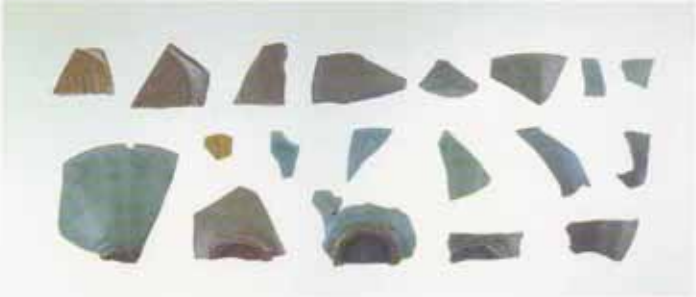
宮城県文化財調査報告書第178集

一本柳遺跡Ⅰ

平成10年3月

宮 城 県 教 育 委 員 会
建 設 省 東 北 地 方 建 設 局

1区中世の屋敷跡



青　磁

白　磁

古瀬戸

漆器皿

漆器椀

茶筅・烏帽子

序　　文

宮城県には、およそ50万年前に遡る旧石器時代以来、各時代に渡って数多くの遺跡が知られています。これらは、先人が自然環境に働きかけ、文化的あるいは時に政治的状況の中で築き上げてきた生活を伝える貴重な遺産であります。

遺跡は、書かれた史料とは別の角度から過ぎ去った時代を映し出してくれる貴重な歴史資料でありますが、同時に、自然環境とともに現在の人間生活に欠くことのできない歴史的・文化的環境の重要な要素であると言えましょう。つまりは、これはそれぞれの土地の精神を示し、地域の個性を表すものと言えます。したがいまして、これを正しく理解し後世に継承していくことは、現代に生きる私達の重大な責務であります。近年におきましては、各地方自治体が郷土の遺跡の重要性を再認識してこれを保護し、地域づくりの拠点として整備し活用していこうとすることが多くなってまいりました。まことに有意義なことであると考えます。

しかし一方で、各種の開発事業の増加はいくつかの遺跡の破壊・消滅の危機をもたらしていることも事実です。宮城県教育委員会では、遺跡の所在や範囲について関係者に周知をはかり、開発工事との関わりが生じた場合には十分な協議を重ね、可能な限りの保存に努めております。

本書は、鳴瀬川の堤防改修とそれに伴う県道移設に先だって、平成７・８年に実施した小牛田町一本柳遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。文化財の保護にはそれぞれの地域の皆様の深いご理解とご協力が必要です。その意味でもこの成果が古代・中世の大崎地方の歴史を再認識する一つの手がかりとなれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存にご理解を示され、調査に際しまして多大なご協力をいただいた関係諸機関の方々、さらには実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

宮城県教育委員会教育長

遠 藤 嘉 彬

例　　言

1．本書は、建設省東北地方建設局が行う鳴瀬川中流堰関連工事に伴う、一本柳遺跡の発掘調査報告書である。
2．第1次調査は小牛田町教育委員会が、第2次調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3．本書の図2は、建設省国土地理院発行の1/25,000「小牛田」を複製して使用した。図4は小牛田町作成の1/2,500都市計画図を複製して使用した。
4．本書における土色の記述には、小山・竹原編（1994）「新版標準土色帖（14版）」を用いた。
5．本書の文章・図中の北は真北を示す。
6．遺物実測図の観察表に付した写真Noは、写真図版の通しNoと対応する。
7．本書は、文化財保護課調査員による協議の後に以下の分担によって執筆した。動物遺体の同定・記述は菅原弘樹が行った。
山田晃弘・・第1～5章、第6章(1)・(3)、第8章(2)、第9章
伊藤　裕・・第6章(2)、第8章(1)
8．出土木製品の樹種・植物種実同定は、それぞれ（株）パレオ・ラボ、（株）古環境研究所に委託して行った（第7章）。
9．発掘調査および整理・報告書の作成にあたっては、次の方々および機関から御助言・御教示をいただいた(五十音順、敬称略)。特に藤沼邦彦・田中則和・千葉孝弥の3氏からは、陶磁器類の産地・年代について丁寧な御教示をいただいた。
阿部正光・阿部幸子・飯村　均・五十嵐康洋・石黒伸一郎・太田昭夫・小川淳一・河西健二・川名秀一・坂井秀弥・佐々木徳夫・佐藤信行・佐藤　洋・高橋圭次・田中則和・千葉孝弥・手塚　均・新野一浩・藤澤良祐・藤沼邦彦・藤原二郎・松本建速・大和幸生
10．発掘調査の出土遺物・図面・写真は宮城県教育委員会が管理・保管している。

目　　次

第１章．調査に至る経過 …… 1
第２章．遺跡の位置と地理的環境 …… 1
第３章．周辺の遺跡と歴史的環境 …… 2
第４章．確認調査について …… 5
第５章．調査の方法 …… 7
第６章．調査の成果 …… 9
(1)　微地形と基本層序 …… 9
(2)　古代の遺構と遺物 …… 10
(3)　中世の遺構と遺物 …… 22
Ａ．遺　構 …… 22
Ｂ．遺　物 …… 97
第７章．自然科学的分析結果 …… 115
(1)　一本柳遺跡出土木製品の樹種同定　㈱パレオ・ラボ …… 115
(2)　宮城県、一本柳遺跡における種実同定分析　㈱古環境研究所 …… 124
第８章．考察とまとめ …… 131
(1)　古 代 …… 131
遺構の変遷・年代・性格 …… 131
(2)　中 世 …… 132
Ａ．陶磁器類の組成について …… 132
Ｂ．遺跡の構成　遺構の変遷と年代 …… 134
Ｃ．屋敷１について …… 141
第９章．ま　と　め …… 145
写真図版 …… 151
報告書抄録

第１章．調査に至る経過

建設省東北地方建設局は、宮城県遠田郡小牛田町不動堂地区内にある鳴瀬川の堤防改修、および鳴瀬川中流堰建設の計画を立案した。堤防改修工事は、字新一本柳・一本柳・塩釜にまたがる東西約1,860mの範囲に及ぶ。これに伴い、現堤防下を走る県道涌谷三本木線の付け替え工事も必要となった。

計画地内には一本柳遺跡が周知されており、宮城県教育委員会は東北地方建設局北上川下流工事事務所からの依頼を受けて、遺跡の範囲確認調査を行った。その結果、中世前期の溝跡・井戸跡・柱穴、奈良・平安時代の土器などが、工事計画地約24,500㎡のほとんどの区域で発見された。

以上の経過を踏まえ、小牛田町教育委員会と県教育委員会は、建設省の委託を受けて平成7年度から事前調査を実施している。調査はまず県道付け替え工事に関わる約11,300㎡を対象とし、その西側部分から開始した。調査面積は7年度が約1,400㎡、8年度が約5,100㎡である。

第２章．遺跡の位置と地理的環境

一本柳遺跡は、小牛田町字一本柳・新一本柳・塩釜に位置する。小牛田町は、仙台市から北東に約40㎞離れた県北中央部にあり、東北本線と陸羽東線の接続地となっている（図1）。

県北部中央には穀倉地帯で有名な大崎低地が広がる。大崎低地は、奥羽山脈から流れ出す鳴瀬川と江合川の中流域にある沖積低地で、盆地上の構造をなす。南には大松沢(鹿島台)丘陵が東西に延び、北には篦岳丘陵が南東方向に延びて低地の東をも区切っている。大崎低地の南縁付近を東西に流れる鳴潮川は、小牛田町から南郷・鹿島台町にかけて南に向きを変え、低地を吉田川低地に連続させた後、鳴瀬町で石巻湾の西端部に注ぎだす。江合川は大崎低地の北部を東流して篦岳丘陵の南裾を通り、旭山丘陵（和渕山）の北を抜けて旧北上川に合流する。

小牛田町は大崎低地の東縁部に位置し、大松沢丘陵と篦岳丘陵が最も接近し低地が狭まる場所にある。鳴瀬川と江合川の間には、牛飼・彫堂・不動堂地区に低丘陵が残り、現在の市街地をのせている。両河川沿いと低地内には、東西あるいは北西ー南東方向に自然堤防が伸びるが、町中央部以西では低地内部に何条も分布する一方で、町東部では河川沿いにほぼ限られている。これは、東部では鳴瀬・江合川の流路がほとんど移動していないことを示している。

図１　遺跡の位置

一本柳遺跡が位置する不動堂地区は、町の南東部・鳴瀬川左岸にあって南郷町と境を接している。西方には彫堂地区から続く低丘陵が連なる。丘陵中央部から東方では鳴瀬川に沿って自然堤防が接続し、その間の志賀殿・鶴頭山・皎善寺に小独立

丘陵が残存する。北側は江合川まで沖積地が広がっている。遺跡は皎善寺の東に延びる自然堤防上に立地する。標高は9.5m～10.0mである。

第3章. 周辺の遺跡と歴史的環境

<旧石器・縄文・弥生時代>

小牛田町内には旧石器時代遺跡の発見はない。縄文時代の遺跡は全て丘陵上に確認されている。素山貝塚と新山前貝塚は、いずれも早期に属するハマグリ・カキを主体とする鹹水性の貝塚である。素山貝塚は、昭和13年に東北帝国大学の伊東信雄氏により発掘調査が行われ、早期の土器型式の素山上層・下層式が設定され、今日までその標式資料となっている。戦前の縄文時代研究史の中で重要な意味を持つ遺跡である(伊東　1940)。また両貝塚は鳴瀬川流域の最奥部に位置する貝塚であり、縄文海進時の海水侵入域を示唆するものとしても重要である。この地域では他の時期に貝塚は形成されていない。このほか、縄文前期の遺跡としては彫堂遺跡、中期には山前・新山前・彫堂遺跡、後期には新

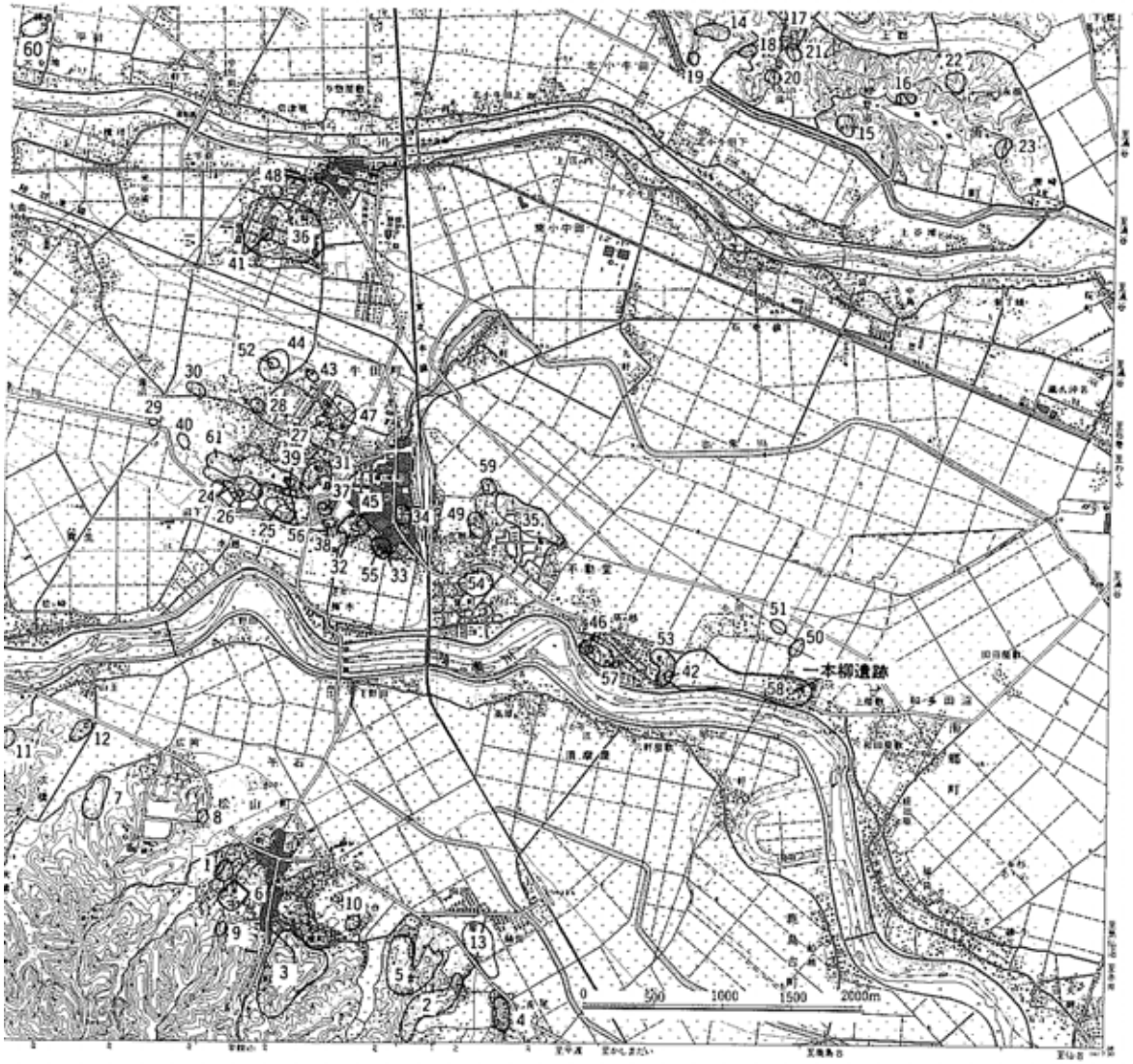


図2　遺跡の位置と周辺の遺跡

山前・彫堂・牛飼・舟入遺跡、晩期には峯山遺跡がある。弥生時代の遺跡は少なく、新山前貝塚・彫堂遺跡で遺物が発見されているのみである。

＜古墳時代＞

宮崎町から小牛田町にかけての鳴瀬川中流域は、県内における本格的な古墳の集中域の一つであり、太平洋側では最北の古墳地帯となっている。小牛田町内最大の古墳は、前方後方墳である京銭塚古墳で全長が約64mある。この古墳は小牛田町の中心街がのる丘陵頂部に立地し、従来は中期に属するものと考えられてきたが、立地と墳形から前期に遡る可能性が指摘されている(辻1992)。付近の同一丘陵上には、保土塚古墳(径約45m、前期)・後藤神社古墳・蜂谷森古墳(径20m、前期)・念仏山古墳といった前・中期の円墳が分布している。その他、町内には丁名塚古墳・王壇古墳・皎善寺古墳・鶴頭山古墳などが低丘陵ないしは自然堤防上に分布するが、これらの時期は明らかではない。埴輪が出土する古墳は未確認である。後期古墳としては、一本松古墳・八雲古墳群(3 基)・糠塚古墳・東谷地古墳があるが、大きい群集を形成してはいない。横穴墓は、蜂谷森横穴群の一ケ所のみである。古墳時代の集落としては、豪族居館が検出された国指定史跡山前遺跡が注目される。遺跡は前・中期古墳が分布する丘陵に貼り付く丘陵上に立地し、蜂谷森古墳を仰ぎ見る位置にある。昭和50年の団地造成工事に関わる調査によって、前期の竪穴住居跡25棟とこれらを取り囲む大溝が検出された。大溝は斜面の裾に沿って直線的に続き、東西 170m以上の範囲を区画している。また低地部に向かっては、祭祀の場と見られる「コ」の字形の張り出しが造り出されている(宮城県教育委員会1976)。集落遺跡として

	No	遺跡名	時代
松山町	1	字和野（上野）遺跡	縄文晩
	2	金谷亀井囲横穴群	古墳後・奈良・平安
	3	千石城跡	中世・近世
	4	長尾城跡	中世
	5	金谷館跡	中世
	6	上野館跡	古墳後・近世
	7	和賀氏屋敷跡	近世
	8	広岡遺跡	古代
	9	松山遺跡	縄文
	10	茶釜台遺跡	古代
	11	前沢遺跡	縄文・古代
	12	山王遺跡	中世
	13	鍋田遺跡	古代
涌谷町	14	一貫横穴群	古代
	15	糟子坊遺跡	江戸
	16	相野沼貝塚	縄文
	17	北大久保遺跡	古代
	18	西谷地遺跡	古代
	19	大窪遺跡	古代
	20	大久保A遺跡	古代
	21	大久保B遺跡	古代
	22	相野沼A遺跡	縄文・古代
	23	相野沼B遺跡	縄文・古代
小牛田町	24	新山前貝塚	縄文早・中
	25	彫堂七館跡	中世
	26	一本松古墳	古墳後
	27	八雲古墳群	古墳後
	28	彫堂遺跡	縄文前・中・後・古墳・古代
	29	一石塚古墳	奈良
	30	丁名塚古墳	古墳

	No	遺跡名	時代
小牛田町	31	舟入遺跡	縄文後
	32	峯山貝塚	縄文早
	33	糠塚古墳	古墳後
	34	京銭塚古墳	古墳前 or 中
	35	峯山遺跡	縄文晩・古代
	36	中飼遺跡	縄文後・古代
	37	保土塚古墳	古墳中
	38	後藤神社古墳	古墳中
	39	蜂谷森古墳	古墳中
	40	念仏山古墳	古墳中
	41	王壇古墳	古墳
	42	皎善寺古墳	古墳
	43	東谷地古墳	古墳後
	44	埠沼遺跡	古代
	45	貝殻塚古墳	奈良
	46	鶴頭山古墳	古墳
	47	駒米遺跡	古墳・奈良
	48	山内館跡	古代・中世
	49	化粧坂遺跡	古代
	50	瓢山遺跡	古代
	51	小沼遺跡	古代・中世
	52	埠沼古墳群	古墳
	53	皎善寺館跡	中世
	54	志賀堂城跡	中世
	55	糠塚遺跡	古代
	56	蜂谷森横穴群	古墳後
	57	西館跡	中世・近世
	58	一本柳遺跡	古代・中世
	59	小町井遺跡	古代
	60	練布遺跡	古代
	61	山前遺跡（国史跡）	縄文早～中・古墳・古代・中世

表1　遺跡地名表

は、他に駒込遺跡がある。今年度町立保育所建設に先立って発掘調査が行われ、後期の竪穴住居跡が4棟検出された（佐藤1998、印刷中）。

＜奈良・平安時代＞

奈良・平安時代では、山前・駒込・山内館跡・牛飼・化粧坂・峯山・狐山・小沼遺跡などの集落跡がある。発掘調査が行われているのは山前・駒込遺跡のみで、両者ともに8世紀代の竪穴住居跡が検出されている（宮城県教育委員会1976、小牛田町史編集纂委員会1970）牛飼地区にある山内館跡と牛飼遺跡からは、8 世紀代の土師器・須恵器のほかに円面硯・瓦が発見されている。化粧坂地区にある峯山遺跡からは、8世紀代の土器の他に9世紀後半以降に位置づけられる須恵器も採集されている。また墨書土器・瓦・小刀もある。一本柳遺跡の北に位置する小沼・狐山遺跡は、他の遺跡と異なり自然堤防上に立地する。狐山遺跡からは、8世紀後半～9世紀前半の土師器・須恵器が多量に採集されており、墨書土器・古瓦・鉄鏃も含まれている。

＜中世＞

中世の遺跡の多くは館跡である。牛飼地区の低丘陵上には山内館跡がある。約60m四方の土塁と大溝が残っている。小牛田町内には約90基の板碑が確認されているが(石黒1995)、江合川南岸にある牛飼地区は集中地域の一つとなっており、弘安年間のもの2基の他、鎌倉・南北朝時代（北朝年号）の板碑が数多い。中でも応安四年（1371）の銘を持つ板碑は、3種子を刻んだ高さ3.69m、幅0.91mの巨大なものである。また、館跡内には応永28年（1421）の銘をもつ板碑もある。彫堂地区の丘陵上には彫堂七館あるいは七館八沢と通称される館跡群がある。これは八つの重要な郭から構成されており、西から山前館・長館・大館・小館・陣館・狼之介館・彫堂館・笹館と称される。各々の境界は明瞭ではなく、ひとつの館として使用された可能性が指摘されている（小井川　1981）。その場合東西は 900mに及ぶ。大館からは弘安五年（1282）の板碑と火葬骨をいれた常滑産の壷が発見されている（宮城県教育委員会　1976）。また周辺では、山前遺跡で発掘された16基を合わせて18基の粘板岩製の板碑が確認されている(佐藤　1995)。年号は弘安5年（1282）から応安元年（1368）まであるが、中心は南北朝時代であり、それらには北朝年号が使用されている。一本柳遺跡のある不動堂地区には、低丘陵上に東から皎善寺館跡・西館跡(鶴頭山城)・志賀堂城跡が近接してある。皎善寺館跡は一本柳遺跡に隣接する。一本柳遺跡の北側には集落跡と見られる小沼遺跡があり、青磁・白磁の出土が報告されている(小牛田町史編纂委員会1970)。この地区にも板碑は多く、化粧坂と皎善寺周辺の2ケ所に集中して分布する(佐藤1995)。石材は全て粘板岩で、高さ1m程度の小形のものが多い。化粧坂周辺の板碑は弘安五年から元徳三年（1331）の鎌倉時代に限られるが、皎善寺周辺では弘安三年（1280）から正和光年（1321）のものに加え、北朝年号の文和二年（1352）・応安七年（1374）の南北朝時代のものもある。

以下に、文献史学からみた中世の遠田郡と不動堂周辺の様子を概観しておく（小牛田町史編纂委員会1970、佐々木1997、伊藤1997ａ・ｂ、和泉1997、入間田1997）。

平泉藤原氏が滅亡した文治5年の奥州合戦以前、遠田郡には国司御廐の経費を負担する直轄田が置かれていたことが知られている(吾妻鏡建久元年＝1190　十一月五日条)。奥州合戦の後、遠田郡の郡

地頭職は、文治・建久年間に下野国の御家人宇都宮朝綱、承元四年（1210）にはその子孫と見られる山鹿遠綱に与えられている(高州文書)。山鹿遠綱は建暦三年（1213）の和田義盛の乱に加担したため地頭職を没収され、地頭職はその後北条泰時に与えられる(吾妻鏡建暦三年五月七日条)。その後遠田郡は鎌倉時代末期まで北条得宗家領となる。一方、留守家旧記は、迫・江合・鳴瀬川流域のいわゆる河内七郡は、河内四頭と呼ばれる渋谷・大掾・泉田・四方田（伊達正統世次考では河内四頭は泉田・渋谷・上形・狩野とされる）に与えられたと伝えている。彼らは郷あるいは村地頭に任じられたと考えられている。

鎌倉幕府滅亡後は、北条氏領は奥州四管領などの諸氏に配分されたと見られるが、遠田郡が誰に与えられたのかは明らかでない。支配権の不安定な中で、河内四頭は貞和年間（1345～1350 年）に四頭一揆と呼ばれる連盟を形成し、それぞれの領地を確保していたと見られる。14 世紀後半からは、奥州四管領の一人斯波氏(後の大崎氏)が河内四頭と結びつき、河内七郡に進出を始める。応永七年(1400)奥州探題に補任されたという大崎氏は、長岡郡小野に本拠をおきいわゆる大崎五郡を支配する。遠田郡は 15～16 世紀には基本的に大崎氏の支配領であったが、その東端にあるため北上川流域に支配権をもつ葛西氏との抗争の地となった。さらに 16 世紀に入ると伊達氏の影響力も及ぶようになり、天文の伊達氏の内訌（1542 年）の際には、二派に分かれた大崎氏が不動堂で戦っている。

天正 18 年(1590)豊臣秀吉の奥州仕置により大崎氏の所領は没収され、同年の葛西・大崎一揆が伊達政宗によって鎮圧されるにいたり、大崎領は伊達氏の領地となった。近世に入り、不動堂村は慶長 16 年（1611）後藤孫兵衛信康の給所の一つとなり、元和 6 年（1620）にはその子近元が不動堂要害（西館・鶴頭城とも呼ばれる）を拝領した。寛保三年（1743）の要害・所・在所拝領改牒によれば、知行高 270 貫、侍屋敷 97 軒、寺屋敷 2 軒、足軽屋敷 35 軒となっている。

第 4 章．確認調査について

確認調査は平成 6 年 11 月 24 日から 12 月 7 日に行った。調査は、周知の一本柳遺跡の範囲を中心としてその周辺の計画地内を重機を使用して掘削し、遺構・遺物の有無を確認した。各トレンチで検出された遺構・遺物は以下の通りである（図 3）。

第 1～3 トレンチ

＜中世＞　遺構・・南北溝 5 条、東西溝 5 条（溝 1 条はＬ字形に曲がる）、井戸跡 10 基

遺物・・東海産陶器鉢・常滑産甕、銭貨（咸平通宝）

＜古代＞　遺物・・須恵器坏・甕、土師器甕

第 4・5・15 トレンチ

＜中世＞　遺構・・南北溝 3 条、東西溝 4 条、井戸跡 2 基、柱穴数個

遺物・・常滑・渥美・在地産陶器甕、馬歯

＜古代＞　遺物・・須恵器高台坏・瓶、転用砥

第 6・7・14 トレンチ

＜中世＞　遺構・・南北溝 6 条、東西溝 1 条、井戸跡 9 基

遺物・・青白磁梅瓶・東海産陶器鉢・常滑産甕、板碑、砥石

＜古代＞　遺物・・須恵器坏・蓋・甕、土師器坏・甕

特に第 6 トレンチに遺物が多い

第 8～11 トレンチ

＜中世＞　遺構・・東西溝 1 条・井戸跡 1 基・柱穴数個

遺物・・常滑産陶器甕、板碑、鉄滓、砥石

＜古代＞　遺物・・須恵器坏・蓋・甕・瓶、土師器甕

特に第 10 トレンチに遺物が多い

第 12・13 トレンチ

＜中世＞　遺構・・南北溝 6 条・土壙数基・柱穴多数

遺物・・陶器甕、鉄小刀、銭貨（元豊通宝）

＜古代＞　遺物・・須恵器坏・甕、土師器坏・甕

第 16・17 トレンチ

＜中世＞　遺構・・溝 1 条・井戸跡 3 基以上・土壙数基・柱穴数個

遺構・・陶器甕

＜古代＞　遺物・・須恵器坏・甕、土師器甕

特に第 16 トレンチに遺物が多い

以上の結果、一本柳遺跡は従来知られていた範囲をはるかに上回り、東西 500m以上の広大な範囲に及ぶことが知られた。南北の範囲も、幅 150～250mある自然堤防に広がっている可能性がある。また遺跡の時代は、これまで知られていた奈良・平安時代だけではなく中世にまで及んでいる。したがって、一部に宅地・耕作地の関係で未確認の区域を残すものの、堤防改修と県道付け替え工事に関わる計画地約 24,500 ㎡では、ほぼ全域で事前調査が必要であると考えられた。なお、確認調査で検出した遺構・遺物は事前調査分に含めて報告する。

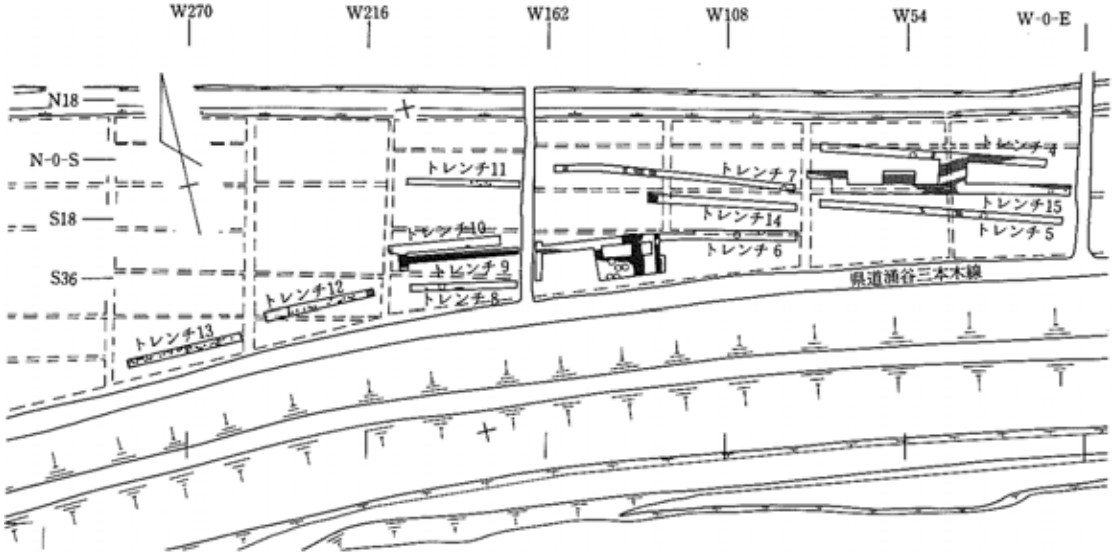


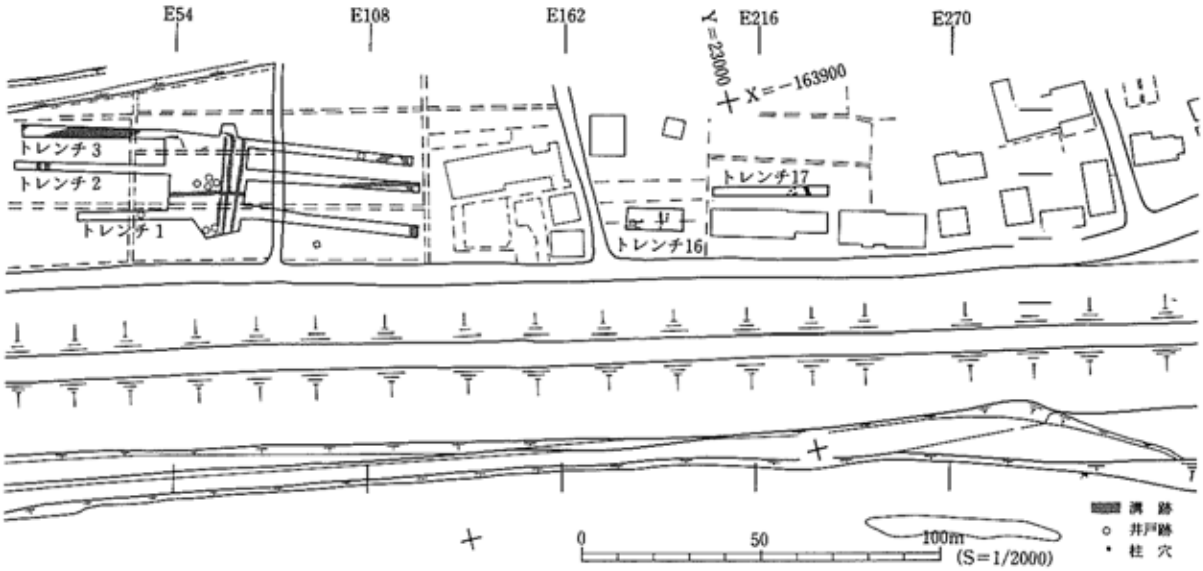
図 3　確認調査トレンチと

第 5 章．調査の方法

第 1・2 次調査の要項は例言に示した。本調査は、県道涌谷三本木線の付け替え予定地を優先させるため、その本線部分を西側から調査していくこととなった。地区名は第 1 次調査分(W207～W132)を 1 区、第 2 次調査の西側（W132～W10）を 2 区、東側（E5～E167）を 3 区とした。グリッドは、付け替え道路のセンター杭（第X系座標X＝－163864.270、Y＝22784.919）と（X＝－163866.2734、Y＝22793.0272）の 2 点を結ぶ線を東西の基線とし、前者を東西南北の原点として 3m方眼で設定した。地点の呼称は基点からの距離で示している(例えば、W123・S6 は原点から西に 123m・南に 6mの位置にあることを示す)。グリッドの南北ラインと座標北との偏差は東に 14°28′40″である(図 4)。

遺構確認面までの掘り下げは重機を使用した。中世の遺構確認は基本的にはⅥ層で行い、古代はⅧ層で行った。検出した遺構の実測図は、平面・断面図ともに 1/20 の縮尺で作成したが、2 区古代の溝は 1/100 の縮尺で平板測量した。記録写真は 35 ㎜のモノクロ・リバーサルフィルムと 6×7 モノクロ・リバーサルフィルムを用いて撮影した。また、区ごとの全体写真は必要に応じて空撮も行った。

現地説明会は、第 2 次調査の平成 8 年 10 月 12 日(土)に、小牛田町教育委員会の協力を得て行った。町内の方々約 50 人の参加を得ている。また調査中に、小牛田町議会議員の方々・公民館の“地元学講座”聴講者の方々の見学があった。



検出遺構（模式図）

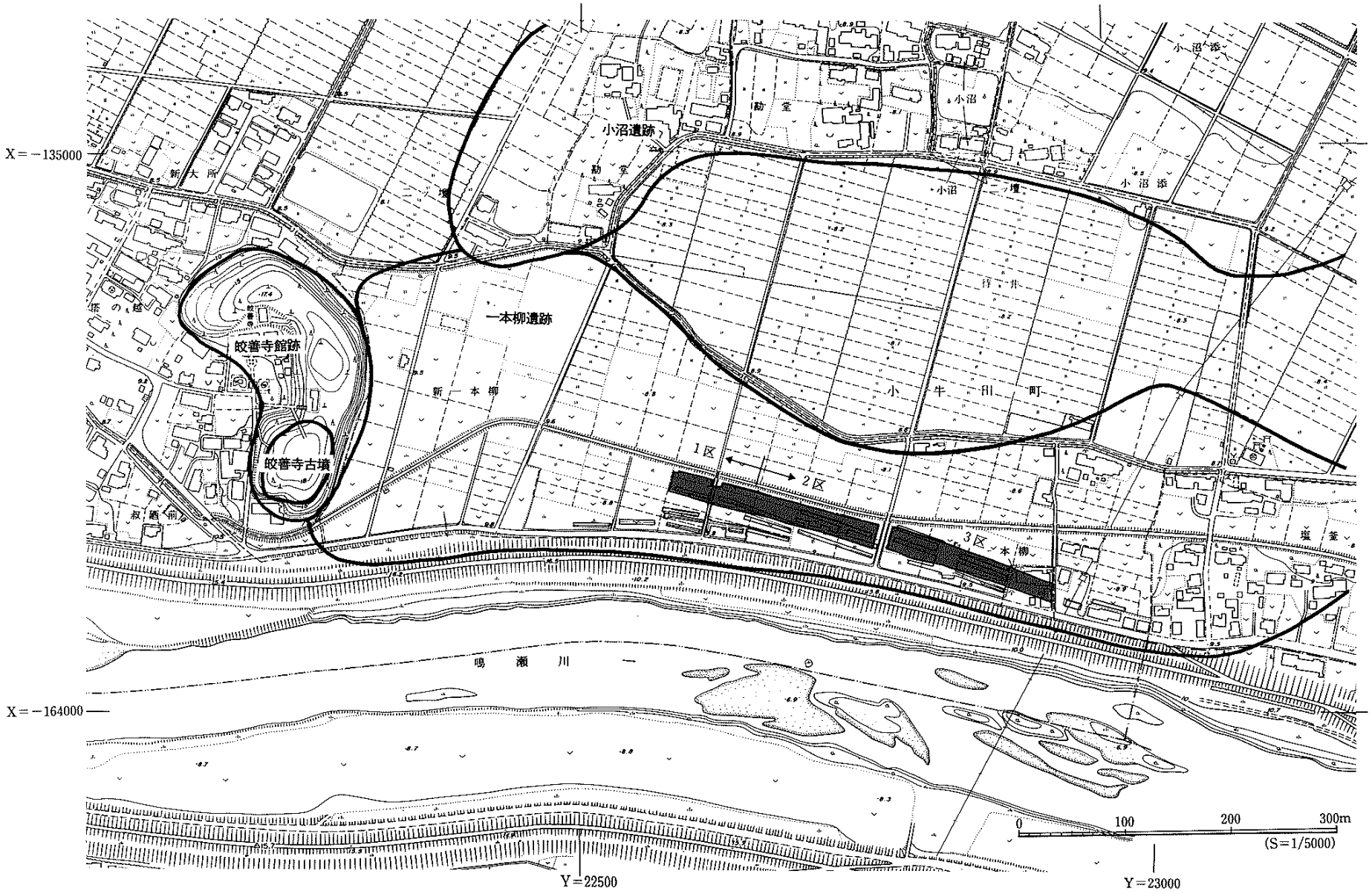


図4　事前調査・調査区の位置

第 6 章. 調査の成果

(1) 微地形と基本層序

調査区は基本的には自然堤防上にあるが、場所により多少の微地形の相違がある。東西方向では、1 区西側が高くW140 付近から東に向かって次第に低くなる。2 区から 3 区西側（E120 付近）までは低地のままで、3 区東側になると次第に高まっていく。微高地と低地とのレベル差は灰白色火山灰（To-a）の層位で約 50㎝ ある（図 5）。南北方向には、1 区西側（W170 付近以西）で北に向かって低くなっているが、他の調査区では明確な高低差は認められなかった。しかし、南側にある現在の堤防に向かって高まることが予測される。

基本的な堆積層は、微地形に応じて若干異なるものの、奈良・平安時代の遺構確認面まで調査区全域でほぼ共通している。

Ⅰ層・・表土および耕作土層

Ⅱ層・・2.5Y5/2～5/3　暗灰黄色～黄褐色　シルト

調査区の全域に分布するが削平されている区域もある。低地部では下位のⅢ層が不規則に混じり合う部分がある。中世の遺構の掘り込み面である。

Ⅲ層・・10ＹＲ～2.5ＹR3/1　黒褐色　粘土質シルト

全域に分布するが、3 区東端部では薄くなる。

Ⅳ層・・2.5Y～5Y6/1　黄灰色～灰色　粘土質シルト

低地部で厚く、微高地では分布しない所がある。

Ⅴ層・・5Y～7.5Y8/1　灰白色火山灰

To-ａテフラである（山田・井上　1990、町田・新井　1992）。低地部では上部に多少乱れた部分が見られることがある。

Ⅵ層・・低地部　2.5Y7/1～6/2　灰白色～灰黄色　粘土からシルト質粘土

微高地　2.5Y5/1～6/4　黄灰色～にぶい黄色　シルト質粘土～粘土質シルト

上部は風化してやや黒味を帯びる。全域に分布するが、低地と微高地では様相が異なる。厚

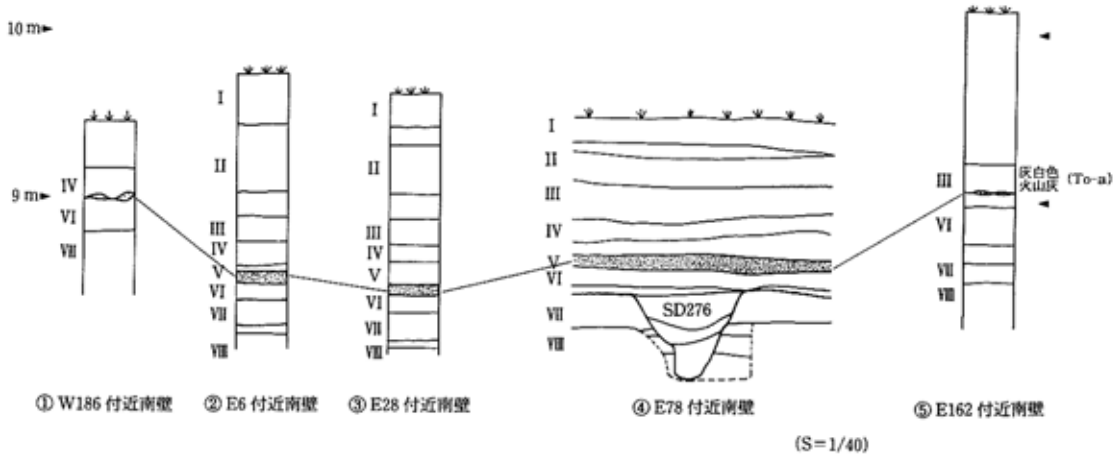


図 5　基本層序

さは微高地ほど厚く3～4層に分層が可能な所もある。また高い所ほど黄色味が強くなる。

Ⅶ層・・低地部　2.5Y～5Y7/1　灰白色　粘土

微高地　2.5Y5/3～6/　　黄褐色～黄灰色　シルト質粘土～シルト

低地部には均質な灰白色粘土が広く分布する。微高地ではやや風化したシルトになる。両者の境界で灰白色粘土が風化シルトの上にのることがある。奈良・平安時代の遺構の掘り込み面である。

Ⅷ層・・シルト～砂　多くはグライ化している。

低地部では上部に草本起源の炭化物の薄層が挟まる。微高地にあるシルトは 2.5Y～5Y6/1 の黄灰色を呈する。ところにより粘土の薄層が挟まる。

(2)　古代の遺構と遺物

掘立柱建物跡9棟、溝跡12条、土壙2基、円形周溝4条、小溝状遺構多数などを検出した。ほとんどの遺構が1区に分布しており、標高がやや低くなる2･3区では溝跡が6条と遺構は少ない(図6)。

出土遺物には土師器・須恵器がある。遺構分布と同様に1区からの出土がほとんどであるが、遺構に伴うものはごく少数である。

Ａ．掘立柱建物跡

[ＳB353]（図7）

1区の西端に位置する、東西3間南北2間の東西棟建物跡である。ＳX90円形周溝（新）より古く、小溝状遺構より新しい。

平面規模は桁行が南側柱列で総長 6.9m、柱間は西から 2.25m、2.3m、2.35m、梁行は西妻で総長5.4m、柱間は北から2.7m、2.7mである。方向は南側柱列で見て東で南に約19°振れる。

柱穴は10個検出した。長径30～50㎝・深さ30～40㎝の円形を基調としており、後に述べる総柱建物の柱穴よりかなり小規模である。埋土はグライ化した砂質シルトである。柱が切り取られている柱穴が4個あるが、すべての柱穴で柱痕跡を検出した。柱痕跡は径約10㎝の円形である。

[ＳB354（新・古）]（図8）

1区中央寄りに位置する、東西3間南北2間の東西棟で総柱の建物跡である。ＳB355掘立柱建物跡より古く、同規模での建て替えが1度行われている。以下、新しい段階のものについて記載する。

平面規模は桁行が北側柱列で総長 5.0m、柱間は西から 1.6m、1.7m、1.7m、梁行は西妻で総長3.7m、柱間は北から1.7m、2.0mである。方向は北側柱列で見て東で南に約14°振れる。

柱穴は12個検出した。長軸60～80㎝、深さ50～60㎝の隅丸方形を基調とし、埋土はグライ化した砂質シルトである。

柱の切り取られている柱穴が1個あるが、すべての柱穴で柱痕跡を検出した。柱痕跡は径20㎝前後の円形で、すべての底面から木片が出土した。木片は長さ 40～50㎝、幅 10～20㎝、厚さ 3～10㎝の棒状ないし板状で、コの字に組まれていた痕跡が2箇所で認められる。これらは柱材の沈下防止のために据えられた礎板と考えられる。古い段階の柱穴は3ケ所で一部が残存していたのみである。

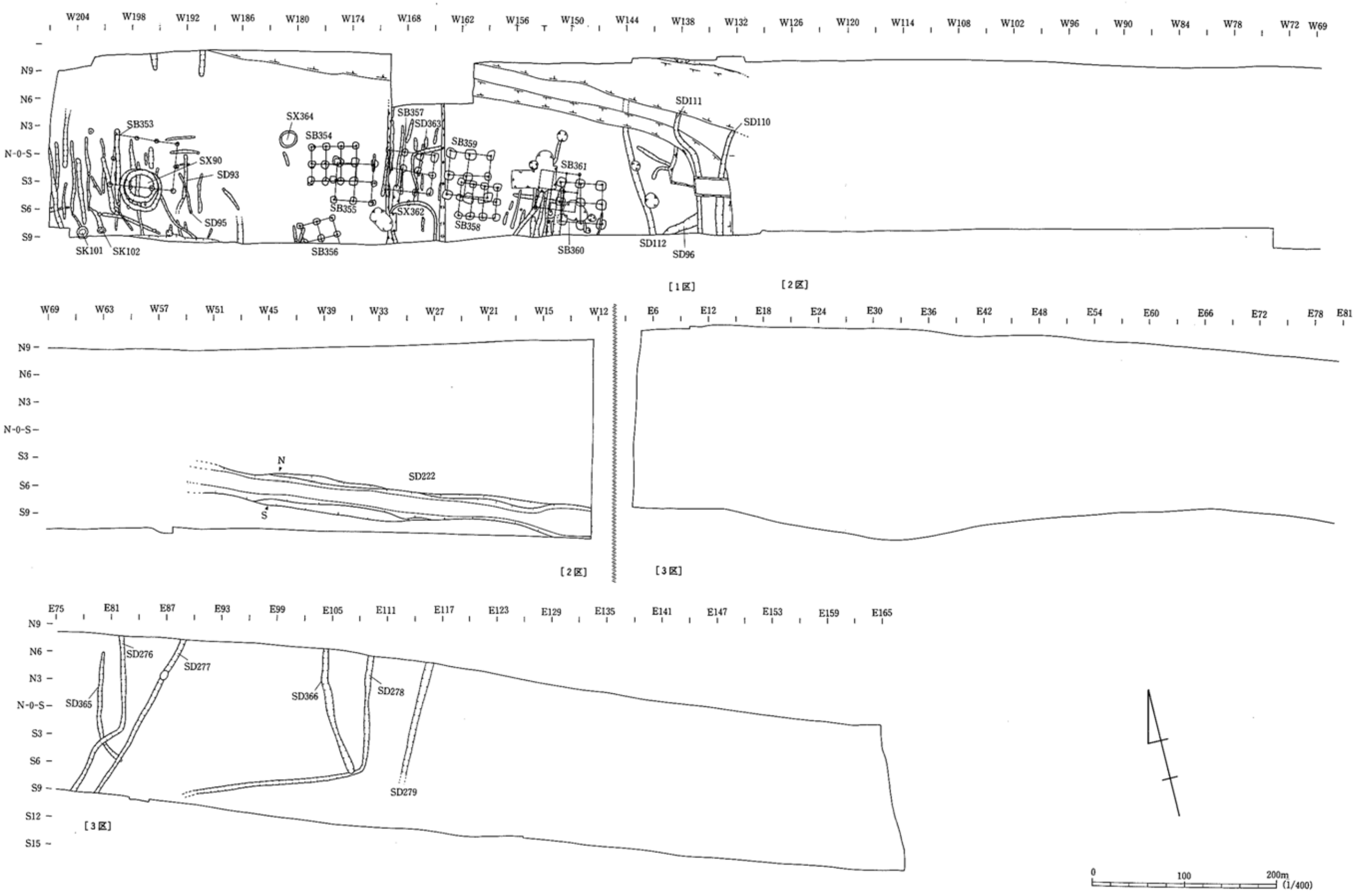

W204
W198
W192
W186
W180
W174
W168
W162
W156
W150
W144
W138
W132
W126
W120
W114
W108
W102
W96
W90
W84
W78
W72
W69
N9
N6
N3
N-0-S
S3
S6
S9
SB353
SX90
SD93
SD95
SK101
SK102
SX364
SB354
SB355
SB356
SB357
SD363
SX362
SB359
SB358
SB361
SB360
SD111
SD110
SD112
SD96
[1区]
[2区]
W69
W63
W57
W51
W45
W39
W33
W27
W21
W15
W12
E6
E12
E18
E24
E30
E36
E42
E48
E54
E60
E66
E72
E78
E81
N
S
SD222
[2区]
[3区]
E75
E81
E87
E93
E99
E105
E111
E117
E123
E129
E135
E141
E147
E153
E159
E165
N9
N6
N3
N-0-S
S3
S6
S9
S12
S15
SD276
SD277
SD365
SD366
SD278
SD279
[3区]
0
100
200m
(1/400)

図6　古代の遺構全体図

[ＳＢ355]（図８）

１区中央寄りに位置する、東西２間南北２間のほぼ正方形で総柱の建物跡である。小溝状遺構より古くＳＢ354より新しい。

平面規模は東側柱列で総長4.1m、柱間は北から2.0m、2.1m、南側柱列で総長4.0m、柱間は西から2.0m、2.0mである。建物の方角は北側柱列で見て東で南に約18°振れる。

柱穴は９個検出した。長軸60㎝～1m・深さ46～59㎝の隅丸方形を基調とし、埋土はグライ化した砂質シルトである。柱が抜き取られている柱穴が２個あるが、すべての柱穴で柱痕跡を検出した。柱痕跡は径20㎝前後の円形で、うち７個の底面に礎板が据えられている。礎板は長さ40～55㎝、幅６～15㎝、厚さ1～6㎝の棒状ないし板状である。

[ＳＢ356]（図８）

１区中央寄りの南壁際に位置する、東西２間南北２間以上の総柱建物跡で、南側は調査区外に及ぶ。平面規模は北側柱列で総長3.7m、柱間は西から1.9m、1.8mである。建物の方向は北側柱列で見て東で南に約２°振れる。

柱穴は６個検出した。長軸70～80㎝・深さ50～64㎝の隅丸方形を基調とし、埋土は褐灰ないし黄橙色の砂質シルトである。柱痕跡は径10㎝～20㎝の円形ですべての柱穴で検出した。このうち２個に柱材がわずかに残存している。

[ＳＢ357]（図８）

１区のほぼ中央部に位置する、東西３間南北２間の東西棟で総柱の建物跡である。小溝状遺構およびＳＤ363と重複しておりいずれよりも古い。

平面規模は桁行が北側柱列で総長4.9m、柱間が西から1.6m、1.9m、1.4m、梁行が東妻で総長4.3m、柱間が北から2.25m、2.05mである。建物の方向は南側柱列で見て東で南に約20°振れる。

柱穴は12個検出した。長軸60㎝～1m・深さ40～50㎝の不整円形を基調とし、埋土はグライ化した砂質シルトである。柱痕跡は径10～20㎝の円形で、すべての柱穴で検出した。うち５個の底面に礎板が据えられている。礎板は長さ10～40㎝・幅5～7㎝・厚さ4～6㎝の棒状ないし板状である。

柱穴埋土からロクロ調整の土師器長胴甕破片が出土している（図12－2）。

[ＳＢ358]（図８）

１区のほぼ中央部に位置する、東西３間南北２間の東西棟で総柱の建物跡である。ＳＢ359と重複しておりこれより古い。

平面規模は桁行が南側柱列で総長4.1m、柱間が西から1.4m、1.3m、1.4m、梁行が西妻で総長3.7m、柱間が北から1.6m、2.1mである。建物の方向は南側柱列で見て東で南に約20°振れる。

柱穴は12個検出した。長軸70～90㎝・深さ30～49㎝の隅丸方形を基調とし、埋土はグライ化した砂質シルトである。柱痕跡は径20～30㎝の円形で、11個の柱穴で検出した。うち４個の底面に礎板が据えられている。礎板は長さ30～40㎝・幅4～20㎝・厚さ1～16㎝の棒状ないし板状である。

[ＳＢ359]（図８）

１区のほぼ中央部に位置する、南北２間東西２間のほぼ正方形で総柱の建物跡である。ＳＢ358と重

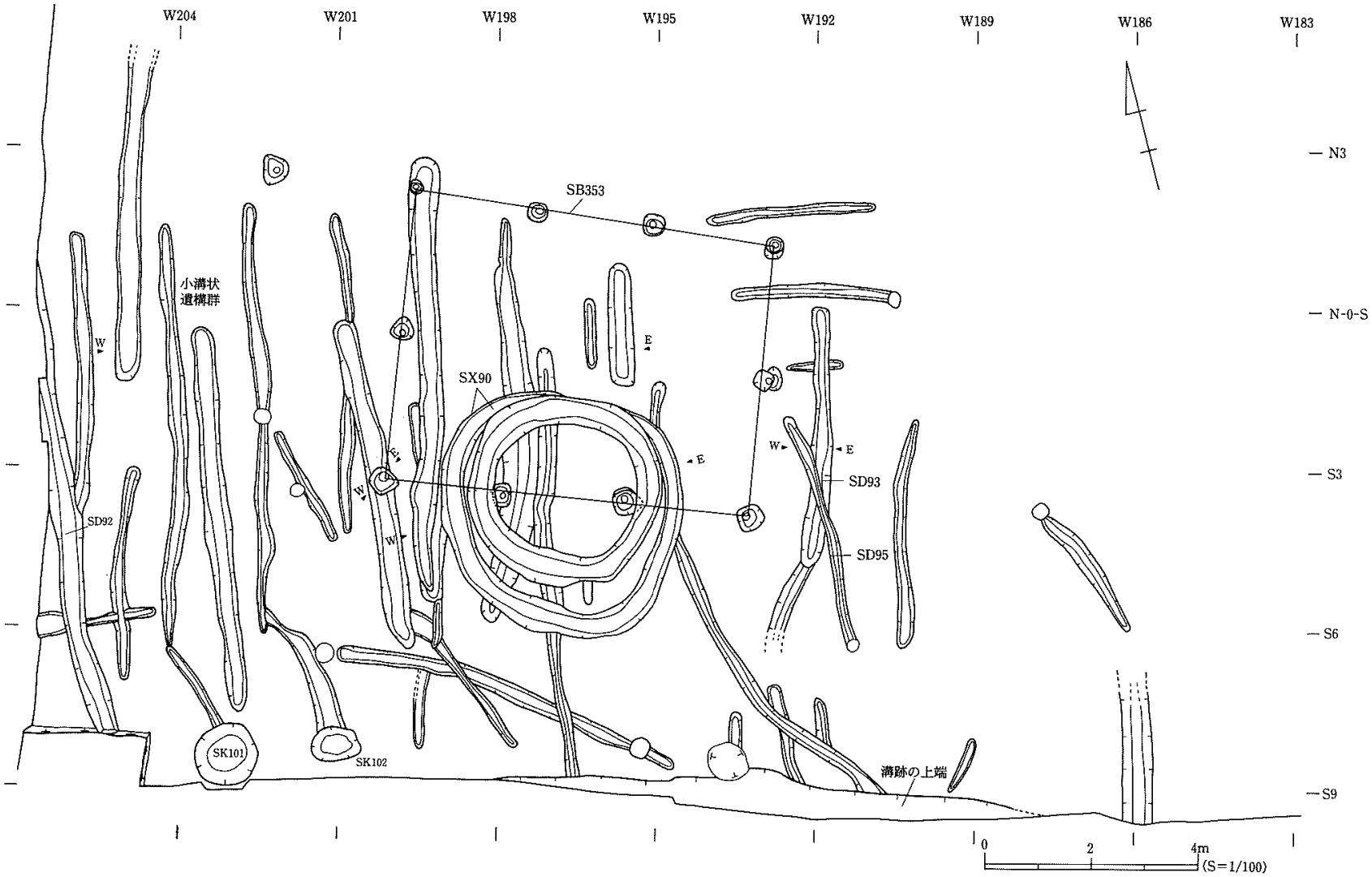

W204
W201
W198
W195
W192
W189
W186
W183
N3
N-0-S
S3
S6
S9
SB353
小溝状
遺構群
SX90
SD92
SD93
SD95
SK101
SK102
溝跡の上端
W
E
0
2
4m
(S=1/100)

図7　1区古代の遺跡(1)

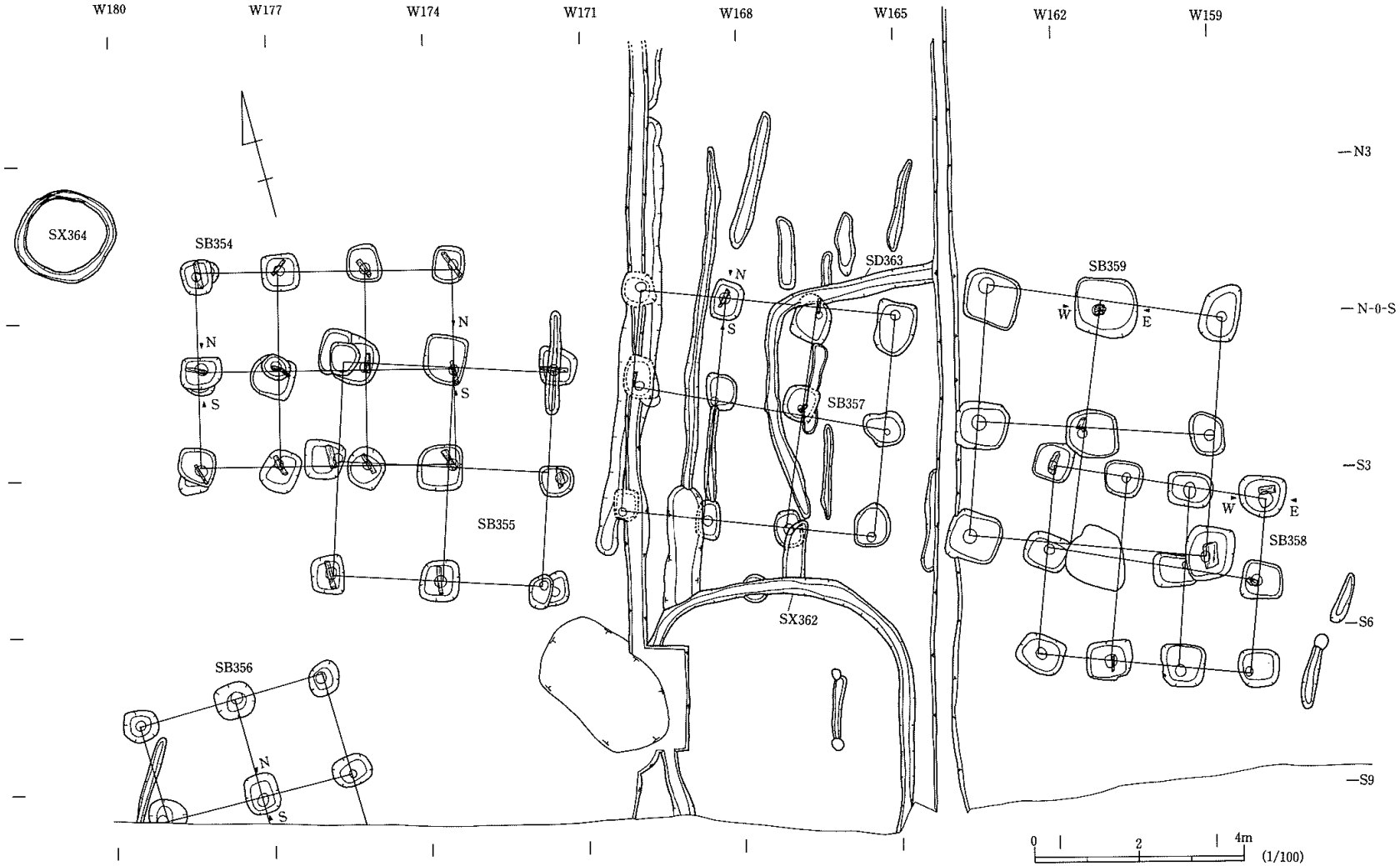

W180
W177
W174
W171
W168
W165
W162
W159
N3
N-0-S
S3
S6
S9
SX364
SB354
SB355
SB356
SB357
SB358
SB359
SD363
SX362
N
S
W
E
0
2
4m
(1/100)

図8　1区古代の遺跡(2)

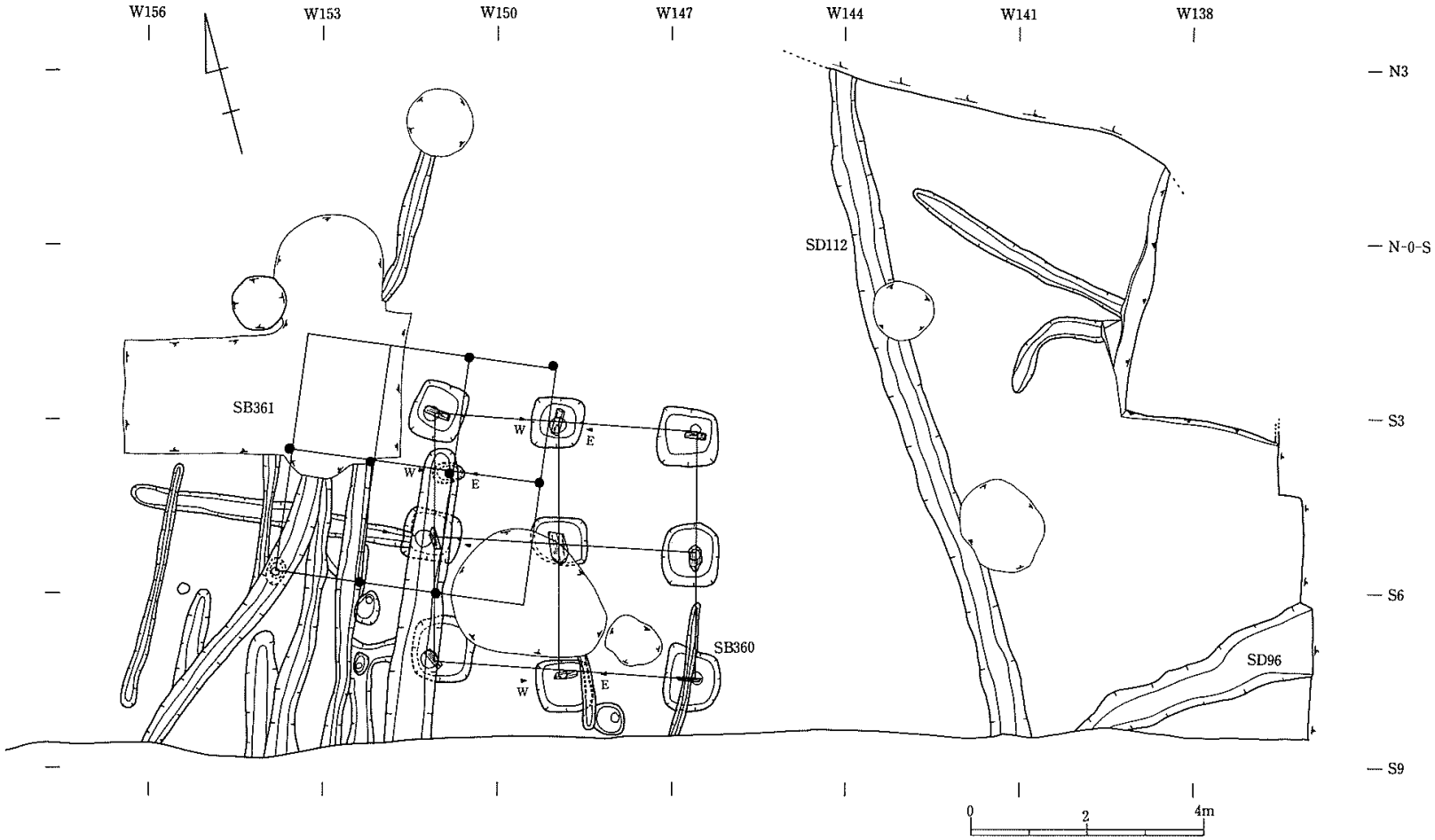
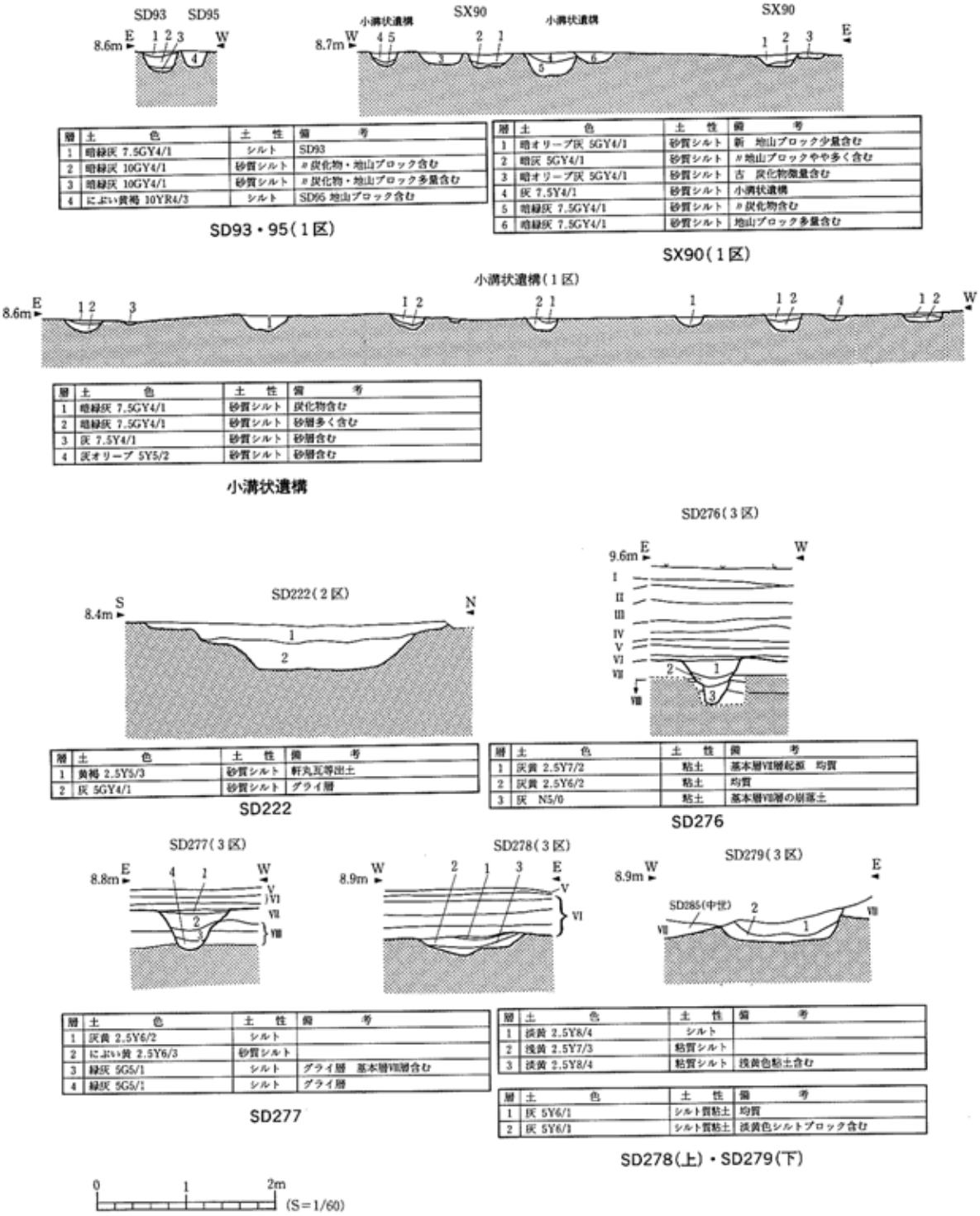

W156
W153
W150
W147
W144
W141
W138
N3
N-0-S
S3
S6
S9
SB361
SB360
SD112
SD96
W
E
0
2
4m

図9　1区古代の遺跡(3)



層	土色	土性	備考
1	暗緑灰 7.5GY4/1	シルト	SD93
2	暗緑灰 10GY4/1	砂質シルト	〃炭化物・地山ブロック含む
3	暗緑灰 10GY4/1	砂質シルト	〃炭化物・地山ブロック多量含む
4	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	SD95 地山ブロック含む

層	土色	土性	備考
1	暗オリーブ灰 5GY4/1	砂質シルト	新 地山ブロック少量含む
2	暗灰 5GY4/1	砂質シルト	〃地山ブロックやや多く含む
3	暗オリーブ灰 5GY4/1	砂質シルト	古 炭化物微量含む
4	灰 7.5Y4/1	砂質シルト	小溝状遺構
5	暗緑灰 7.5GY4/1	砂質シルト	〃炭化物含む
6	暗緑灰 7.5GY4/1	砂質シルト	地山ブロック多量含む

層	土色	土性	備考
1	暗緑灰 7.5GY4/1	砂質シルト	炭化物含む
2	暗緑灰 7.5GY4/1	砂質シルト	砂層多く含む
3	灰 7.5Y4/1	砂質シルト	砂層含む
4	灰オリーブ 5Y5/2	砂質シルト	砂層含む

層	土色	土性	備考
1	黄褐 2.5Y5/3	砂質シルト	軒丸瓦等出土
2	灰 5GY4/1	砂質シルト	グライ層

層	土色	土性	備考
1	灰黄 2.5Y7/2	粘土	基本層VII層起源 均質
2	灰黄 2.5Y6/2	粘土	均質
3	灰 N5/0	粘土	基本層VII層の崩落土

層	土色	土性	備考
1	灰黄 2.5Y6/2	シルト	
2	にぶい黄 2.5Y6/3	砂質シルト	
3	緑灰 5G5/1	シルト	グライ層 基本層VIII層含む
4	緑灰 5G5/1	シルト	グライ層

層	土色	土性	備考
1	淡黄 2.5Y8/4	シルト	
2	浅黄 2.5Y7/3	粘質シルト	
3	淡黄 2.5Y8/4	粘質シルト	浅黄色粘土含む

層	土色	土性	備考
1	灰 5Y6/1	シルト質粘土	均質
2	灰 5Y6/1	シルト質粘土	淡黄色シルトブロック含む

図10 古代の遺構セクション

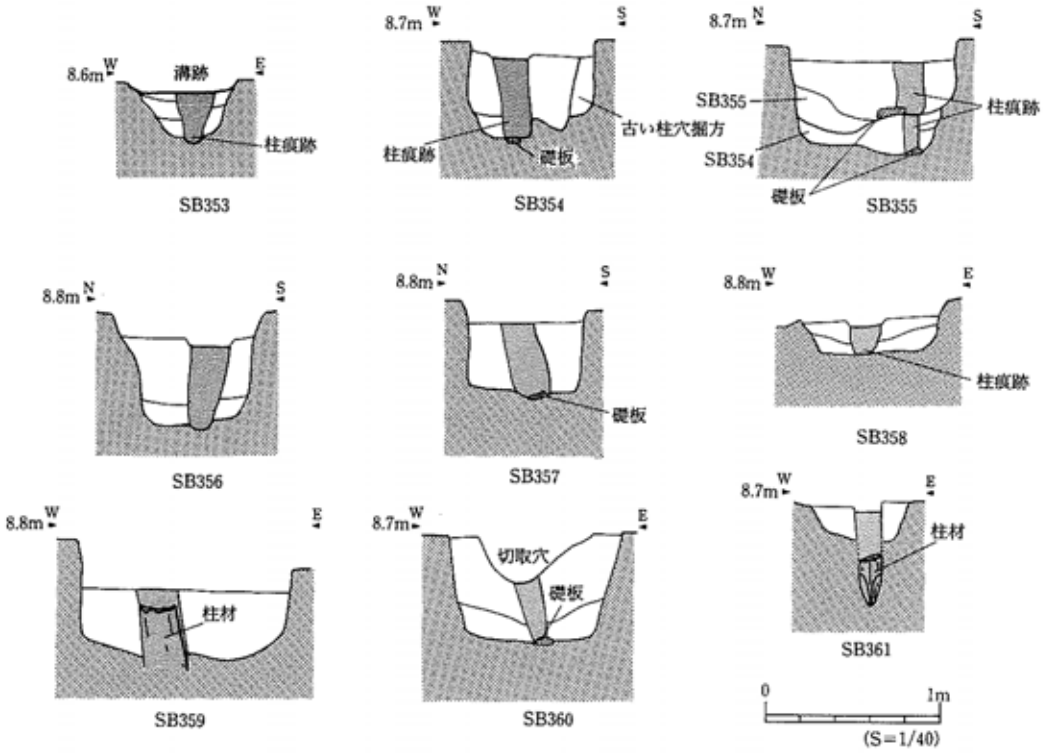


図11　掘立柱建物跡柱穴セクション

複しこれより新しい。

平面規模は西側柱列で総長 4.8m、柱間が北から 2.6m、2.2m、北側柱列で総長 4.5m、柱間が西から 2.2m、2.3mである。建物の方向は北側柱列で見て東で南に約 19°振れる。

柱穴は 9 個検出した。長軸 80㎝～1m・深さ 47～66㎝の隅丸方形を基調とし、埋土はグライ化した砂質シルトである。柱痕跡は径 20～30㎝の円形で、8 個の柱穴で検出したが、このうち 1 個では底面が平坦な柱材が残存している。また 2 個の底面に礎板が据えられている。礎板はそれぞれ長さ 35・50㎝、幅 15・25㎝、厚さ 2㎝の板状である。

[ＳB360]（図 9）

1 区の東寄りに位置する、南北 2 間東西 2 間のほぼ正方形で総柱の建物跡である。ＳB361 および小溝状遺構と重複し、小溝状遺構よりも古い。

平面規模は南側柱列で総長 4.6m、柱間は西から 2.3m、2.3m、西側柱列で総長 4.3m、柱間は北から 2.1m、2.2mである。建物の方向は北側柱列で見て東で南に約 16°振れる。

柱穴は 9 個検出した。長軸 90㎝～1.1m・深さ 42～61㎝の隅丸方形を基調とし、埋土は灰色のシルトである。柱痕跡は径 15～30㎝の円形で、9 個検出した。すべての底面に礎板が据えられている。礎板は長さ 30～50㎝・幅 5～30㎝・厚さ 4～7㎝の棒状ないし板状である。

柱穴埋土から須恵器坏破片が出土している（図 12－1）。

[ＳB361]（図 9）

1 区の東寄りに位置しており、東西 3 間南北 2 間の東西棟で総柱の建物跡と考えられる。ＳB360 および小溝状遺構と重複し、小溝状遺構よりも古い。

平面規模は桁行の柱間が南側柱列で西から1.4m、1.3m、約1.6m、梁行の柱間が東妻で北から2.0m、約2.1mと推定され、建物の方向は南側柱列で見て東で南に約11°振れる。

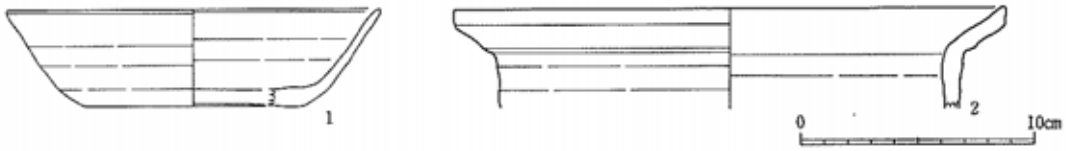
柱穴は2個の掘り方の痕跡がわずかに残る程度であったが、柱材は深く沈下していたために8箇所で検出することができた。柱材は径20～30㎝で先端が尖っている。

B．溝 跡

溝跡は1区で5条、2区で1条、3区で5条検出した。

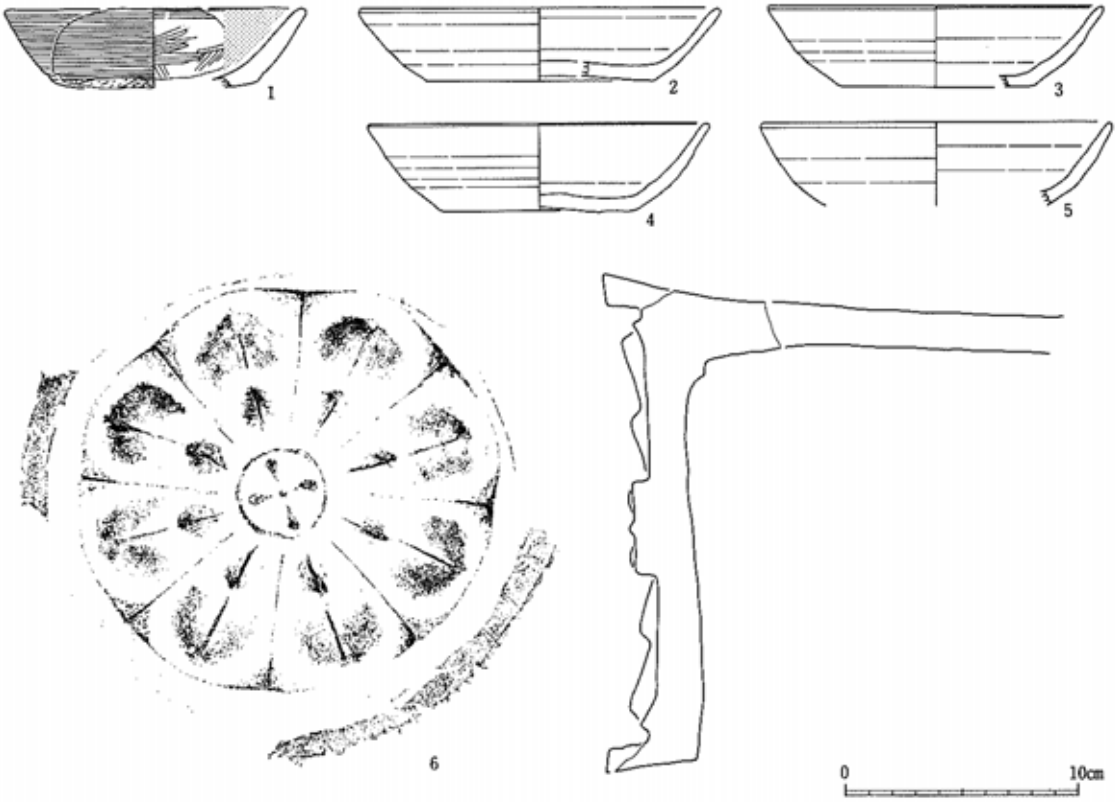
[ＳＤ110～ＳＤ112]（図6・9）

1区で検出した溝跡は建物群の東側に分布しており、南北方向が3条、東西方向が1条ある。南北



No.	写真	遺構	種別	器種	備考
1	7	SB360	須恵器	杯	口径16.0、底径9.4、器高4.2、外底磨耗、内外面ロクロナデ、海綿骨針
2	9	SB357	土師器	甕	口径23.8、内外面ロクロナデ

図12　SB357・360 出土遺物



No.	写真	遺構	種別	器種	備考
1	3	SD222	土師器	杯	口径13、底径8.9、器高3.4、内面ヘラミガキ→黒色処理、外面ヨコナデ、外底ヘラケズリ
2	6	SD222	須恵器	杯	口径15.4、底径9.6、器高3.1、外底ヘラキリ、無調整
3		SD222	須恵器	杯	口径14.4、底径8.4、器高3.5、外底回転ヘラキリ、無調整
4	2	SD222	須恵器	杯	口径14.6、底径8.6、器高3.8、外底回転ヘラキリ、無調整
5		SD222	須恵器	杯	口径15.0、海綿骨針
6	15	SD222	瓦	軒丸瓦	瓦当部、八葉重弁蓮花文、政庁創建期

図13　SD222 出土遺物

方向の溝は、確認面で幅が70～80㎝で深さが約10㎝の浅いもの（ＳＤ110・112）と約30㎝の深いもの（ＳＤ111）ある。深いものは壁が急角度に立ち上がっている。

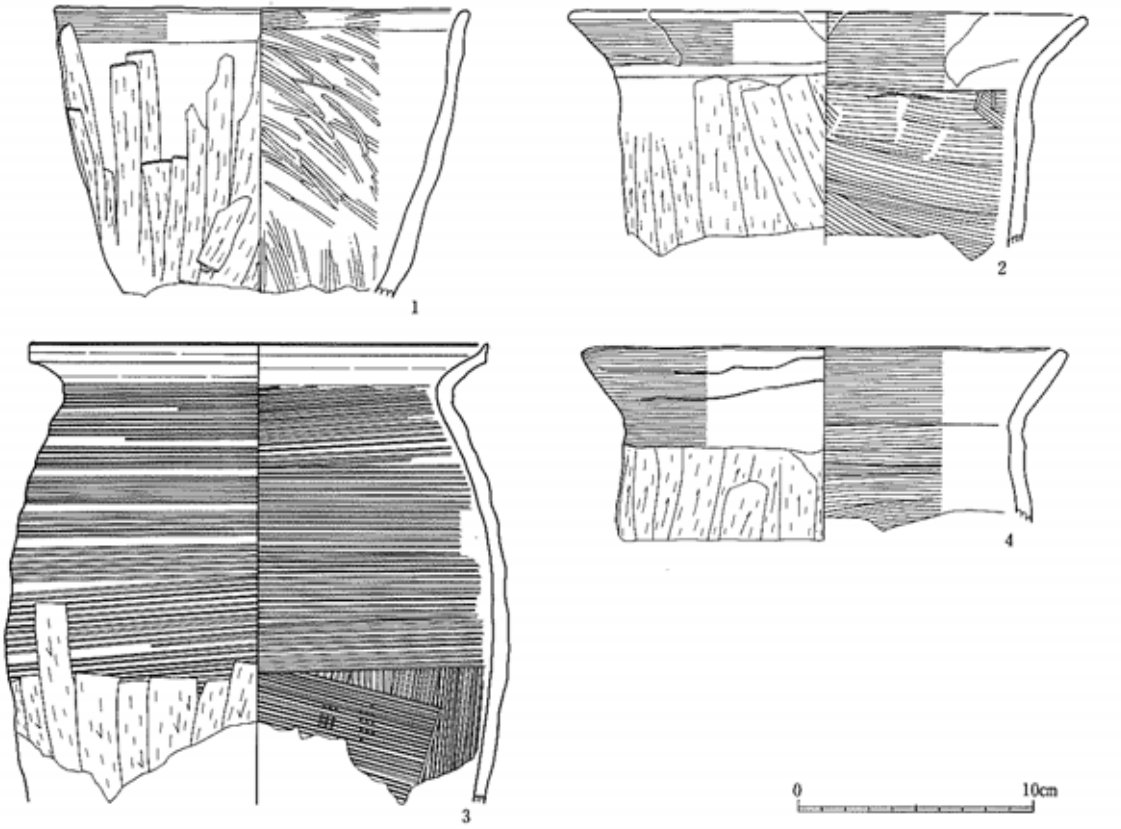
ＳＤ112は比較的縁辺が直線的で南北方向に延びるが、他の溝跡は曲がりくねったりゆるく湾曲しており、ＳＤ96などは自然の落ち込みの可能性もある。これらの溝跡の堆積土はいずれも自然堆積である。

遺物は、ＳＤ112から、ロクロ調整で回転刷毛目の見られる土師器長胴甕の破片が出土している（図14-3）。

[ＳＤ222]（図6）

2区西端部で検出した。西側は中世の溝に破壊されているが検出部より西に延びていたと考えられる。検出部は確認面で長さが約44m・幅3～4m・深さ約50㎝あり、断面は逆台形を呈す。堆積土は自然堆積で下層がグライ化している。

堆積土上層から有段で丸底風平底の土師器坏(図13-1)、須恵器坏(図13-2～5)、多賀城創建期の軒丸瓦の破片（図13-6）が出土している。土師器坏は非ロクロ調整で体下端に弱い段がつくもので、器面調整は外面がヨコナデとヘラケズリ、内面がヘラミガキである。このような特徴の土器は国分寺下層式の新しい段階とされ、8世紀後半に位置づけられている(加藤1989)。須恵器坏は口径に対する底



No.	写真	遺構	種別	器種	備考
1	13	SD92	土師器	坏	無底式、口径17.6、内面ヘラミガキ、外面口縁ヨコナデ→体部ヘラケヅリ
2	10	SK101	土師器	甕	口径22.0、内面ヘラナデ→口縁ヨコナデ、外面ヘラクズリ→口縁ヨコナデ
3		SD112	土師器	甕	口径19.4、内面ロクロナデ→ハケメ→回転ハケメ、外面ロクロナデ→回転ハケメ→ヘラケズリ
4	8	SK102	土師器	甕	口径20.6、内面ヘラナデ→口縁ヨコナデ、外面ヘラケズリ→口縁ヨコナデ

図14　SD92・SK101・SD112・SK102出土遺物

径の比が大きいもので、8 世紀後半～9 世紀前半頃に位置づけられている（白鳥 1980、村田 1992・1994、ほか）。底部の切り離しが判明するもの 4 点は、いずれもヘラ切りで再調整はなされない。以上よりＳＤ222 出土土器は、8 世紀後半～9 世紀前半頃に位置づけられる。

[ＳＤ363]（図 8）

ＳＤ363 はＳＸ362 の北にある検出長約 7mのＬ字状の溝で、ＳＤ350 とその周辺の小溝状遺構と重複しており、これらより新しい。溝は確認面で幅 30～40㎝、深さ 10㎝ 前後あり、堆積土は自然堆積である。Ｌ字を呈する平面形態から竪穴住居の周溝の一部かとも思われたが、住居跡に伴う他の施設は検出されず性格は不明である。

[ＳＤ276～279 ほか]（図 6）

3 区のやや東寄りで検出した溝跡で、直線的にのびるもの、ゆるく湾曲するもの、屈曲するものの 3 種がある。調査区断面の観察では、溝は掘り込み面で幅 60～80㎝・深さ約 50㎝ で断面がＶ字のものと（ＳＤ276、277）、幅 1.2～1.4m・深さ 20～30㎝ で断面が逆台形のもの（ＳＤ278、279）がある。

堆積土はいずれも自然堆積で、ＳＤ276 は 1 度掘り直されている。

Ｃ．土 壙

[ＳＫ101・102]（図 7）

1 区西端にある 2 基の浅い土壙で、いずれも小溝状遺構より新しい。ＳＫ101 は径 1.2mの円形、ＳＫ102 は長軸約 90㎝ の楕円形で、深さはともに 13～16㎝ 程度である。ＳＫ102 は底面に凹凸が多く、自然のくぼみの可能性もある。

2 基からは、非ロクロ調整で体部外面にヘラ削りが見られる土師器長胴甕の破片が出土している（図 14-2・4）。

Ｄ．その他の遺構

円形周溝など

[ＳＸ90・ＳＸ362・ＳＸ364]（図 7・8）

ＳＸ90 は 1 区西端に位置する円形周溝で、2 基が重複している。古いものは溝の心心距離で東西約 4.2m、新しいものは東西約 3.2mあり、いずれも確認面での幅が 40～50㎝・深さ 12～25㎝ で断面は逆台形状またはU字状を呈する。堆積土はいずれも自然堆積である。

ＳＸ364 はＳＸ90 の東側にあり、溝の心心距離が東西 2mに満たない小規模なものである。

ＳＸ362 は 1 区中央部の南壁にかかっており、検出部の溝は隅丸方形状にまわる。小溝状遺構の一部と重複しており、これより新しい。平面規模は溝の心心距離で東西約 4.6m、確認面での幅は 30～40㎝、深さは 7～16㎝ あり、堆積土は自然堆積である。

小溝状遺構　[ＳＤ93・95 ほか]（図 6）

畝跡と考えられる溝状の掘り込みである。1 区の広い範囲に分布するが、ＳＢ354～356 周辺ではほとんど検出されなかった。

ＳＢ353、ＳＢ355、ＳＢ360、ＳＢ361、ＳＸ90(新･古)、ＳＸ362、ＳＤ363 と重複しており、ＳＢ353、ＳＸ90、ＳＸ362、ＳＤ363 より古く、ＳＢ355、ＳＢ360、ＳＢ361 より新しい。

調査区の南北基準線とほぼ揃う方向のものが多く、その他にやや西に振れるものと東西方向のものが少数ある。やや振れるものには、南北基準線とほぼ揃うものより新しいものがある。溝は確認面で幅が10～50㎝、深さが7～25㎝あり、断面は逆台形状やU字状を呈する。

1区西端のＳＤ92から非ロクロ調整の土師器甑の破片が出土している（図14-1）。

(3)　中世の遺構と遺物

Ａ．遺　構

検出された遺構には、道路跡2条･掘立柱建物跡41棟･柱穴列12条･溝跡35条･井戸跡52基･土壙墓1基･銭備蓄遺構1基･土壙36基がある。はじめに区をまたがって検出された東西の溝跡を記述し、その後区ごとに主要な遺構を説明する。全遺構の詳細は区ごと・種類ごとに表に示した（表2～16）。各遺構からは奈良・平安時代の須恵器・土師器も出土しているが、特別なものを除いて記述・図化は省略した。また、直接的な重複関係にある遺構間で遺物が接合（明確な同一個体を含める）した場合には、その遺物は古い方の遺構に所属させて記載してある。

＜東西溝＞

ＳＤ49（図15）

1区の東側から3区の西側に位置する。検出長は約192mで、W144付近の調査区北壁から南東方向に延び、W50付近で東の方向に緩く曲がってＥ40付近で北壁外に出る。全体的に直線的ではなく、軽く蛇行している。ＳＤ50・201・207・213、ＳＥ54・56・220、ＳＫ62・246・250 より古く、ＳＥ208より新しい。底面は東に向かって深くなっており、ほぼ同位置で1度掘り直されている。Ａ（古）は上幅3.4～3.5m・下幅1～1.2mで掘り込み面からの深さは約1.3mあり、Ｂ（新）は上幅3.5m・下幅約0.6mで掘り込み面からの深さは約1mある。打ち込み杭列が2箇所で検出されている（W138、W21付近）。断面形はＡＢいずれも逆台形状を呈す。埋土は全て自然堆積である（図16）。

遺物は1区の東側から2区の西側にかけて、特に2区の西側に集中して多量に出土している（図17～24）。常滑・渥美および在地産の陶器鉢・壷・甕、古瀬戸の折縁深皿、手づくねかわらけ皿・小皿、ロクロかわらけ小皿、龍泉窯系青磁碗・坏・盤？、白磁碗・皿、鉄鏃・刀子・鎌・羽釜、板碑片、砥石、板草履・付札・箸・漆器椀・曲物、銭貨（熙寧元宝？・皇宋通宝）、ウマの上顎歯・橈骨などがある。ＳＤ49はＳＤ50ほかの多くの溝に切られ掘り返されているため、これらの新しい溝から出土した遺物には本来ＳＤ49にあったものが含まれている可能性がある。実際に陶器の多くの個体で、新しい溝とＳＤ49出土資料が接合したり同一個体と考えられる例がある。一方、ＳＤ49と直接の切り合い関係を持たないが、ＳＤ49出土の陶器と接合したりあるいは確実に同一個体と見られるものを出土した遺構として、ＳＤ01(4個体)・ＳＤ03・ＳＤ47(2個体)・ＳＤ229・ＳＥ42(3個体)・ＳＥ38・ＳＫ70(2個体)がある。ＳＤ229以外は1区の遺構である。

ＳＤ50（図15）

1区東側のW160付近から南東方向に直線的に延び、2区西端のW105付近で北西方向に直角に屈曲して調査区北壁外に及ぶ。検出長は、南辺が約41m・東辺が約12mある。ＳＤ47・49・57・85・207・213、ＳＫ200と重複し、ＳＤ47・49・57・85より新しく、その他より古い。新旧の2時期がある。Ａ(古)

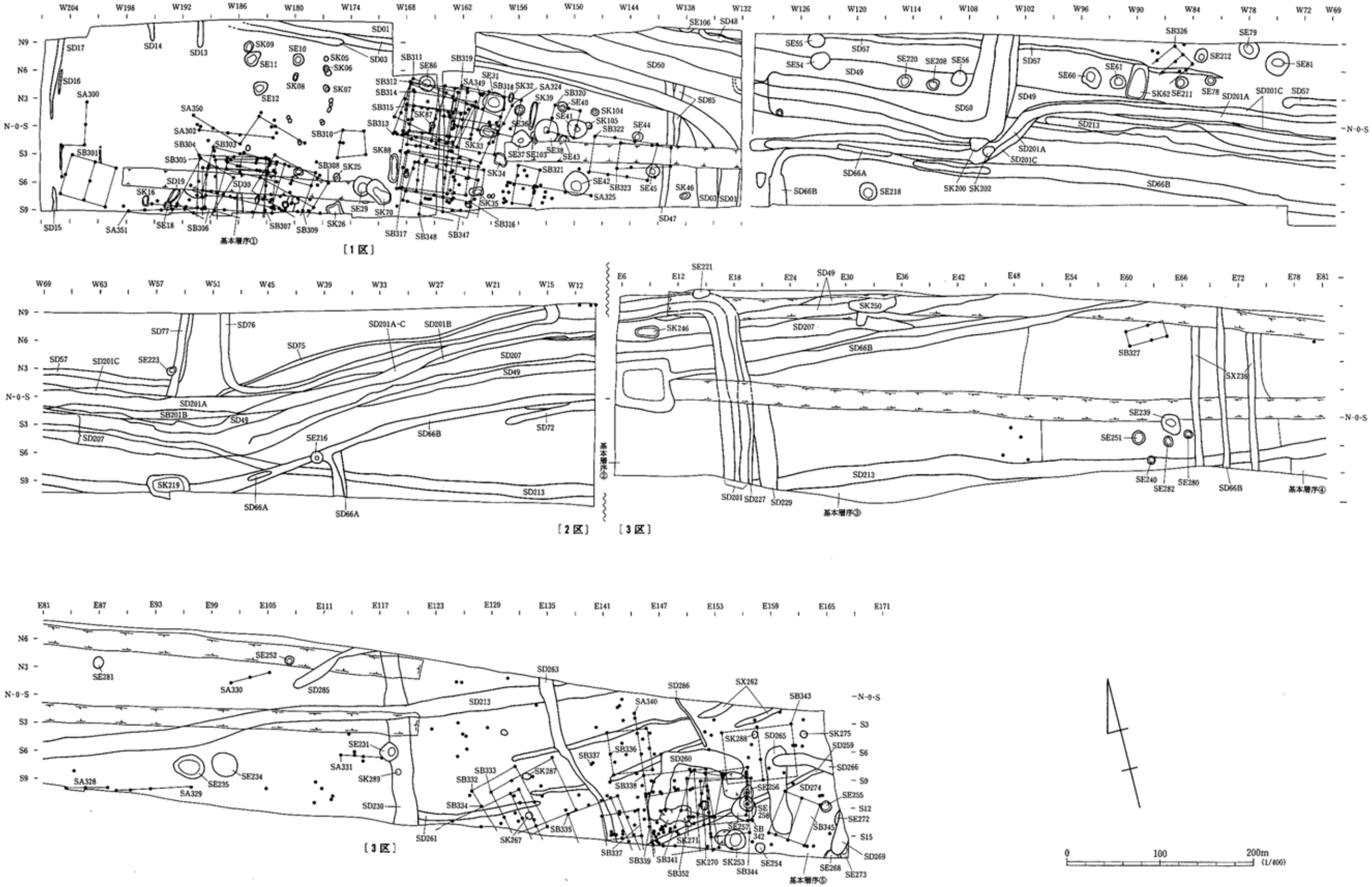


図15　中世遺構全体図

は確認面での上幅が推定3m程度・下幅0.8～1.5m・深さ1.3～1.6mで、一部で掘り直しがある。下部の断面形は箱堀状で、底は西側→南東コーナー→北側へと次第に低くなる。B（新）はAを浅めに幅広く掘り直したもので、確認面での上幅が4～4.5m・下幅が約2m・深さが0.85～1.2mある。断面は途中に段がつく逆台形状をなす。埋土はＡＢともに基本的に自然堆積である（図16）。

B段階では、南辺のW132～W129 の範囲を掘り残し、同時に、ＡとＳD49 が十分に埋まりきらずに窪地となっていた部分を整地して土橋を作り出している。またその上面にはL字形に曲がる小規模な溝(ＳD202)を掘り込んでいる。ＳD202は、上幅が1.6m程度で底面に一段深い部分があり、東に向かって低くなってＳD50Bに接続している。

遺物は主に南辺の東側部分から出土しており、常滑・渥美および在地産の陶器甕・鉢・壷、古瀬戸の瓶子・盤類、手づくねかわらけ皿・小皿、龍泉窯系青磁碗、白磁合子、羽口、転用砥、砥石、石鉢、茶臼上臼、板碑片、漆器椀、折敷、曲物、板草履、下駄、ウマ中手骨・大腿骨、ウマかウシの仙椎、ニホンジカ下顎骨、イヌ頭蓋骨・下顎骨・上腕骨などがある(図25～31)。ＳD50出土の陶器と接合したり、あるいは確実に同一個体と見られるものを出土した遺構(直接の重複のないもの)として、ＳD01(2個体)・ＳD03(3個体)・ＳD236・ＳE10・ＳE41・ＳE42(2個体)・ＳK70がある。ＳD236(3区中央部)以外は1区の遺構である。

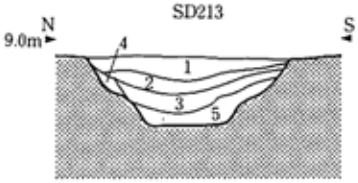
ＳD66（図15）

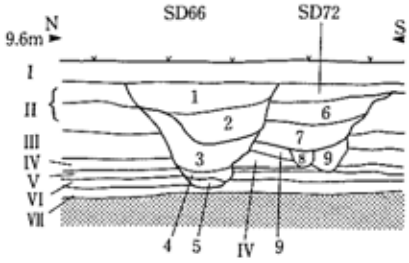
2区西端部のW129から3区中央部のE70にかけて位置する。W129の調査区南壁から北に延び、S3付近でほぼ直角に東に曲がる。W56付近までは南東方向にやや向きを変えながら延び、その後東の方向に緩く曲がってE62で調査区北壁外に及ぶ。確認調査の際にこの延長がE70付近で南に屈曲することを確認している。W39付近には三叉があり、南へ分岐している。また、3区西端部には1辺約6m・深さ1.3mの方形を呈する大形の溜升がある。検出長は約199mあり、三叉部分から西側の屈曲部までが約90m、東側の屈曲部までが約109mとなる。ほぼ同位置で1度掘り直されている(古い段階をA、新しい段階をBとする)。ＳD72・207・213より新しく、ＳD201・ＳE216・ＳK219より古い。Bの確認面での上幅は1.0～2.2m・下幅が50～70㎝、深さが17～80㎝ある。断面形は逆台形またはV字状で、底面は東から北・西に向かって低くなる。埋土は全て自然堆積である（図16）。

遺物は検出部西側の2区を中心に出土している(図32～34)。龍泉窯系青磁碗、青白磁梅瓶、古瀬戸卸皿・直縁大皿、東海・在地産の陶器鉢、常滑産の陶器壷、常滑・在地産の甕、手づくねかわらけ皿・瓦質土器摺鉢、羽口、転用砥、差歯下駄の歯、曲物側板、茶臼下臼、砥石、板碑片、鉄滓、銭貨（皇宋通宝･咸平元宝）、ウシ下顎歯、イヌ上腕骨がある。直接重複関係のない遺構との接合例として、在地産の鉢1例がＳE234出土品と接合している。

ＳD201（図15）

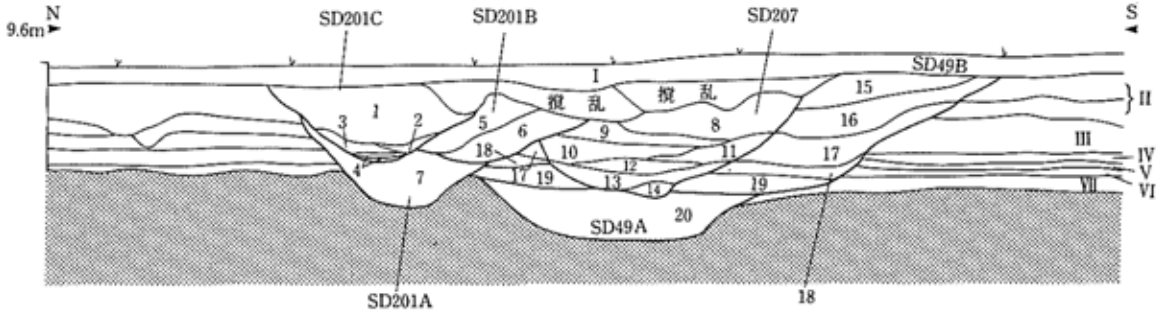
2区西端のW131から3区西端のE18付近に位置する。W131から南東方向へ延び、W106付近でなだらかな鍵の手状に屈曲する。W42付近からは東へ方向を変え、E18でほぼ直角に南に曲がっている。検出長は約150mあり、2回の掘り直しが見られる(A→B→C)。ＳD49・50・75・77・207より新しく、ＳD76より古い。





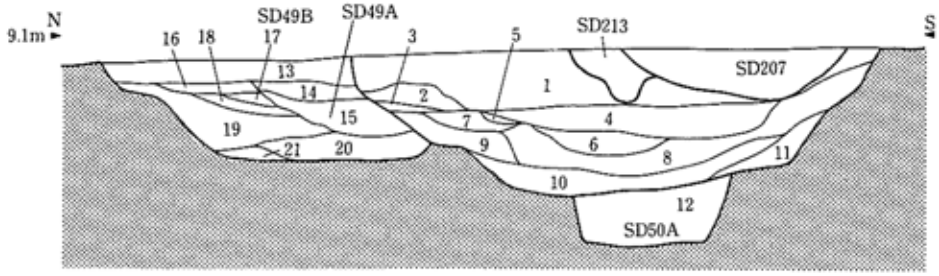
層	土色	土性	備考
1	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	自然堆積 砂質に富む
2	黄灰色 2.5Y5/1	砂質シルト	〃
3	黄灰色 2.5Y4/1	砂質シルト	〃少量の炭化物を層状に含む
4	黄灰色 5Y4/1	砂質シルト	〃地山崩壊土
5	黄灰色 5Y4/1	砂質シルト	〃炭化物・地山ブロック含む

層	土色	土性	備考
1	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト	SD66B
2	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	〃
3	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	SD66A
4	黄灰 2.5Y5/1	砂質シルト	〃 1～3層より粘性大
5	灰黄 2.5Y6/1	粘土	〃 基本層VII層＋4層
6	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	SD72
7	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト	〃
8	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	未命名の小溝 基本層III層を含む
9	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	〃



層	土色	土性	備考
1	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	SD201C 灰色シルトを斑状に含む
2	黄灰 2.5Y5/1	砂質シルト	〃
3	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	砂質シルト	〃
4	暗灰黄 2.5Y4/2	細砂	〃
5	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	SD201B 砂質に富む
6	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃
7	黒褐 2.5Y3/2	シルト	SD201A 下層に細砂やグライ層を含む
8	褐灰 7.5YR4/1	砂質シルト	SD207
9	褐灰 7.5YR4/1	シルト	〃
10	褐灰 7.5YR5/1	砂質シルト	〃

層	土色	土性	備考
11	褐灰 7.5YR5/1	砂質シルト	SD207 17層を少量含む
12	黄灰 2.5Y5/2	シルト	〃
13	黄灰 2.5Y5/2	シルト	〃粘性大
14	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	〃
15	にぶい黄褐 10YR4/3	砂質シルト	SD49B
16	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	〃
17	暗灰黄 7.5YR5/2	シルト	〃灰色シルトブロックを含む
18	暗灰黄 7.5YR5/2	シルト	〃
19	暗灰黄 7.5YR5/2	シルト	〃VII層を含む
20	灰 10Y4/1	シルト	SD49A グライ層



層	土色	土性	備考
1a	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	SD50B 炭化物含む
2	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	SD50B 1a層より粗 炭化物含む
3	灰黄褐 10YR5/2	砂質シルト	〃 炭化物含む
4	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	〃砂層含む
5	灰黄褐 2.5Y5/2	砂質シルト	〃4層＋黄色砂
6	灰 5Y4/1	砂質シルト	〃砂層含む
7	灰オリーブ 5Y5/2	砂質シルト	〃炭化物含む
8	灰 5Y4/1	砂質シルト	〃ラミナ状を呈す
9	灰 5Y4/1	砂質シルト	〃8層よりしまりあり
10	灰 5Y4/1	シルト	〃砂層含む

層	土色	土性	備考
11	灰 10Y5/1	砂質シルト	SD50B グライ層＋8層＋10層
12	黒 7.5Y2/1	シルト	SD50A しまりなし
13	褐灰 10YR5/1	砂質シルト	SD49B グライ層のブロック含む
14	灰 5Y5/1	砂質シルト	SD49B 炭化物含む
15	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃 9層との境界に地山ブロック
16	灰 10Y5/1	砂質シルト	SD49A
17	黄褐 2.5Y4/1	砂質シルト	〃 黄色砂層含む
18	灰 7.5Y6/1	砂質シルト	〃
19	オリーブ黒 5Y3/1	砂質シルト	〃グライ砂層含む
20	灰 5Y4/1	シルト	〃グライ層含む
21	灰 5Y4/1	シルト	〃グライ層

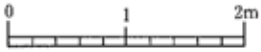


図16 溝跡セクション（SD49・50・66・201・207・213）

		位置	長(m)	上幅(m)	底面幅(m)	深さ	断面	方向	堆積土	備　　考
SD49	A	W150-E45	192	3.4-3.5	1-1.2	0.38-0.7	逆台形	東西	自然堆積	
	B	W150-E45	192	3.5	0.6	0.3	逆台形	東西	自然堆積	SD50,201,207,213,SE54,56,220,SK62,246,SK250 より古，SE208 より新　打ち込み杭列
SD50	A	W159-102	50	1.4-2	0.8-1.5	0.37-0.71	箱堀状	西-北	自然堆積	
	B	W159-102	50	4-4.5	2	0.85-1.2	逆台形	西-北	自然堆積	低い土橋　SD207,213,SK200 より古 SD49,47,57,85 より新
SD66	A	W130-E74		0.5-0.7	0.2-0.4	0.2-0.4	逆台形,U字	西-北-南	自然堆積	
	B	W130-E74	194	1-2.2	0.5-0.7	0.17-0/8	逆台形,V字	西-北-南	自然堆積	SD201,SK219,SE216 より古 SD72.207.213 より新
SD201	A	W132-E18	150	1-1.7	0.4-0.6	0.43-0.88	逆台形,U字	西-南	自然堆積	堤状の高まり SD49.50.75.77.207 より新
	B	W070-E17	61	(1-1.6)	0.4前後	0.6前後	逆台形,U字	西-南	自然堆積	SD76 より古
	C	W132-E19	150	1.5-1.8	0.4-1.2	0.4-0.6	逆台形,U字	西-南	自然堆積	
SD207		W105-E36	122	1.3-3.1	0.9-1	0.18-0.29	逆台形,U字	東西	自然堆積	SD66.201 より古 SD49.50.213 より新
SD213		W104-E145	160	1.4-2.1	0.3-0.6	0.23-0.7	逆台形,U字	東西	自然堆積	一部掘り直し SD66,207 より古

表 2　溝跡属性表

ＳＤ201Ａは、確認面での上幅が 1～1.7m・下幅が 40～60㎝・深さが 43～88㎝ で、底面の一部を掘り残すことによって高さ 30㎝ 前後の土手状の高まりを 2 箇所設けている。溝の断面は逆台形またはU字形を呈し、東に向かって深くなっている。ＳＤ201Ｂは、上幅 1～1.6m・下幅 40㎝ 前後・深さ 60㎝ 前後で、断面は逆台形ないしはU字状を呈する。ＳＤ201Ｃは、上幅 1.5～1.8m・下幅 0.4～1.2m・深さ 40～60㎝ で、断面は逆台形やU字状を呈する。いずれも埋土は自然堆積である（図 16）。

遺物は 2 区西側から主に出土しており、龍泉窯系青磁碗、古瀬戸直縁大皿・縁釉小皿、東海地方および在地産の陶器鉢、常滑・渥美産の壷、常滑・渥美・在地産の甕、手づくねかわらけ皿、土錘、転用砥、粉挽臼上皿、茶臼下臼受皿部、石鉢、砥石、板碑片（貞和五年(1349)銘）、銭貨(熙寧元宝・洪武通宝)、鉄滓、漆椀、組物？、藁縄、クルミ・モモの種実、ウマ上顎歯・橈骨、アカニシの殻軸などがある（図 35～38）。

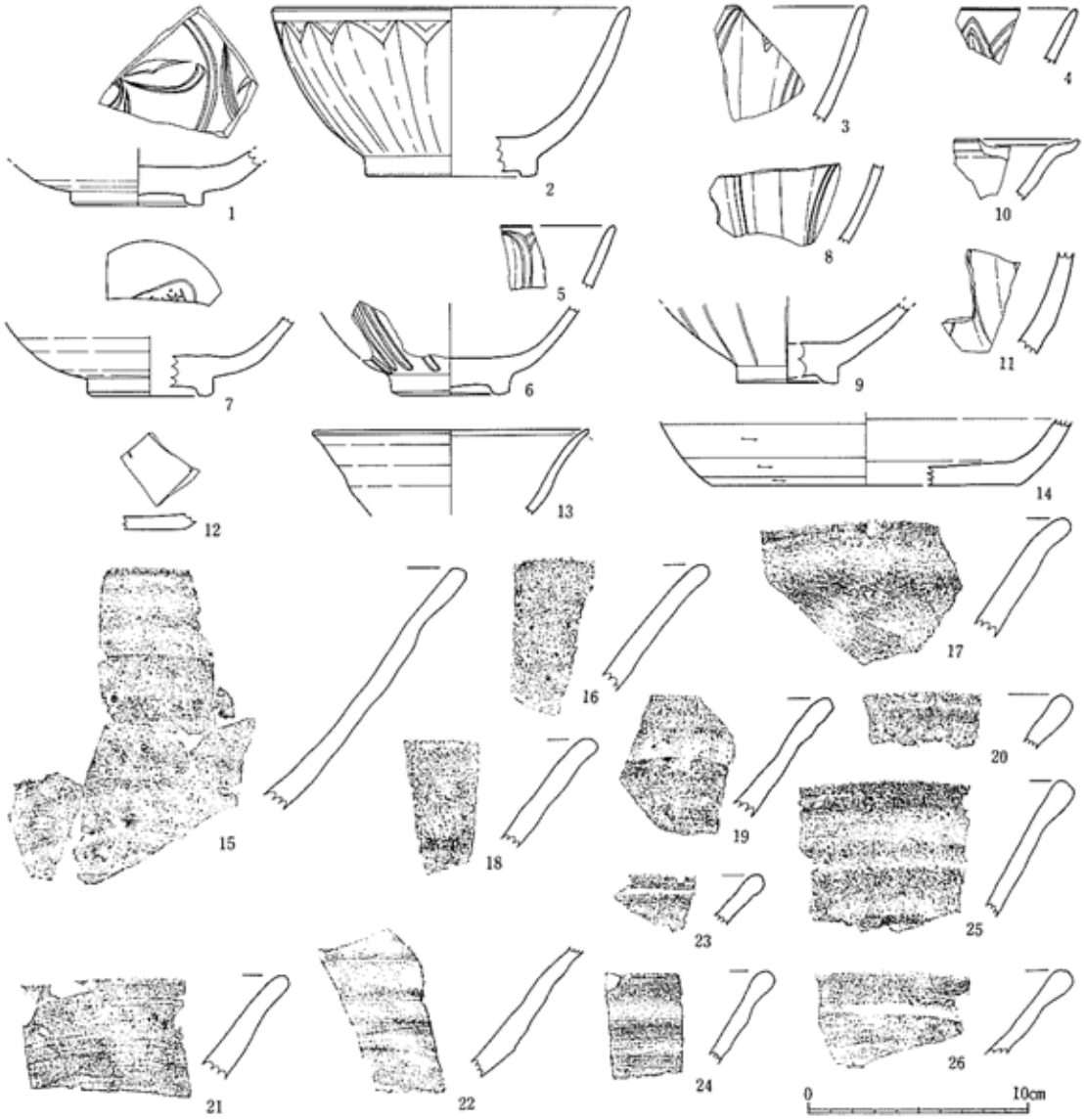
ＳＤ207（図 15）

1 区西側のW150 付近から 3 区西側のＥ37 にかけて検出した。西から南東方向に延びて、W50 付近でなだらかに東に曲がる。Ｅ37 でＳＤ66 に切られそれ以西は確認できないが、ＳＤ66 と同位置に続いていた可能性がある。検出長は約 122mである。全体的には、ＳＤ49 とほぼ同位置でやや南側にあることになる。ＳＤ49･50･213 より新しく、ＳＤ66･201 より古い。確認面での上幅は 1.3～3.1m、下幅は 0.9～約 1m、深さは 18～29㎝(掘り込み面からは約 1m)である。断面形は逆台形状ないしはU字状を呈し、底面は東に向かってやや低くなっている。埋土は自然堆積である（図 16）。

遺物は 2 区の西側を中心に出土しており、東海・在地産の鉢、常滑・渥美・在地産の甕、常滑・在地産の壷、古瀬戸の瓶子、手づくねかわらけ皿・小皿、龍泉窯系青磁碗、白磁碗、転用砥、砥石、板碑片、粉挽臼、鞘尻金具、銭貨（開元通宝・景徳元宝・聖宋元宝・紹聖元宝・祥符元宝・天聖元宝・洪武通宝）などがある（図 39・40）。

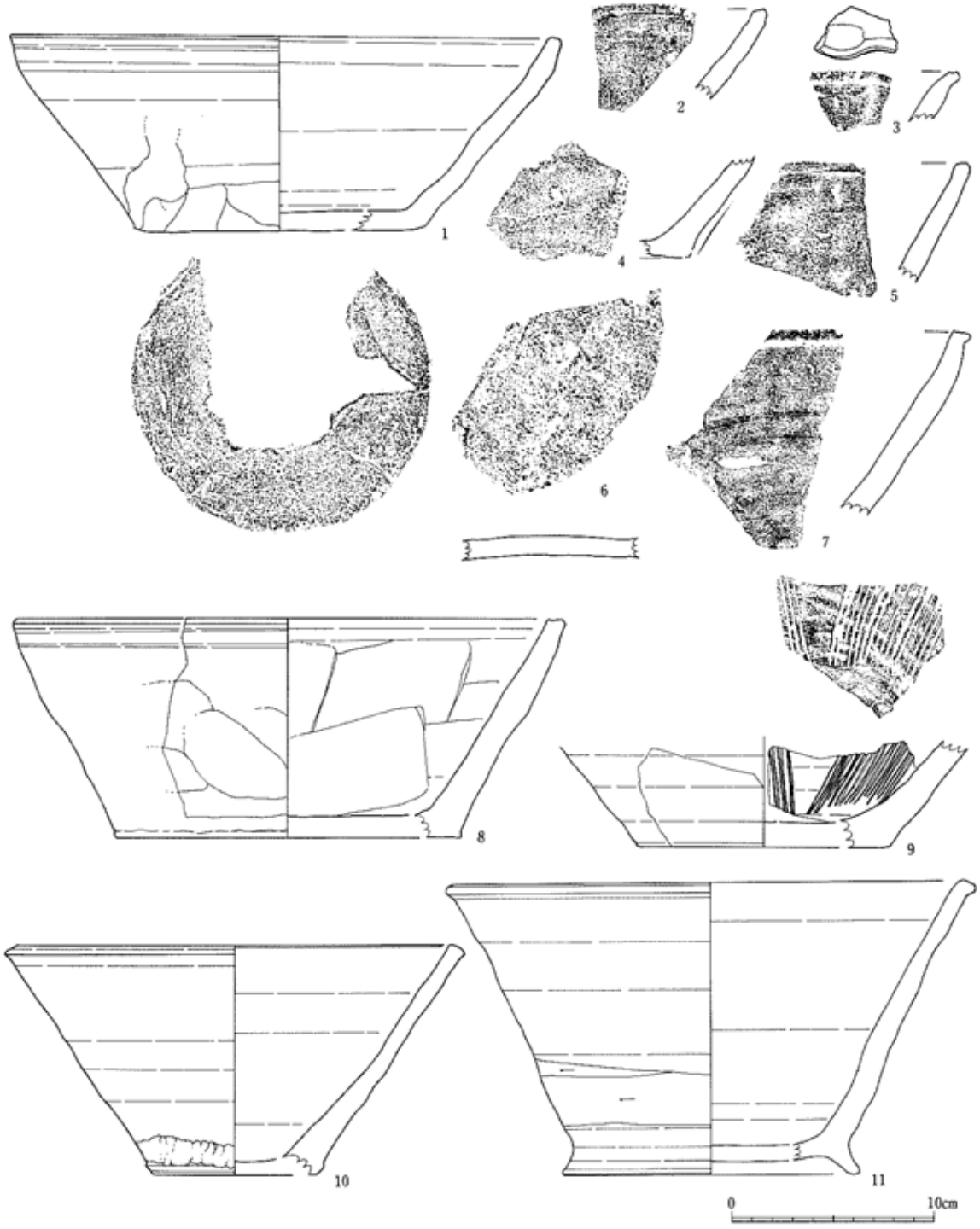
ＳＤ213（図 15）

1 区東側のW150 付近から 3 区東側のＥ140 付近にかけて位置する。1 区から 2 区にかけては、南東方向に弱く蛇行しながら延び、未調査部分を挟んでＥ15 付近から東の方向に曲がって調査区北壁外におよぶ。検出長は約 160mある。ＳＤ49･50･230 より新しく、ＳＸ236、ＳＤ66･201･207･263、ＳＥ240 より古い。確認面での上幅 1.4～2.1m･下幅 0.3～0.6m･深さ約 23～70㎝ で、検出部のほぼ中央(Ｅ45



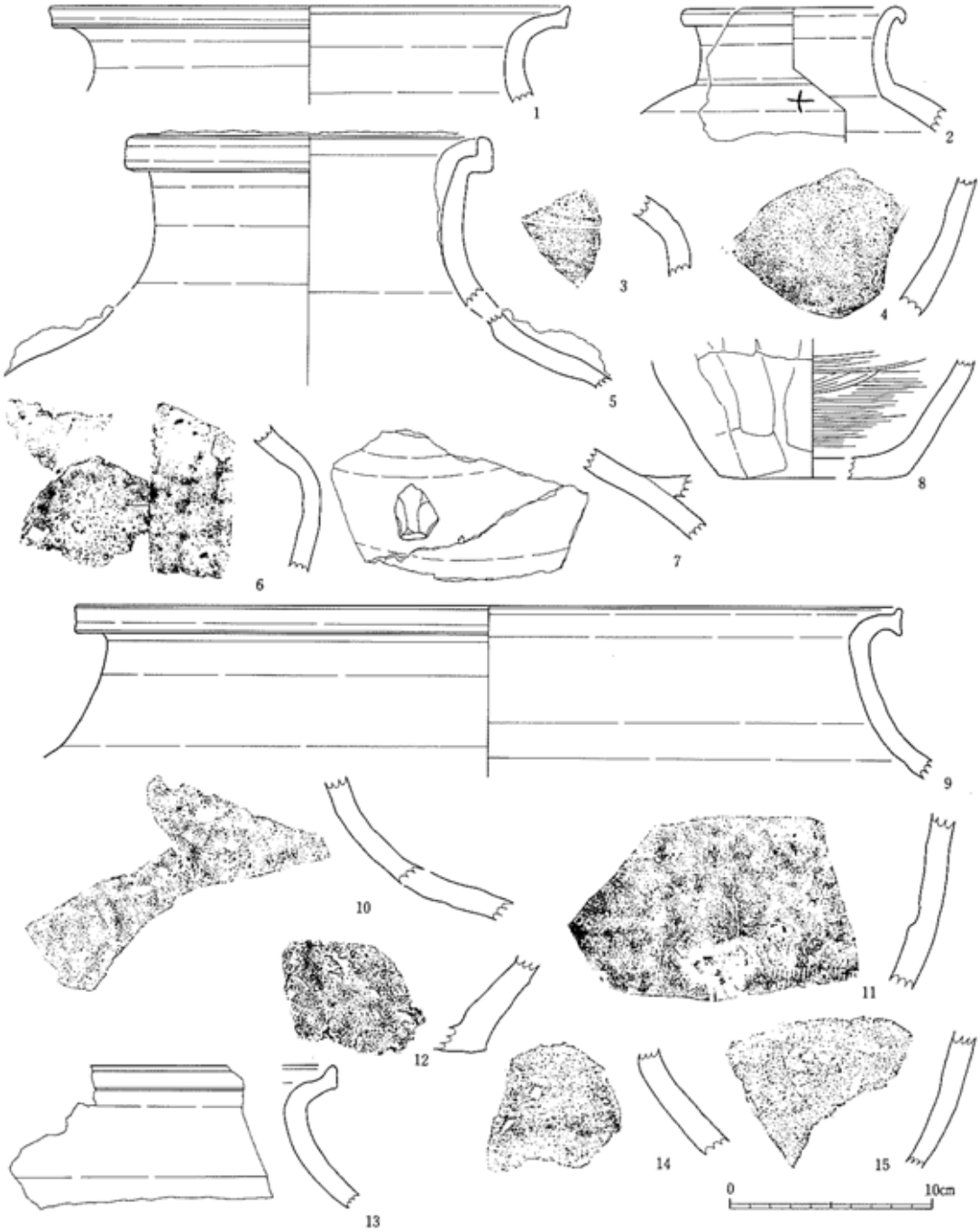
№	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ2a	劃花文、高台径5.9、外底のみ露胎、青灰色
2		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、口径16.0、高台径7.6、器高7.6、畳付・外底露胎、漆継、淡緑色
3		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、灰色がかった淡緑色、2と同一個体か
4		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、淡緑色
5		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、淡緑色、6と同一個体か
6		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、高台径5.3、畳付・外底釉掻き取り、淡緑色、5と同一個体か
7		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ1	高台径5.5、見込みに金玉満堂の刻印、畳付・外底釉掻き取り
8		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、青灰色、35−1と同一個体か
9		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5a	蓮弁文、高台径4.6、畳付・外底釉掻き取り、灰緑色
10		青磁	杯	龍泉窯系	太宰府Ⅲ3	無文、淡緑色、釉厚い
11		青磁	盤？	龍泉窯系		鎬蓮弁文、灰緑色、貫入あり
12		白磁	Ⅲ		太宰府Ⅷ1	見込みに文様有り、外底釉掻き取り
13		白磁	碗		太宰府Ⅸ	口径12.8、口禿
14		陶器	折縁深皿	瀬戸	古瀬戸中期前半	底径13.8、外面・外底周辺回転ヘラケズリ、全面に灰釉、転用砥
15	21	陶器	鉢	東海	鉢2	内外面ナデ、口唇に小平坦面
16		陶器	鉢	東海		内外面ナデ、自然釉
17	29	陶器	鉢	東海	5期	内外面ナデ
18		陶器	鉢	東海		内外面ナデ
19		陶器	鉢	東海	鉢23、5期	内外面ナデ、口唇に小平坦面
20		陶器	鉢	東海	6期	内外面ナデ、口唇に小平坦面
21	42	陶器	鉢	東海	5期	内外面ナデ、内面自然釉
22		陶器	鉢	東海	鉢17、5期	内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ
23		陶器	鉢	東海	5期	内外面ナデ
24		陶器	鉢	東海	鉢17、5期	内外面ナデ
25	37	陶器	鉢	東海	6A	内外面ナデ、
26	44	陶器	鉢	東海	5期	内外面ナデ

図17　SD49 出土遺物 (1)



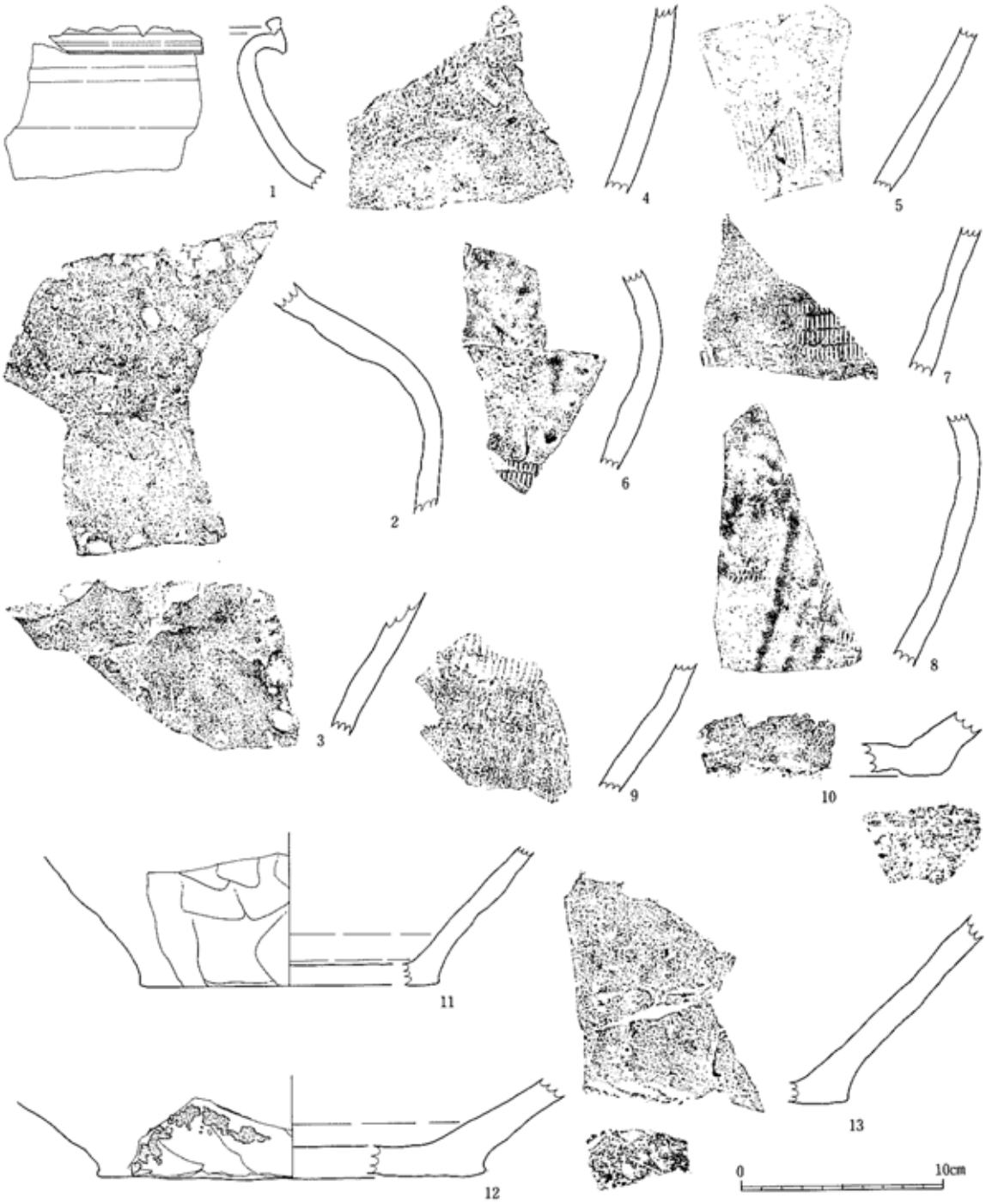
No.	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1	18	陶器	鉢	東海	鉢9	口径27.7、底径14.7、器高10、内面ナデ、外面ナデ→縦ヘラナデ
2	25	陶器	鉢	東海	鉢12	内外面ナデ
3		陶器	鉢	東海	鉢13	内外面ナデ、片口幅2.5突出気味
4	25	陶器	鉢	東海	鉢12	内面ナデ、外面縦ヘラナデ、外底砂目
5		陶器	鉢	東海	鉢13	内面ナデ、外面縦ヘラナデ
6		陶器	鉢	東海		内面ナデ、外底砂目・回転台圧痕
7	27	陶器	鉢	在地	鉢27	内外面ナデ
8	20	陶器	鉢	東海	鉢11	口径27、底径17.3、器高10.9、内面ヘラナデ→ナデ、外面縦ヘラナデ・口縁部ヨコナデ
9	58	陶器	鉢	在地		底径12.6、内面ナデ→筋目（6本単位8セット？）、外面ナデ
10	35	陶器	鉢	在地	鉢25	口径22.8、底径8.2、器高11.4、内外面ナデ、取り上げ痕
11	19	陶器	鉢	在地	鉢1	口径26.2、高台径14.8、器高14.5、内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ

図18　SD49 出土遺物 (2)



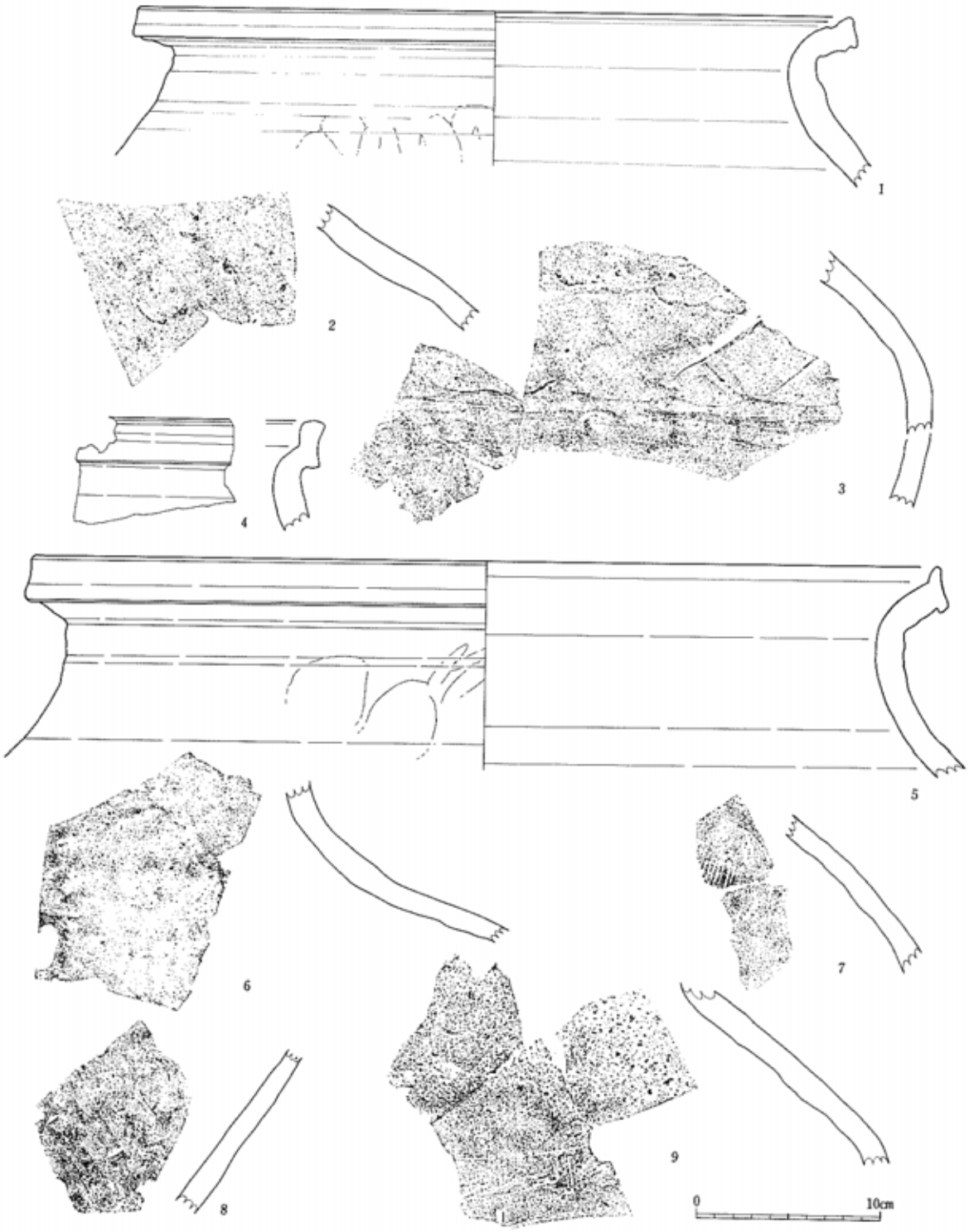
№	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	68	陶器	広口壺	常滑	壺8	口径26、内外面ナデ
2	65	陶器	壺	渥美	壺6	口径11.2、肩に十字の篦書き、内外面ナデ、SD108と接合
3	65	陶器	壺	渥美	壺6	肩に1条の沈線、内外面ナデ
4	65	陶器	壺	渥美	壺6	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ
5	61	陶器	広口壺	在地	壺1	口径18.2、内面ナデ、外面ナデ？、分厚い自然釉
6	73	陶器	壺	在地？	壺4	内面ナデ、外面自然釉、鉄分の吹き出し
7	72	陶器	有耳壺	渥美？		内面粗いナデ、外面ナデ、薄雑ぎ
8	71	陶器	壺	常滑？		底径9.4、内面ヘラナデ、外面縦ヘラナデ
9	81	陶器	甕	常滑	甕6	口径41、口縁内側沈線状、内外面ナデ、SE38と同一個体
10	81	陶器	甕	常滑	甕6	内面ナデ、外面自然釉
11	81	陶器	甕	常滑	甕6	内面オサエ→ナデ、外面自然釉、櫛状押印
12		陶器	甕	常滑	甕6	内面自然釉、外面縦ヘラナデ、外底砂目
13	86	陶器	甕	常滑		内外面ナデ、肩に緑灰色の自然釉
14	109	陶器	甕	常滑	甕4	内外面ナデ、肩に自然釉、SD01と同一個体
15	109	陶器	甕	常滑	甕4	内面ナデ、外面縦ヘラナデ、斜格子に×の押印

図19　SD49 出土遺物 (3)



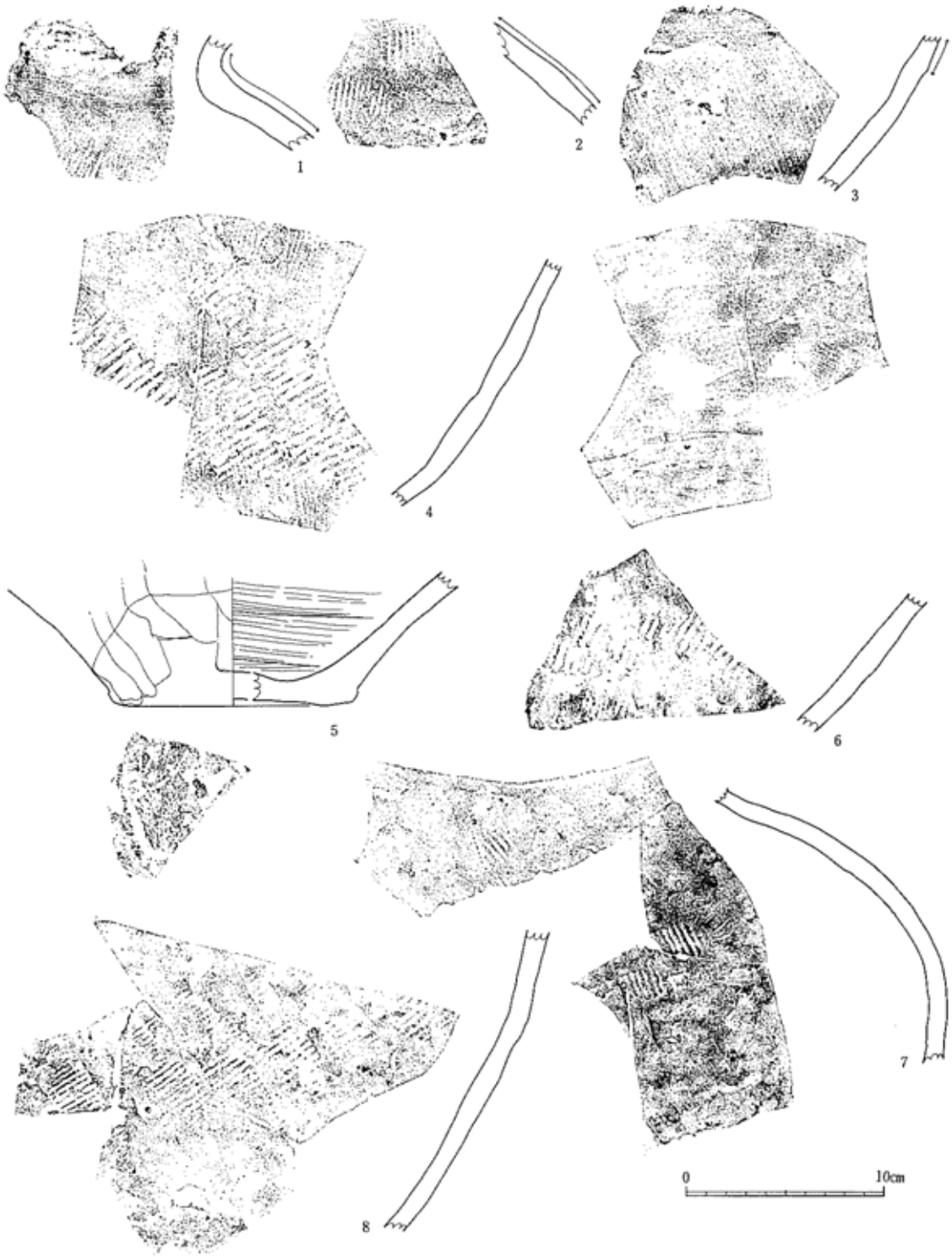
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	83	陶器	甕	常滑	甕11	内外面ナデ、外面灰緑色の自然釉
2	83	陶器	甕	常滑	甕11	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ
3	83	陶器	甕	常滑	甕11	内面ナデ、外面縦ヘラナデ
4	112	陶器	甕	常滑	甕12	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→押印
5	111	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面縦ヘラナデ→平行線に×の押印→自然釉
6	103	陶器	甕	常滑	甕5	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→簾状押印
7	103	陶器	甕	常滑	甕5	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→簾状押印
8		陶器	甕	常滑	甕5	内面ナデ、外面簾状押印→自然釉
9	118	陶器	甕	常滑		内面オサエ→ナデ、外面縦ヘラナデ→簾状押印
10		陶器	甕	常滑？		内面ナデ、外面縦ヘラナデ、外底砂目
11	129	陶器	甕	常滑		底径14.8、内面ナデ、外面縦ヘラナデ、外底砂目
12	127	陶器	甕	不明		底径19、内面ナデ、外面縦ヘラナデ、諸継ぎ
13	126	陶器	甕	常滑	甕13	内面ヘラナデ、外面縦ヘラナデ、外底ワラ状圧痕

図20　SD49 出土遺物 (4)



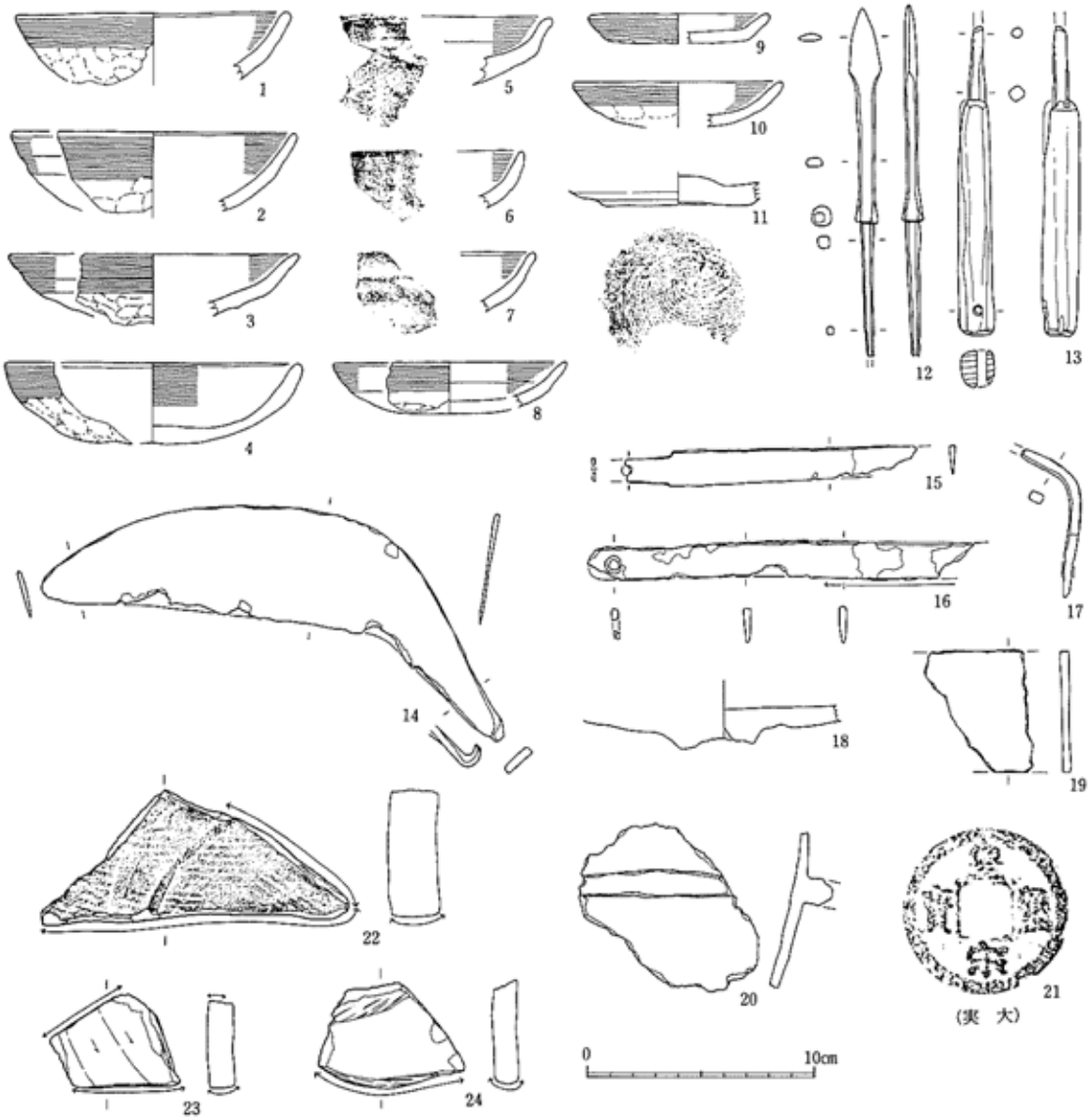
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	78	陶器	甕	在地	甕15	口径39.3、口縁内側沈線、内ナデ、外縦ヘラナデ→ナデ、SK70・SD01・47と同一
2	78	陶器	甕	在地	甕15	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ→霜降り状自然釉
3	78	陶器	甕	在地	甕15	内面ナデ、外面縦ヘラナデ・肩のみ横ヘラナデ→霜降り状自然釉
4	84	陶器	甕	在地		内外面ナデ
5	82	陶器	甕	常滑	甕14	口径50.3、内面ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ→霜降り状自然釉
6	82	陶器	甕	常滑	甕14	内面オサエ→ナデ、外面ナデ→霜降り状自然釉
7		陶器	甕	常滑	甕14	内面ナデ、外面平行線押印→自然釉
8		陶器	甕	常滑？	甕24	内面ヘラナデ→磨耗、外面ヘラナデ、鉢に転用か、SD47・SE42と同一個体
9	106	陶器	甕	不明	甕2	内面オサエ→ナデ、外面肩横ヘラナデ→縦ヘラナデ→ナデ

図21　SD49 出土遺物 (5)



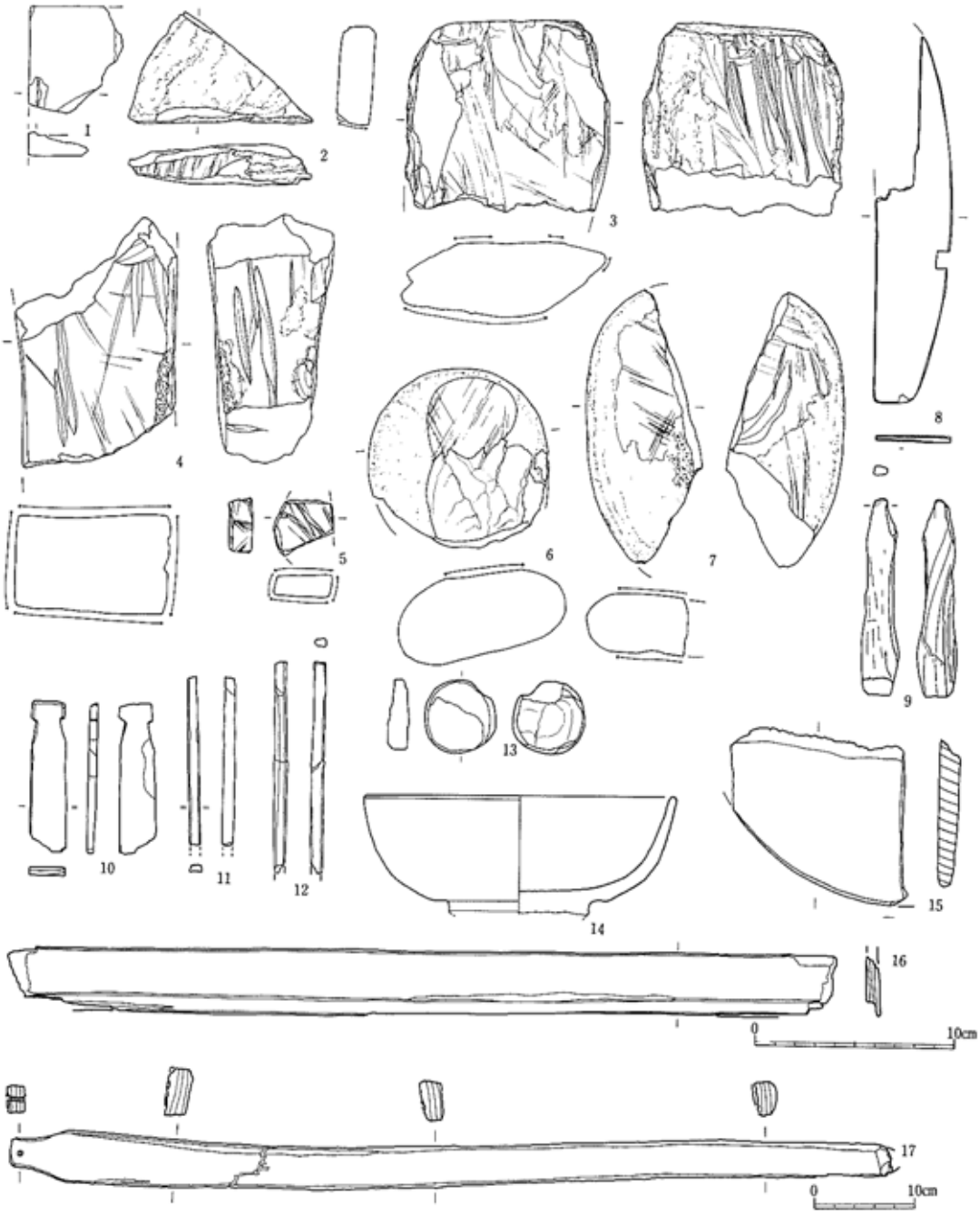
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	77	陶器	甕	湖美	甕19	内面ナデ、外面ナデ→灰釉ハケヌリ、SK70・SE42・SD01と同一個体
2		陶器	甕	湖美	甕19	内面ナデ、外面ナデ→平行線押印→灰釉ハケヌリ
3	91	陶器	甕	湖美	甕18	内面ヘラナデ、外面縦ヘラナデ→灰釉ハケヌリ（上部）
4	91	陶器	甕	湖美	甕18	内面ヘラナデ、外面縦ヘラナデ→平行線押印（粘土帯境界に集中）
5	91	陶器	甕	湖美	甕18	底径12、内面ヘラナデ、外面縦ヘラナデ、外底砂目・ワラ状圧痕、破片が転用砥に
6		陶器	甕	湖美	甕18	内面ヘラナデ、外面縦ヘラナデ→平行線押印
7	90	陶器	甕	湖美	甕17	内面オサエ→ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ→平行線押印→自然釉
8	90	陶器	甕	湖美	甕17	内面ヘラナデ、外面縦ヘラナデ→平行線押印

図22　SD49 出土遺物 (6)



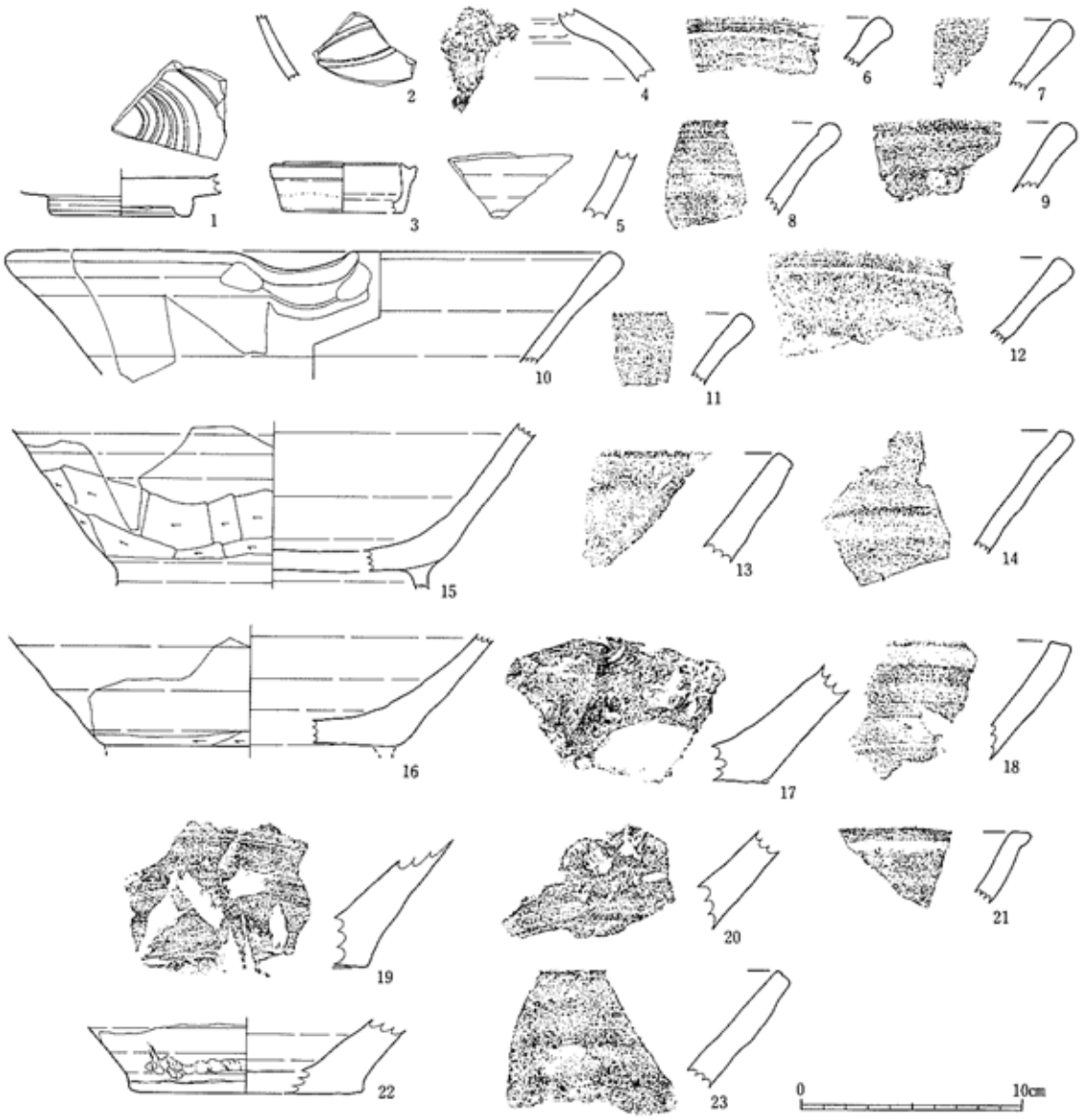
№	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1		かわらけ	皿	手づくね	口径12.2、内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ、海綿骨針
2	140	かわらけ	皿	手づくね	口径12.6、内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ、海綿骨針
3	139	かわらけ	皿	手づくね	口径12.4、内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ
4	132	かわらけ	皿	手づくね	かわらけ2、口径13.2、器高3.6、内面ヨコナデ、外面オサエ・ヨコナデ、海綿骨針
5	145	かわらけ	皿	手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ
6		かわらけ	皿	手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ
7		かわらけ	皿	手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ、海綿骨針
8		かわらけ	中皿	手づくね	口径10.3、器高2.3、内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ
9	151	かわらけ	小皿	手づくね	口径8、器高1.3、内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ、海綿骨針
10	147	かわらけ	中皿	手づくね	口径9.2、器高2,内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ、海綿骨針
11	152	かわらけ	小皿	ロクロ	底径6.4、回転糸切り、砂粒多い
12	229	鉄製品	鏃	長頸鏃	鏃身三角形・両丸造・無関・長3.5、頸部長6.0・台形関
13	227	鉄製品	錐？	木10	身(3.3)×0.6×0.6・隅丸方形～円形、柄10.4×1.6×1.6隅丸方形・ヒノキ、孔
14	223	鉄製品	鎌	有茎	刃15×4.9×0.2・平造直刃、茎7.1×3～1.2×0.3・端部折り返し
15	221	鉄製品	刀子		丸棟平造、両関（斜関）、目釘孔0.4、刃最大幅1.5、茎最大幅1.2、厚0.3
16	220	鉄製品	刀子		丸棟平造、無関、目釘孔0.5、刃(6.6)×1.6、茎11.2×1.5、厚0.3
17	231	鉄製品	釘・鐵		(　)×0.5×0.4
18	226	鉄製品	鎖・金		湯口あり、厚1.2～0.8
19		鉄製品	不明		板状、5.4×(4.7)×0.4
20	225	鉄製品	羽釜		鍔厚1.2、器厚0.5～0.4
21		銅製品	銭貨	皇宋通宝	径2.5、重2.4
22	158	土製品	転用砥		須恵器甕体部破片素材、表面と二辺使用、13.8×5.6×2.2
23		土製品	転用砥		東海産鉢体部破片素材、二辺使用、6.0×4.6×1.1
24		土製品	転用砥		東海産？甕体部破片素材、表面と一辺使用、6.4×4.6×1.1

図23　SD49 出土遺物 (7)



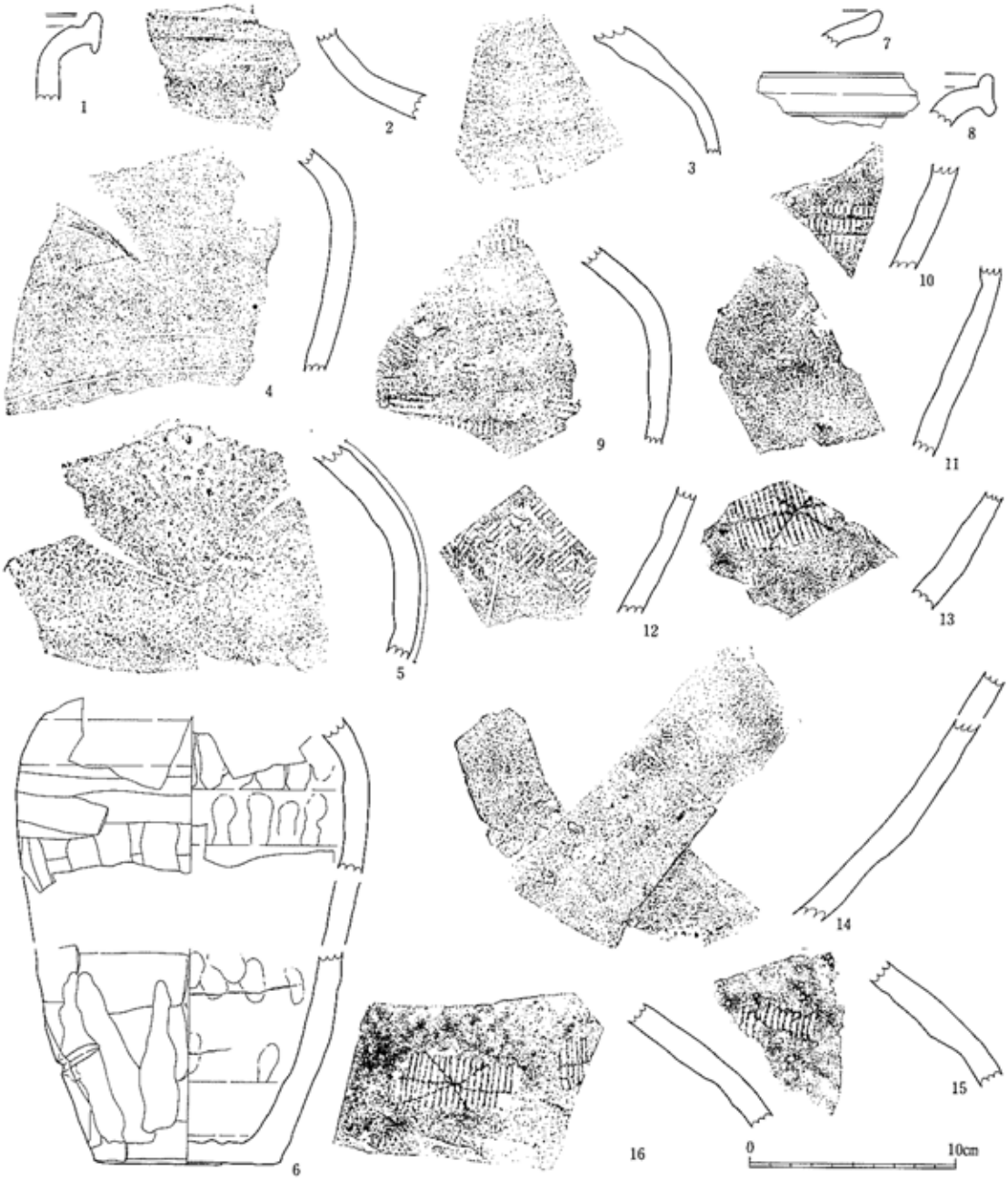
№	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1	294	石製品	硯	粘板岩	膝？付着
2		石製品	砥石	粘板岩	一辺使用、(5.6)×(9.7)×1.7、重90
3		石製品	砥石	粘板岩	二面と一辺使用、(9.5)×10.0×3.7、重560
4		石製品	砥石	砂岩	四面使用、(12.5)×7.6×5.0、重720
5		石製品	砥石	細粒砂岩	六面使用、(3.5)×(2.7)×1.0
6	293	石製品	砥石	砂岩円礫	一面使用、(9.1)×(9.0)×4.0、重490
7		石製品	砥石	砂岩円礫	二面使用、(13.7)×(5.7)×3.0、重300
8	206	木製品	板草履	木120	スギ板目、(18.3)×3.8×0.3
9	176	木製品	つけ木？	木153	(9.8)×1.9×0.6
10	179	木製品	付札	木039	モミ属板目、墨書、(7.5)×1.9×0.4
11		木製品	箸	角箸、木057	スギ、片方削り、(8.4)×0.5×0.3
12		木製品	箸	角箸、木008	スギ、片方削り、(10.5)×0.7×0.5
13		木製品	不明	木044	円形、全体に磨耗、長径3.6、厚1.1
14	168	木製品	漆椀	木020	口径15.5、高台径7.0、輪 or 平高台、両面黒色漆、ケヤキ横木取り
15	195	木製品	曲物	木122	柾目、径(19.2)、厚0.7～1.0
16		木製品	折敷	木142	板目、結合痕なし、(41.4)×(3.1)×0.7
17	187	木製品	不明	木070	モミ属板目、頭部に釘孔・木釘残存(0.3角)、(88.2)×5.1×2.4

図24　SD49 出土遺物 (8)



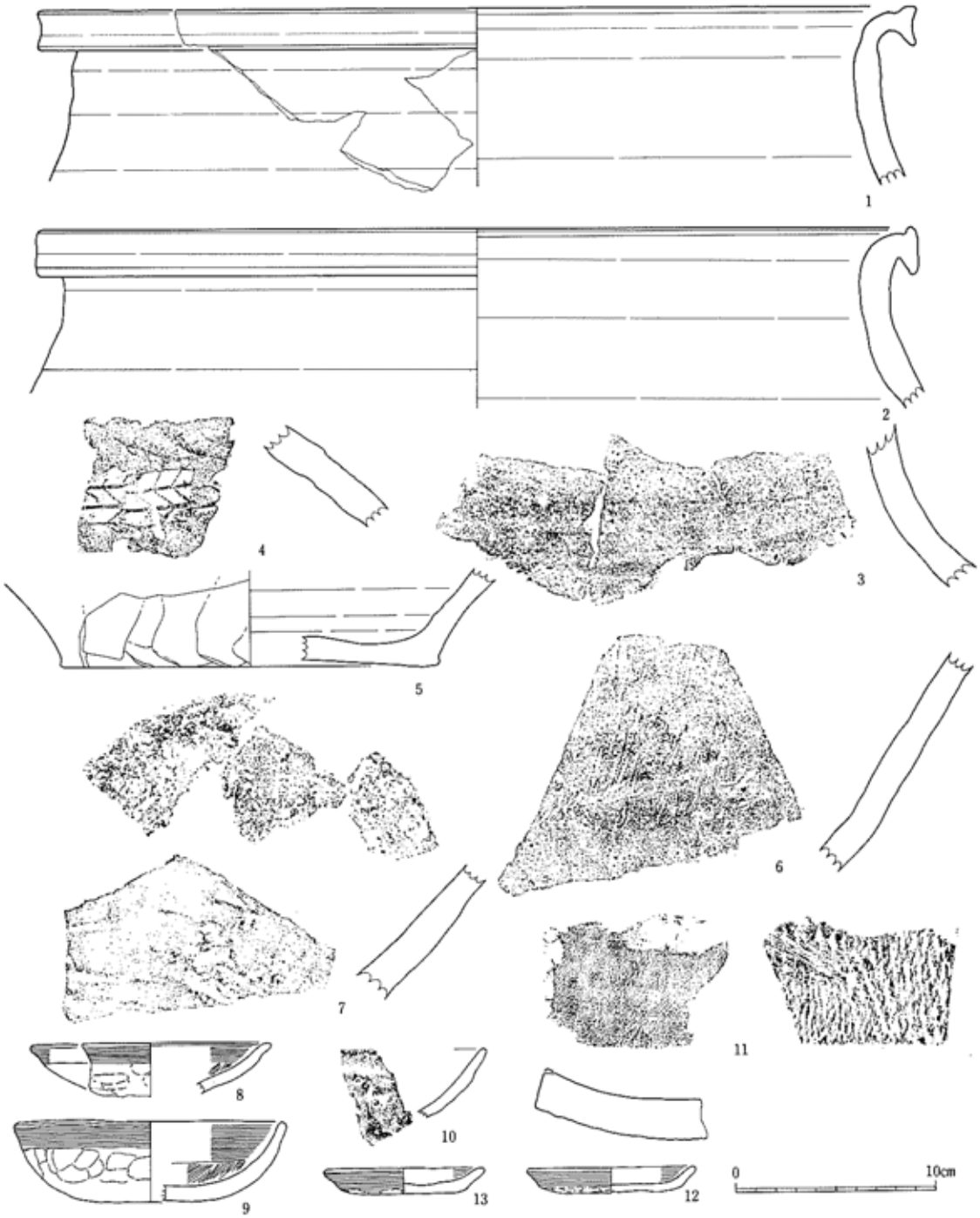
№	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府12b	劃花文、高台径16.4、畳付・外底も施釉、黄灰色
2		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府12	劃花文、青灰色
3		白磁	合子			型つくり？、口径6.6、底径5.5、器高2.2、体部外面下部～外底露胎
4		陶器	瓶子	瀬戸	古瀬戸中期	灰釉・内面は頸部付近まで、SD207に同一個体
5		陶器	盤類	瀬戸		内外面灰釉？、焼成不良
6	33	陶器	鉢	東海	鉢18	口唇に小平坦面（沈線気味）、内外面ナデ
7		陶器	鉢	東海	鉢19	内外面ナデ
8	46	陶器	鉢	東海	鉢21、5-6A期	内外面ナデ
9	47	陶器	鉢	東海		内外面ナデ、口唇に小平坦面
10	28	陶器	鉢	東海	鉢24	口径28、片口部幅5.5、内外面ナデ、口唇に小平坦面
11		陶器	鉢	東海		口唇に小平坦面、内外面ナデ
12	45	陶器	鉢	東海	鉢22	口唇に小平坦面、内外面ナデ
13		陶器	鉢	東海		片口部付近、内面ナデ、外面縦ヘラナデ
14		陶器	鉢	東海		口唇に小平坦面、内面ナデ→自然釉、外面ナデ
15	51	陶器	鉢	東海	鉢16	内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ→高台接着、SE42と接合
16	52	陶器	鉢	東海		(底径13.2)、内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ、高台剥落後も使用か？
17		陶器	鉢	東海？		内面ナデ、外面縦ヘラナデ
18	32	陶器	鉢	東海？		内外面ナデ
19		陶器	鉢	在地		内外面ナデ
20		陶器	鉢	在地		内外面ナデ
21	43	陶器	鉢	在地		内外面ナデ、自然釉
22	56	陶器	鉢	在地		底径10.6、内外面ナデ、外底砂目、外面に取り上げ痕
23	41	陶器	鉢	在地	鉢14	内面ナデ→自然釉、外面ナデ

図25　SD50 出土遺物（1）



No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	62	陶器	広口壺	常滑	壺9	内外面ナデ、口縁内側に幅0.7の沈線
2	62	陶器	広口壺	常滑	壺9、	内外面ナデ
3		陶器	壺	渥美？	壺3	内面ロクロ？ナデ、外面傷み（被熱？）
4	75	陶器	壺	常滑？		内面オサエ→ナデ、外面縦ヘラナデ→ヨコヘラケズリ（肩直下）・ヨコヘラナデ
5	76	陶器	壺	渥美	壺7	内面ナデ、外面灰釉ヘラヌリ？、SD108と接合
6	63	陶器	壺	常滑	壺5	内面オサエ→ナデ、外面下半横ヘラナデ→縦ヘラナデ・上半縦ヘラナデ→横ヘラナデ→ナデ、刻文
7	89	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面ヘラナデ→ナデ
8		陶器	甕	常滑		内外面ナデ、口縁帯に緑灰色自然釉
9		陶器	甕	常滑	甕9	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→横ヘラナデ→押印、SD108・SD236・SE10・SE41に同一個体
10		陶器	甕	常滑	甕9	内外面ナデ、簾状押印
11		陶器	甕	常滑	甕9	内面ナデ、外面縦ヘラナデ
12		陶器	甕	渥美	甕16	内面横ヘラナデ、外面縦ヘラナデ→平行押印、SE42に同一個体
13	121	陶器	甕	常滑	甕26	内面ナデ、外面ナデ→押印（簾に×）
14	108	陶器	甕	常滑	甕1	内面横ヘラナデ→自然釉、外面縦ヘラナデ、SD01に同一個体
15		陶器	甕	常滑	甕26	内面オサエ→ナデ、外面簾状に×押印→自然釉、SK70（61－3）と接合
16	117	陶器	甕	常滑	甕26	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→押印（簾に×）→自然釉

図26　SD50 出土遺物 (2)

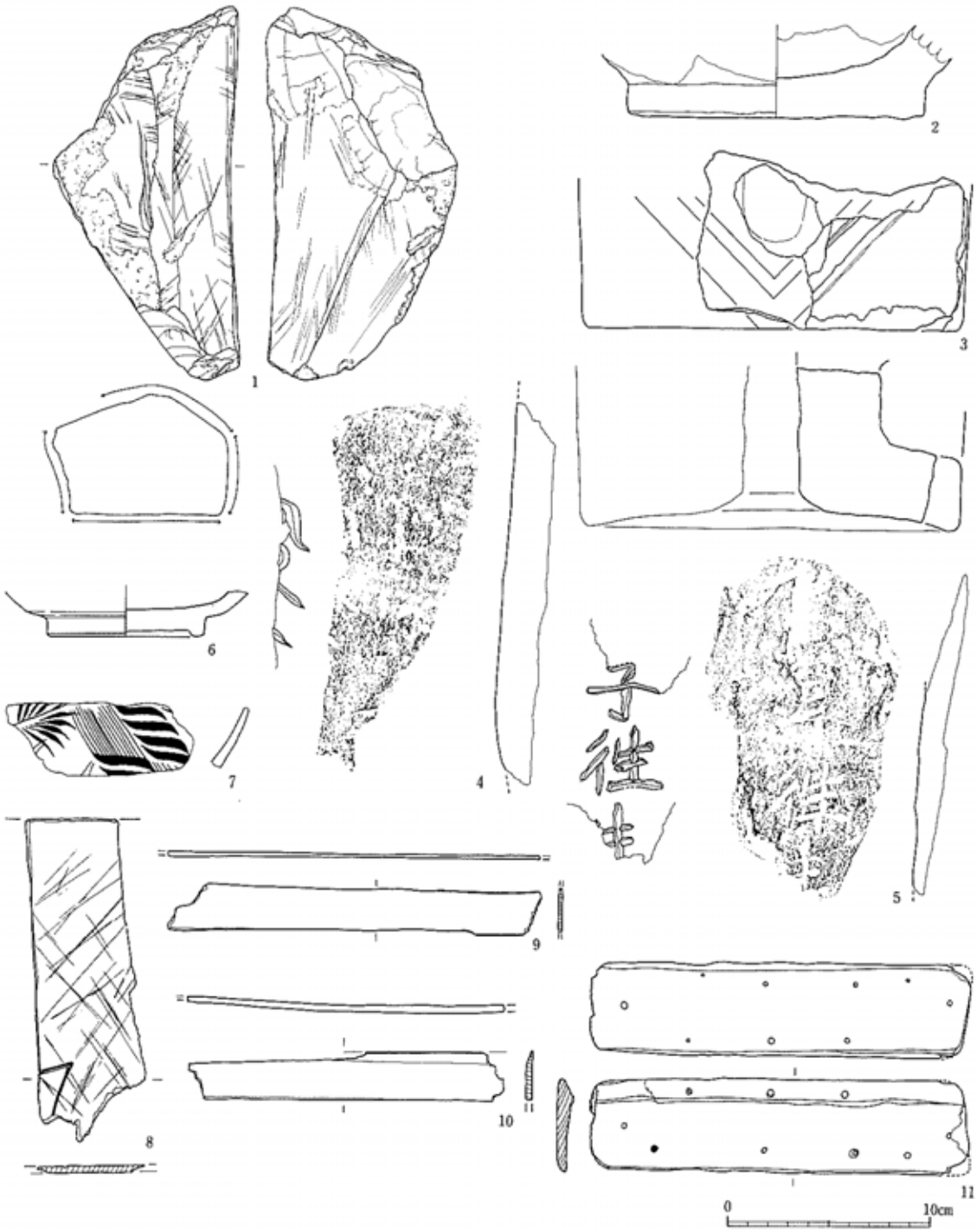


No.	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	85	陶器	甕	常滑	甕25	口径43.8、口縁内側に凹線、内外面ナデ、漆継、SD01と接合
2	80	陶器	甕	常滑	甕10	口径43.8、内外面ナデ
3	80	陶器	甕	常滑	甕10	内外面ナデ、外面自然釉
4	105	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面斜ヘラナデ→矢羽状押印
5	128	陶器	甕	常滑？	甕21	底径28.9、内面ナデ、外面縦ヘラナデ
6		陶器	甕	常滑？	甕23	内面横ヘラナデ、外面縦ヘラナデ、ヘラのあたり痕
7		陶器	甕	不明		内面横ヘラナデ→磨耗、外面縦ヘラナデ、鉢に転用か？
8	144	かわらけ	皿		手づくね	口径12、内面ヨコナデ、外面オサエ・口縁ヨコナデ、海綿骨針
9	134	かわらけ	皿		かわらけ1、手づくね	口径13.5、器高4、内面見込み一方向のナデ→ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ
10		かわらけ	皿		手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ
11		瓦	平瓦			一枚造り？、凹面布目、凸面縄叩き目、
12	135	かわらけ	小皿		かわらけ9、手づくね	口径8.4、器高1.3、内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
13	136	かわらけ	小皿		手づくね	口径8、器高1.3、内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針

図27　SD50 出土遺物 (3)

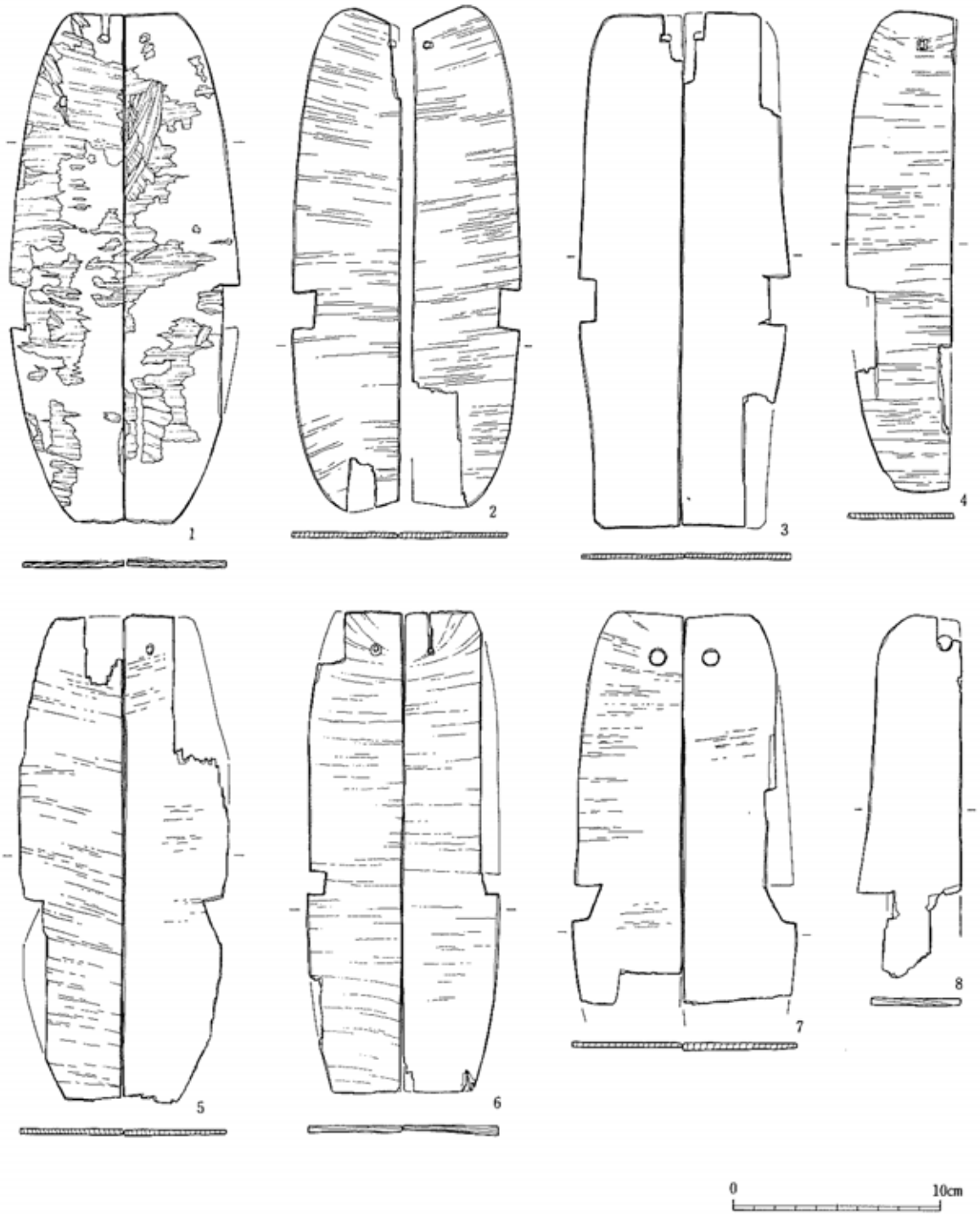
No.	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1	222	鉄製品	刀子		平棟平造、両関、身幅1.7・厚0.4
2	159	土製品	転用砥		東海産鉢体部破片素材、表面と二辺使用
3	160	土製品	転用砥		常滑甕14体部破片素材、一辺使用
4		土製品	転用砥		無釉陶器甕体部破片素材、二辺使用
5	165	土製品	羽口		孔径推定3.1、溶着滓
6	164	土製品	羽口		孔径推定2.9
7	163	土製品	羽口		孔2.6×3.1、最大径8、溶着滓
8	303	石製品	砥石	砂岩（中粒）	5面使用、11.2×4.3×3.8、重360
9	305	石製品	砥石	砂岩（中粒）	4面使用、(9.1)×4.3×3.3、重160
10		石製品	砥石	砂岩（中粒）	4面使用、(5.1)×4.9×2.7、重100
11	304	石製品	砥石	凝灰岩（細粒）	5面使用、(6.8)×4.7×2.2、重130
12		石製品	砥石	凝灰岩（細粒）	4面使用、(5.2)×2.5×1.1、重30
13	297	石製品	砥石	粘板岩（細粒）	3面使用、(7.5)×3.2×(1.1)、重30
14	302	石製品	砥石	粘板岩（細粒）	2面使用、10.7×6.6×4.4、重560
15	300	石製品	砥石	砂岩（粗粒）	4面使用、19.8×4×3.4、重640

図28　SD50 出土遺物 (4)



No.	写真	種別	器種	分類ほか	備考
1	298	石製品	砥石	砂岩（中粒）	4面使用、18.5×(8.6)×6、重1240
2	295	石製品	石鉢	安山岩	底径14.6、SD01・201・204と接合
3		石製品	茶臼	上臼、安山岩	径18.8、供給孔径2.8、子持菱、ふくみ1.0、溝なし
4		石製品	板碑	粘板岩	種子は「ウーン」か、薬研彫り、一部に金箔残存
5	308	石製品	板碑	粘板岩	銘文「子往生」、薬研彫り
6		木製品	漆椀	木078	高台径7.8、内面赤色漆、外面黒色漆、輪高台、ブナ属横木取り
7		木製品	漆椀	木009	内面赤色漆、外面黒地・赤色漆絵、ケヤキ横木取り
8		木製品	折敷	底板、木086	(16)×(5.2)×0.3、表面に刻み、まな板に転用、柾目
9	178	木製品	曲物	側板、木090	墨書、厚0.3、柾目
10	178	木製品	曲物	側板、木090	墨書、厚0.4、柾目
11		木製品	組物？	木028	釘孔9ケ、1ケ木釘残存、18.6×4.6×0.7、板目

図29　SD50 出土遺物 (5)

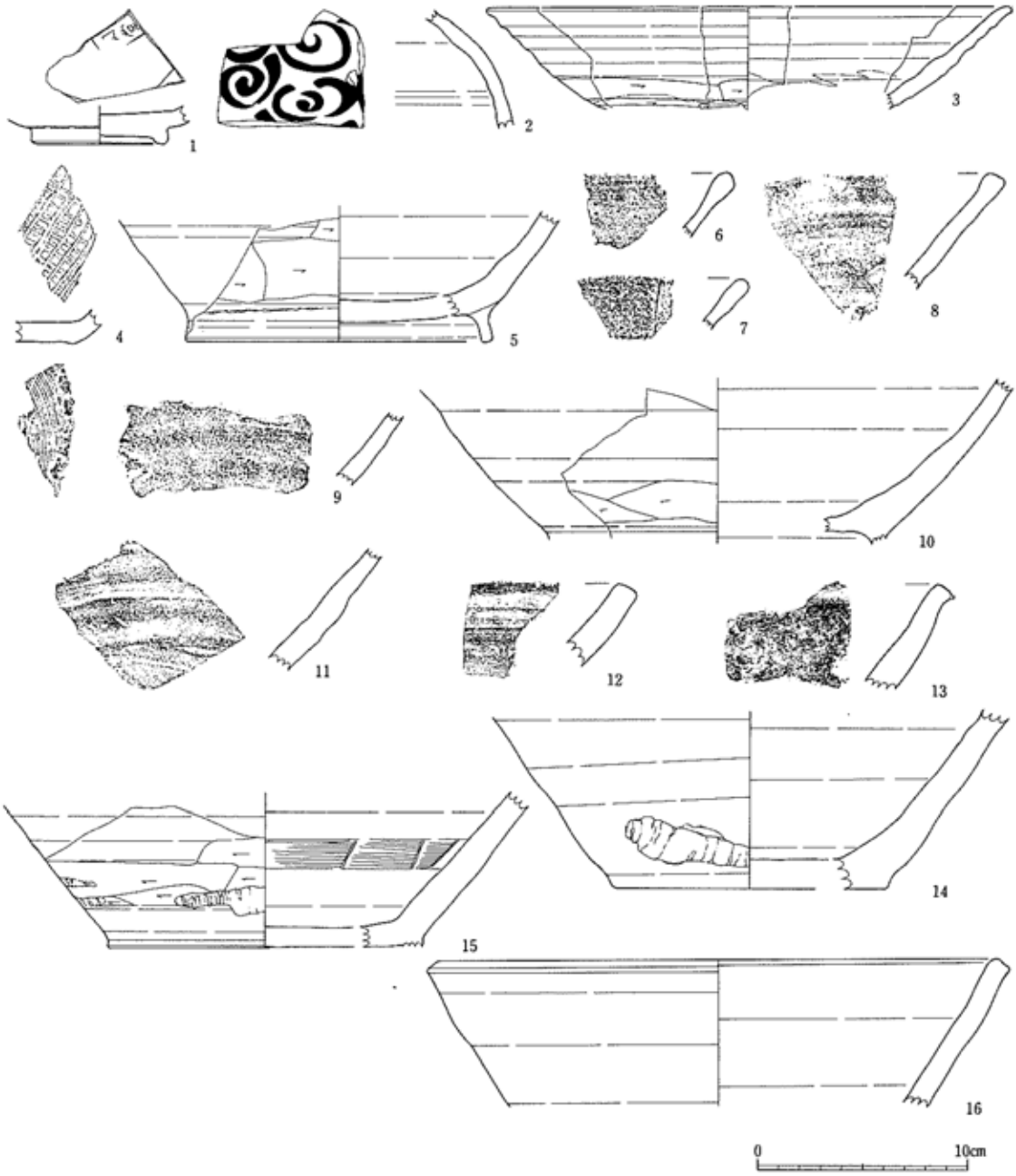


No.	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1	210	木製品	板草履	木016	24.7×5.6×0.3、24.7×5.5×0.3、ヒノキ柾板目、ワラ残存、鼻緒？
2	212	木製品	板草履	木092	(24.4)×5.1×0.3、(24.3)×5.2×0.3、スギ柾目、ワラの圧痕
3	215	木製品	板草履	木094	25×5.2×0.3、25×5×0.2、スギ柾目、前孔方形0.5×0.4
4	213	木製品	板草履	木144	23.4×5×0.3、スギ柾目、ワラ圧痕
5	216	木製品	板草履	木157	23.4×5.1×0.3、23.6×5×0.3、スギ柾目、ワラ圧痕
6	211	木製品	板草履	木040	23.4×4.6×0.3、23.4×4.7×0.4、スギ板目、ワラ圧痕
7	217	木製品	板草履	木095	(19.1)×5.4×0.3、(19)×5.5×0.4、スギ柾目、ワラ圧痕
8	214	木製品	板草履	木128	(17.6)×(5)×0.3、アカマツ板目、前孔径0.7

図30　SD50 出土遺物 (6)

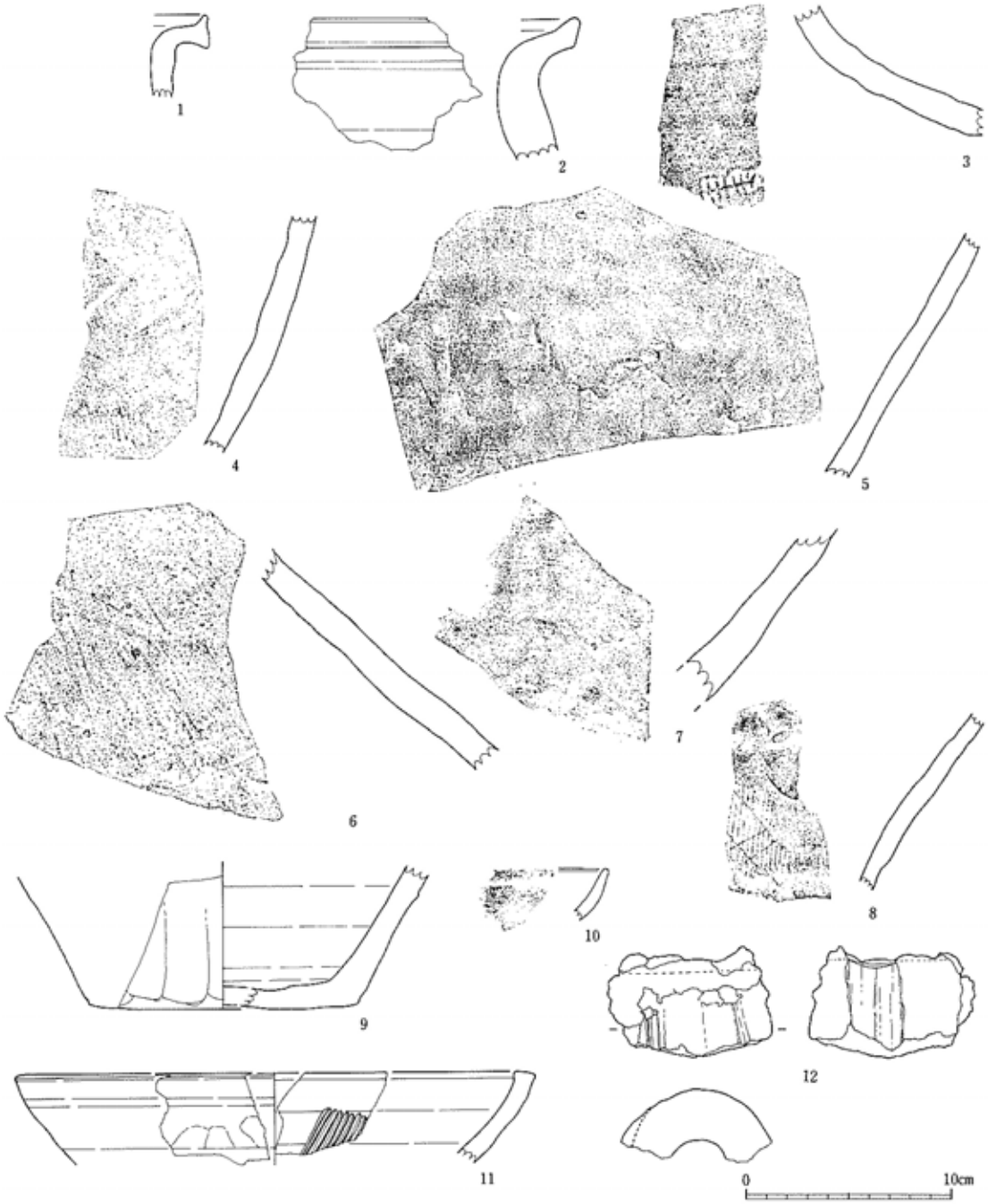
No.	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1		木製品	下駄	連歯、木165	台20.0×8.8×1.2、前壺径0.7、後壺径1.0、板目、すり減り激しい
2	202	木製品	下駄	連歯、木059	台(18.6)×(7.9)×1.2、後歯長方形(8.3)×3.9×2.5、前壺径1.3、クリ板目
3	200	木製品	下駄	連歯、木021	右、台19×(9.8)×(1)、前歯長方形(10)×2.5×(2.1)、後壺径1.5、クリ板目
4		木製品	板草履	木128	(13.7)×(4.7)×0.4、前孔径0.6、板目
5	205	木製品	板草履	木043	(12.7)×5.2×0.3、柾目、ワラ残存、前孔径0.6
6		木製品	板草履	木128	(11.1)×(5.1)×0.4、板目、4と同一個体？
7		木製品	板草履	木130	(13.9)×(5.2)×0.3、スギ柾目、前孔径0.5
8		木製品	下駄	差歯、木162	(5.7)×12.6×(2)、下面磨滅、側辺面取り、柾目
9	209	木製品	下駄	差歯、木085	(9.4)×14.2×(2.4)、四隅面取り、表裏面に鋸引きの痕、片減り、柾目

図31　SD50 出土遺物 (7)



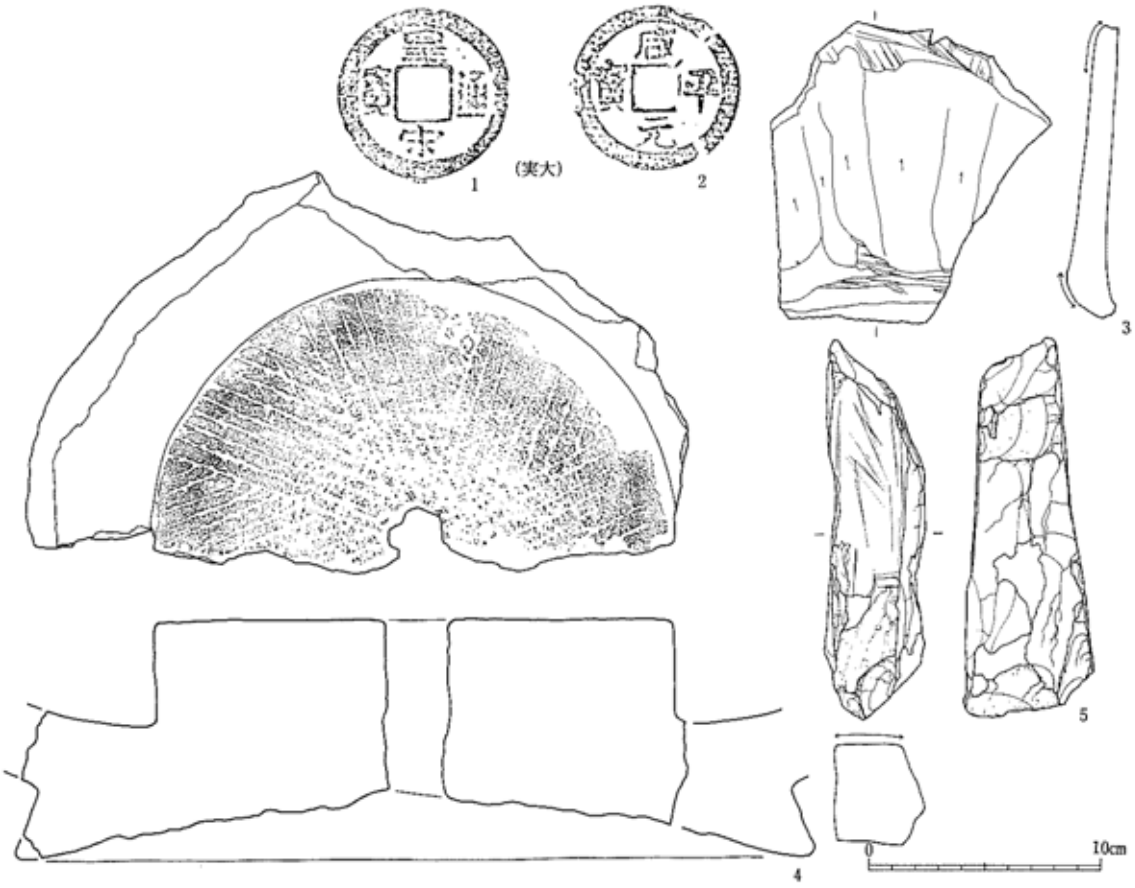
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅱ1	高台径6.6、見込み「満堂」の刻印、畳付～外底の釉掻き取り、黄灰色
2		青白磁	梅瓶			鎬文、釉は青白色、内面にも施釉、被熱
3		陶器	直縁大皿	瀬戸	古瀬戸後Ⅲ期	口径24.6、ロクロナデ、外面下部回転ケズリ、外面上部・内面全体（下部ハケヌリ）に灰釉
4		陶器	卸皿	瀬戸	古瀬戸中期	底径8前後、内面格子状筋目、内外面灰釉、底面露胎、回転糸切り無調整
5	54	陶器	鉢	東海		高台径14.5・高1.5、内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ2段以上
6		陶器	鉢	東海		口唇に小平坦面、内外面ナデ
7		陶器	鉢	東海		片口付近、内面ナデ→自然釉、外面ナデ
8	31	陶器	鉢	東海		片口部・幅3前後・突出、内外面ナデ
9		陶器	鉢	東海		内外面ナデ
10	53	陶器	鉢	東海		底径(16)、内面ナデ→激しい磨耗・傷み、外面ナデ→手持ちヘラケズリ1段
11	49	陶器	鉢	東海		内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ
12		陶器	鉢	在地？		内外面ナデ
13	23	陶器	鉢	在地	鉢10	内外面ナデ
14	23	陶器	鉢	在地	鉢10	底径13.2、内外面ナデ、外底砂目、取り上げ痕、SE234と接合
15	55	陶器	鉢	不明		底径(15)、内面ヘラナデ→ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ3段以上、黒褐色
16	36	陶器	鉢	在地		口径27.8、内外面ナデ、赤褐色

図32　SD66 出土遺物 (1)



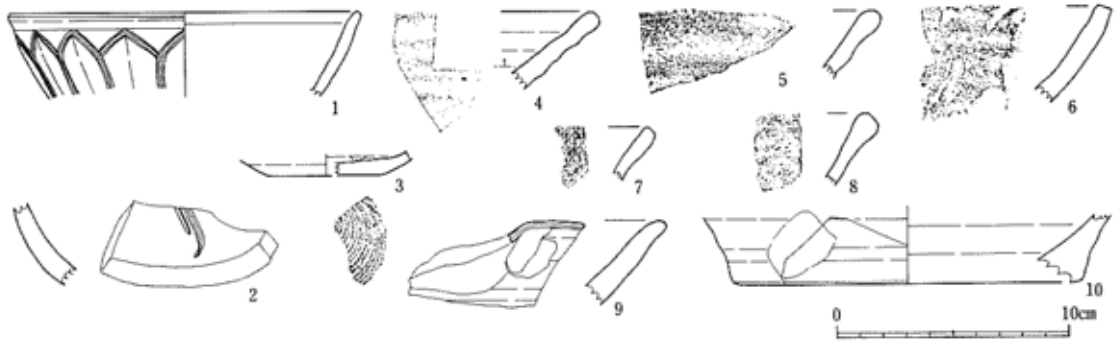
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	67	陶器	広口壺	常滑		内外面ナデ
2	87	陶器	甕	在地		内外面ナデ
3	97	陶器	甕	常滑？		内面オサエ→ナデ、外面ナデ→菓状押印→自然釉
4	115	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面斜ヘラナデ→押印・ヘラあたり痕
5	101	陶器	甕	常滑		内面横ヘラナデ、外面縦ヘラナデ
6	98	陶器	甕	在地？		内面ナデ、外面斜ヘラナデ→頸部付近ナデ
7		陶器	甕	不明		内面ナデ→磨耗、外面ナデ→縦ヘラナデ、鉢に転用か？
8	122	陶器	甕	常滑		内面ナデ→自然釉、外面縦ヘラナデ→押印
9	131	陶器	甕	常滑		底径13.2、内面ナデ、外面縦ヘラナデ
10		かわらけ	皿		手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ
11	154	瓦質土器	鉢	在地	瓦質鉢1	口径25.6、内面ナデ→筋目（8本）、外面オサエ→ナデ特に口縁、SK219に同一個体
12	166	土製品	羽口			径(7.0)、孔径(3.0)、溶着滓

図33　SD66 出土遺物 (2)



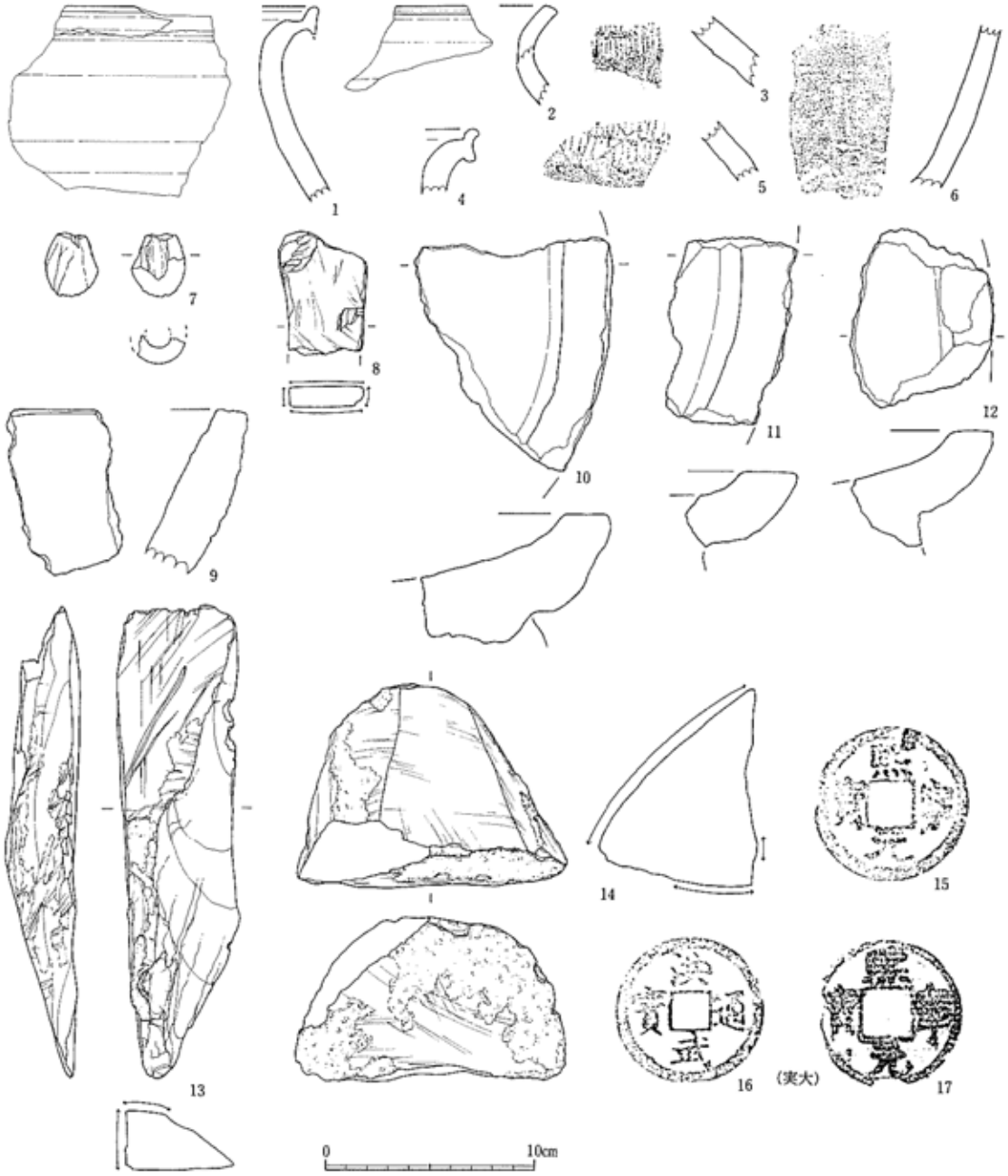
No	写真	種別	器種	分類ほか	備考
1	254	銅製品	銭貨	皇宋通宝	径2.5、重2.8
2	239	銅製品	銭貨	咸平元宝	径2.5、重2.2
3	156	土製品	転用砥		常滑産甕底部破片素材、表面使用、14.1×12.2×1.7
4	289	石製品	茶臼	下臼、安山岩	臼面径22.4、台部径(34.4)、高(10.4)、芯棒孔径2.4～2.6、8分画8～10溝
5		石製品	砥石	粘板岩	1面使用、15.9×5.5×4.2、重490

図34　SD66 出土遺物 (3)



No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、口径15.2、水色がかった緑色、17−8と同一個体か
2		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ4	面花文、青灰色
3		陶器	緑釉小皿	瀬戸	古瀬戸後Ⅲ以降	底径4.9、見込み露胎、内面の一部に鉄釉、回転糸切り
4		陶器	直縁大皿	瀬戸	古瀬戸後Ⅲ期	内面上部・外面灰釉
5		陶器	鉢	東海		片口部、内外面ナデ
6		陶器	鉢	不明		内外面ナデ
7		陶器	鉢	東海		口唇に平坦面、内外面ナデ・自然釉
8		陶器	鉢	東海		内外面ナデ
9	22	陶器	鉢	東海	鉢3	内外面ナデ、SX62に同一個体、渥美？
10		陶器	鉢	在地		底径15.2、内外面ナデ

図35　SD201 出土遺物 (1)

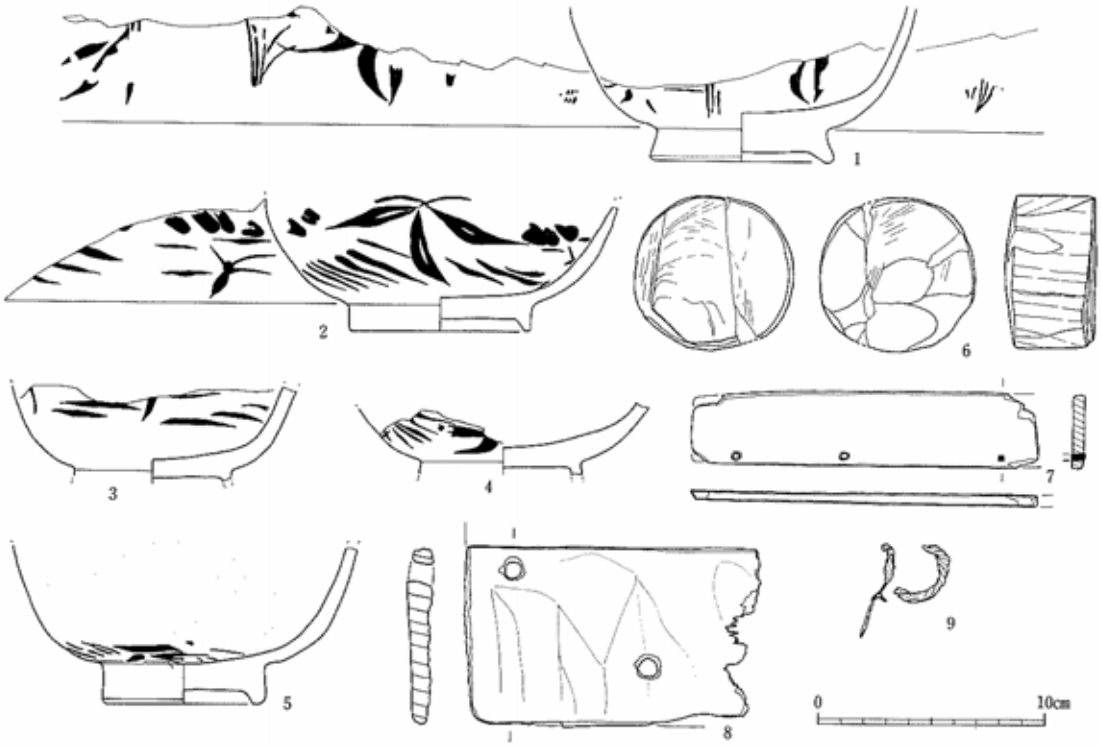


№	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	69	陶器	広口壺	常滑		内外面ナデ
2	64	陶器	短頸壺	常滑		内外面ナデ
3		陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面簾状押印→自然釉
4		陶器	甕	常滑		内外面ナデ
5		陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面ナデ→押印（簾状に×）
6	155	瓦質土器	火鉢？	在地		表面傷み
7		土製品	土錘			推定孔径1.2
8		石製品	砥石			凝灰岩、4面使用、(5.9)×4.2×1、重30
9	296	石製品	石鉢		安山岩	
10	291	石製品	茶臼		下受皿、安山岩	
11	290	石製品	茶臼		下受皿、安山岩	
12		石製品	茶臼		下受皿、安山岩	
13	301	石製品	砥石		粘板岩（細粒）	2面使用、(22.6)×(5.2)×2.8、重420、板碑転用？
14		石製品	砥石		安山岩（粗粒）	3面使用、9.6×12.9×7.5、重1050
15		銅製品	銭貨		熙寧元宝	径2.5、重3.9
16	287	銅製品	銭貨		洪武通宝	径2.4、重2.9
17		銅製品	銭貨		熙寧元宝	径2.4、重2.6

図36　SD201 出土遺物 (2)

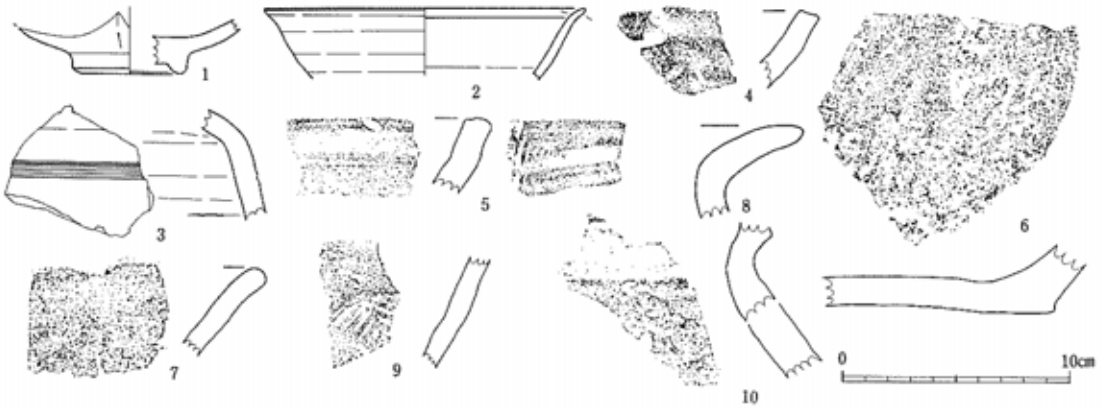
No	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1	307	石製品	板碑	粘板岩	紀年「貞和五年」、薬研彫り、表面に軽いケズリ
2		石製品	板碑	砂岩	縁の上に金箔で文字？
3	306	石製品	板碑	粘板岩	種子「カ」or「カーン」・篭彫り、頭部半円形？、厚4
4	310	石製品	板碑	粘板岩	二重月輪・薬研彫り
5	311	石製品	板碑	粘板岩	種子「？」・浅い薬研彫り、割材・表面を軽く削る

図37　SD201 出土遺物 (3)



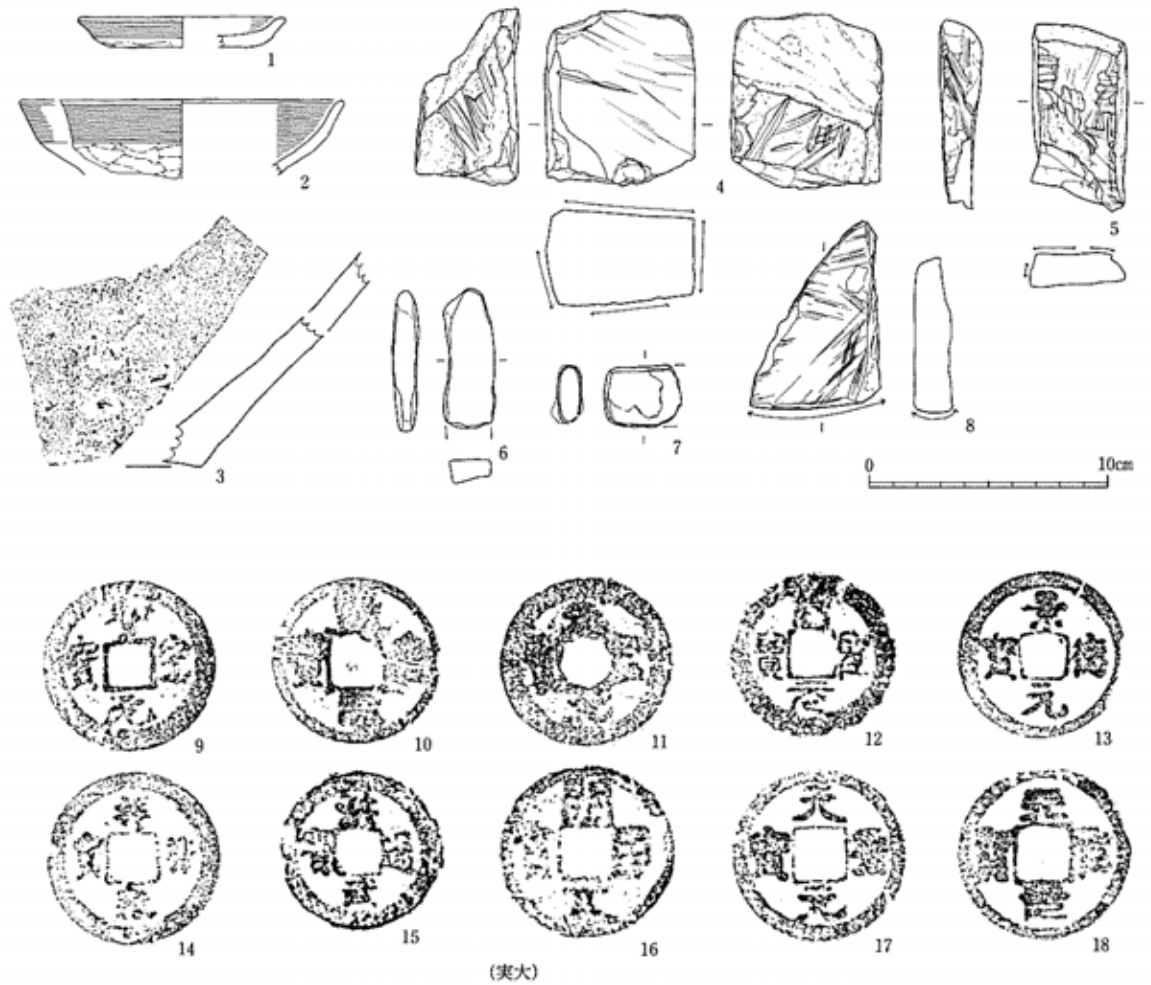
№	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1	167	木製品	漆椀	木014	高台径8.1、輪高台、内面赤色漆、外面黒色・赤色絵、ブナ属横木取り
2	170	木製品	漆椀	木027	高台径8.0、輪高台、内面赤色漆、外面黒色・赤色絵、ブナ属横木取り
3	171	木製品	漆椀	木018	輪高台、内面赤色漆、外面黒色・赤色絵、ブナ属横木取り
4		木製品	漆椀	木082	輪高台、内面黒色漆、外面黒色・赤色絵、ブナ属横木取り
5	173	木製品	漆椀	木023	高台径7.2、輪高台、内面赤色漆、外面黒色・赤色絵、ブナ属横木取り
6	177	木製品	栓？	木152	径7、厚4、クマノミズキ類芯持ち丸木
7	198	木製品	組物？	側板、木083	(15.3)×3.3×0.5、釘結合・釘孔3・木釘1、端部を斜めにそぐ、柾目
8		木製品	不明	木077	厚1、穴2径0.8、表面に削り痕、柾目
9	175	繊維製品	紐	木156	ワラ製、径0.3～0.4

図38　SD201 出土遺物 (4)



№	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5b	鎬蓮弁文、高台径4.6、畳付～外底は釉掻き取り、灰緑色
2		白磁	碗		太宰府Ⅸ	口禿、口径14.2、
3		陶器	瓶子	瀬戸	古瀬戸中期	内面ロクロナデ・下部に輪積み痕、外面灰釉・櫛描き平行沈線3本、SD50に同一個体
4		陶器	鉢	不明		片口付近、内外面ナデ
5		陶器	鉢	在地		内面ナデ→筋目（8本以上1単位）、外面ナデ
6		陶器	鉢	東海		底径18.4、内面ナデ、外面庭ヘラナデ、外底砂目
7	48	陶器	鉢	東海		内面ナデ→自然釉、外面ナデ
8	88	陶器	甕	産美		内面ナデ、外面オサエ→ナデ、施釉なし
9	125	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面矢羽状？押印→自然釉
10		陶器	甕	不明		内外面ナデ、被熱

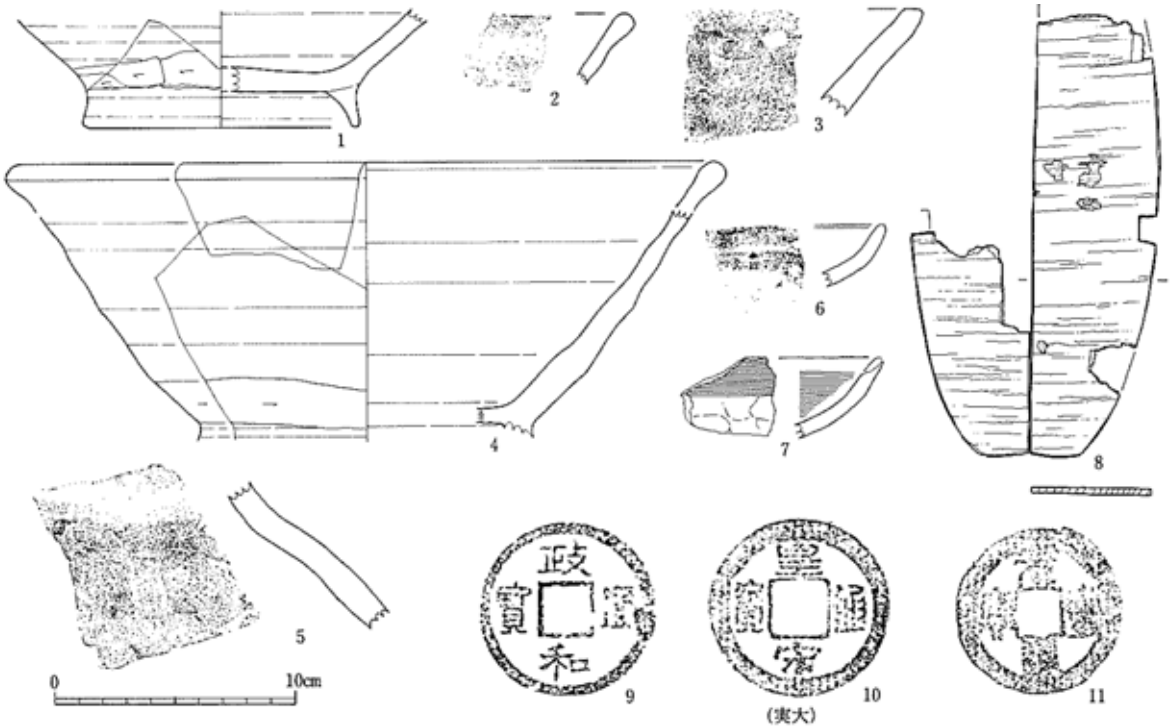
図39　SD207 出土遺物 (1)



№	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	149	かわらけ	小皿		手づくね	口径8.6、器高1.3、内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
2		かわらけ	皿		手づくね	口径13.6、内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
3	130	陶器	甕	常滑		内面横ヘラナデ、外面縦ヘラナデ、外底砂目
4		石製品	砥石		凝灰岩（細粒）	5面使用、7.4×6.2×4、重250
5		石製品	砥石		粘板岩（細粒）	2面使用、7.7×4×1.4、重70
6		鉄製品	不明			棒状、(5.9)×2.1×1.1
7	233	鉄製品	鞘尻金具			(3.3)×(2.4)×(1)
8	161	土製品	転用砥			常滑甕体部破片素材、表面と二辺使用、9.1×5×1.6
9		銅製品	銭貨		聖宋元宝	径2.5、重3.2
10		銅製品	銭貨		不明	径2.2、重2.6
11		銅製品	銭貨		不明	径2.5、重3.3
12		銅製品	銭貨		紹聖元宝	径2.4、重2.5
13		銅製品	銭貨		景徳元宝	径2.4、重1.8
14		銅製品	銭貨		祥符元宝	径2.5、重2.5
15		銅製品	銭貨		洪武通宝	径2.2、重3.2
16		銅製品	銭貨		開元通宝	径2.5、重2.8
17	245	銅製品	銭貨		天聖元宝	径2.5、重3.2
18		銅製品	銭貨		天聖元宝	径2.5、重2.0

図40　SD207 出土遺物 (2)

～81 付近）がやや深くなっている。断面は逆台形またはU字形を呈し、3 区では一部に改修の痕跡が見られる。埋土は自然堆積である（図 16）。



No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1	60	陶器	鉢	東海	鉢26	高台径11.2・高1.5、内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ、自然釉
2		陶器	鉢	東海		内外面ナデ
3		陶器	鉢	東海		内面ナデ、外面縦ヘラナデ・口縁ヨコナデ
4	24	陶器	鉢	東海	鉢15	口径28.2、高台径(13.8)、器高(10.5)、内面ナデ、外面ナデ→ヘラケズリ
5	93	陶器	甕	不明		内面オサエ→ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ
6		かわらけ	皿		手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
7		かわらけ	皿		手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ→ヨコナデ、海綿骨針
8	203	木製品	板草履		木051	(18.4)×5.1×0.3、スギ柾目、ワラ圧痕ほぼ平行に全面に存在
9		銅製品	銭貨		政和通宝	径2.5、重2.8
10	253	銅製品	銭貨		皇宋通宝	径2.5、重2.1
11		銅製品	銭貨		元豊通宝	径2.4、重3.0

図41　SD213 出土遺物

出土遺物には、東海産の鉢、常滑・渥美・在地産の甕、手づくねかわらけ皿・曲物側板・底板、板草履、銭貨（政和通宝･皇宋通宝･元豊通宝）、砥石、ウマ上腕骨、クルミ･モモの種実がある（図41）。

＜1 区の遺構＞（W132-W207）

掘立柱建物跡 25 棟、柱穴列 7 条、溝跡 13 条(前述の溝跡を除く)、井戸跡 18 基、土壙墓 1 基、土壙 22 基を検出した。

・掘立柱建物跡（表 3）

1 区中央部と、西側南寄りの 2 ケ所に集中している。全て側柱建物跡である。それぞれの詳細な属性は表 3 に示した。復原できた建物跡以外にも柱穴が確認されており、他にも建物跡が存在したと考えられる。なお、中世の遺物が出土した建物跡はない。

ＳＢ301（図 42）

西端部のW199～205･Ｓ3～8 に位置する南北 2 間･東西 2 間の東西棟である。中央に間仕切り？の柱穴がある。方向は東で南に約 31 ° 振れ、北側柱列はこれより東に位置するＳＢ303 の南側柱列と柱筋が

揃っている。総長は桁行が4.8m、梁行が4.3mある。掘り方は長径30～50㎝の楕円形もしくは円形で、柱痕跡は直径15㎝程度である（1区の建物群の多くはこれとほぼ同規模である）。

ＳＢ303（図42）

W181～190・S2～9に位置する。桁行2間・梁行2間の東西棟で北廂を持つ。方向は東で南に約29°振れ、南側柱列はＳＢ301の北側柱列と柱筋が揃う。廂の北側柱列は、東側に位置するＳＢ347の南側柱列と柱筋が揃う。総長は桁行が7.8m、梁行が4.8mある。廂の出は2.0mある。ＳＢ306と重複しそれより古い。

ＳＢ304（図42）

W183～190・S3以南に位置する。桁行3間・梁行3間以上で東西棟と思われる。方向は東で南に約17°振れる。西妻には間柱と見られる柱穴がある。総長は北側柱列で7.2m、西側柱列で6.2m以上となり、かなり大形である。ＳＢ305・309より新しい。

ＳＢ305（図42）

W186～193・S3以南に位置する。桁行2間（?）・梁行2間（?）の南北棟である。方向は北で東に約43°振れており、1区の建物跡の中で東への偏りが最も大きいグループに属する。西側柱列では、確認調査トレンチによって中央部の柱穴が失われている可能性がある。北側柱列は、これより東に位置するＳＢ308の南側柱列と柱筋が揃う。桁行総長は西側柱列で5.6m、梁行総長は北側柱列で4.1mと小形である。ＳＢ304より古い。

ＳＢ306（図42）

W182～190・S4～9に位置する。桁行3間・梁行2間の東西棟で、南に廂・北に張り出しを持つ。方向は東で南に約19°振れる。南西隅柱の西側には、南側柱列と柱列を揃えて2個の柱穴があり、これらはこの建物跡と関係する可能性がある。総長は桁行が北側柱列で7.1m、梁行が西側柱列で4.4m、南廂の出が1.3m、北側の張り出しの出が0.8mである。掘り方の長径は70～90㎝あり、1区の建物群の中では大形である。ＳＢ303・309より新しく、ＳＢ307よりも古い。

ＳＢ307（図42）

W183～190・S4以南に位置する。桁行3間・梁行2間？とみられる東西棟で、西に廂・北に張りだしが付く。方向は東で南に約17°振れる。桁行総長は北側柱列で7.0mあり、大形の建物になると見られる。廂の出は1.5m・張りだしの出は1.2mある。西側に位置するＳＡ351は、方向は若干異なるものの、この建物に取り付くと考えられる。ＳＢ306より新しく、これと北側柱列がほぼ重なり方向も一致する。

ＳＢ308（図42）

W176～185・S3以南に位置する。桁行4間・梁行3間と見られる東西棟で南廂を持つ。南西隅柱は確認トレンチで失われていると予測される。方向は東で南に約42°振れ、南側柱列はＳＢ305の北側柱列と柱筋が揃う。また北西方向にある鍵の手状のＳＡ350と平行する。総長は桁行が6.4m・梁行が4.7m程度になる。廂の出は1.9mある。

ＳＢ309（図42）

W178～189・S3以南に位置する。桁行4間・梁行2間と見られる東西棟で、北側に張り出しを持つ。

西妻中央の柱穴は、確認調査トレンチによって失われた可能性がある。西妻から3列目に間仕切りの柱穴がある。方向は東で南に約30°振れている。張り出し部の北側柱列が、ＳB303の北側柱列と一部重複しながら柱筋をほぼ揃えている。また東に位置するＳB347 の南側柱列とも柱筋を揃える。桁行総長が9.2m･梁行総長が5.6mあり、かなり大形の建物になると予測される。ＳB304･306 より古い。

ＳB311（図43）

W160～169･N5～S2に位置する。桁行3間･梁行2間の東西棟で西妻から3列目に間仕切りをもつ。東妻中央の柱穴を欠く。方向は東で南に約42°振れ、この東に隣接する南北3間の柱穴列ＳA324とほぼ直交する。これらは1区中央部の建物群の中で最も南への偏りが大きい。総長は、桁行が南側柱列で7.4m、梁行が西側柱列で4.5mある。他の建物との直接的な切り合いはない。

ＳB312（図43）

W161～169･N5～S8に位置する。桁行5間･梁行3間の長大な南北棟となる。東に廂が付き、北妻から2･3列目と西桁から2列目南側に間仕切りがある。廂の東側柱列では北から3個目の柱穴が欠けているため、ここを廂ではなく北側に1間分・南側に2間分の張り出しと見ることも可能である。方向は北で東に約22°振れる。桁行総長は西側柱列で11.6m･梁行総長は南側柱列で6.0mあり、1区最大の建物となる。ＳB313・316・346より新しく、ＳB314よりも古い可能性がある。

ＳB313（図43）

W158～169・N5～S4に位置する。桁行4間･梁行2間の東西棟で、東妻から2列目に間仕切りがある。方向は東で南に約35°振れる。総長は桁行が南側柱列で9.8m･梁行が西側柱列で5.6mあり、大形である。東側柱列は南に位置するＳB347 の東側柱列と柱筋をほぼ揃えている。ＳB312・314・315・346より古い。

ＳB314・317（図43）

W160～168・N4～S7に位置する。いずれも桁行2間･梁行2間の東西棟で、東妻から2列目中央の類似する位置に間仕切りの柱穴を持つ。方向はそれぞれＥ－23°－Ｓ･Ｅ－24°－Ｓと近似し、東西の妻の柱筋も一致している。総長は、桁行が6.7mと6.8m、梁行が4.1mと3.7mで同規模である。重複関係では、ＳB314がＳB313より新しく、ＳB312よりも新しい可能性がある。ＳB317はＳB316より新しい。

ＳB315（図43）

W162～168･N2～S3に位置する。桁行4間･梁行3間の東西棟で、南に廂を持つ。方向は東で南に約23°振れ、廂の南側柱列はこれより東に位置するＳB322の南側柱列と柱筋が揃う。総長は桁行が5.1m、梁行が4.2mである。ＳB313より新しい。

ＳB316（図43）

W160～168･S3～8に位置する。桁行4間･梁行2間の東西棟である。方向は東で南に約26°振れ、北側にある南北棟ＳB346とほぼ平行する。桁行総長は南側柱列で7.7m、梁行総長は西側柱列で3.8mである。ＳB312・317より古い。

ＳB318（図43）

W157～165・N4～S3 に位置する。桁行 3 間・梁行 2 間の東西棟であるが、桁行（北側柱列）・梁行（西側柱列）総長ともに 6.4mでほぼ正方形である。棟通り下に間仕切り(？)の柱穴が 2 個ある。方向は東で南に約 24°振れ、ＳB348 とほぼ平行する。ＳE31・ＳK34 よりも古い。

ＳB319（図 43）

W156～163・N4～S1 に位置する。桁行 3 間・梁行 1 間の東西棟で、西妻から 2 列目の中央北寄りに間仕切りの柱穴がある。方向は東で南に約 28°振れており、北側柱列は、東側に位置するＳB320 の北側柱列と柱列が揃っている。桁行総長は、南側柱列で 6.4m、梁行総長は西側柱列で 4.2mある。ＳE37 よりも古く（？）、ＳA324・ＳK33 より新しい。

ＳB320・321（図 43）

W149～157 に位置する。ＳB320 は桁行 2 間・梁行 2 間のほぼ方形の建物で、ＳB321 は桁行 2 間・梁行 1 間の南北棟である。方向はほぼ一致し、北で東にそれぞれ約 28°・30°振れている。またＳB320 の西側柱列とＳB321 の東側柱列の柱筋が揃っている。建物総長はＳB320 が桁行 2.9m・梁行 2.8m、ＳB321 が桁行 4.2m・梁行 2.9mで、いずれも小形である。ＳB320 はＳE40 よりも古く、ＳE38・41 よりも新しい。

ＳB323（図 43）

W139～145・S2～4 に位置する、桁行 3 間・梁行 1 間の東西棟である。方向は東で南に約 23°振れており、南への偏りが最も小さいものである。ＳE45 よりも古い可能性が高い。

ＳB346（図 43）

W162～168・N5～S2 に位置する。桁行 3 間・梁行 3 間の南北棟で、西桁は 2 間割りである。北妻の西から 3 個目の柱穴は、撹乱によって壊されていると見られる。東廂を持つ。方向は北で東に約 26°振れ、南側柱列はＳB316 の北側柱列と平行する。総長は桁行が東側柱列で 5.7m、梁行が南側柱列で 4.9mである。廂の出は 1.7mある。ＳB312 より古く、ＳB313 より新しい。

ＳB347（図 43）

W160～168・S4 以南に位置する。桁行 2 間・梁行 2 間の東西棟と見られる。方向は東で南に約 30°振れ、ＳB313 の方向と近似する。ＳB313 とは互いの東側柱列の柱筋もほぼ揃っている。また、南側柱列は、これより西に位置するＳB303・309 の北側柱列と柱筋が揃う。総長は桁行が北側柱列で 7.0m、梁行が西側柱列で 4.4mある。

ＳB348（図 43）

W159～166・S4 以南に位置する。桁行 3 間・梁行 2 間の南廂を持つ東西棟になると予測される。方向は東で南に約 23°振れており、これより北に位置するＳB318 と平行する。総長は桁行が北側柱列で 6.4m、梁行は西側柱列で 5.7mある。廂の出は 1.2mある。

・柱穴列（塀跡）（表 4）

ＳA300（図 42）

西端部のW202～205・N3～S5 に位置する。南北 3 間・東西 1 間の鍵の手状に曲がる柱穴列で、南北の総長は 8.2mある。方向は北で東に約 17°振れており、西側にあるＳD15・16・17 に平行するが、ＳD16

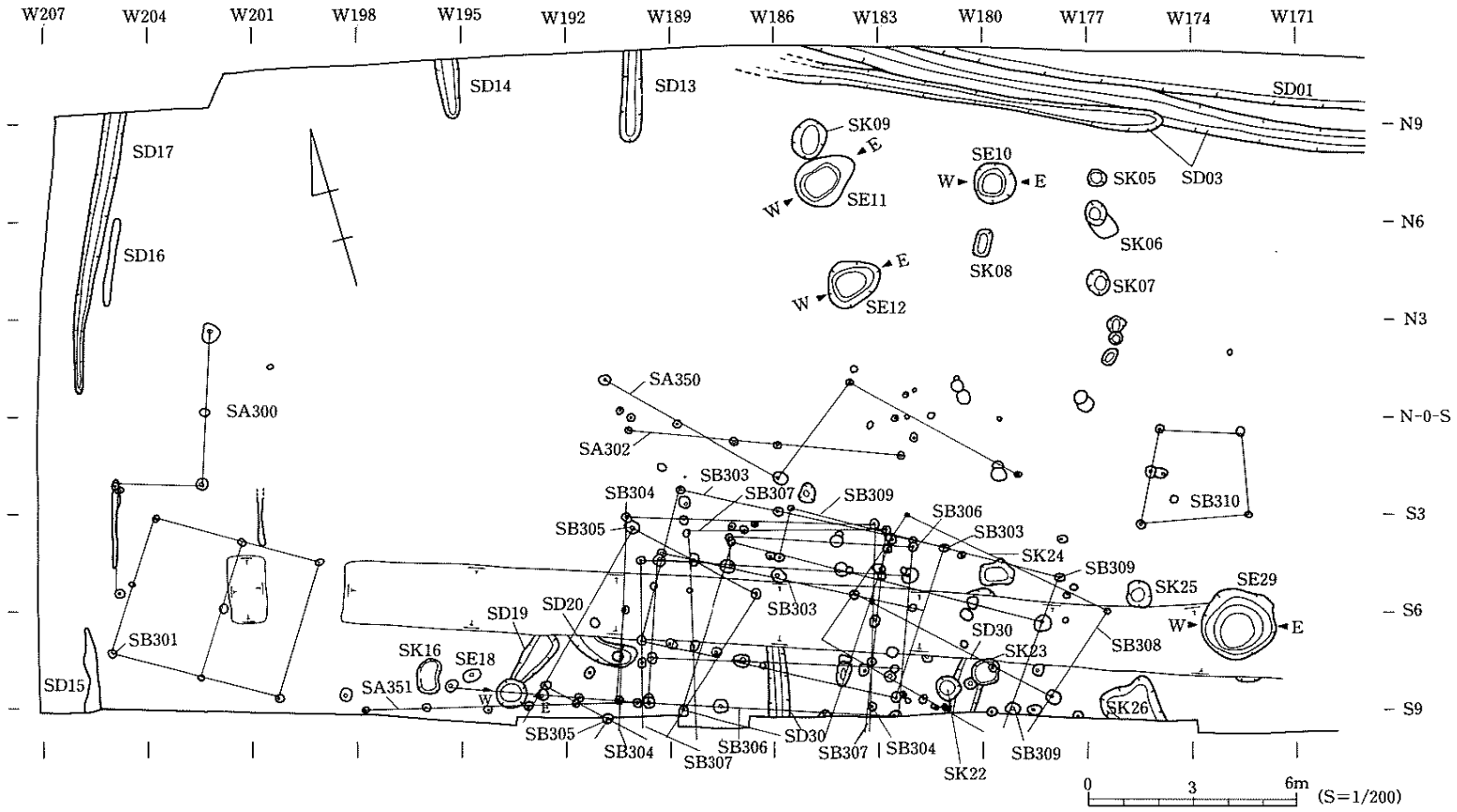
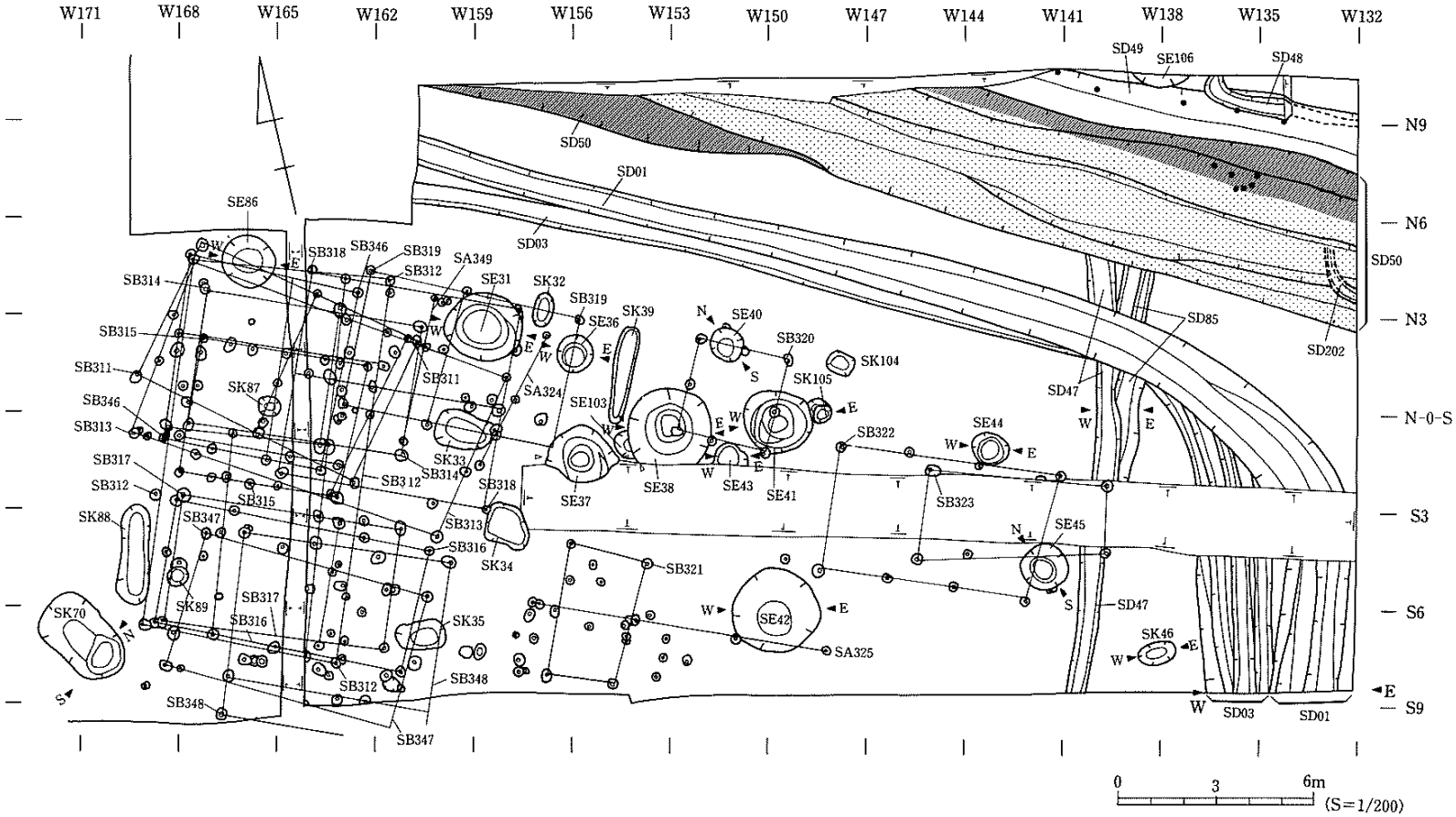
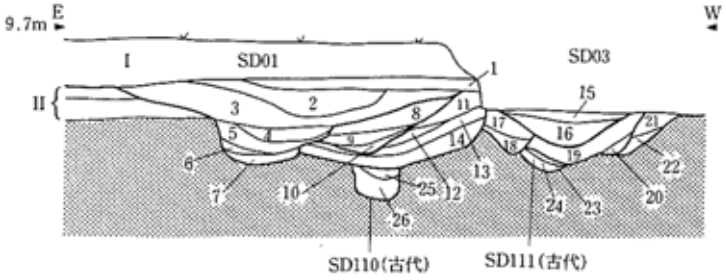


図42　1区中世の遺構 (1)

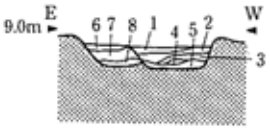


（注１） SD50 上のドットスクリーン部分は SD207、213の推定範囲を示す。
（注２） SD50・49 の●は打込杭を示す。

図43　１区中世の遺構 (2)



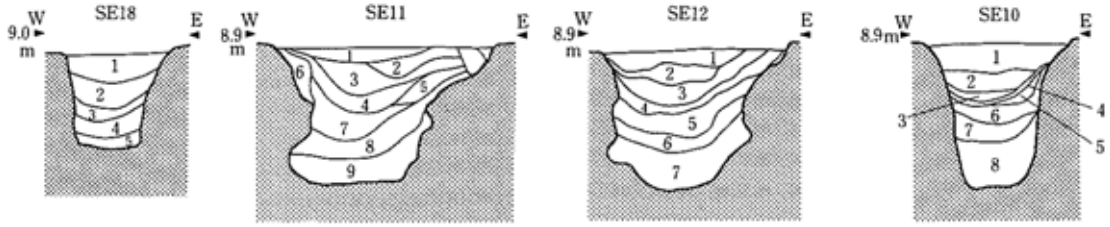
層	土色	土性	備考	層	土色	土性	備考
1	褐 10YR4/4	シルト	SD01	14	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	SD01
2	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	〃	15	灰黄褐 10YR4/2	シルト	SD03 焼土少量含む
3	灰黄褐 10YR4/2	シルト	〃 炭化物少量含む	16	にぶい黄褐 10YR5/3	砂質シルト	〃炭化物少量含む
4	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 炭化物・焼土微量含む	17	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	〃炭化物・焼土少量含む
5	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃 炭化物・焼土微量含む	18	黒褐 10YR3/1	シルト	〃地山小ブロック多量含む
6	黄灰 2.5Y4/1	シルト	〃	19	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	〃炭化物・焼土少量含む
7	黒褐 2.5Y3/1	粘土	〃地山ブロック含む	20	黒褐 10YR3/1	シルト	〃地山小ブロック多量含む
8	黄灰 10YR4/1	シルト	〃	21	灰黄褐 1OYR5/2	シルト	〃砂層含む
9	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	〃炭化物少量含む	22	灰黄褐 1OYR5/2	シルト	〃砂層多量含む
10	暗灰黄 2.5Y4/2	粘質シルト	〃	23	黄灰 2.5Y5/1	砂	SD111（古代）
11	灰黄褐 10YR4/2	シルト	〃	24	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃
12	オリーブ褐 10YR4/3	シルト	〃	25	黄灰 2.5Y4/1	粘土	SD110（古代） 砂層含む
13	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	〃	26	暗灰黄 2.5Y4/2	粘土	〃水成堆積層



SD85・SD47

層	土色	土性	備考
1	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	SD47 黄褐色砂質シルト含む
2	灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃黄褐色砂質シルト含む
3	灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃 2層と似るがより均質
4	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	〃
5	灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃基本層・・・層含む
6	灰 2.5Y4/1	砂質シルト	SD85 黄褐色砂含む
7	灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃均質
8	灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃基本層・層含む

SD47・SD85



層	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	人為堆積 地山ブロック含む
2	黒褐 10YR3/1	シルト	自然堆積
3	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	〃 砂層を縞状に含む
4	黒褐 2.5Y3/1	シルト	〃
5	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃

SE18

層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	人為 地山ブロック含む
2	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 地山ブロック含む
3	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 地山小ブロック含む
4	黒褐 10YR2/3	シルト	〃
5	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	自然
6	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	〃
7	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	〃

SE12

層	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	人為 地山ブロック・中礫含む
2	黒褐 10YR2/2	シルト	〃 地山ブロック含む
3	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 地山ブロック含む
4	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	〃
5	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	〃 地山ブロック含む
6	黒褐 10YR2/2	シルト	〃 地山ブロック含む
7	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 地山ブロック微量含む
8	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃 地山ブロック微量含む
9	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	自然

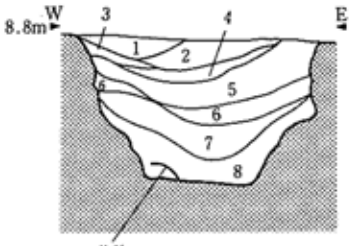
SE11

層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	人為 地山ブロック・炭化物含む
2	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 地山小ブロック含む
3	暗褐 10YR3/3	粘質シルト	自然
4	暗褐 10YR3/1	粘質シルト	〃
5	暗褐 10YR3/3	粘質シルト	〃
6	灰 10Y4/1	粘質シルト	〃
7	灰 10Y4/1	粘質シルト	〃
8	灰 10Y4/1	粘質シルト	〃

SE10

図44 1区の遺構セクション (1)

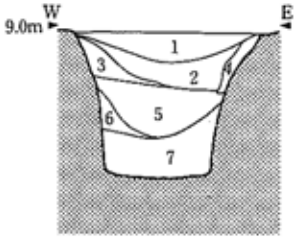
SE29



層	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	人為　炭化物少量含む
2	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	〃 地山ブロック・砂層含む
3	黒褐 10YR3/2	シルト	〃 炭化物・地山ブロック含む
4	オリーブ黒 5Y2/2	シルト	〃 地山ブロック含む
5	オリーブ黒 5Y2/2	シルト	〃 地山小ブロック含む
6	オリーブ黒 5Y2/2	粘質シルト	〃
7	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	砂質シルト	自然
8	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	〃

SE29

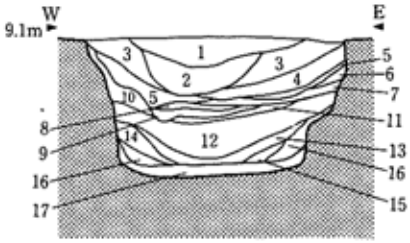
SE86



層	土色	土性	備考
1	灰褐 7.5YR4/2	砂質シルト	人為　少量の炭化物と灰含む
2	褐灰 7.5YR4/1	砂質シルト	自然
3	褐灰 5YR4/1	砂質シルト	〃
4	にぶい黄橙 10YR6/3	砂質シルト	〃
5	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	〃
6	緑灰 10GY5/1	粗砂	〃
7	オリーブ黒 5Y3/1	砂質シルト	〃　砂層を含む

SE86

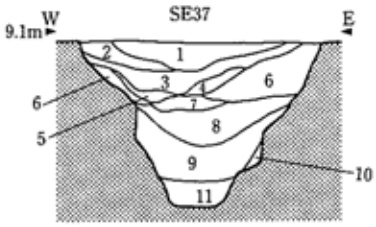
SE31



層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/4	シルト	人為　中礫・炭化物含む
2	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 中礫・地山ブロック含む
3	暗褐 10YR3/4	シルト	〃 中礫・地山ブロック多く含む
4	暗褐 10YR3/4	シルト	〃 中礫・地山ブロック含む
5	黒褐 10YR3/2	シルト	〃 炭化物多量含む
6	暗褐 10YR3/4	シルト	〃 地山ブロック含む
7	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	〃 地山ブロック含む
8	黒褐 10YR2/2	粘質シルト	〃
9	オリーブ黒 5Y2/2	シルト	〃 砂層を含む
10	黒褐 10YR2/2	シルト	人為　地山ブロック含む
11	オリーブ黒 5Y2/2	シルト	〃 炭化物多量含む
12	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	自然
13	オリーブ黒 10Y3/1	粘質シルト	〃
14	オリーブ黒 10Y3/1	粘質シルト	〃
15	オリーブ黒 10Y3/1	粗砂	〃
16	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	〃
17	暗オリーブ灰 5GY4/1	砂質シルト	〃

SE31

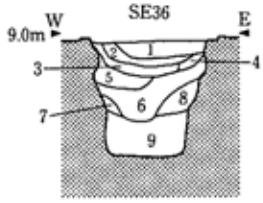
SE37



層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	人為　炭化物・中礫等含む
2	黒褐 10YR2/2	シルト	〃 炭化物含む
3	にぶい黄 2.5Y6/4	シルト	〃 地山ブロック含む
4	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト	〃 地山ブロック含む
5	黒　10YR1.7/1	炭化物層	〃
6	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	〃 地山ブロック含む
7	褐　10YR4/4	シルト	〃 地山ブロック含む
8	オリーブ黒 5Y2/2	粘質シルト	〃 地山ブロック含む
9	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	〃 地山ブロック含む
10	オリーブ黒 5Y3/1	砂質シルト	〃 地山ブロック含む
11	オリーブ黒 5Y2/2	砂質シルト	自然

SE37

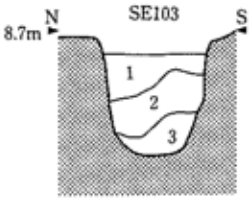
SE36



層	土色	土性	備考
1	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト	人為 炭化物・地山ブロック含む
2	黒　7.5Y2/1	炭化物層	〃
3	黒　2.5Y2/1	シルト	〃 地山ブロック・焼土含む
4	黄褐 2.5Y5/3	シルト	〃
5	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	人為 地山ブロック含む
6	黒　10YR2/1	粘質シルト	〃 炭化物多量含む
7	黄灰 2.5Y4/1	粘土	自然 壁の崩落土
8	黒　2.5Y2/1	粘土	〃

SE36

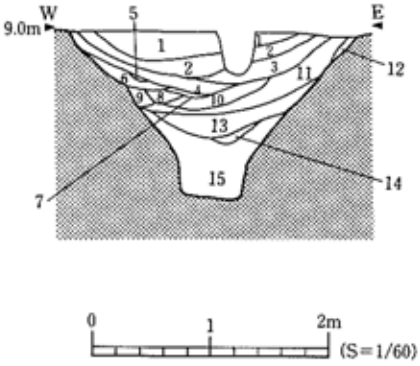
SE103



層	土色	土性	備考
1	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	人為 地山ブロック含む
2	黄灰 2.5Y5/1	粘土	人為 黒褐シルトブロック含む
3	灰　5Y4/1	粘土	自然 グライ砂層含む

SE103

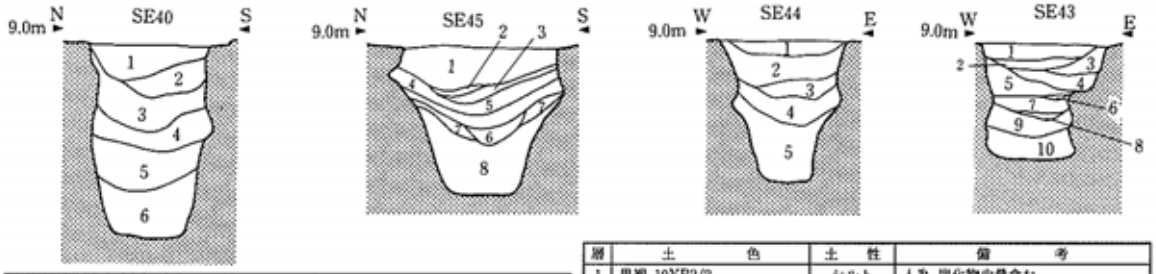
SE38



層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 10YR4/4	シルト	人為 炭化物・地山ブロック含む
2	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	〃 炭化物・焼土を縞状に含む
3	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	〃 炭化物含む
4	黒灰 10YR3/1	粘質シルト	〃 炭化物多量含む
5	明褐灰 5YR7/2	焼土層	〃
6	灰黄褐 10YR4/2	粘質シルト	〃 炭化物の薄層含む
7	黄褐 2.5Y5/3	砂	〃
8	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	人為 炭化物・灰多量含む
9	灰　5Y4/1	粘質シルト	〃 炭化物含む
10	灰　5Y4/1	粘質シルト	〃
11	にぶい黄 2.5Y6/3	砂	〃
12	にぶい黄褐 10YR5/3	シルト	〃 炭化物含む
13	黒　10YR2/1	粘土	自然　グライ層含む
14	暗青灰 5B3/1	粗砂	〃
15	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	〃 水成堆積

SE38

図45　1区の遺構セクション (2)



層	土色	土性	備考
1	黄灰 2.5Y5/1	シルト	人為 地山ブロック多量含む
2	黒褐 10YR3/1	粘土	〃 炭化物・焼土含む
3	褐灰 10YR4/1	粘土	〃 炭化物・地山ブロック含む
4	褐灰 10YR4/1	粘土	自然 砂層を縞状に含む
5	黒 2.5Y2/1	シルト	〃
6	褐灰 10YR4/1	シルト	〃

SE40

層	土色	土性	備考
1	黒褐 10YR2/2	シルト	人為 炭化物少量含む
2	黒褐 2.5Y3/2	シルト	〃 地山ブロック含む
3	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	自然
4	オリーブ黒 5Y3/2	粘質シルト	〃
5	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃 水成堆積 砂層を縞状に含む

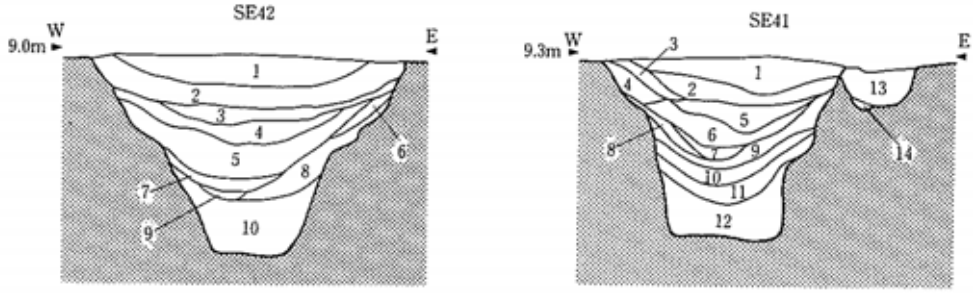
SE44

層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	人為 炭化物・小礫含む
2	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 炭化物微量含む
3	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 地山ブロック含む
4	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 炭化物・地山ブロック含む
5	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 炭化物・地山ブロック多量
6	オリーブ黒 10Y3/2	砂質シルト	自然
7	オリーブ黒 7.5Y2/2	粘質シルト	〃
8	オリーブ黒 7.5Y2/2	粘質シルト	〃
9	青黒 5B2/1	粘質シルト	〃
10	青黒 5B2/1	粘質シルト	〃

SE43

層	土色	土性	備考
1	灰黄褐 10YR4/2	シルト	人為 炭化物・地山ブロック含む
2	褐灰 10YR5/1	粘質シルト	自然
3	褐灰 10YR4/1	粘質シルト	〃
4	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	〃 地山ブロック少量含む
5	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	自然 地山ブロック少量含〃
6	黒褐 2.5Y3/1	粘土	〃
7	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	〃
8	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃

SE45

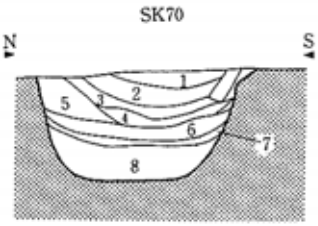


層	土色	土性	備考
1	黒褐 2.5Y3/2	シルト	人為 地山ブロック少量含む
2	黒褐 10YR3/2	シルト	〃 炭化物・地山ブロック少量
3	黒褐 2.5Y3/1	シルト	〃 炭化物少量含む
4	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 炭化物含む
5	オリーブ黒 5Y3/1	粘質シルト	〃 腐食した木含む
6	黒褐 2.5Y3/1	シルト	人為 地山ブロック多量含む
7	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	〃 砂層含む
8	黒 2.5Y2/1	粘質シルト	〃 植物遺体多量含む
9	黄褐 2.5Y4/1	シルト	〃 砂層・植物遺体含む
10	黒 2.5Y2/1	砂質シルト	自然

SE42

層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	人為 炭化物・焼土含む
2	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 炭化物・地山ブロック多量
3	黒褐 2.5Y3/2	シルト	〃 炭化物含む
4	黒褐 2.5Y3/2	シルト	〃 炭化物・焼土多量含む
5	黒褐 2.5Y3/2	粘質シルト	〃
6	青黒 5BG2/1	炭化物層	〃 腐植した木など含む
7	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	自然
8	黄褐 2.5Y5/3	粘質シルト	自然 壁の崩落土
9	黄灰 2.5Y4/1	粘質シルト	〃 グライ層を縞状に含む
10	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	〃
11	黄灰 2.5Y5/1	粘土	〃 グライ層を縞状に含む
12	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	〃
13	灰黄褐 10YR4/2	シルト	SK105 人為 炭化物含む
14	黒 2.5Y2/1	砂質シルト	人為 SK105 に切られる小土壙

SE41・SK105



層	土色	土性	備考
1	黒褐 2.5Y3/2	シルト	人為 地山ブロック・炭化物含む
2	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	〃 地山ブロック・炭化物含む
3	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃
4	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	〃
5	黄灰 2.5Y4/1	粘土	自然 砂層を縞状に含む
6	灰 5Y4/1	粘土	〃 砂層を縞状に含む
7	灰 10Y4/1	粘質シルト	〃 6層とグライ層含む
8	灰 10Y4/1	粘質シルト	〃 グライ層

SK70

図46 1区の遺構セクション (3)

遺構名	構造・特徴	間　数	総 長(m)	柱間寸法　西より／北より(m)		切り合い	方向	備　考
SB301	東西棟？ 間仕切り	桁行２間 梁行２間	(4.8) (4.3)	北桁 西妻	(2.5)＋(2.3) (2.1)＋(2.2)		E-31-S	
SB303	東西棟 間仕切り	桁行２間 梁行２間	(7.8) (4.8)	北桁 西妻	2.9+4.9 2.1+2.7	SB306 より古	E-29-S	
SB304	東西棟？	桁行３間 梁行≧２間	(7.2) (>6.2)	北桁 西妻	1.7+2.1+3.4 2.0+2.9+(　)	SB305、309より新	E-17-S	
SB305	南北棟	桁行２間？ 梁行２間？	(5.6) (4.1)	西桁 北妻	5.6（２間分） 4.1（２間分）	SB304 より古	N-43-E	
SB306	東西棟 北張出南廂	桁行３間 梁行２間	(7.1) (4.4)	北桁 西妻	2.1+3.0+2.0 身舎3.1	SB303、309より新 SB307 より古	E-19-S	廂の出1.3m 張り出しの出0.8m
SB307	東西棟？ 西廂北張出	桁行３間 梁行２間？	(7.0) (>5.0)	北桁 西妻	1.5+4.5+1.0 3.1+(　)	SB306 より新	E-17-S	廂の出1.5m 張り出しの出1.2m
SB308	東西棟 南廂間仕切	桁行４間 梁行３間	(6.4) (>4.7)	南桁 西妻	(2.2)+1.2+(　) 1.2+1.6	SK24 より古？	E-42-S	廂の出(1.9)m
SB309	東西棟 北に張出	桁行４間 梁行２間	(9.2) (5.6)	北桁 東妻	(1.4)＋(2.9)+2.8+2.1 2.8+(　)	SB304、306より古	E-30-S	張り出しの出1.6m
SB310	東西棟	桁行１間 梁行２間	(3.1) (3.0)	南桁 西妻	3.1 1.3+1.7		—	
SB311	東西棟 間仕切	桁行３間 梁行２間	(7.4) (4.5)	南桁 西妻	1.8+2.3+3.3 2.3+2.2		E-42-S	
SB312	南北棟 東廂間仕切	桁行５間 梁行３間	(11.6) (6.1)	西桁 南妻	2.5+3.0+2.1+4.0(２間分) 2.1+2.9	SB313、316、346より新 SB314 より古？	N-22-E	廂の出1.3m
SB313	東西棟 間仕切	桁行４間 梁行２間	(9.8) (5.6)	南桁 西妻	2.0+2.7+1.6+3.5 (3.3)+2.3	SB312、314、315 346より古い	E-35-S	
SB314	東西棟 間仕切	桁行２間 梁行２間	(6.7) (4.1)	南桁 西妻	4.1+2.6 1.9+2.2	SB313 より新 SB312 より新？	E-23-S	
SB315	東西棟 南廂	桁行４間 梁行３間	(5.1) (4.2)	北桁 西妻	0.9+2.9(２間分)+1.3 1.5+1.4	SB313 より新	E-23-S	廂の出1.3m
SB316	東西棟	桁行４間 梁行２間	(7.7) (3.8)	南桁 西妻	1.9+1.9+2.1+1.8 1.6+2.2	SB312、317より古	E-26-S	
SB317	東西棟 間仕切り	桁行２間 梁行２間	(6.8) (3.7)	北桁 東妻	4.8+2.0 1.9+1.8	SB316 より新	E-24-S	棟通下に２ヶの柱穴
SB318	東西棟 間仕切	桁行３間 梁行２間	(6.4) (6.4)	北桁 西妻	2.5+1.8+2.1 3.2+3.2	SE31、SK34 より古	E-27-S	
SB319	東西棟 間仕切り	桁行３間 梁行１間	(6.4) (4.2)	南桁 西妻	2.6+2.1+(1.7) 4.2	SE37 より古？ SA324、SK33 より新	E-28-S	
SB320	南北棟 ほぼ正方形	桁行２間 梁行２間	(2.9) (2.8)	東桁 北妻	1.6+1.3 (1.4)＋(1.4)	SE40 より古 SE38、41より新	N-28-E	
SB321	南北棟	桁行２間 梁行１間	(4.2) (2.9)	西桁 北妻	2.1+2.1 2.4		N-30-E	
SB322	東西棟	桁行３間 梁行１間	(6.6) (4.0)	北桁 東妻	2.0+2.1+2.5 4.0		E-23-S	
SB323	東西棟	桁行３間 梁行１間	(5.5) (2.8)	北桁 西妻	(3.4)+2.1	SE45 より古？	E-23-S	
SB346	南北棟 間仕切り	桁行３間 梁行３間	(5.7) (4.9)	東桁 南妻	1.9+1.2+2.6 1.6+1.7+1.6	SB313 より新 SB312 より古	N-26-E	
SB347	東西棟	桁行２間 梁行２間	(7.0) (4.4)	北桁 西妻	4.0+3.0 3.3+1.1		E-30-S	
SB348	東西棟？ 南廂？	桁行３間 梁行２間	(6.4) (5.7)	北桁 西妻	2.2+2.0+2.2 4.5		E-23-S	廂の出1.2m

表３　１区掘立柱建物跡属性

遺構名	構造・特徴	間　数	総 長(m)	柱 間	西より／北より(m)	切り合い	方向	備　考
SA300	南北 鍵の手状	３間			(2.5)＋(2.2)＋2.5+3.3	SD16 より新	N-17-E	
SA302	東西	３間	(7.8)		3.1+1.2+3.5		E-21-S	
SA324	南北	３間	(4.5)	北から	2.2+1.2+1.1	SB319 より古 SK33 より新	N-41-E	
SA325	東西	３間	(9.1)	西から	2.9+3.4+2.8		E-24-S	南壁外に及ぶ建物跡？
SA349	南北	２間	(4.5)	北から	1.5+3.0		N-27-E	
SA350	東西 鍵の手状	４間	(11.4)	西から	2.5+3.3+2.0+3.6南北3.7		E-46-S	
SA351	東西	５間	(7.9)	西から	1.8+1.8+1.1+1.4+1.8	SE18 より新	E-13-S	

表４　1区柱穴列属性

遺構名		位置	検出長(m)	上端幅(m)	底面幅(m)	深さ	断面	方向	堆積土	備　　考
SD01		W189-132	42	1.1-1.6	0.5-1	0.17-0.43	逆台形	西-南	自然堆積	掘り直1回 SD03より新
SD03		W189-132	34	0.85-1.1	0.2-0.3	0.2-0.53	逆台形	西-南	自然堆積	掘り直し3回 SD01.02より古
SD13		W190	2.9	0.4-0.5	0.25	0.07-0.09	U字形	-	自然堆積	北壁外に及ぶ
SD14		W196	1.9	0.4-0.6	0.2-0.3	0.13	U字形	-	自然堆積	北壁外に及ぶ
SD15		W205	2.6	-		-	-	-	-	痕跡のみ
SD16		W205	2.7	-		-	-	-	-	痕跡のみ
SD17		W205	8.7	0.3-0.6	0.01-0.3	0.06	U字形	-	自然堆積	
SD19		W193	1.5	0.4-0.7	0.1-0.5	0.1-0.12	逆台形	-	自然堆積	SE18より古
SD20		W190	1.7	0.7-0.8	0.4	0.13	U字形	-	自然堆積	
SD30		W180	1.7	0.75	0.4	0.23	逆台形	南・北	自然堆積	南壁外に及ぶ SK22,23より古
SD47		W141	13	0.6-0.9	0.3-0.6	0.09-0.27	逆台形	南・北	自然堆積	南壁外に及ぶ　SD01,03,50より古 SD85より新
SD48		W136	約5	0.5	0.1-0.3	0.13	U字形	東西	自然堆積	北壁外に及ぶ　SD49より新
SD85		W138	6	-	0.4	0.09-0.24	逆台形か	南・北	自然堆積	掘り直し1回 SD03,47,49,50より古

表5　1区溝跡属性表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	平面／断面形	堆積土	備　　考
SE10	W180	1.2	—	1.22	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し
SE11	W186	1.9	1.5	1.18	漏斗	下層自然堆積	上層埋め戻し
SE12	W186	1.66	—	1.2	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し
SE18	W195	0.9	—	0.8	円筒	自然堆積	SD19より新、SA351より古
SE29	W174	2.2	—	1.1	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し、SK70より新
SE31	W159	2.3	—	1.2	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し、炭化物廃棄、SB318より新
SE36	W156	1.1	—	1.0	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し、炭化物廃棄
SE37	W156	1.8	—	1.4	漏斗	埋め戻し	炭化物廃棄、SE103より新？
SE38	W153	2.5	—	1.4	漏斗	埋め戻し	SB320より古、SE103より新、焼土・炭廃棄
SE40	W152	1.08	—	1.68	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し、炭化物廃棄
SE41	W150	2.2	—	1.5	漏斗	下層自然堆積	上層埋め戻し、SB320より古、SK105より新
SE42	W150	2.64	—	1.7	漏斗	下層自然堆積	上層埋め戻し
SE43	W151	1.1	—	1.0	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し
SE44	W143	1.1	—	1.2	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し
SE45	W143	1.3	1	1.25	円筒	下層自然堆積	最上層埋め戻し、SB323より新？
SE86	W167	1.7	—	1.22	円筒	最上層埋め戻し	
SE103	W154	0.9	—	0.98	円筒	埋め戻し	SE38より古
SE106	W138						SD49より新

表6　1区井戸跡属性表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	平面／断面形	堆積土	備　　考
SK05	W177	0.54	0.43	0.25	皿状／円	自然堆積	
SK06	W177	0.8	0.65	0.14	皿状／円	自然堆積	
SK07	W177	0.75	0.6	0.17	皿状／円	自然堆積	
SK08	W180	0.9	0.45	0.09	皿状／方	自然堆積	
SK09	W185	1.2	1.0	0.15	皿状／楕円	自然堆積	
SK16	W196	1.1	0.55	0.14	皿状／不整楕円		焼土・灰・木炭含む
SK22	W181	0.75	0.6	0.16	皿状／円	埋め戻し	木炭含む　SD30より新
SK23	W180	0.85	0.8	0.12	皿状／円	埋め戻し	木炭含む　SD30より新
SK24	W179	0.9	0.65	0.16	皿状／方	埋め戻し	焼土・木炭含む
SK25	W175	0.85	0.65	0.13	皿状／楕円		
SK26	W176	—	1.55	0.17	皿状／方	埋め戻し	焼土・木炭含む
SK32	W157	0.98	0.6	0.13	皿状／楕円	埋め戻し	土壌墓、焼土・木炭含む　銭貨6枚
SK33	W159	1.65	1.1	0.24	皿状／方	埋め戻し	木炭含む、SB319、SA324より古
SK34	W158	1.4	1.1	0.28	皿状／方	埋め戻し	木炭・小礫・地山粒含む　SB318より新
SK35	W161	1.45	0.85	0.47	—	埋め戻し	焼土・木炭含む
SK39	W154	3	0.65	0.14		自然堆積	
SK46	W138	1.0	0.7	0.2	皿状／楕円	埋め戻し	木炭・地山粒含む
SK70	W171	2.9	1.7	0.61-0.89	逆台形／長楕円	下層自然堆積	上層埋め戻し　SE29より古
SK87	W165	0.35	0.27	0.13	皿状／方	埋め戻し	焼土含む
SK88	W169	3.0	0.9	0.2-0.33	U字形／長楕円	埋め戻し	木炭含む
SK89	W168	0.6	—	0.28	皿状／円	埋め戻し	木炭含む
SK104	W148	0.75	0.55	0.23	皿状／方	—	—
SK105	W148	0.6	—	0.3	円	埋め戻し	新古あり　木炭含む　SE41より古

表7　1区土壙属性表

よりは新しい。

ＳＡ302（図42）

W182～190・ＳNo～S1 に位置する東西 3 間の柱穴列である。これより北に復原できた掘立柱建物跡はなく、他の柱穴もわずかに分布するのみである。方向は東で南に約 21°振れ、南に位置する東西棟ＳＢ304・306・307 の方向に近い。総長は 7.8mある。

ＳＡ324（図43）

W156～159・N2～S2 に位置する。南北 3 間の柱穴列で、総長は 4.5mある。方向は北で東に約 41°振れ、この西側に位置するＳＢ311 と平行する。ＳＢ319 より古くＳK33 より新しい。

ＳＡ325（図43）

W148～157・S6～7 に位置する。ここでは東西 3 間の柱穴列としておくが、南側に展開する建物跡の北側柱列の可能性が高い。方向は東で南に約 24°振れ、ＳＢ322・318・315 の南側柱列・ＳＢ348 の北側柱列とほぼ平行する。総長は 9.1mある。

ＳＡ350（図42）

W179～191・N1～S2 に位置する。鍵の手状に曲がる東西の柱穴列で、東西 4 間・南北 1 間ある。方向は東で南に約 46°振れ、ＳＢ305・308 の北側柱列と平行する。東西の総長は 11.4mある。

ＳＡ351（図42）

W190～198・S9 に位置する、東西 5 間の柱穴列である。方向は東で南に約 13°振れ、総長は 7.9mある。前述のように、ＳＢ307 に取り付くと考えられる。

・溝跡（表5）

ＳＤ01・03（図42・43）

ほぼ同位置にあるＬ字形の溝跡で、同一の溝の掘り直しと見なすことも可能である。調査区北壁のW183 付近に始まって南東方向に直線的に延び、W135 付近でほぼ直角に南西に曲がって調査区外に延びている。ＳＤ01 が 03 より新しく、やや北東にずれて位置している。両者ともＳＤ47・85 より新しい。

ＳＤ01 は、北辺の検出長が未調査部分を含めて約 44mある。東辺では 2 回の掘り直しが認められ、新しいものがより東にずれている。確認面での上幅は 1.1～1.6mで、下幅が 0.5～1m、深さは約 70㎝ある。断面形は、上方が浅く開き下方が逆台形をなす。底面の高低差はほとんどない。埋土は自然堆積である（図44）。出土遺物には、常滑・渥美・在地産の陶器甕、温石、石鉢、砥石、板碑、鉄鎌、鉄滓、ウマ下顎歯がある(図47)。ＳＤ01 と直接重複関係がないが、同一個体の陶器片を出土した遺構に、ＳＤ49(4 個体)・ＳＤ50(2 個体)・ＳＥ38・ＳＥ42(2 個体)・ＳK70(2 個体)がある。

ＳＤ03 も東辺で 3 回・北辺で 1 回の掘り直しが認められる。ＳＤ01 と同様に、東辺では新しいものが東にずれる傾向がある。確認面での上幅は 0.85～1.1m、下幅は 20～30㎝、深さは 20～53㎝ある。断面形は逆台形ないしは擂鉢状を呈し、底面は東辺から西に向かって低くなる。出土遺物には、渥美産の陶器壷、常滑・渥美・在地産の陶器甕、ロクロかわらけ皿、鉄滓がある（図47）。ＳＤ03 とは直接重複関係がないが、同一個体の陶器片を出土した遺構に、ＳＤ49・ＳＤ50(3 個体)・ＳX236・ＳＥ10・ＳＥ41・ＳK70 がある。

ＳＤ15・16・17（図42）

W205～W206に検出された南北溝で、ＳＤ01･03とほぼ直交する位置にある。ＳＤ16と17は近接して平行し、ＳＤ15はＳＤ17の南延長上にあるため一連のものと見られる。ＳＤ16はＳＡ300に切られている。ＳＤ17は確認面での上幅が30～70㎝･下幅が20～30㎝で、深さは6㎝である。ＳＤ15･16は痕跡を確認できた程度である。遺物はＳＤ15に無釉陶器甕の破片が1点あるのみである。

ＳＤ47・85（図43）

W138～W141付近に位置する南北方向の溝で、ＳＤ47がＳＤ85より新しい。ＳＤ01･03･50、ＳＢ323と重複し、これらより古い。ＳＤ49との新旧関係は確定できなかった。ＳＤ47は確認面での上幅60～90㎝･下幅30～60㎝･深さ9～27㎝で、断面は逆台形を呈する（図44）。出土遺物には、常溝産？と在地産の陶器甕、板碑片がある(図47-8)。甕の破片にはＳＤ49出土のものと同一個体と見られるものが2個体ある。ＳＤ85はＳＤ47とほぼ同規模で、1回の掘り直しが認められる。遺物は出土していない。

・井戸跡（表6）

18基が検出されたが、西側のW180～W185に3基・東側のW141～W159に10基と2ケ所の集中部がある。前者は建物集中域の北側に当たり、遺構が少なく重複もほとんどない区域である。後者は建物集中域の東半部に当たり、井戸跡同士や建物跡・土壙との重複が見られる。井戸跡と建物跡との新旧関係は、どちらかが常に新しいというような一律的なものではない。

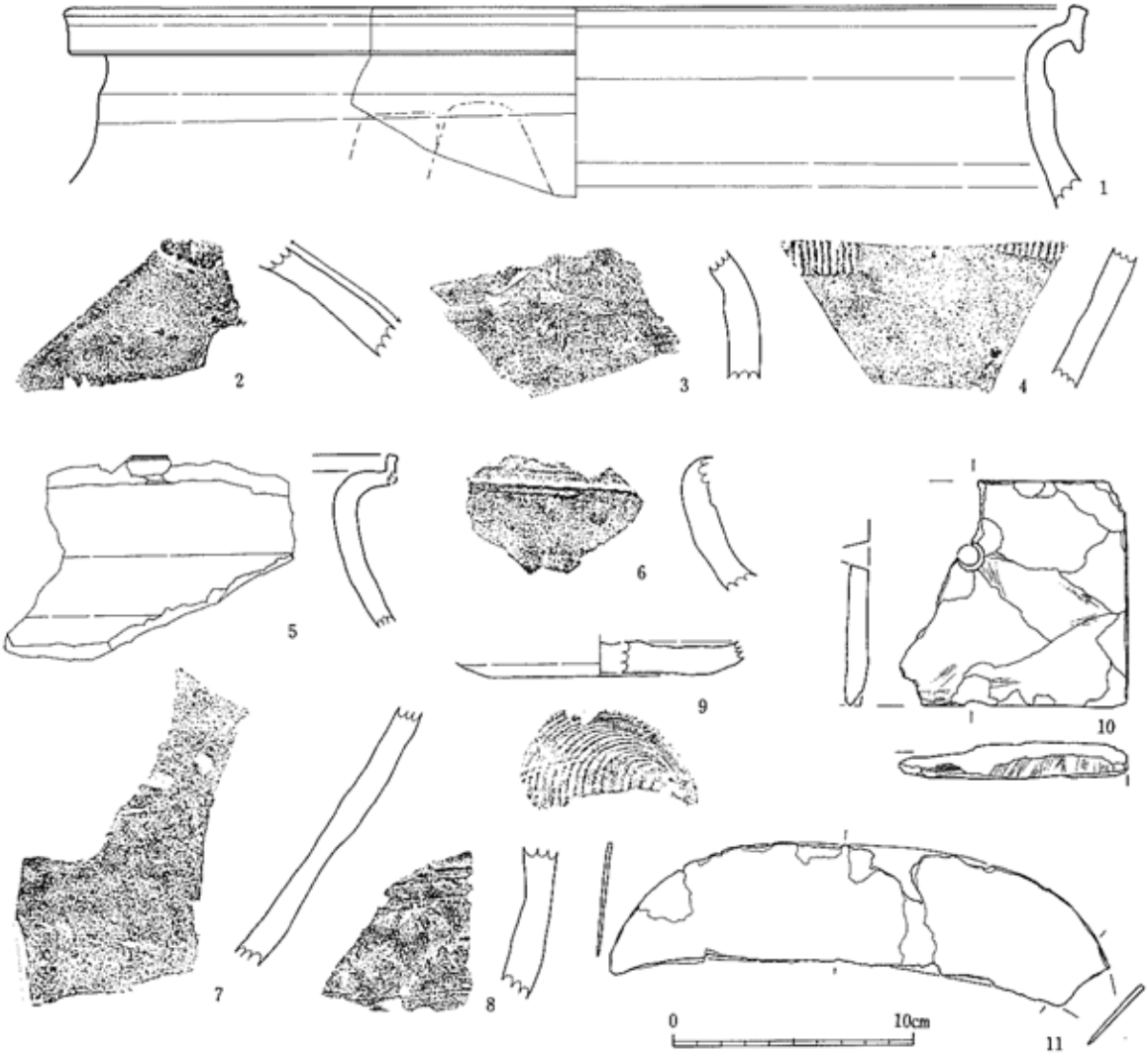
全てが素掘りで井側が検出されたものはない。平面形は円形ないしは楕円形を基調とする。断面形は円筒形を呈するものが多いが、漏斗状で下部が屈曲して垂直に落ちるものもある（ＳＥ37・38・41・42、図44～46）。下部に自然堆積層が形成された後に、上部が埋め戻されているものが多い。埋め戻しは一気に行われている場合と、途中で炭化物・焼土などの廃棄が行われている場合とがある。規模は、確認面での長軸が1mに満たない小形のものから、2.5m程の大形のものまで様々である。深さは0.8～1.7mで、いずれもⅧ層の砂層にまで掘り込んでいる。

遺物は、たがいに近接して分布するＳＥ38･41･42で比較的まとまって出土した。ＳＥ38には常滑産の陶器甕、板草履？があり（図49）、ＳＥ41には常滑産陶器甕･壷、東海産の鉢、漆器皿、連歯下駄、鉄滓があり（図51）、ＳＥ42には渥美･常滑産の甕、東海産の鉢、転用砥、温石、銭貨（元祐通宝・元豊通宝）、鉄滓がある(図52)。このほか、ＳＥ10からは常滑産の陶器甕が(図48-1)、ＳＥ11からは東海産の鉢が、ＳＥ29からは曲物の完形品が(図48-2)、ＳＥ31からは無釉陶器甕が、ＳＥ40からは常滑産の陶器甕･手づくねかわらけ皿、軽石製の砥石、非ロクロ調整の土師器坏が(図50)、ＳＥ45からは無釉陶器甕が出土している。無釉陶器片で遺構間で接合するものがある。ＳＥ42はＳＤ01(2個体)･ＳＤ49(3個体)･ＳＤ47･ＳＤ50･ＳＥ38･ＳＥ40･ＳＫ70と、ＳＥ38はＳＤ01･ＳＤ49･ＳＥ40･ＳＥ42と、ＳＥ41はＳＤ03･ＳＤ50･ＳＥ10と、ＳＥ10はＳＤ50･ＳＤ03･ＳＥ41とである。

・土壙墓

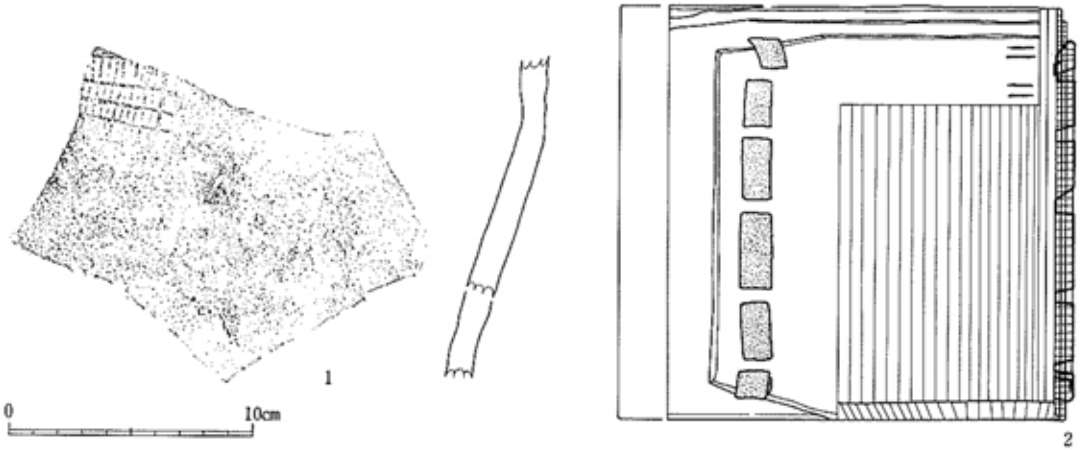
ＳＫ32（図43）

W157･N3に位置する。平面形は楕円形で、確認面での長軸は98㎝・短軸は60㎝・深さは13㎝ある。



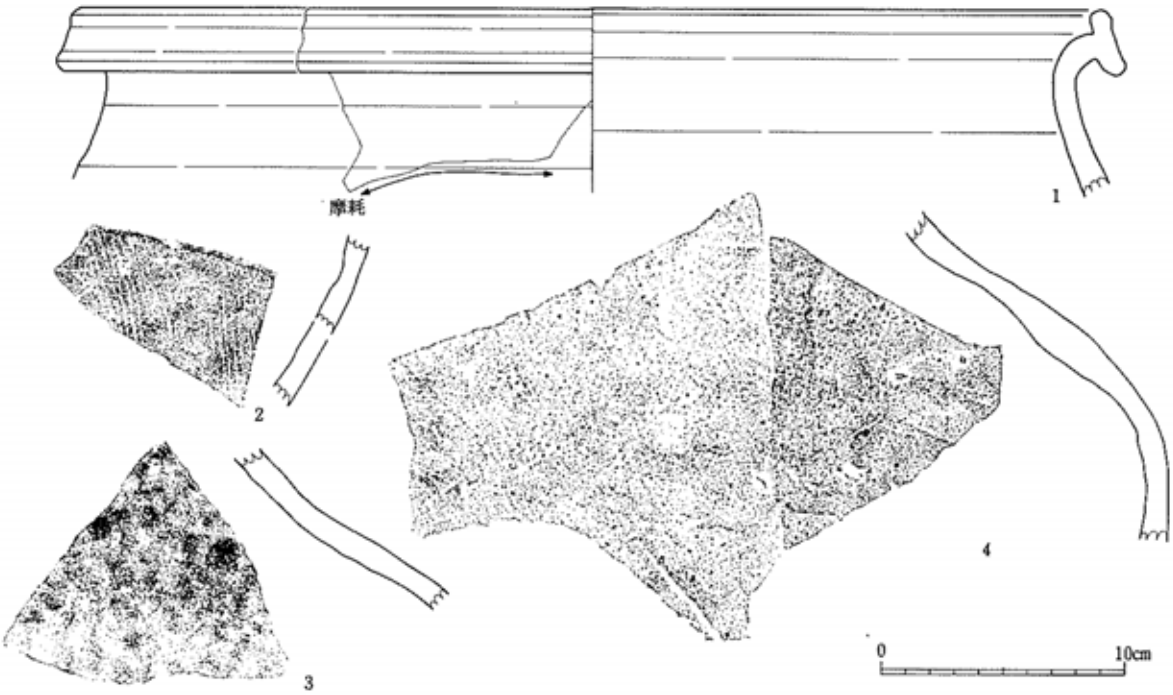
No	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	79	SD03	陶器	甕	常滑	甕9	口径42.6、内面ナデ、外面縦へラナデ→ナデ、SD50・108・236・SE10・41に同一
2		SD01	陶器	甕	瀬戸	甕19	内面横へラナデ、外面灰釉刷毛塗り、漆継ぎ、SD49・SE42・SK70に同一個体
3		SD01	陶器	甕	在地	甕15	内面ナデ、外面縦へラナデ→横へラナデ
4	119	SD03	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面縦へラナデ→簾状に×押印
5		SD03	陶器	甕	在地		内外面ナデ、自然釉
6		SD01	陶器	甕	常滑	甕4	内面ナデ、外面ナデ・頸部特に強い、SD49に同一個体
7	108	SD01	陶器	甕	常滑	甕1	内面横へラナデ→自然釉、外面縦へラナデ、SD50と接合
8		SD47	陶器	甕	在地	甕15	内面ナデ、外面縦へラナデ→横へラナデ、SD49・SD01・SK70に同一個体
9	153	SD03	かわらけ	皿		ロクロつくり	底径8.6、回転糸切り、ロクロナデ
10		SD01	石製品	温石		粘板岩	紐孔径1.1、(9.5)×9.4×(1.5)
11	224	SD01	鉄製品	鎌		有茎？	全長(20.8)、刃＝平造・19×4.9×0.2・内湾

図47　1区 SD01・03・47 出土遺物



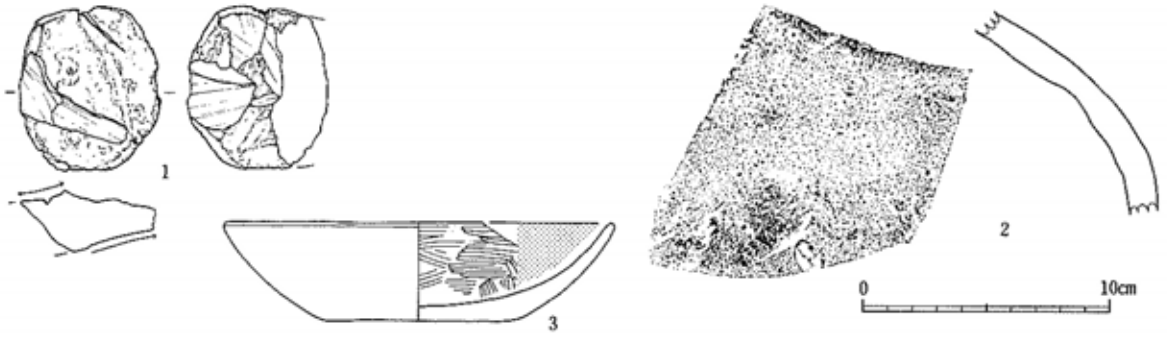
No.	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	79	SE10	陶器	甕	甕9	常滑	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→鱗状押印、SD50・108・236・SE41に同一個体
2	190	SE29	木製品	曲物	木060		底径18、器高17.1、側板0.2〜0.3・底板厚0.7・スギ柾目、1列内6段綴じ、縦ケビキ

図48　1区 SE10・29 出土遺物



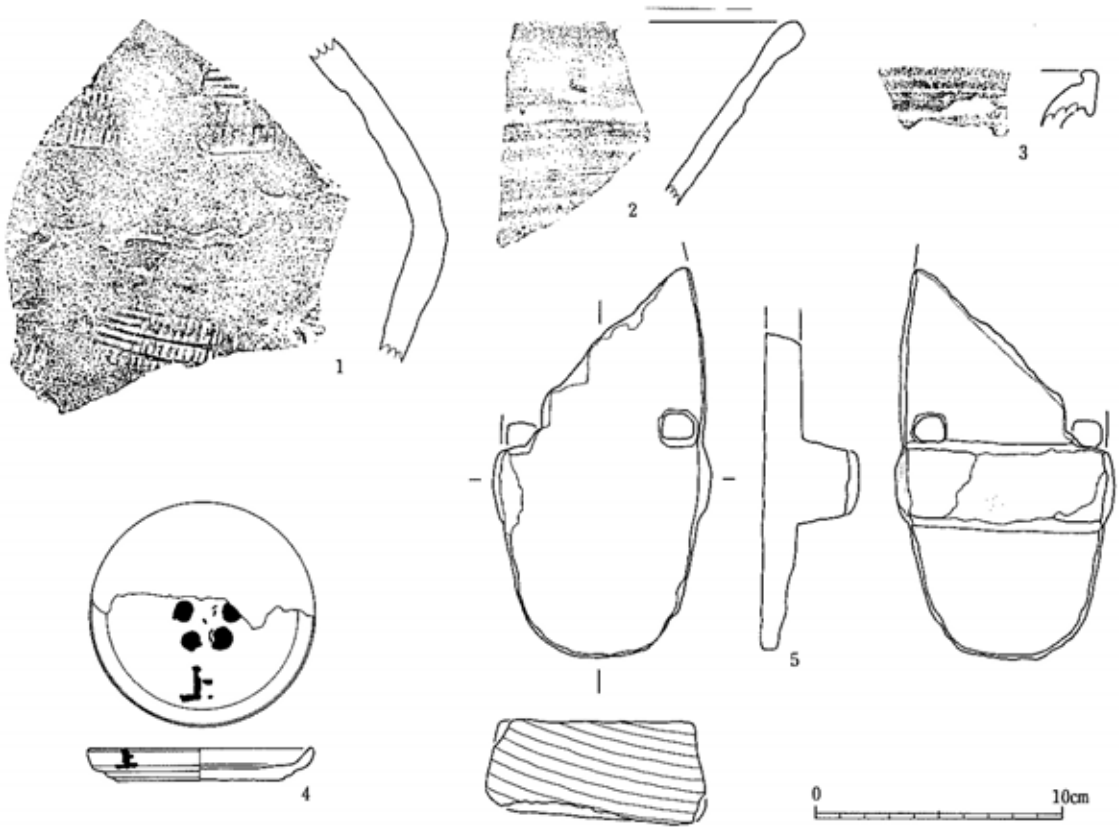
No.	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		陶器	甕	常滑		口径41.8、内外面ナデ、割れ面磨耗（転用砥）
2	102	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面縦ヘラナデ
3		陶器	甕	常滑	甕6	内面オサエ→ナデ、外面自然釉、SD49に同一個体
4	99	陶器	甕	常滑	甕3	内面オサエ→ナデ、外面斜ヘラナデ→自然釉、SE40に同一個体

図49　1区 SE38 出土遺物



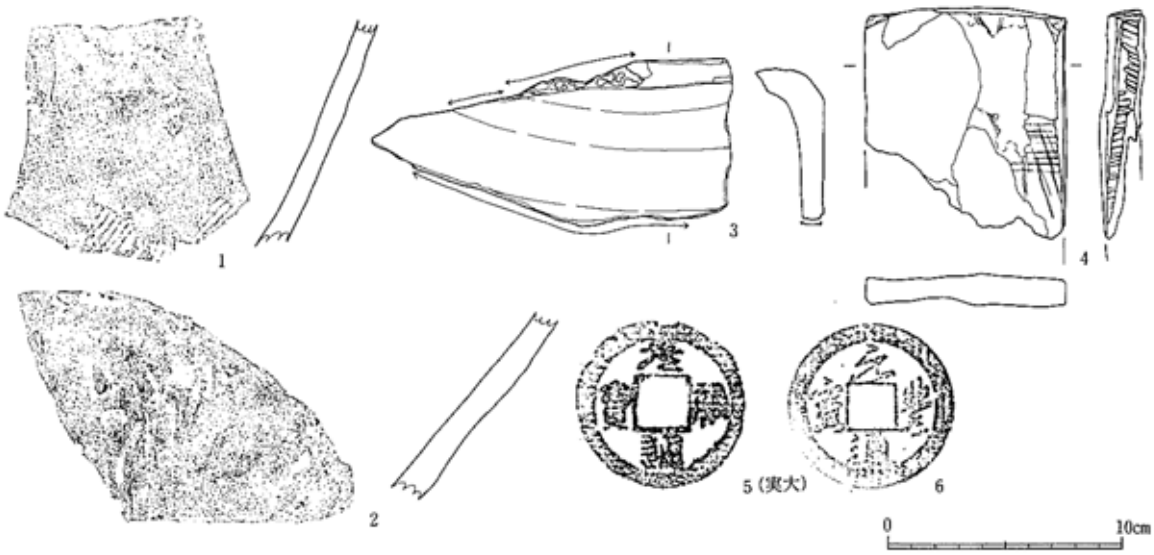
No.	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1		石製品	砥石		軽石	2面使用、6.6×(5.7)×2.5、重30
2		陶器	甕	常滑	甕3	内面オサエ→ナデ、外面斜ヘラナデ→自然釉
3	1	土師器	杯		非ロクロ	口径15.8、底径8.0、器高4.0、内面ミガキ→黒色処理、外面磨滅

図50　1区 SE40 出土遺物



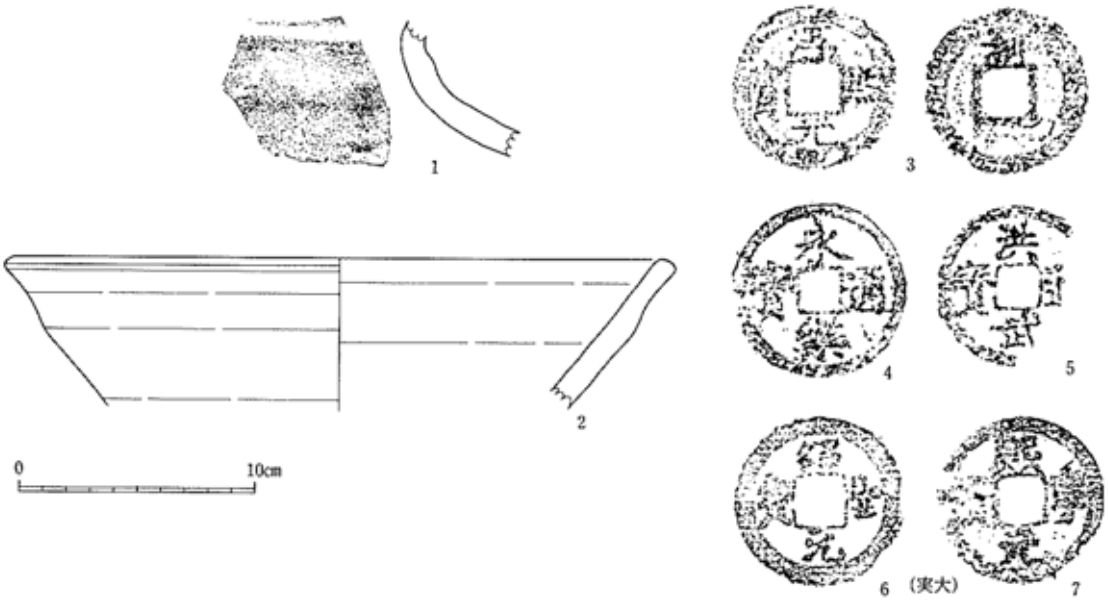
No.	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1		陶器	甕	常滑	甕9	内面ナデ、外面縦ヘラナデ→肩部横ヘラナデ、押印圏＋平行線
2		陶器	鉢	東海		内外面ナデ、口唇に小平坦面
3		陶器	甕	常滑	甕9	内外面ナデ、SD50・108・236・SE10 に同一個体
4	169	木製品	漆皿		木145	口9.2、底6.8、高1.3、内外黒漆、内面朱「梅・上」、外面朱「上」、ケヤキ横木取り
5		木製品	下駄		連歯、木166	台(15)×8×1.5、後壺1×1.2、後歯台形9×(2.2)、板目

図51　1区 SE41 出土遺物



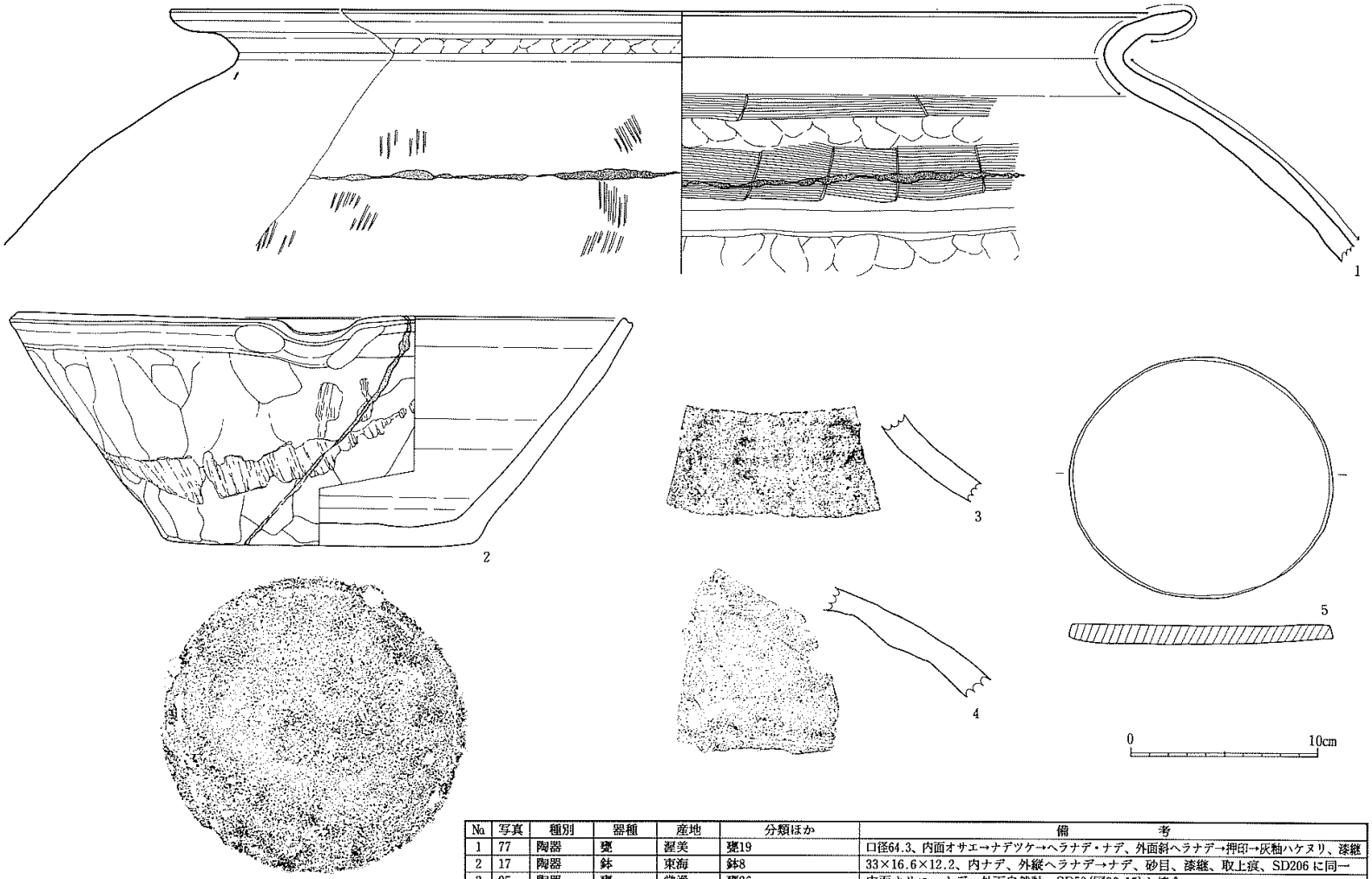
No.	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	110	陶器	甕	渥美	甕16	内面横ヘラナデ、外面縦ヘラナデ→平行線押印、SD50に同一個体
2		陶器	甕	常滑？	甕24	内面横ヘラナデ→磨耗、鉢に転用か、外面縦ヘラナデ、SD47・49に同一個体
3	77	土製品	転用砥			渥美産甕19頸部破片素材、2辺使用、外面灰釉施塗り、漆継、15.1×6.7×1.4
4	292	石製品	温石		滑石	(9.5)×8.5×1.3、重(150)、剥離とケズリ痕
5		銅製品	銭貨		元祐通宝	径2.5、重2.6
6	274	銅製品	銭貨		元豊通宝	径2.4、重3.1

図52　1区 SE42 出土遺物



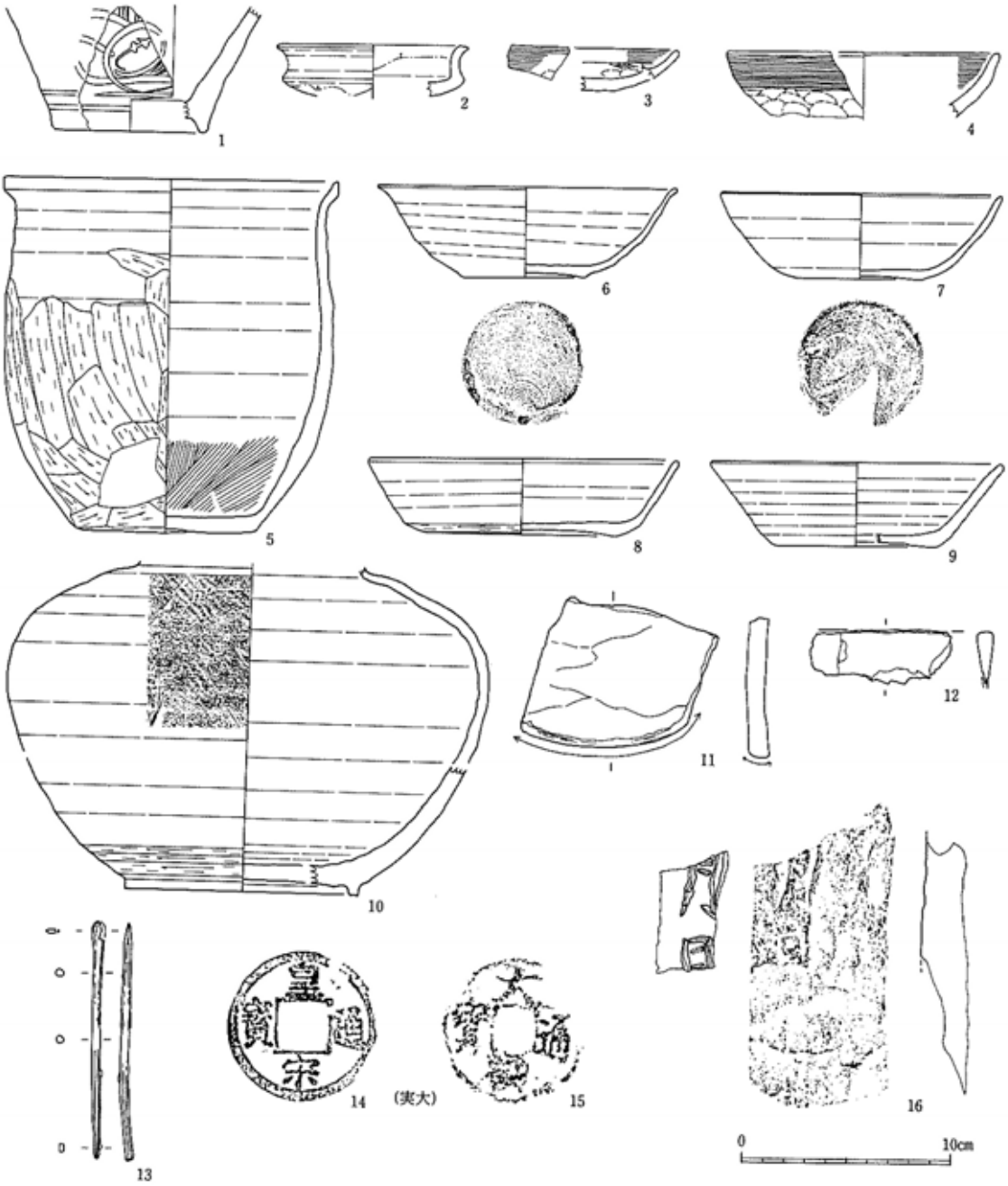
No.	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	92	柱穴	陶器	甕	不明		内面ナデ、外面ナデ→自然釉
2	26	柱穴	陶器	鉢	東海		口径28.4、内外面ナデ
3	286	SK32	銅製品	銭貨		淳熙元宝	径2.4、重2.3、まとまって出土
4	288	SK32	銅製品	銭貨		永乗通宝	径2.6、重2.9
5		SK32	銅製品	銭貨		洪武通宝	径2.3、重2.0
6	278	SK32	銅製品	銭貨		紹聖元宝	径2.5、重3.2
7		SK32	銅製品	銭貨		熙寧元宝	径2.4、重2.1

図53　1区 SK32・柱穴出土遺物



No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	77	陶器	甕	渥美	甕19	口径64.3、内面オサエ→ナデツケ→ヘラナデ・ナデ、外面斜ヘラナデ→押印→灰釉ハケヌリ、漆継
2	17	陶器	鉢	東海	鉢8	33×16.6×12.2、内ナデ、外縦ヘラナデ→ナデ、砂目、漆継、取上痕、SD206に同一
3	95	陶器	甕	常滑	甕26	内面オサエ→ナデ、外面自然釉、SD50(図26-15)と接合
4		陶器	甕	在地	甕15	内面ナデ、外面自然釉、SD01・49・47に同一個体
5	193	木製品	曲物	完形	底板、木052	14.1×12.7×1、スギ柾目

図54　1区 SK70 出土遺物



No.	写真	遺構	種別	器種	分類ほか	備考
1		遺構外	青白磁	梅瓶		唐草文・ヘラ描き・櫛歯文、削り出し高台・径7.2、畳付～外底露胎
2		遺構外	陶器	香炉	古瀬戸後III期	袴腰形、口径9.2、内面口縁～外面体上部に灰釉
3		遺構外	かわらけ	皿	かわらけ8、手づくね	内面オサエ→ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
4	141	表土	かわらけ	皿	かわらけ6、手づくね	口径13.0、内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
5	11	遺構外	土師器	甕		口径16.0、底径8.6、器高17.0、内面ロクロナデ→ロクロナデ、外面ロクロナデ→ヘラクズリ
6	4	表土	須恵器	杯		口径14.4、底径5.8、器高4.4、回転糸切り、無調整
7		遺構外	須恵器	杯		口径13.4、底径6.0、器高4.1、回転糸切り、無調整
8	5	遺構外	須恵器	杯		口径14.8、底径9.0、器高3.7、底面～体下端回転ヘラケヅリ
9		遺構外	須恵器	杯		口径14.0、底径8.0、器高4.0、回転ヘラキリ、無調整
10	12	遺構外	須恵器	甕		高台径11.2、内面ロクロナデ、外面叩き→ロクロナデ→下端回転ヘラケヅリ→高台接着
11	157	遺構外	土製品	転用砥		常滑甕5体部破片素材、一辺使用、7.7×7×1
12		遺構外	鉄製品	刀		丸棟平造、厚0.7
13	228	遺構外	鉄製品	鏃		身木葉形・関丸造・無関・1.1×0.7×0.2、全11.4×0.4×0.4、無関
14		遺構外	銅製品	銭貨	皇宋通宝	径2.5、重2.2
15		遺構外	銅製品	銭貨	大観通宝	径2.3、重1.4
16	309	遺構外	石製品	板碑		粘板岩、紀年「月日」・薬研彫り

図55　1区遺構外・表土出土遺物

断面形は皿状をなし、埋土は焼土・木炭を含む人為堆積である。壙底付近から、副葬品として6枚の銭貨（熙寧元宝・紹聖元宝・淳熙元宝・洪武通宝・永楽通宝・1枚は不明）が出土した（図53-3～7）。

ＳK32 のほかに、ＳK46 は形状や大きさから見て土壙墓の可能性があるが、副葬品の出土がないため確定できない。

・土壙（表7）

調査区内に散在して分布する。長軸50㎝～1.6m・深さ30㎝未満の、円形を基調とする皿状のものが多く、そのほかに長軸3m前後・深さ20～90㎝前後の大形で長楕円形のものがある(ＳK39・70・88)。皿状のものには、堆積土に木炭や焼土の廃棄層を含むものがある(ＳK16・23・24・26・32・87)。長楕円形の土壙のうち、浅いものには同様の堆積土が見られる（ＳK39・88）。

遺物が出土した土壙は少ないが、ＳK70からは渥美・常滑・在地産の陶器甕、東海産の鉢、曲物底板、砥石、板碑破片など、比較的多量の出土があった(図54)。そのほか、ＳK35からは手づくねかわらけ小皿が出土した。

＜2区の遺構＞（W9-W132）

掘立柱建物跡1棟、溝跡5条(前述の東西溝以外)、井戸跡15基、土壙4基を検出した。建物・井戸・土壙の多くは、調査区中央部を東西に走る溝跡の北側に分布している。

・掘立柱建物跡（表8）

建物跡がきわめて少ない区域で、中央部西寄りに1棟復原できるが、他には北東隅に数個の柱穴があるのみである。

ＳB326（図57）

W84～W88の北壁際にある。桁行2間・梁行2間の小形で不整方形の東西棟である。ＳD57より新しい。

・溝跡（表9）

ＳD57（図56・57）

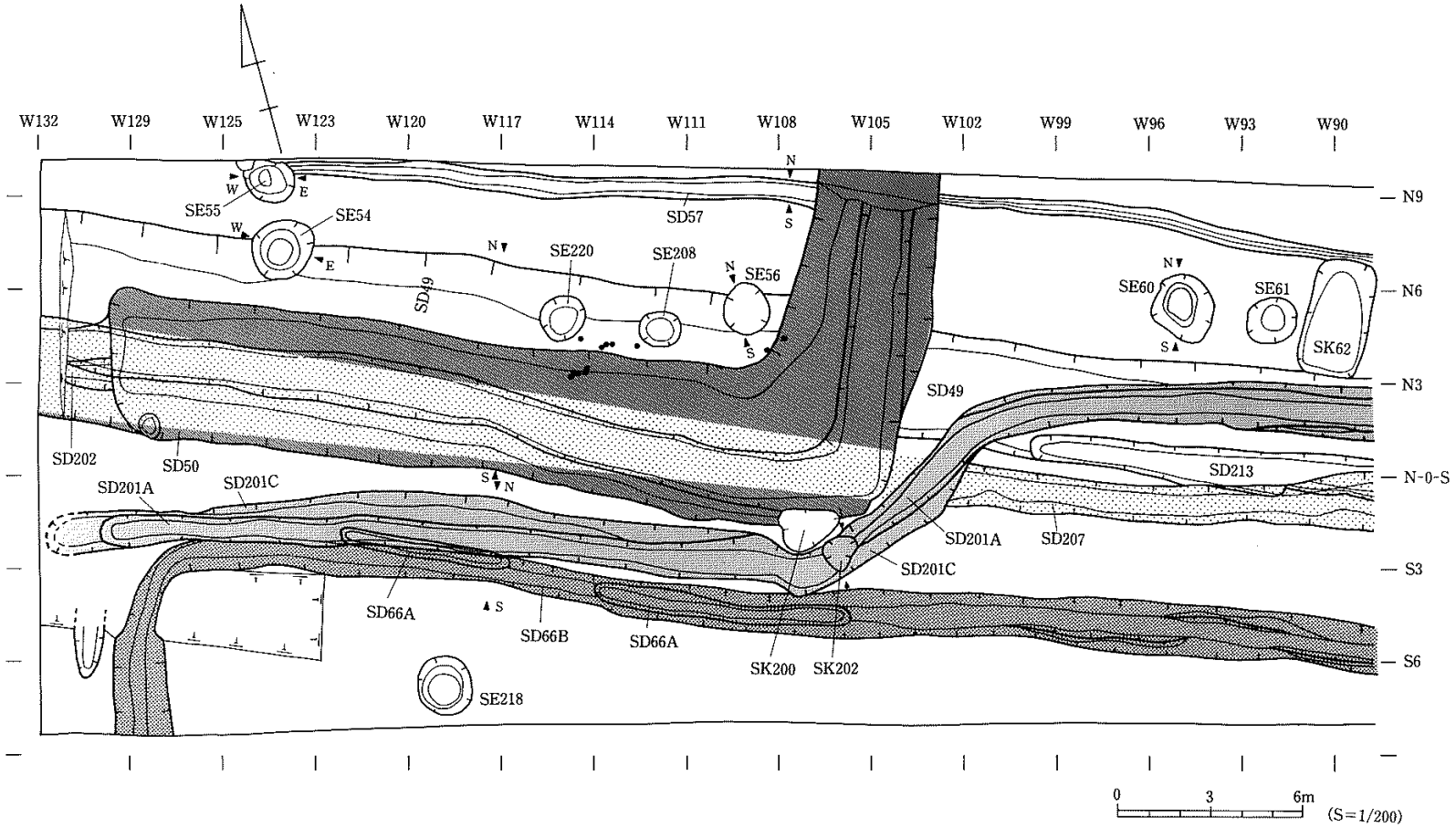
W125付近の調査区北壁から南東方向に延び、W81～W74付近で一端途切れるものの、W55付近まで続きそこで北東方向に屈曲して調査区北壁外におよぶ。東西方向の検出長は約77mある。ＳD50・77、ＳB326、ＳE55・78、ＳK62と重複しいずれよりも古い。確認面での上幅は60～90㎝・下幅は20～50㎝で深さは4～20㎝と浅い。断面形はU形状を呈し、埋土は自然堆積である。遺物は出土していない。

ＳD76（図58）

東側に位置し、調査区北壁のW50から南に延び、N1付近でほぼ直角に東に曲がり、その後やや蛇行しながらW15付近まで延びて北に曲がる。南辺の長さは約37mになる。ＳD75・201Ｃと重複しいずれよりも新しい。確認面での上幅は0.5～1.2m、下幅は10～80㎝、深さは9～37㎝ある。断面形は逆台形状で、底面は北に向かって低くなっている。埋土は自然堆積である。遺物は出土していない。

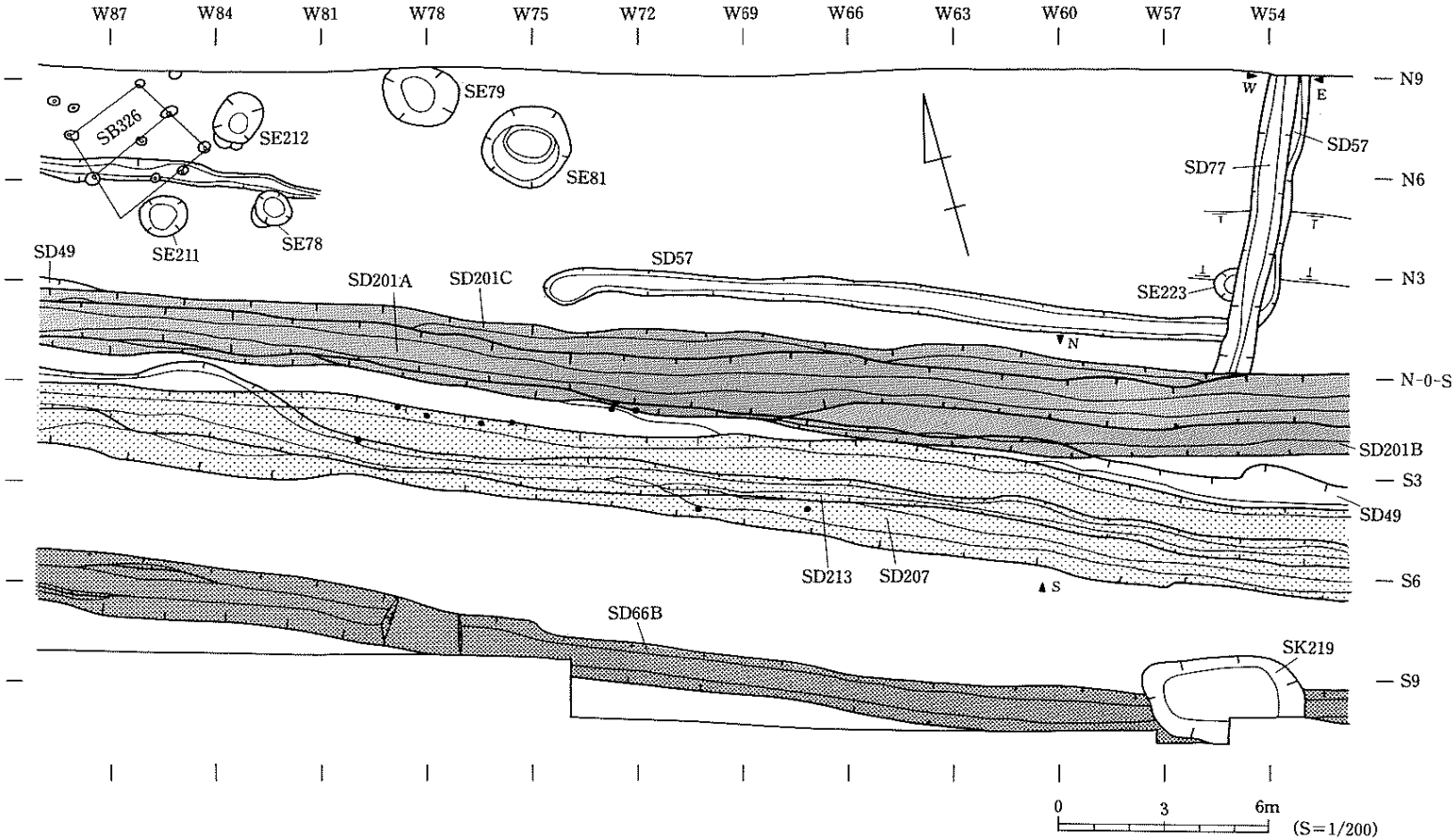
ＳD77（図57）

W54 付近で検出された南北溝である。南側はＳD49 まで延びていないため、東西方向に屈曲していた可能性もある。ＳD201より古くＳD57・ＳE223より新しい。確認面での上端幅は1m前後・深さは



(注１)　SD50 上のドットスクリーン部分は SD207、213の推定範囲を示す。
(注２)　SD50・49 の●は打込杭を示す。

図56　２区中世の遺構 (1)



(注) ●は打込杭を示す。

図57　2区中世の遺構 (2)

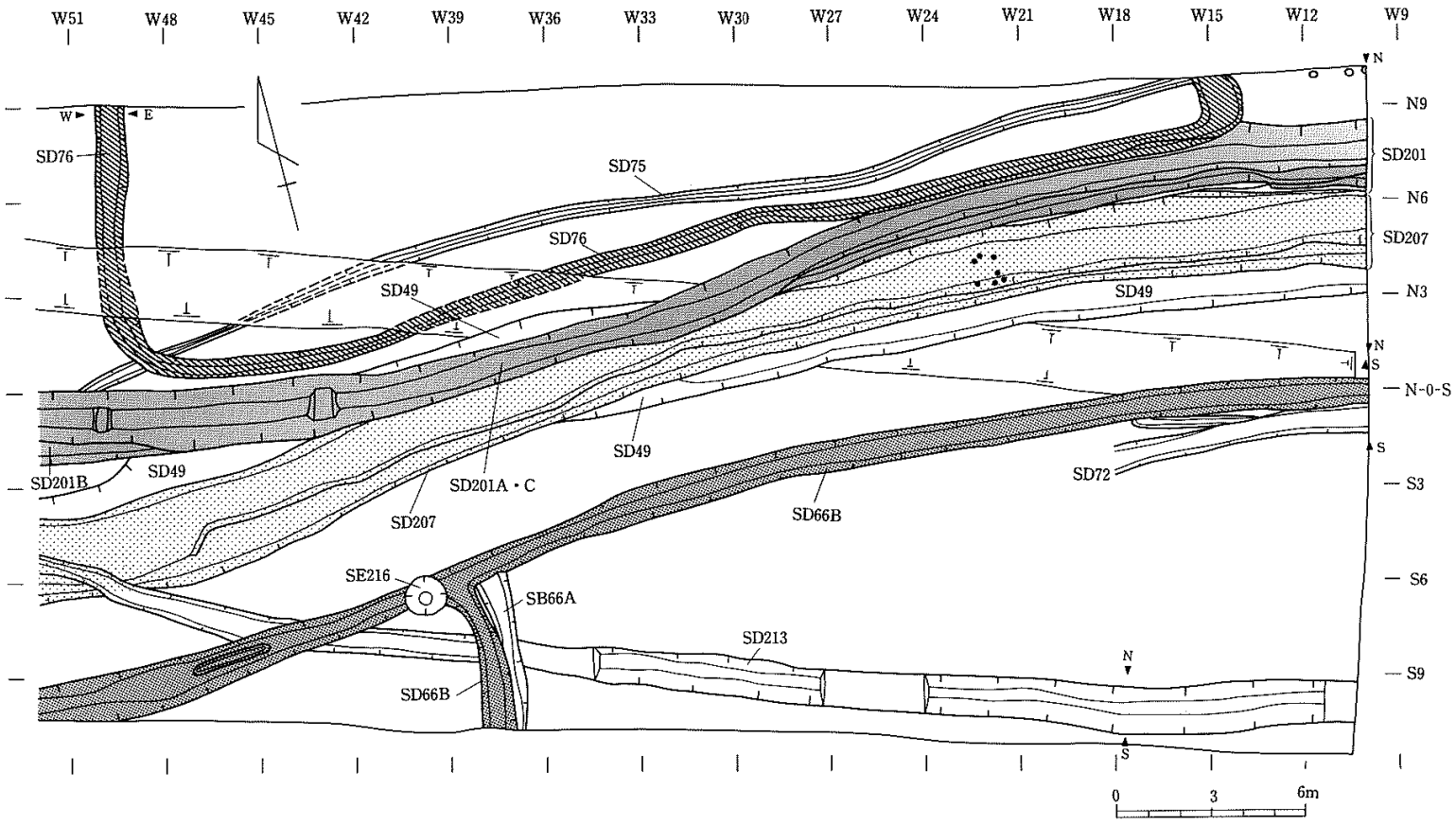
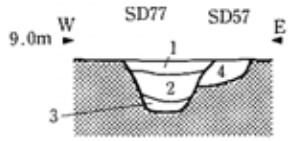
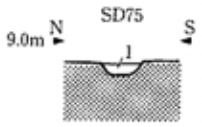


図58　2区中世の遺構 (3)



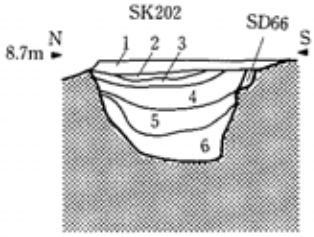


層	土色	土性	備考
1	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	
2	黄灰 2.5Y5/1	砂質シルト	
3	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	
4	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	SD57 基本層III層少量含む

SD77・57

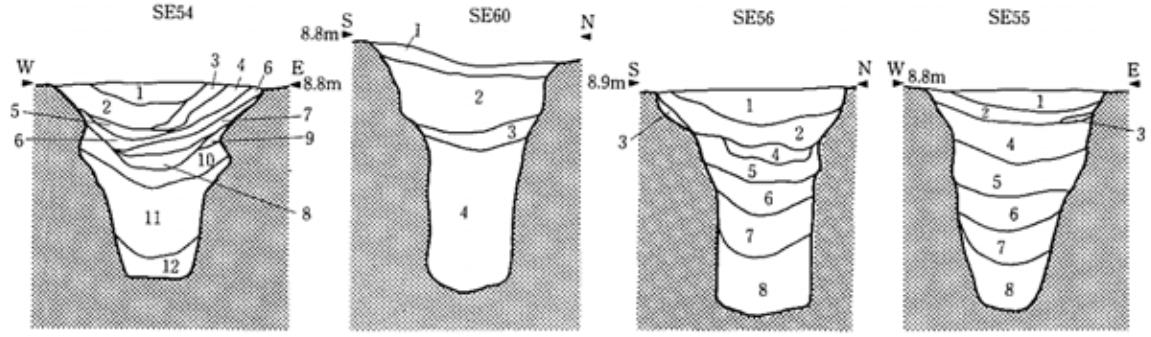
層	土色	土性	備考
1	褐灰 7.5YR4/1	砂質シルト	

SD75



層	土色	土性	備考
1	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	自然
2	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	〃
3	黒褐 2.5Y3/1	シルト	〃
4	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃
5	オリーブ黒 5Y3/1	砂質シルト	〃
6	灰 5Y4/1	砂質シルト	〃 グライ砂層含む

SK202



層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 10YR4/2	砂質シルト	人為
2	暗褐 10YR3/3	砂質シルト	〃 炭化物少量含む
3	黒褐 10YR2/2	砂質シルト	〃 炭化物少量含む
4	暗褐 10YR3/4	砂質シルト	〃
5	黒褐 10YR3/2	砂質シルト	〃 黒褐色土ブロック含む
6	黒褐 10YR2/3	砂質シルト	〃 炭化物含む
7	黒褐 10YR3/2	砂質シルト	〃 地山ブロック・炭化物含む
8	黒褐 10YR2/2	砂質シルト	〃
9	黒褐 10YR3/2	砂質シルト	〃
10	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	自然
11	黒褐 10YR3/2	シルト	〃 植物遺体含む
12	黒褐 10YR3/1	シルト	〃

SE54

層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/4	シルト	人為 炭化物含む
2	黄灰 2.5Y4/1	シルト	〃 地山ブロック・炭化物含む
3	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃
4	オリーブ黒 5Y3/2	粘質シルト	〃 植物遺体（ワラ？）含む

SE60

層	土色	土性	備考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	人為 地山小ブロック含む
2	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 炭化物含む
3	暗褐 10YR3/3	シルト	〃 地山ブロック少量含む
4	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 地山ブロック少量含む
5	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	〃 地山小ブロック含む
6	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	〃 地山ブロック少量含む
7	黒褐 10YR3/1	粘質シルト	〃 地山ブロック少量含む
8	黒 10YR2/1	粘質シルト	自然

SE56

層	土色	土性	備考
1	にぶい黄褐 10YR4/3	シルト	人為 炭化物・地山ブロック含む
2	灰黄褐 10YR4/2	シルト	〃 炭化物・地山ブロック含む
3	黒 N2/	炭化物層	〃 焼土含む
4	灰 5Y4/1	シルト	〃 炭化物少量含む
5	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	自然 水成堆積 砂層を縞状に含む
6	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	〃 水成堆積 砂層を縞状に含む
7	オリーブ黒 5Y3/1	粘土	〃 水成堆積 砂層を縞状に含む
8	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	〃

SE55

図59　2区の遺構セクション

遺構名	構造・特徴	間数	総長(m)	柱間	西より／北より(m)	切り合い	方向	備考
SB326	不整方形	桁行2間	(2.6)	北桁	1.2+1.4	SD57より新	—	
		梁行2間	(2.5)	西妻	2.5			

表8　2区掘立柱建物跡属性

遺構名		位置	検出長(m)	上端幅(m)	底面幅(m)	深さ	断面	方向	堆積土	備考
SD57		W125-54	77	0.6-0.9	0.2-0.5	0.04-0.2	U字形	西-北	自然堆積	SD50.77,SB326,SE55,78,SK62より古
SD72		W018-9	8	1前後	0.6前後	0.1前後	逆台形	東西	自然堆積	SD66より古
SD75		W051-15	36	0.5前後	0.1前後	0.13前後	U字	東西	自然堆積	北壁外に及ぶ SD76.206より古
SD76		W050-15	44.5	0.5-1.2	0.1-0.8	0.09-0.37	逆台形	北-南-北	自然堆積	SD75.206より新
SD77		W054	9	1前後	0.2-0.4	0.38-0.45	逆台形	南・北	自然堆積	D206より古 SD57より新

表9　2区溝跡属性表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	平面／断面形	堆積土	備　　考
SE54	W125	2.2	1.9	1.64	漏斗	自然堆積	上層埋め戻し、SD49 より新
SE55	W125	1.7	>1.3	1.84	円筒	下層自然堆積	上層埋め戻し、SD57 より新
SE56	W109	1.6	1.5	1.9	漏斗	埋め戻し	SD49 より新
SE60	W095	2.3	2.0	2.1	円筒	埋め戻し	
SE61	W093	1.7	1.4	1.55	漏斗	—	
SE78	W082	1.0	1.1	1.25	円筒	—	SD57 より新
SE79	W079	2.2	1.9	>1.5	円筒	—	
SE81	W076	2.6	2.5	>1.3	漏斗	—	
SE208	W112	1.4	1.1	1.7	円筒	—	SD49 より古
SE211	W085	1.5	1.3	1.55	円筒	—	
SE212	W084	1.6	1.3	1.32	漏斗	—	
SE216	W040	1.3	—	1.25			SD66 より新
SE218	W119	1.8	1.9	0.75	円筒	埋め戻し	
SE220	W115	1.5	1.4	1.5	円筒	—	SD49 より新
SE223	W055	1.0	>0.9				SD77 より古

表10　2 区井戸跡属性表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	平面／断面形	堆積土	備　　考
SK62	W090	3.8	2.1	0.89	逆台形／方形		SD49、57より新
SK200	W109	1.6	1.6	0.36	皿状／不整円		SD50 より新
SK202	W106	1.1	1	0.85	逆台形／不整円	自然堆積	SD201 より新
SK219	W057	4.4	>2.5	0.81	逆台形／方形		SD66 より新

表11　2 区土壙属性表

40㎝前後である。断面形は逆台形で埋土は自然堆積である（図 59）。遺物は出土していない。

ＳＤ75（図 58）

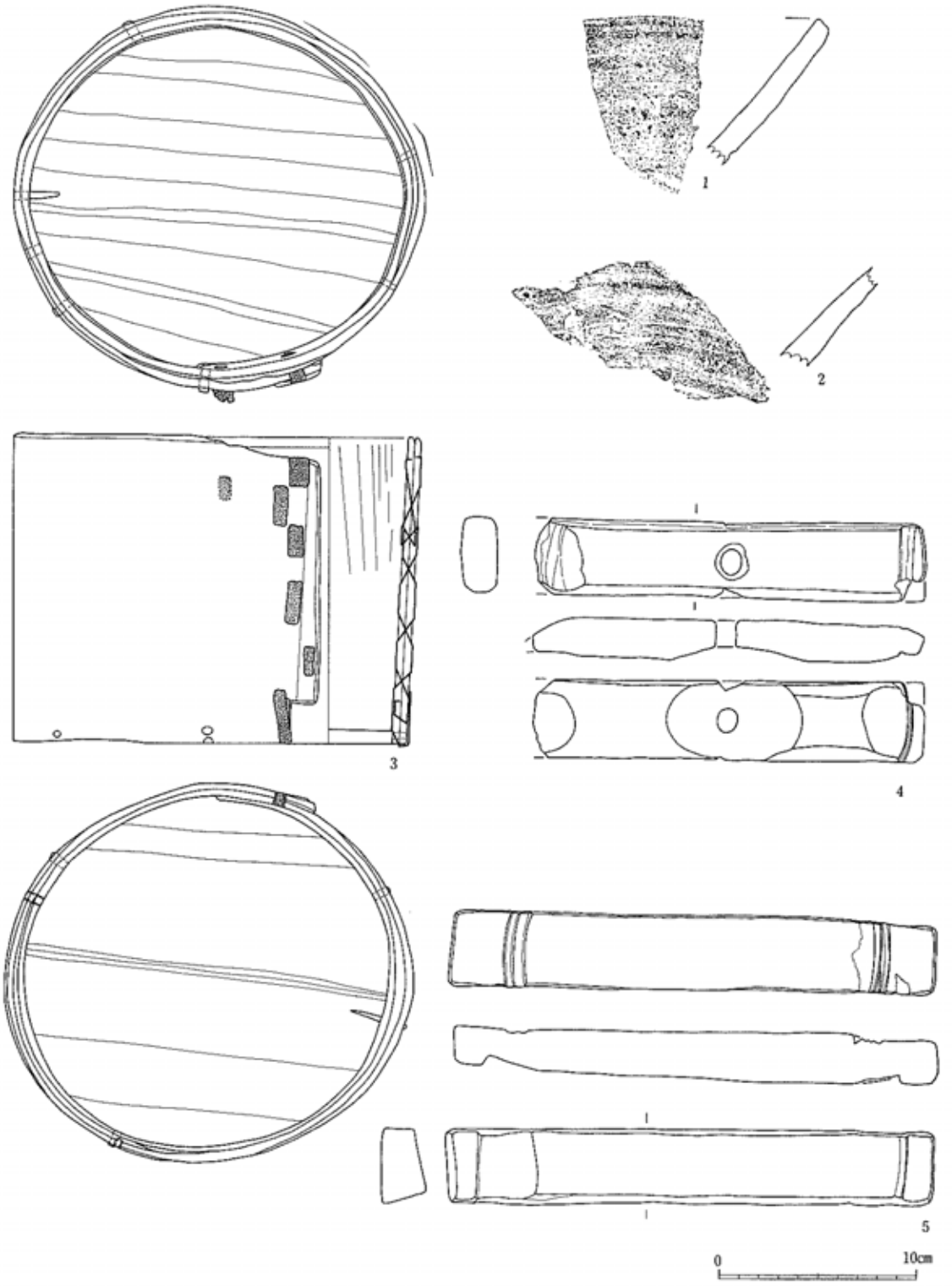
東側のW15～W51 にかけて検出された、ほぼ東西に延びる小規模な溝である。検出長は約 36mあり、確認面での上幅は約 50㎝、深さ 13㎝前後で、ＳＤ76･201Ｃより古い。遺物は出土していない。

・井戸跡（表 10）

15 基が検出された。2 区西北部のW109～125 に 5 基、西側のW74～95 に 7 基が集中している。前者の区域には掘立柱建物跡や土壙は全くない。ＳＥ55 はＳＤ57 より、ＳＥ54･56･220 はＳＤ49 より新しい。ＳＥ208 はＳＤ49 より古い。後者の区域には井戸跡以外の遺構がわずかにあるが、ＳＥ78 がＳＤ57 を切っている以外、井戸跡と重複する遺構はない。また井戸跡同士の重複もない。

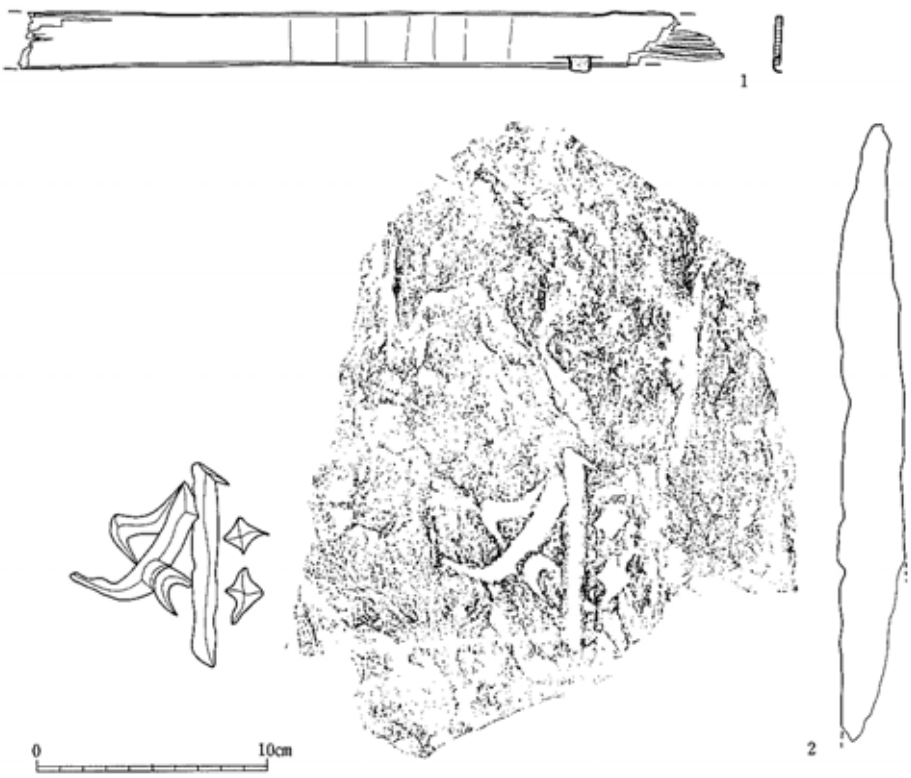
全てが素掘りで、規模・平面形・断面形・埋土の状況などの諸特徴は１区の井戸跡と類似している。深さは概して１区よりも深いが、これは底面のあるⅧ層（砂層）が低いレベルにあるためと見られる（図 59）。

出土遺物は以下の通りである。ＳＥ54 で漆椀(総黒色系漆塗りで赤色漆絵、取り上げ不能)･折敷桟？(図 63-2)、ＳＥ56 で折敷側板？、ＳＥ61 で箸･板状木製品、ＳＥ79 で東海･在地産の無釉陶器鉢、把手付き曲物手桶(図 60)、ＳＥ208 で木製把手？(図 63-3)･曲物側板？･板草履？、ＳＥ211 で在地産の無釉陶器甕(図 63-1)･曲物側板･桃の種実、ＳＥ216 で折敷側板･板碑片(種子「サク」)(図 61)、ＳＥ220 で龍泉窯系青磁碗・無釉陶器甕・手づくねかわらけ皿・漆椀・曲物底板・折敷底板・鉄小刀・転用砥である（図 62）。



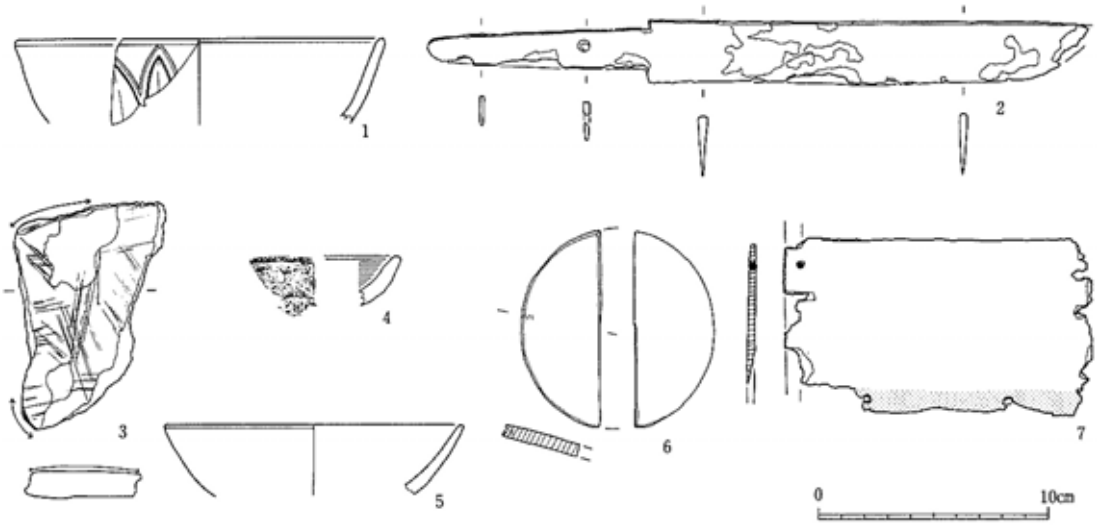
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1	38	陶器	鉢	在地		内面ナデ→自然釉、外面ナデ・取り上げ痕
2	50	陶器	鉢	東海		内外面ナデ
3	188	木製品	曲物手桶		木033	径20.5、器高15.5、側板厚0.8・スギ柾目、底板厚0.7・スギ柾目
						2列前上内下外4段・後内3段、木釘上段6本・下段4本、ケビキ
4	188	木製品	曲物手桶		把手上、木033	(19.7)×4.0×1.9、孔径1.3×1.1、下面中央部に抉り、イヌエンジュ
5	188	木製品	曲物手桶		把手下、木033	24.5×3.8×2.3、下面両端に鍵かけの抉り、イヌエンジュ

図60　2区 SE79 出土遺物



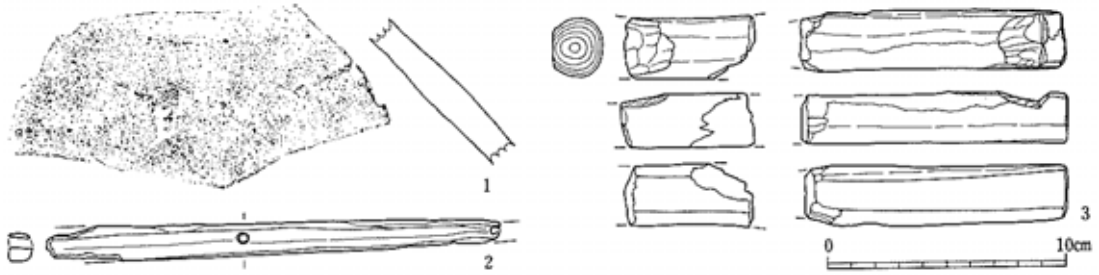
No.	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1		木製品	折敷	側板、木143	(30.7)×2.7×0.3、樺皮結合、綴皮1、ケビキ、ヒノキ柾目
2	312	石製品	板碑	粘板岩	種子「サク」、薬研彫り、頂部山形、割材の縁辺を剥離、厚3.0

図61　2区 SE216 出土遺物



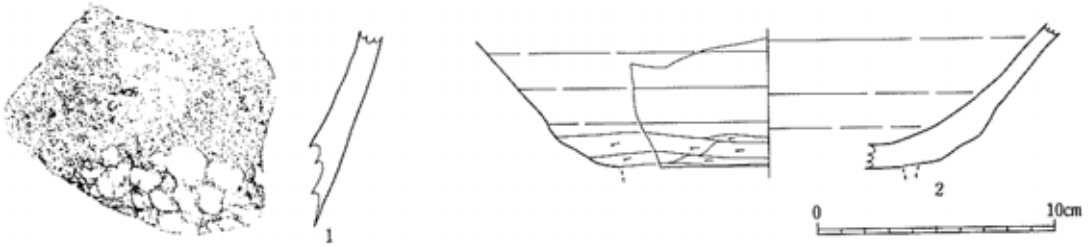
No.	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		青磁	碗	龍泉窯系	太宰府15b	鎬蓮弁文、口径14.2、水色がかった緑色
2	218	鉄製品	小刀			丸棟平造、両関、目釘穴1、全(28.7)、身(19.2)×2.7×0.4、茎9.5×1.7×0.4、
3		転用紙				常滑甕体部破片紫材、表面と二辺使用、9.9×6.4×1.2
4		かわらけ	皿		手づくね	内面ナデ、外面オサエ→ナデ
5		木製品	漆椀		木079	口径13.0、両面黒色漆、ケヤキ横木取り
6	191	木製品	曲物		底板、木007	径8.8、厚0.5、ヒノキ柾目、釘穴1、墨書
7		木製品	折敷		底板、木081	釘結合・釘穴3・木釘1、枧の痕跡、厚0.3、柾目

図62　2区 SE220 出土遺物



No	写真	遺構	種別	器種	分類ほか	備考
1	96	SE211	陶器	甕	甕14か？	在地、内面ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ
2		SE54	木製品	折敷？	桟？、木147	孔2、(19.1)×1.5×1.0、断面D字形
3		SE208	木製品	把手？	木064	(11.1)×2.5×2、(5.4)×2.5×2.3、端部片面に抉り、芯持ち丸木

図63　2区 SE54・208・211 出土遺物

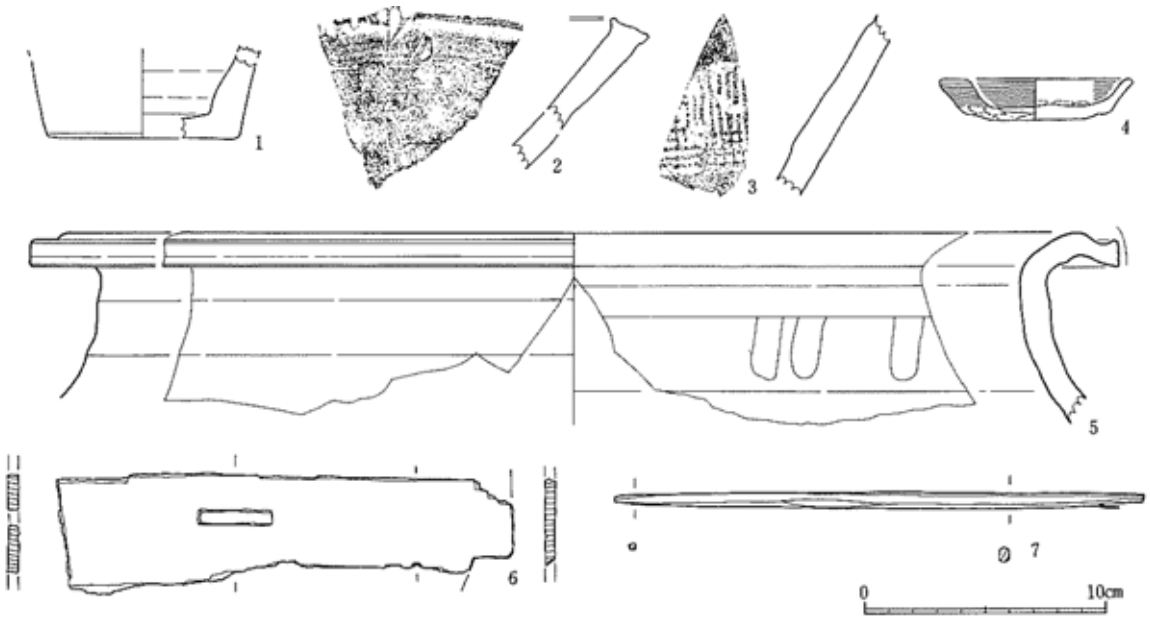


No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1	74	陶器	壺	常滑		内面横ヘラナデ、外面縦ヘラナデ→自然釉、被熱
2	22	陶器	鉢	東海	鉢3	(底径13.6)、内面ナデ、外面ナデ→ケズリ、高台剥落、SD201に同一個体

図64　2区 SK62 出土遺物

No	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1	57	SK219	陶器	鉢	在地	鉢28	底径13.0、内面ナデ、外面ナデ・取り上げ痕、外底モミ圧痕
2	154	SK219	瓦質土器	鉢	在地	瓦質鉢1	内面ナデ→筋目8本以上1セット
3	192	SK219	木製品	曲物		底板、木109	径8.8、厚1.1、アスナロ柾目、ケズリ痕
4		SK200	陶器	鉢	東海	鉢20	口唇に小平坦面、内外面ナデ

図65　2区 SK219・220 出土遺物



No.	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1		遺構外	陶器	瓶子	瀬戸	古瀬戸中期	底径8、外面～外底灰釉施釉・一部剥落
2	30	不明	陶器	鉢	東海？		内面ナデ、外面オサエ→ナデ、ヘラの当たり痕
3	124	表土	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面縦ヘラナデ→押印
4	150	表採	かわらけ	小皿		手づくね	口径8、器高1.7、内面オサエ→ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
5		遺構外	陶器	甕	東海		口径45、内面オサエ→ナデ、外面ナデ
6		不明	木製品	曲物		側板、木099	樺皮綴じ、把手の取り付け孔？（3.1×0.6）あり、柾目
7	184	不明	木製品	箸		木025	両方削り、21.9×0.7×0.4、スギ

図66　2区遺構外ほか出土遺物

・土壙（表11）

ＳＫ62とＳＫ219は、共に長辺が4m前後で短辺が2mを越える大形・隅丸長方形の土壙である(図56・57)。底面はほぼ平坦で深さは約80cmある。埋土はいずれも自然堆積である。ＳＫ62はＳＤ49・57より、ＳＫ219はＳＤ66より新しい。出土遺物は、ＳＫ62で常滑産の陶器壷・東海産の陶器鉢が（図64）、ＳＫ219で渥美産の陶器甕・東海産の陶器鉢・瓦質土器鉢(ＳＤ66出土資料と接合)・曲物底板・イヌ尺骨が(図65-1～3)、ＳＫ200で東海産陶器鉢(図65-4)・ウマ上顎歯が出土している。

<3区の遺構>（E6-E167）

通路跡2条、掘立柱建物跡15棟、柱穴列5条、溝跡12条(前述の東西溝以外)、井戸跡19基、銭備蓄遺構1基、土壙10基が検出された。西側では溝跡以外の遺構はわずかで、建物跡・井戸跡は中央部から東側に多く、特に東端部（E125以東）に濃密に分布する。

・道路跡

ＳＸ236（図68）

E67～73に位置する南北道路跡である。東西側溝は直線的に延びている。検出長は約15mで、道路幅は東西側溝の心心間で約6mある。両側溝ともに確認面での上幅が80～90cm、下幅が40～50cmで、深さは15cm程であるが、深めの場所が所々にあり一定しない。ＳＤ213よりも新しが、ＳＤ66との新旧は確定できない。遺物は、東側溝から常滑産の無釉陶器甕破片が1点出土している。

ＳＸ262（図70）

E131～E160 にかけて検出された。東西方向にやや弧状に延びる道路跡で、東側は北壁外に及び西側は途切れている。検出長は約 29mある。北側溝で 1 ケ所・南側溝で 2 ケ所、側溝が途切れる箇所があるが、確認面からの深さが 10㎝ 程度とごく浅く残存状況が悪いため、本来的に途切れていたかどうかは確定できない。道路幅は、側溝の心心間で 2.5～4.5mある。側溝と重複する柱穴は全て側溝より新しい。ＳD260・263・286 も側溝を切っている。遺物は出土していない。なお南側溝の西側延長には、やや食い違いを見せるものの側溝と特徴が良く類似したＳD261 がある。これは、ＳX262 道路跡がさらに西側に延びていた可能性を示している。

・掘立柱建物跡（表 12）

確認できた掘立柱建物跡 15 棟は全て側柱建物跡である。この他にも、調査区南壁付近に多くの柱穴が存在するが、これらは 3 次調査以降に南側を調査した後に再検討することにする。

ＳB327（図 68）

西側のE60～65・N7～4 に位置する。桁行 2 間(4.2m)・梁行 1 間(1.6m)の小規模な東西棟である。方向は東である。桁の柱列はＳD66 とほぼ平行する。

ＳB332（図 70）

E127～135・S8 以南に位置する。桁行 2 間・梁行 1 間の南北棟と見られる。方向は東側柱列で見て北で西に約 15°振れる。総長は桁行が 7.3m・梁行は 5.4mある。掘り方は直径 30㎝ 程度の円形で、柱痕跡は 10㎝ 強の円形である(掘り方・柱痕跡の大きさは、以下の建物もほぼ同様である)。ＳD261 より新しい。

ＳB333（図 70）

E129～138・S7 以南に位置する。桁行 2 間・梁行 2 間の東西棟で、東妻は 1 間である。方向は北側柱列で見て東で北に約 15°振れる。桁行総長は 7.6m・梁行総長は 6.3mある。

ＳB334（図 70）

E124～134・S10 以南に位置する。桁行 3 間以上・梁行 1 間以上と見られる東西棟で、東に廂が付く。方向は東で北に約 10°振れる。桁行総長が 8m以上になる大形の建物である。廂の出は 0.9mある。ＳD261 より新しい。柱穴から皇宋通宝が 1 点出土している（図 82-11）。

ＳB335（図 70）

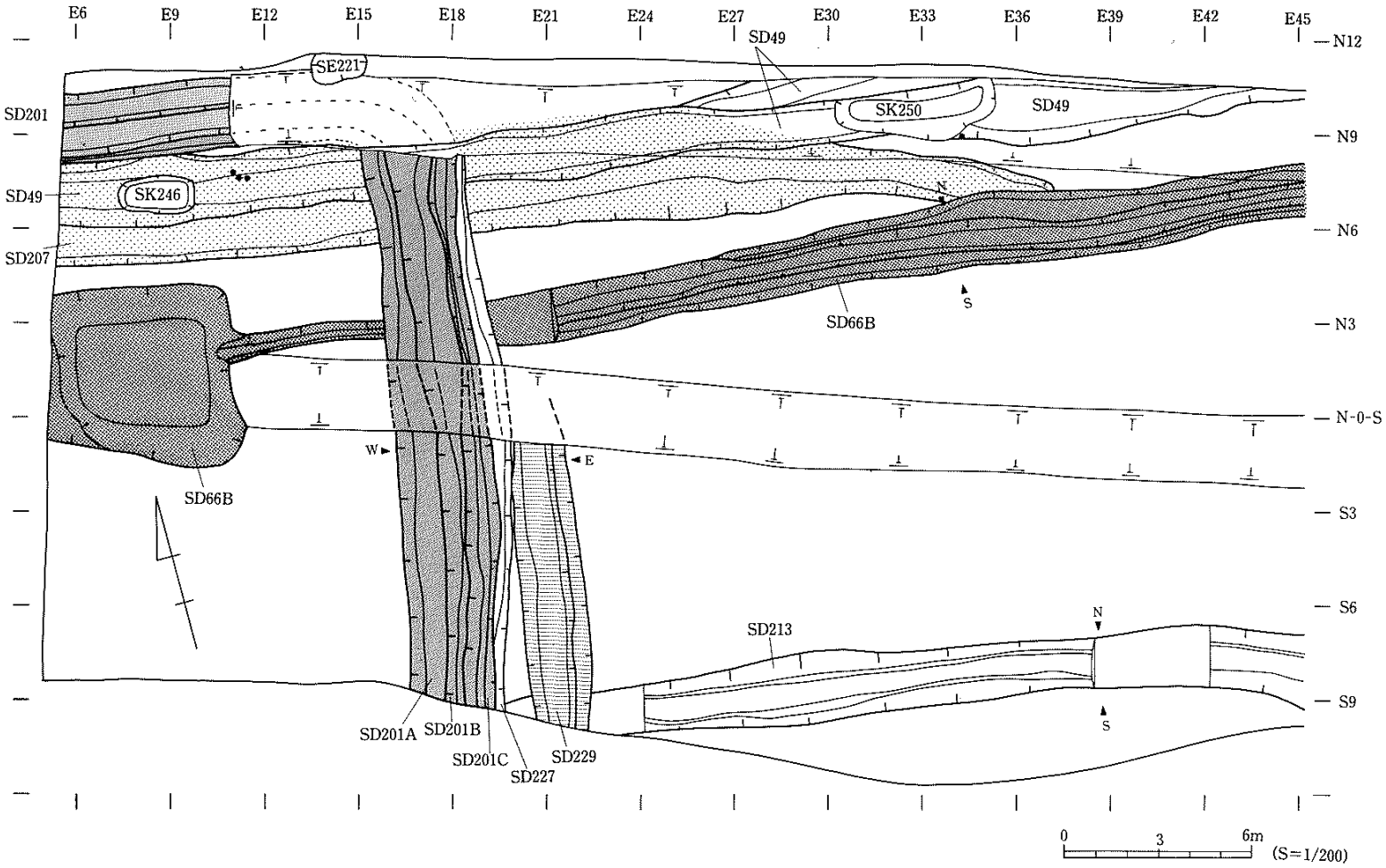
E137～144・S11 以南に位置する。桁行 2 間以上・梁行 3 間の南北棟と見られる。東に廂が付く。方向は東側柱列で見て北で約 9°西に振れる。梁行総長は北傾柱列で 4.8m、廂の出は 0.8mである。

ＳB336（図 70）

E141～146・S3～9 に位置する。桁行 2 間・梁行 1 間の南北棟で、方向は北で 6°東に振れる。総長は桁行が 4.6m・梁行が 4.3mで小形の建物跡であるが、柱穴の掘り方は長径 50～60㎝ のものが多く比較的大形である。ＳX262 道路跡より新しい。

ＳB337（図 70）

E141～145・S12 以南に位置する。桁行 2 間以上・梁行 2 間の南北棟と見られる。北妻から 2 列目に間仕切りを持つ可能性がある。方向は東側柱列で見て北で東に 7°振れる。梁行総長は 4.1mある。



(注) ●は打込杭を示す。

図67　3区中世の遺構 (1)

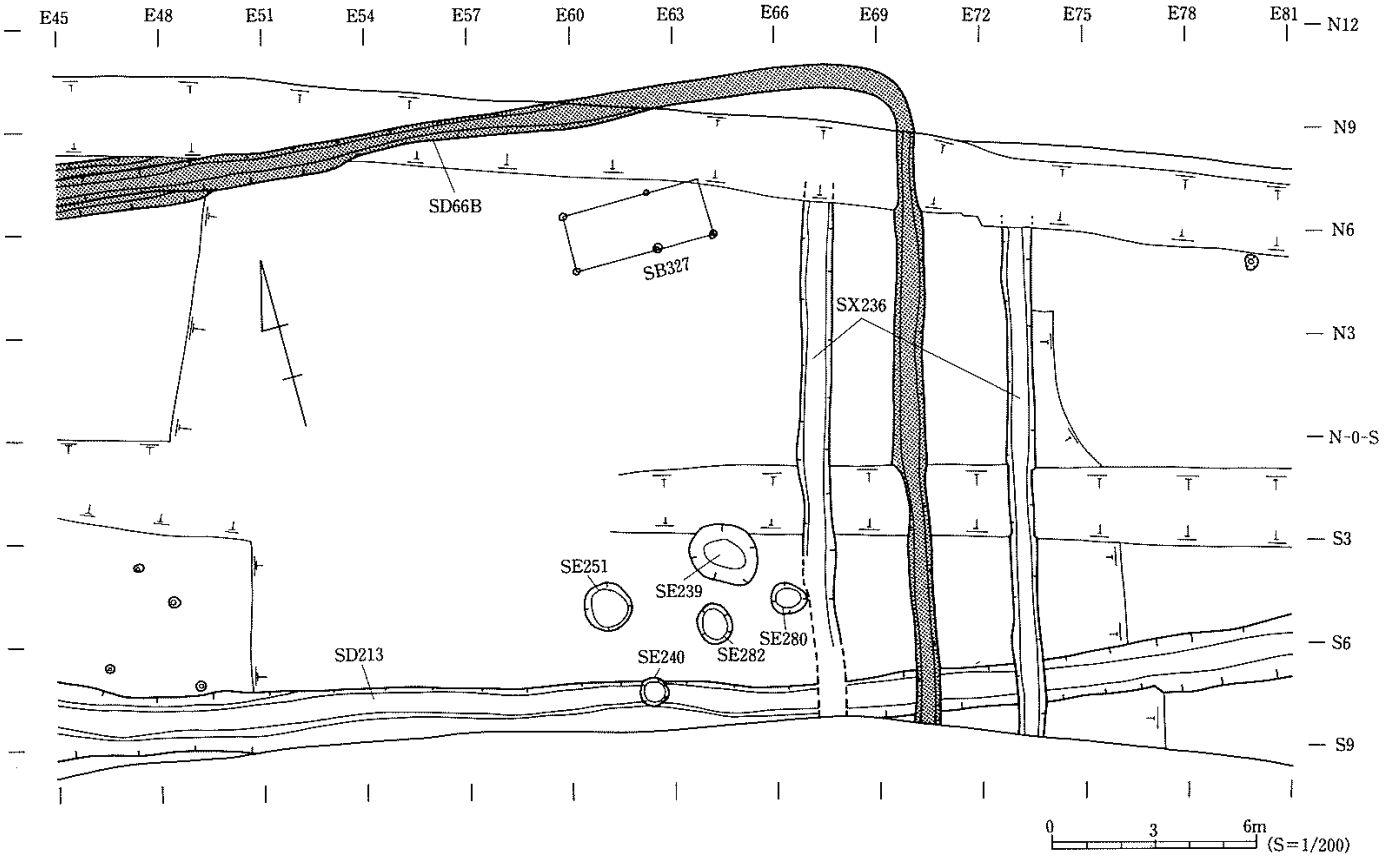


図68　3区中世の遺構 (2)

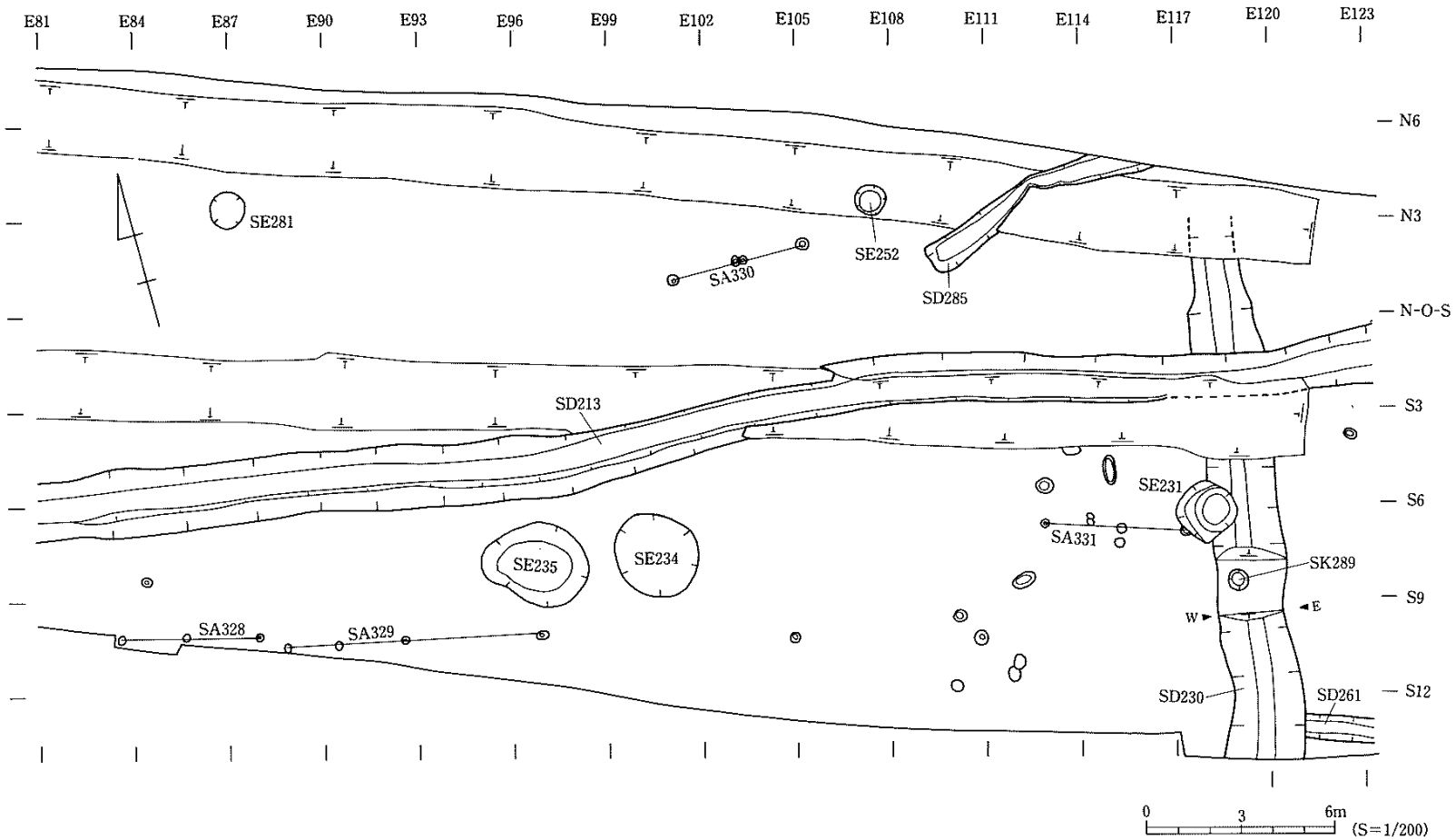


図69　3区中世の遺構 (3)

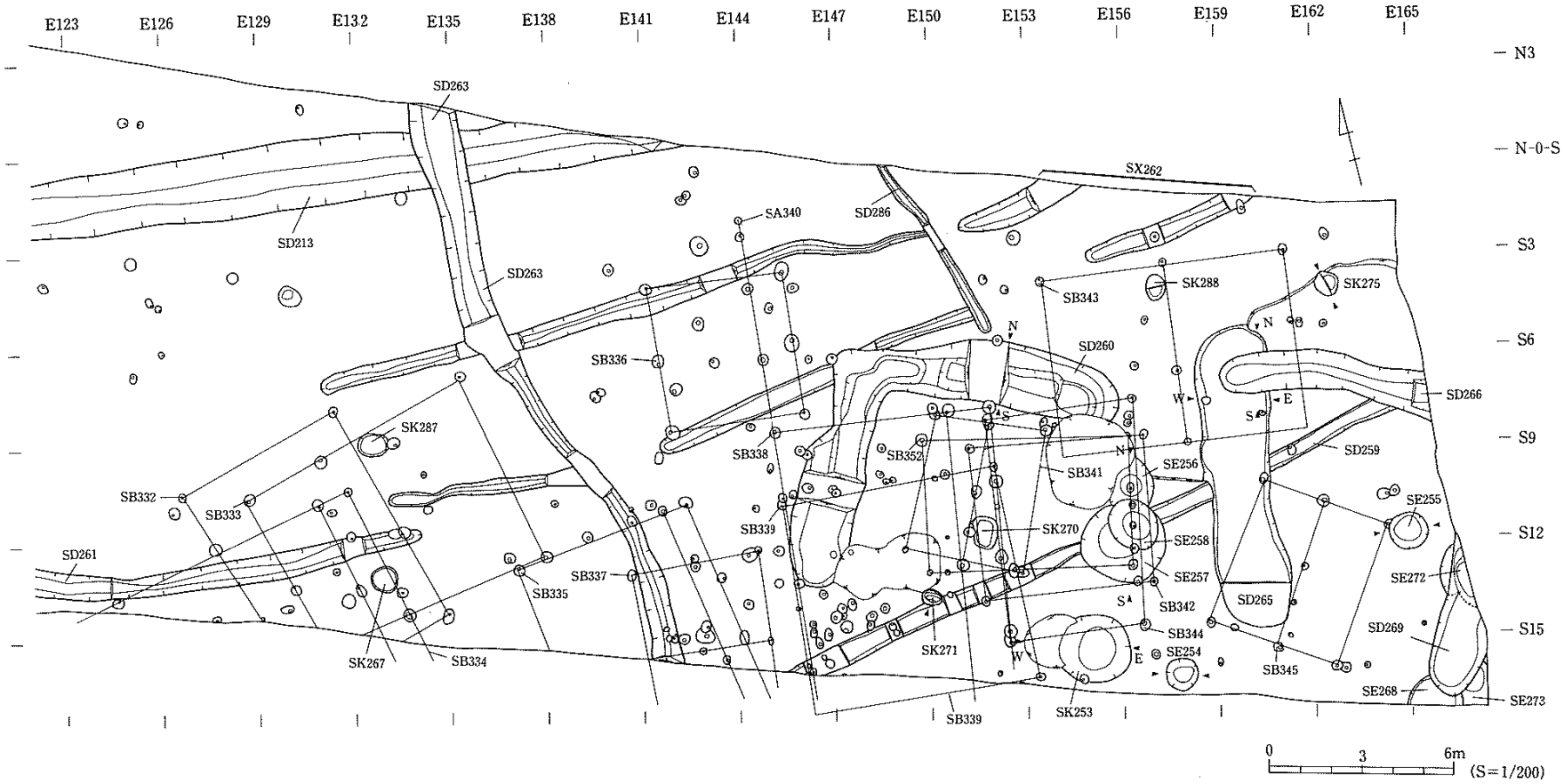
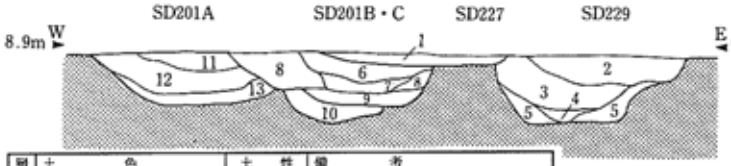
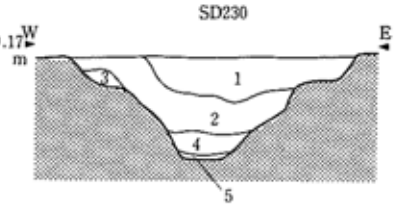


図70　3区中世の遺構 (4)



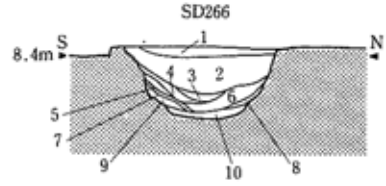
層	土　　色	土　性	備　　考
1	褐　10YR4/4	砂	SD227
2	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	SD229 新
3	褐灰 10YR4/1	砂質シルト	SD229 古
4	黄灰 2.5Y4/1	砂質シルト	〃　均質
5	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 基本層Ⅴ層に川層が混じる
6	黄灰 2.5Y4/1	砂	SD201C
7	黄灰 2.5Y4/1	砂	〃　黒色シルト含む
8	黄灰 2.5Y4/1	砂	〃
9	黒褐 2.5Y3/2	砂質シルト	〃　黒褐色シルト含む
10	黒褐 2.5Y3/1	砂質シルト	SD201B 下層に地山ブロック
11	黄灰 2.5Y4/1	砂	SD201A 褐色砂少量含む
12	黄灰 2.5Y5/1	砂質シルト	〃
13	黒褐 10YR3/1	砂質シルト	〃

SD201・227・SD229



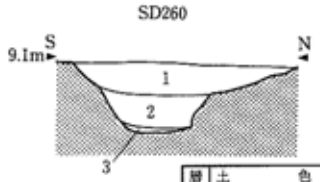
層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗灰黄 2.5Y4/2	砂質シルト	
2	暗灰黄 2.5Y5/2	砂質シルト	地山ブロック含む
3	黄褐 2.5Y5/4	砂質シルト	地山崩壊土
4	黄灰 2.5Y5/1	シルト	
5	暗灰黄 2.5Y4/2	砂	地山崩壊土

SD230



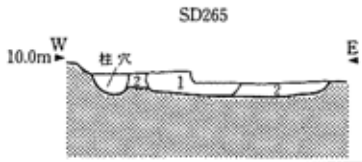
層	土　　色	土　性	備　　考
1	オリーブ黒 5Y3/2	シルト	
2	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	炭化物含む
3	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	
4	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	炭化物含む
5	灰オリーブ黒 7.5Y4/2	シルト	
6	灰オリーブ 5Y4/2	シルト	
7	オリーブ黒 5Y3/1	シルト	
8	オリーブ褐 2.5Y4/4	シルト	
9	オリーブ褐 2.5Y4/4	シルト	
10	オリーブ黒 5Y3/2	シルト	

SD266



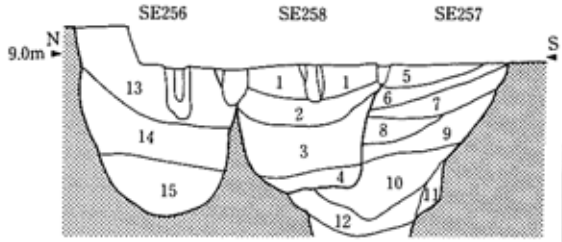
層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	炭化物少量含む
2	黒褐　2.5Y3/2	シルト	人為堆積　基本層Ⅴ層含む
3	オリーブ褐　2.5Y4/4	シルト	

SD260



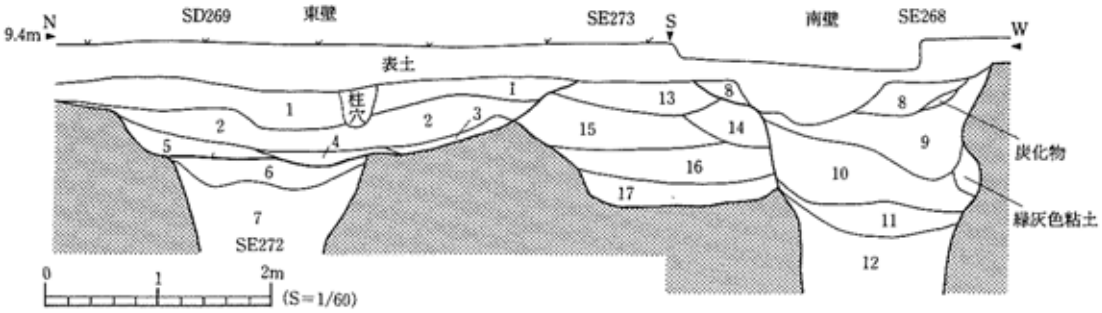
層	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐 2.5Y3/2	シルト	人為
2	暗オリーブ褐 2.5Y3/3	シルト	(SD265 堆積土)

SD265



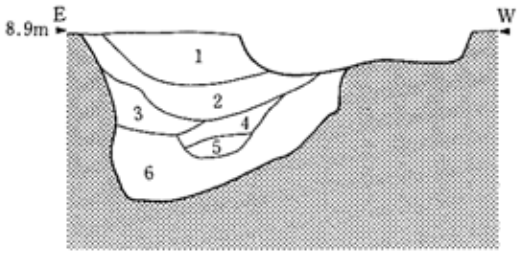
層	土　　色	土　性	備　　考
1	暗褐 10YR3/3	シルト	SE258 人為 炭化物含む
2	黒褐 10YR3/2	シルト	〃　〃 炭化物・・層含む
3	黒褐 10YR3/1	シルト	〃　〃 地山ブロック含む
4	黒褐 2.5Y3/1	シルト	〃　〃 地山ブロック含む
5	暗灰黄 2.5Y4/2	シルト	SE257 自然
6	オリーブ褐 2.5Y4/3	シルト	〃　〃
7	オリーブ褐 2.5Y4/4	シルト	〃　人為
8	暗灰黄 2.5Y5/2	シルト	〃　〃 黒褐シルトブロック含む
9	黒褐 10YR2/2	シルト	〃　自然
10	黒褐 2.5Y3/1	シルト	〃　〃
11	オリーブ灰 2.5GY5/1	粘質シルト	〃　〃
12	灰　10Y4/1	シルト	〃　〃
13	黒褐 10YR3/2	シルト	SE256 自然
14	暗褐 10YR3/3	シルト	〃　人為　炭化物・・層含む
15	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃　〃　地山ブロック含む

SE256・SE257・SE258



層	土　　色	土　性	備　　考	層	土　　色	土　性	備　　考
1	灰　5Y5/1	粘質シルト	SD269	9	黄灰 2.5Y5/1	粘質シルト	SE268 人為 炭化物ブロック（ワラか）
2	灰　5Y4/1	粘質シルト	〃明黄褐粘土ブロック含む	10	灰　10Y4/1	粘土	〃　〃 明黄褐粘土ブロック多量
3	灰　5Y4/1	粘質シルト	〃明黄褐粘土ブロック含む	11	灰　10Y4/1	粘土	〃　〃 植物遺体（ワラか）多量
4	オリーブ黒5Y3/1	シルト質粘土	〃	12	緑灰 10GY6/1	粘土	〃　〃 オリーブ黒粘土ブロック多量
5	明黄褐2.5Y7/6	シルト質粘土	〃崩落土	13	灰　5Y5/1	粘質シルト	SE273 自然 明褐色粘土ブロック
6	オリーブ黒7.5Y3/1	シルト質粘土	SE272 人為 灰白色粘土含む	14	明黄褐 2.5Y7/6	シルト質粘土	〃人為 灰色シルト粘土ブロック
7	緑灰 10GY6/1	粘土	〃　〃 オリーブ黒粘土ブロック多量	15	灰　5Y5/1	粘質シルト	〃自然　均質
8	黄灰 2.5Y5/1	粘質シルト	SE268 人為	16	灰5Y4/1～オリーブ黒5Y3/1	粘土	〃明黄褐・緑灰粘土ブロック
				17	緑灰 10GY6/1	粘土	〃自然 オリーブ黒粘土を縞状に挟む

図71　3区の遺構セクション



層	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐 10YR3/2	シルト	人為 炭化物含む
2	暗褐 10YR3/3	シルト	〃
3	黒褐 10YR3/1	シルト	〃 地山ブロック含む
4	黒褐 10YR3/1	シルト	〃
5	黒褐 2.5Y3/1	粘質シルト	〃 地山ブロック含む
6	暗オリーブ灰 2.5GY4/1	粘質シルト	〃 地山ブロック含む

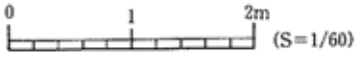


図72　3区 SK253 セクション

遺構名	構造・特徴	間　数	総 長(m)	柱 間	西より／北より(m)	切り合い	方向	備　考
SB327	東西棟	桁行2間 梁行1間	(4.2) (1.6)	南桁 西妻	2.5+1.7 1.6		E-0-N	
SB332	南北棟	桁行2間 梁行1間	(7.3) (5.4)	東桁 北妻	(4.4)+(2.9) (5.4)	SD261より新	N-15-W	南壁外に及ぶ
SB333	東西棟？	桁行2間 梁行2間	(7.6) (6.3)	北桁 東妻	2.6+5.0 6.3（2間分）		E-15-N	南壁外に及ぶ
SB334	東西棟？	桁行＞2間 梁行＞1間	(＞8.0) (＞3.5)	北桁 東妻	(　)+3.5+4.5 3.5+(　)	SD261より新	E-10-N	南壁外に及ぶ
SB335	南北棟？ 東廂	桁行≧2間 梁行3間	(＞4.5) (4.8)	東桁 北妻	2.6+1.9+(　) 2.3+2.5		N-9-W	南壁外に及ぶ 廂の出0.8m
SB336	南北棟	桁行2間 梁行1間	(4.6) (4.3)	西桁 北妻	2.4+2.2 4.3	SX262より新	N-6-E	
SB337	南北棟？	桁行≧2間 梁行2間	(＞2.8) (4.1)	東桁 北妻	2.8+(　) 2.0+2.1		N-7-E	南壁外に及ぶ
SB338	南北棟	桁行≧3間 梁行2間	(＞7.0) (6.8)	東桁 北妻	2.3+2.4+2.3 5.4+1.4	SD259、260より新 SB341、339より新	N-6-E	SA338が西桁に取付く
SB339	東西棟？	桁行4間 梁行2間	(6.8) (6.8)	北桁 東妻	1.6+1.7+1.6+1.9 3.4+3.4	SB338より古 SD260、SB341より新	E-5-S	
SB341	南北棟 床束？	桁行1間 梁行2間	(4.5) (3.8)	東桁 南妻	4.5 1.9+1.9	SB338、339、344より古 SD259より新	N-25-E	
SB342	東西棟	桁行1間 梁行2間	(5.5) (4.8)	北桁 西妻	5.5 2.6+2.2	SK270より新 SD259、SE258より新	E-9-S	
SB343	東西棟 間仕切り	桁行2間 梁行2間	(7.8) (5.5)	北桁 東妻	3.9+3.9 2.2+(　)		E-9-S	
SB344	南北棟	桁行3間 梁行1間	(7.0) (4.6)	東桁 北妻	2.8+1.9+2.3 4.6	SB338より古 SB341、SE256、258より新	N-12-E	
SB345	南北棟 床束？	桁行1間 梁行2間	(4.8) (4.2)	東桁 北妻	4.8 2.0+2.1	SE255より古 SD265より新	N-35-E	
SB352	東西棟	桁行1間 梁行2間	(6.4) (4.1)	北桁 東妻	6.4 2.2+1.9	SE257、258より新	E-13-S	

表12　3区掘立柱建物跡属性

遺構名	構造・特徴	間　数	総 長(m)	柱 間	西より／北より(m)	切り合い	方向	備　考
SA328	東西	2間	(4.4)		2+2.4		E-14-S	南壁外に及ぶ建物跡？
SA329	東西	3間	(8.0)		1.5+2.1+4.4		E-12-S	南壁外に及ぶ建物跡？
SA330	東西	2間	(4.3)		2.1+2.2		E-0-N	
SA331	東西	2間	(5.5)		(2.4)+(3.1)	SE231より古	E-18-S	
SA340	南北	3間	(6.7)		2.1+2.3+2.3		N-6-E	SB338西桁に取り付く

表13　3区柱穴列属性

遺構名		位置	検出長(m)	上端幅(m)	底面幅(m)	深さ	断面	方向	堆積土	備　　考
SD227		E009	18	1-1.7	0.6-1.2	0.1前後	逆台形	南北	自然堆積	SD201,229より新
SD229		E009	9	1.6-2	0.65-0.9	0.65前後	逆台形,U字	南・北	自然堆積	北には延びず南壁外に及ぶ、SD227より古
SD230		E117	18.5	1.5-2.5	0.5前後	0.51-0.82	逆台形	南・北	自然堆積	SD213,SE231より古　SD261より新
SD259		E145-165	20.2	0.5-0.7	0.3-0.5	0.02-0.23	逆台形	北西・南東	自然堆積	SB340～342.SD265.266,SE257,SK271より古
SD260		E145-156	14.5	1.3-2.0	0.5-1.0	0.31-0.6	逆台形	東-南	自然堆積	下層は埋め戻し SB337～339より古
SD261		E121-134	12.3	0.4-0.8	0.2-0.5	0.08-0.11	U字	東西	自然堆積	SB332.336,SD230より古
SD263		E135-141	18.5	0.8-1.2	0.1-0.8	0.13-0.26	U字	南・北	自然堆積	SD213.261.262より新
SD265		E160	9.2	2.1-2.4	1.8-2	0.1-0.15	U字	南・北	人為堆積	SB345,SD266より古　SD259より新
SD266		E159-166	6.3	1-1.4	0.3-0.6	0.51-0.69	U字	東西	自然堆積	SD259.265より新、SD269と同一か
SD269		E166	3.1	＞1.4	0.9前後	0.54-0.6	U字	南北	自然堆積	SE268.272.273より新
SD285		E108-117	6.5	0.5-1.0	0.1-0.6	0.53-0.63	U字	東西	自然堆積	北壁外に及ぶ
SD286		E149-152	6.3	0.14-0.4	0.12前後	0.04-0.09	U字	南北	自然堆積	北壁外に及ぶ　SD261.262より新

表14　3区溝跡属性表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	平面／断面形	堆積土	備　　考
SE221	E014	1.8	>1.0	1.55			
SE231	E118	2.0	1.8		漏斗		SD230 より新
SE234	E100	2.6	2.8	2.71			
SE235	E090	3.4	2.5	2.88			
SE239	E064	2.2	1.8	1.78			
SE240	E062	0.9	0.8	0.86			SD213 より新
SE251	E061	1.5	—	1.09			
SE252	E107	1.0	—	1.94			
SE254	E158	1.0	0.9	1.0	円筒	埋め戻し	
SE255	E165	1.2	1.1	2.0	円筒	埋め戻し	SB345 より新
SE256	E156	1.5	>1.2	1.64	円筒	埋め戻し	SB344、SB352、SE258 より古
SE257	E156	2.6	2.5	>1.6	漏斗	下層自然堆積	上層埋め戻し、SB342・344・352、SE258 より古
SE258	E156	1.6	—	1.4	円筒	埋め戻し	SB342・344・352、SE257 より古、SD259 より新
SE268	E165	2.2	>0.9	>2.0	漏斗	埋め戻し	SE273 より新、SD269 より古
SE272	E166	1.7	>0.9	>0.7	円筒	埋め戻し	SD269 より古
SE273	E166	1.5	>1	1.10	円筒	埋め戻し	SD269、SE268 より古
SE280	E066	1.1	0.9	1.27			
SE281	E087	1.2	1.1	>1.04			
SE282	E064	1.2	1.0	1.15			

表15　3 区井戸跡属性表

遺構名	位置	長軸	短軸	深さ	平面／断面形	堆積土	備　　考
SK246	E007	2.5	1.2		逆台形／方形	埋め戻し	SD49 より新　烏帽子ほか
SK250	E030	5.0	1.6		逆台形／方形		SD49 より新
SK253	E155	>2.2	2.1	1.4		埋め戻し	炭化物廃棄
SK267	E133	0.9	0.8				
SK270	E151	1.0	0.8		皿状／方形	埋め戻し	銭貨76枚、SB342 より古
SK271	E150	0.62	0.47	0.082	皿状／不整楕円	埋め戻し	SD259 より新　銭箱埋設
SK275	E162	0.8	0.7	0.35		埋め戻し	
SK287	E132	1.0	0.7	0.12			
SK288	E157	0.8	0.6	0.23			
SK289	E119	0.7	0.6				SD230 より新

表16　3 区土壙属性表

ＳＢ338（図 70）

E145～152・Ｓ8 以南に位置する。桁行 3 間以上・梁行 2 間の南北棟である。東に廂が付く。西側柱列の北への延長には 3 間の柱穴列ＳＡ340 が取り付く。方向は北で 6°東に振れる。建物総長は、梁行が 6.8m・桁行が 7.0m以上と比較的大形で、掘り方も大形である。廂の出は 1.2mである。ＳＤ259・260、ＳＢ339・341 より新しい。柱穴から銭貨（治平元宝）が 1 枚出土している（図 82-10）。

ＳＢ339（図 70）

E145～153・Ｓ10 以南に位置する。桁行 4 間・梁行 2 間の東西棟になると見られる。方向は東で南に約 5°振れる。総長は桁行・梁行ともに 6.8mで、平面形は方形をなす。ＳＢ338 より古く、ＳＢ341・ＳＤ260 より新しい。

ＳＢ341・345（図 70）

E149～164 に位置する。いずれも桁行 1 間・梁行 2 間の南北棟で、棟通り下の中央に床束かと見られる柱穴がある。方向は北でそれぞれ 25°・35°と東に大きく振れている。建物総長は、ＳＢ341 が桁行 4.5m・梁行 3.8m、ＳＢ345 が桁行 4.8m・梁行 4.2mと、ほぼ同規模で小形である。ＳＢ341 はＳＤ259 より新しく、ＳＢ338・339・344 よりも古い。ＳＢ345 はＳＤ265 より新しく、ＳＥ255 より古い。

ＳＢ342（図70）

E151～157・S9～14に位置する。桁行１間・梁行２間の東西棟である。方向は東で南に９°振れる。桁行総長は5.5m・梁行総長は4.8mである。ＳD259・ＳE258・ＳK270より新しい。

ＳＢ343（図70）

E153～162・S3～9に位置する。桁行２間・梁行２間の東西棟で、中央やや南寄りに間仕切りの柱穴がある。方向は東で南に約９°振れている。桁行総長は7.8m・梁行総長は5.5mある。

ＳＢ344（図70）

E152～157・S8～15に位置する。桁行３間・梁行１間の南北棟である。方向は北で東に約12°振れる。総長は桁行が7.0m・梁行が4.6mある。ＳB338より古く、ＳB341・ＳE256・ＳE258より新しい。

ＳＢ352（図70）

E151～156・S9～13に位置する。桁行１間・梁行２間の東西棟であるが、西妻は１間である。方向は東で約13°南に振れる。総長は桁行が6.4m・梁行が4.1mである。ＳE257・258より新しい。

・柱穴列（表13）

E118付近にあるＳD230南北溝の西側に、柱穴列が４条検出された(ＳA328～331、図69)。この内、ＳA328・329はほぼ同方向で、調査区外南側に展開する建物の一部である可能性が高い。

ＳA340（図70）

E144～145・S2～9に位置する。ＳB338の西桁から北に延びる３間の柱穴列で、建物に取り付いていたと考えられる。方向はＳB338と同じく、北で東に約６°振れる。総長は6.7mである。

・溝　跡（表14）

ＳD230（図69）

E118付近に位置する南北溝である。確認面での上幅が1.5～2.5m・下幅が50㎝前後・深さは50～80㎝で、断面形は逆台形を呈する。埋土は自然堆積である。ＳD213・ＳE231・ＳK289よりも古く、ＳD261より新しい。遺物は出土していない。

ＳD259（図70）

E145～165に直線的に延びる東西溝である。検出長は約20mある。確認面での上幅が50～70㎝、下幅が30～50㎝で、深さは20㎝以下と浅い。断面形は逆台形を呈し、埋土は自然堆積である。ＳD265・266、ＳE257・258、ＳB338・339・341・342と重複し、全てより古い。遺物には軽石製の砥石がある。

ＳD260・266・269（図70）

ＳD260は、E146～156に位置する北東方向から南西方向にＬ字形に曲がる溝である。確認面での上幅が1.3～2.0mで、深さは30～60㎝で一定しない。埋土上層は自然堆積であるが、下層は埋め戻されている。

ＳD260の東側にあるＳD266は南西方向の溝で、ＳD269は北東方向の溝である。それぞれＳD260の北辺・西辺と平行し、規模・形状・埋土の状況も一致する。両者を繋ぐとＳD260と対称形となる。ＳD266はＳD259・265よりも新しく、ＳD269はＳE268・272・273よりも新しい。ＳD260とＳD269間の距離は心心で約20mとなる。遺物は、ＳD260で手づくねかわらけ小皿(図73-2)・多賀城創建期の軒丸瓦(図

73-5)・鉄鏃あるいは釘が、ＳＤ266 で青磁椀(蓬弁文図 73-1)が、ＳＤ269 で無釉陶器鉢・常滑産の甕(図 73-4)・砂岩製の砥石が出土している。

ＳＤ263・286（図 70）

ＳＤ263 はＥ134～142 に、ＳＤ286 はＥ148～152 に位置する。いずれも南北方向に延び直線的ではない。ＳＤ263 はＳＸ262・ＳＤ213・建物跡に復原できなかった柱穴より、ＳＤ286 はＳＸ262 よりも新しい。

・井戸跡（表 15）

Ｅ60～66 付近・Ｅ154～159・Ｅ164～167 の 3 ヶ所に集中的に分布し、ＳＤ230 の西側にも散在する(図 68～70)。Ｅ60～66 には 5 基存在するが、掘立柱建物跡他の遺構は全くない区域である。Ｅ154～158 には 4 基あり、その内の 3 基(ＳＥ256～258)は重複している。ここは掘立柱建物跡・土壙が集中する区域で、井戸跡は確認できた建物跡よりも古い。Ｅ164～168 には 3 基が存在し、いずれもＳＤ269 よりも古い。

全てが素掘りで、諸特徴は 1・2 区と同様である。ＳＥ231・257・268 は、上部が擂鉢状で中央部がほぼ垂直に落ちる漏斗形をしている。埋土は、いずれも最下層のみが機能中に自然堆積したもので、上部は埋め戻されたものである(図 71)。この内ＳＥ257・258・268 では、埋め戻された層の間に多量の植物種実を含む炭化物の廃棄層があった。これらの植物種実の同定を依頼して行ったところ、イネ・オオムギ・アサといった栽培植物とアカザ属・ナデシコ科・タデ属・カヤツリグサ科・シソ属といった畑地雑草ないし人里植物の種実が検出された（第 7 章(2)参照）。

出土遺物には、ＳＥ221 で内面に黒色漆が塗られた曲物底板(図 78-7)、ＳＥ231 で在地産の陶器鉢・産地不明の甕・常滑産の甕破片を素材とする転用砥(図 74-1～3)、ＳＥ234 で手づくねかわらけ皿(図 74-4・5)・曲物底板、ＳＥ235 で東海産の陶器鉢・常溝産の甕・連歯下駄・竹篭(図 75)、ＳＥ240 で常滑・在地産？の甕(図 78-9)・建築部材と見られる板材、ＳＥ252 で在地産？の鉢、曲物柄杓・曲物側板・板草履（図 76）、ＳＥ255 で古瀬戸の卸皿（図 77-1）・無釉陶器鉢・茶筅（図 77-2）・曲物側板・鋳鉄鋳物の板状小片・砥石（図 77-3）、ＳＥ256 で折敷側板(図 78-10)、ＳＥ257 で手づくねかわらけ皿（図 77-4）、ヒョウタン製の容器（図 77-5）・曲物側板（1 点には内面に黒色漆が塗られている）・曲物底板？・箸（図 77-7）、軽石製の砥石（図 77-6）、ＳＥ258 で常滑産の広口壷（図 78-1）と甕（図 78-3）、手づくねかわらけ皿（図 78-2）と小皿・曲物側板・櫛歯・箸（図 78-5）・黒漆塗りの不明木製品（図 78-6）・鉄釘（図 78-4）、ＳＥ268 で常滑産の甕（図 78-8）・加工木片、ＳＥ273 で桃の種実、がある。

・土　壙（表 16）

西側には大形の土壙が 2 基があり、東側では長軸 1m以下の円形ないし方形を呈する浅いものが多くある。

ＳＫ246（図 67）

3 区北西端のＥ7～Ｅ10・Ｎ7 に位置する。長辺 2.5m・短辺 1.2m・深さ約 80㎝の隅丸長方形を呈し、断面は逆台形をなす。埋土はすべてグライ化しているが、少なくとも下層は人為的な埋め戻しとみられる。ＳＤ49 と重複しこれより新しい。手づくねかわらけ小皿・無釉陶器甕・烏帽子断片・折敷底板・漆椀・板草履・鉄小刀・ウマ脛骨が出土した（図 82-1～6）。

ＳＫ270（図70）

東側のＥ152-Ｓ12 にある。長辺 90㎝･短辺 60㎝ の隅丸長方形で、断面形が皿状を呈する浅い土壙である。埋土は全て人為的に埋め戻されたものである。銭貨 76 枚と龍泉窯系青磁小碗の破片１点が出土したが、これらは狭い範囲に集中することはなく、埋土の上位から壙底近くに散在していた（図 79・80）。銭貨の内訳は、以下の通りで初鋳年が最新のものは政和通宝（1111 年）である。

開元通宝（ 621 年）6 枚／咸平通宝（ 998 年）4 枚／景徳元宝（1004 年）1 枚

紹符元宝（1008 年）1 枚／天熙通宝（1017 年）2 枚／天聖元宝（1023 年）1 枚

景祐元宝（1034 年）3 枚／皇宋通宝（1039 年）9 枚／至和元宝（1054 年）2 枚

至和通宝（1054 年）1 枚／嘉有元宝（1056 年）1 枚／嘉祐通宝（1056 年）1 枚

治平元宝（1064 年）2 枚／熙寧元宝（1068 年）6 枚／元豊通宝（1078 年）16 枚

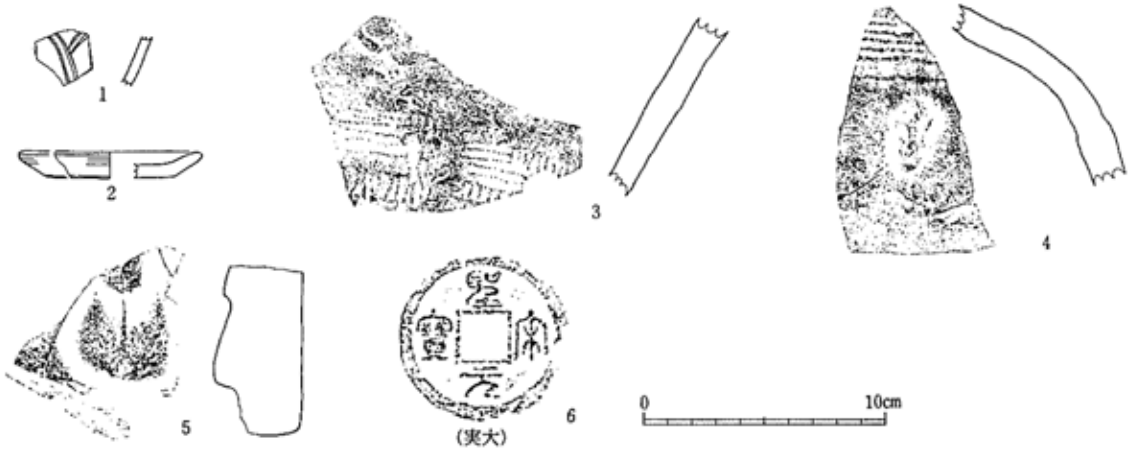
元祐通宝（1086 年）7 枚／紹聖元宝（1094 年）2 枚／元符通宝（1098 年）2 枚

聖宋元宝（1101 年）4 枚／大観通宝（1107 年）2 枚／政和通宝（1111 年）1 枚　　不明 2 枚

なお、ＳＫ267(Ｅ133-Ｓ13)からも、ＳＫ270 と同じ状況で 4 枚の銭貨(開元通宝１枚･熙寧元宝１枚･元豊通宝１枚･紹聖元宝１枚)が出土している。

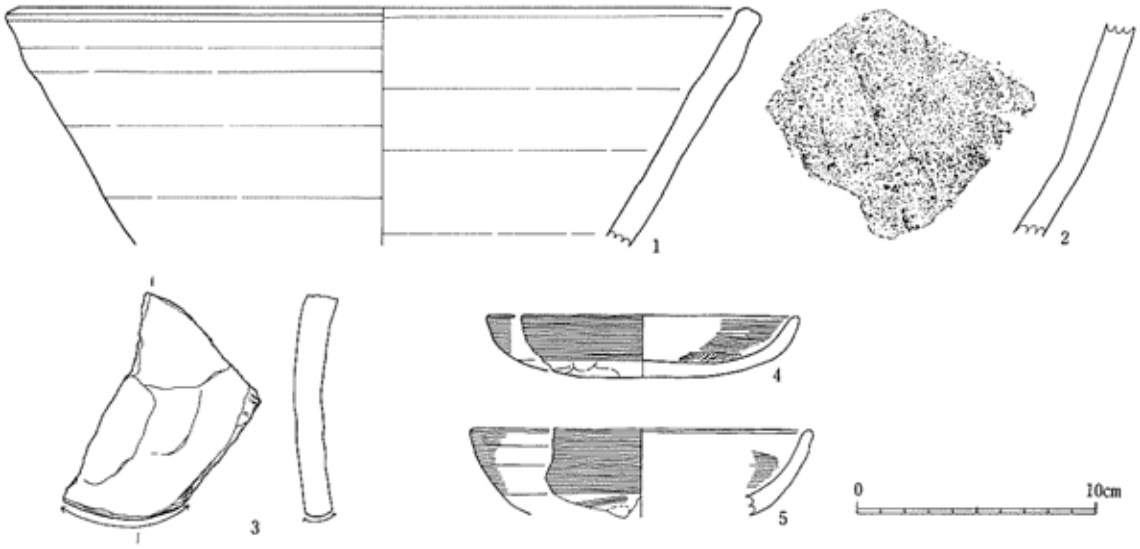
・銭備蓄遺構　ＳＫ271（図 70・81）

ＳＫ270 の南東部Ｅ150・Ｓ14 に位置する。この場所はＳＢ338 あるいはＳＢ339 掘立柱建物跡の内部にあたる。ＳＤ259 と重複しこれより新しい。掘り方は、確認面で長軸 62㎝・短軸 47㎝・深さ 8㎝の不整円形を呈する。壙底から 3㎝ほど浮いた位置に、長辺約 41㎝・短辺約 11㎝・残存高約 3㎝の組物かと見られる長方形の箱を水平に据えて、その周囲を埋め戻してある。底板の厚さは不明だが、側板は 7～8㎜ の厚さがある。箱内面には黒色漆が塗られており、材は腐食し漆の塗膜のみが残存していた部分が多い。内部の埋土は人為的な埋め戻しによるものである。中からは銭貨 16 枚が出土した



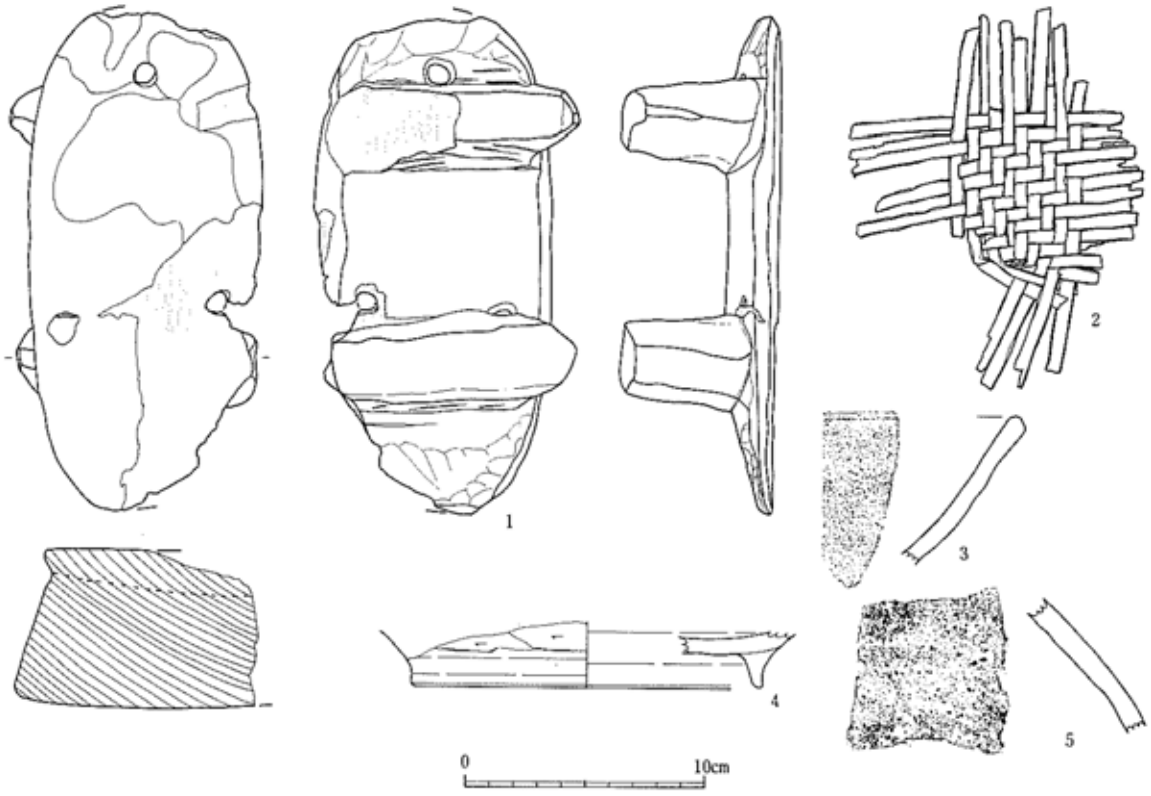
№	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		SD266	青磁	碗	龍泉窯系	太宰府Ⅰ5a	蓮弁文、黄褐色
2		SD260	かわらけ	小皿		手づくね	口径7.6、器高1.1、内面ヨコナデ、外面オサエ→ヨコナデ、海綿骨針
3	114	SD265	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面押印
4	116	SD269	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面ナデ→格子押印→自然釉
5	16	SD260	瓦	軒丸瓦		瓦当部	重弁蓮華文、多賀城創建期、
6	281	SD265	銅製品	銭貨		聖宋元宝	茎2.4、重3.3

図73　3 区溝跡出土遺物



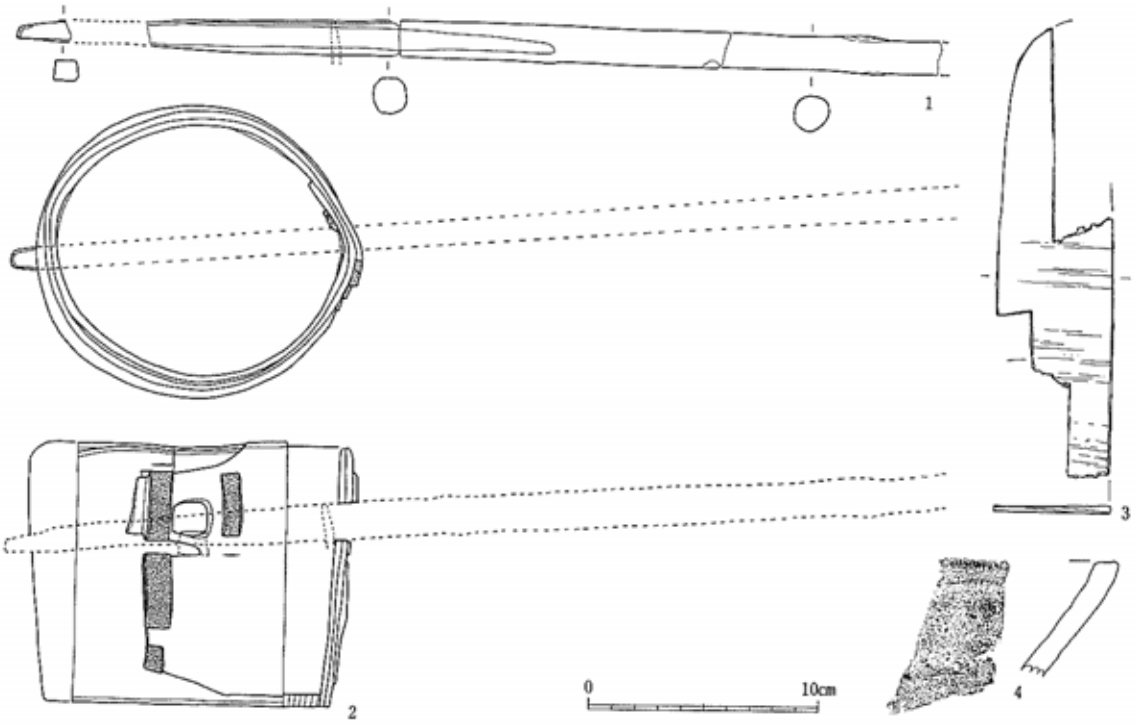
No	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	34	SE231	陶器	鉢	在地		口径31.4、内外面ナデ
2	104	SE231	陶器	甕	不明		内面ナデ・横ヘラナデ、外面縦ヘラナデ
3	162	SE231	土製品	転用砥			常滑甕体部破片素材、一辺使用、(9.3)×(5.2)×1.3
4	146	SE234	かわらけ	皿		手づくね	口径13.1、器高2.6、内面一方向のナデ→ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
5	133	SE234	かわらけ	皿		かわらけ、手づくね	口径14.3、内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針

図74　3区 SE231・234 出土遺物



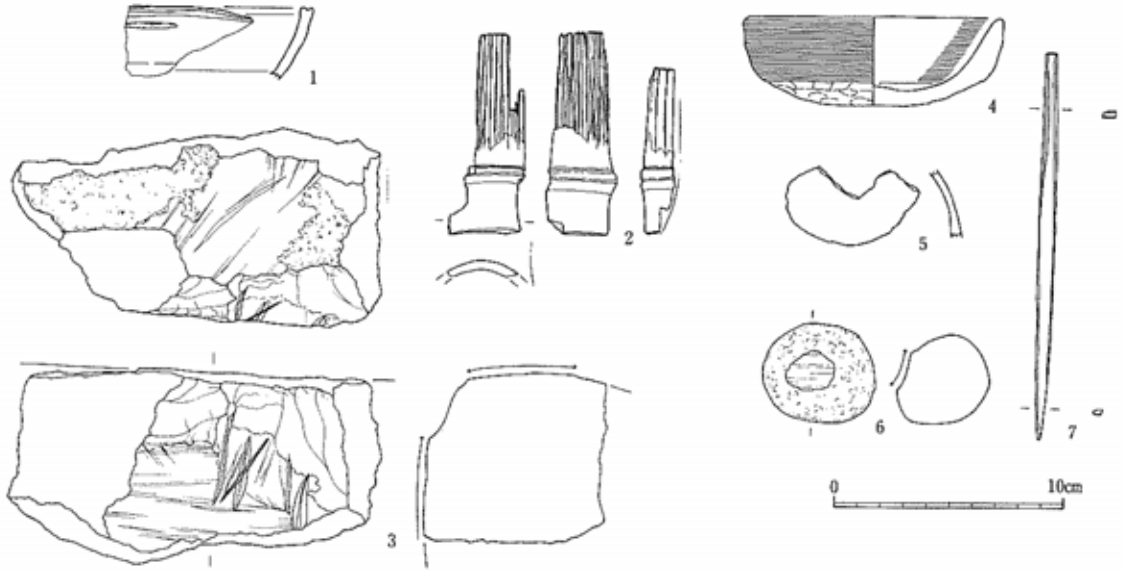
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	201	木製品	下駄		遺物、木035	左用、台20.9×9.7×2.1、前壺径0.8、後歯(10.1)×5×4・台形、ケヤキ板目
2	174	木製品	竹篭		木024	竹ひご0.5×0.05、樺皮（孔あり）
3	39	陶器	鉢	東海		内外面ナデ、口唇に小平坦面
4		陶器	鉢	東海		高台径14.4、内面ナデ、外面ヘラケズリ、外底砂目
5		陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面自然釉

図75　3区 SE235 出土遺物



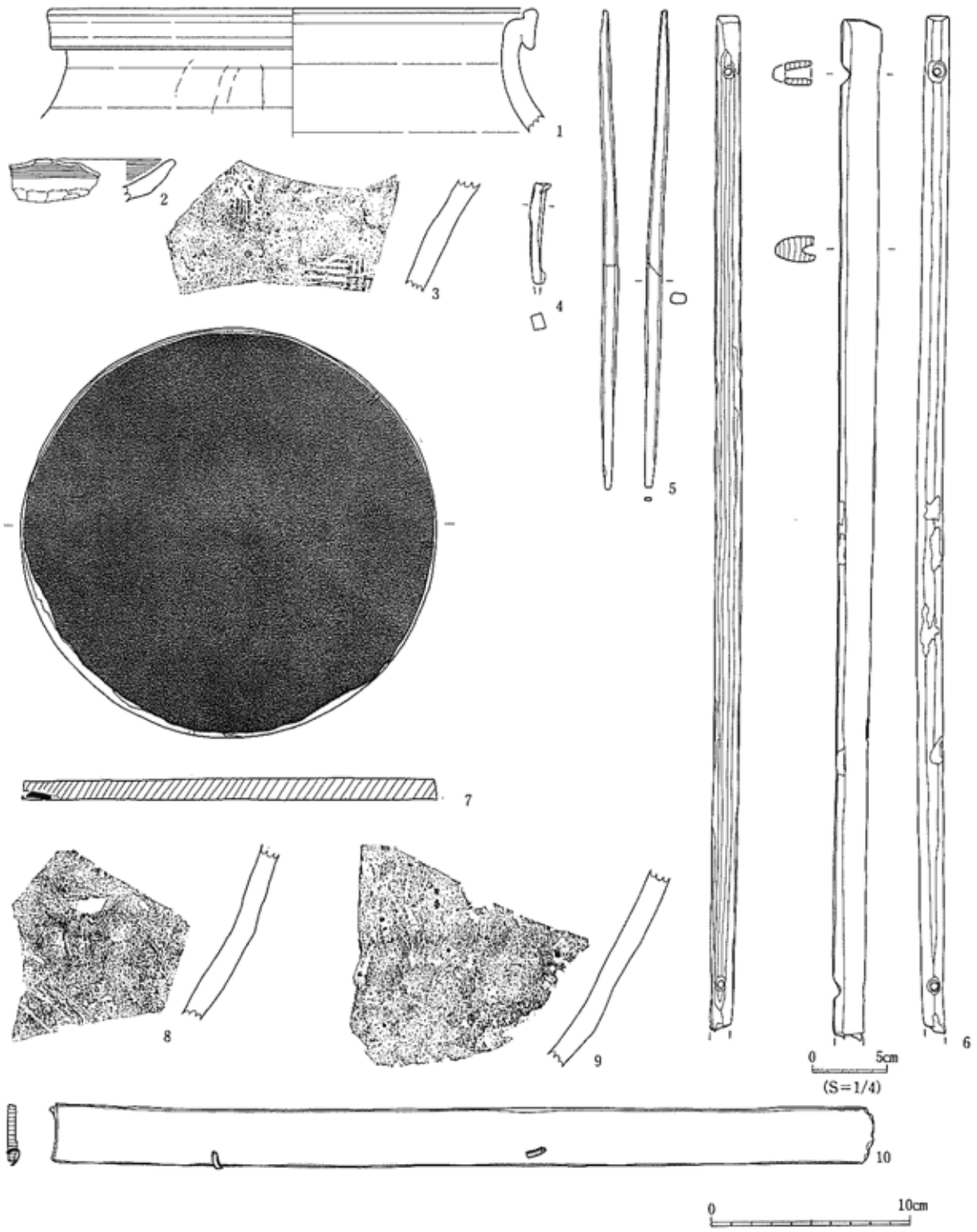
No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	189	木製品	曲物柄杓		柄、木032	(35.5)×径1.5、先端断面方形、抜け落ち防止の木釘、ムラサキシキブ属芯持ち
2	189	木製品	曲物柄杓		木032	14.1×12.6・高11.4、側板0.6・ヒノキ属柾目、底板0.5スギ柾目
						2列前内3段後内2段綴じ、底板はめ込み
3	204	木製品	板草履		木103	(19.5)×5.1×0.3、スギ板目、ワラ圧痕
4	40	陶器	鉢	在地？		内外面ナデ

図76　3区 SE252 出土遺物



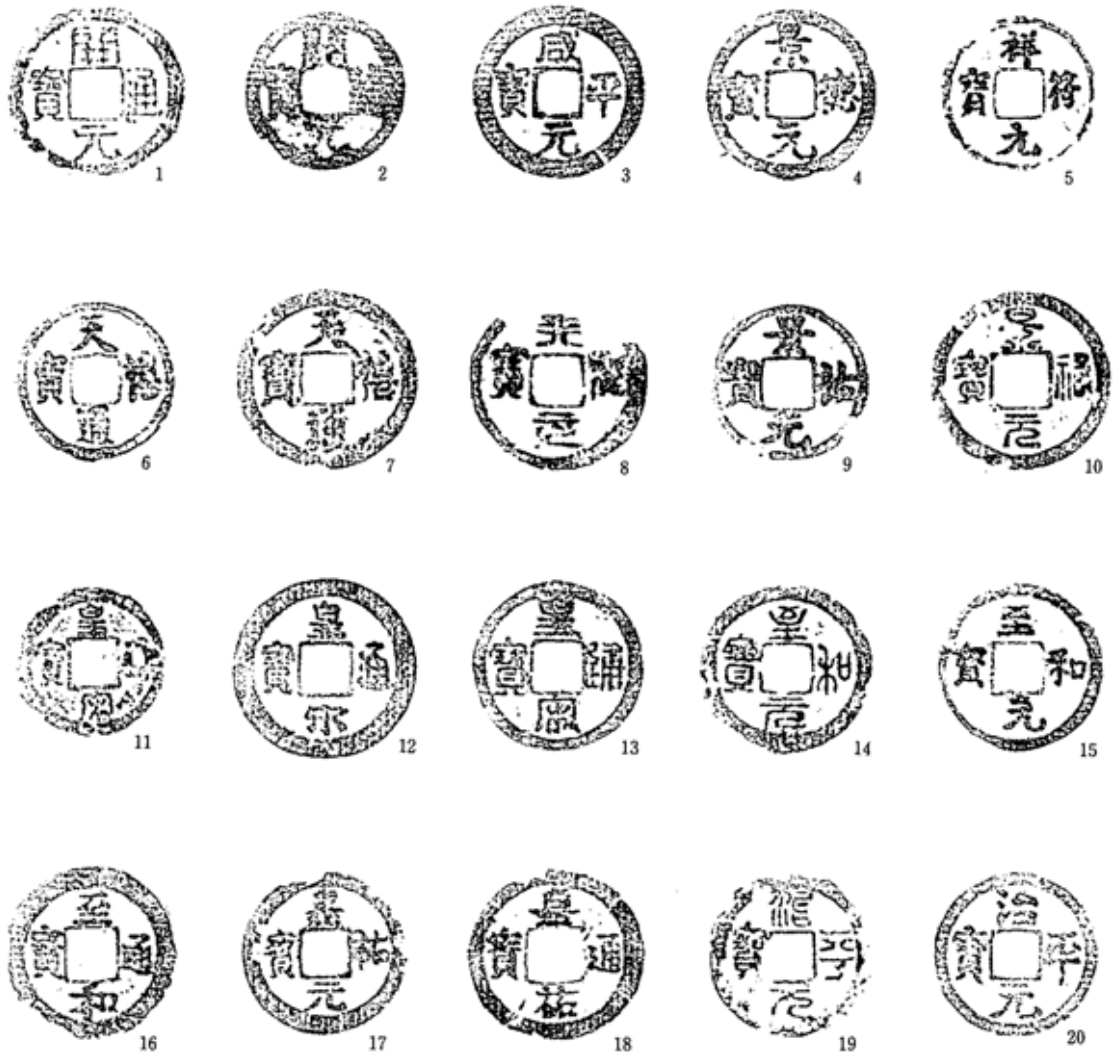
No	写真	遺構	種別	器種	分類ほか	備　　考
1		SE255	陶器	卸皿	古瀬戸中II期	口唇に沈線、体下部にやや屈曲、外面下部無調整、内外面灰釉、融着
2		SE255	木製品	茶筅	木001	全長8.8、柄長2.3、厚0.4、穂幅0.3～0.15、径2.5前後、タケ
3		SE255	石製品	砥石	安山岩	2面使用、火バネ
4	138	SE257	かわらけ	皿	かわらけ3、手づくね	口径11.3、器高3.8、内面ヨコナデ、外面オサエ→ヨコナデ
5	180	SE257	植物製品	ヒョウタン容器	木055	厚0.3～0.5
6		SE257	石製品	砥石	軽石	1面使用、4.8×4.2×3.7、重20
7	183	SE257	木製品	箸	木053、角箸	片方ケズリ、16.8×0.7×0.3、スギ

図77　3区 SE255・257 出土遺物



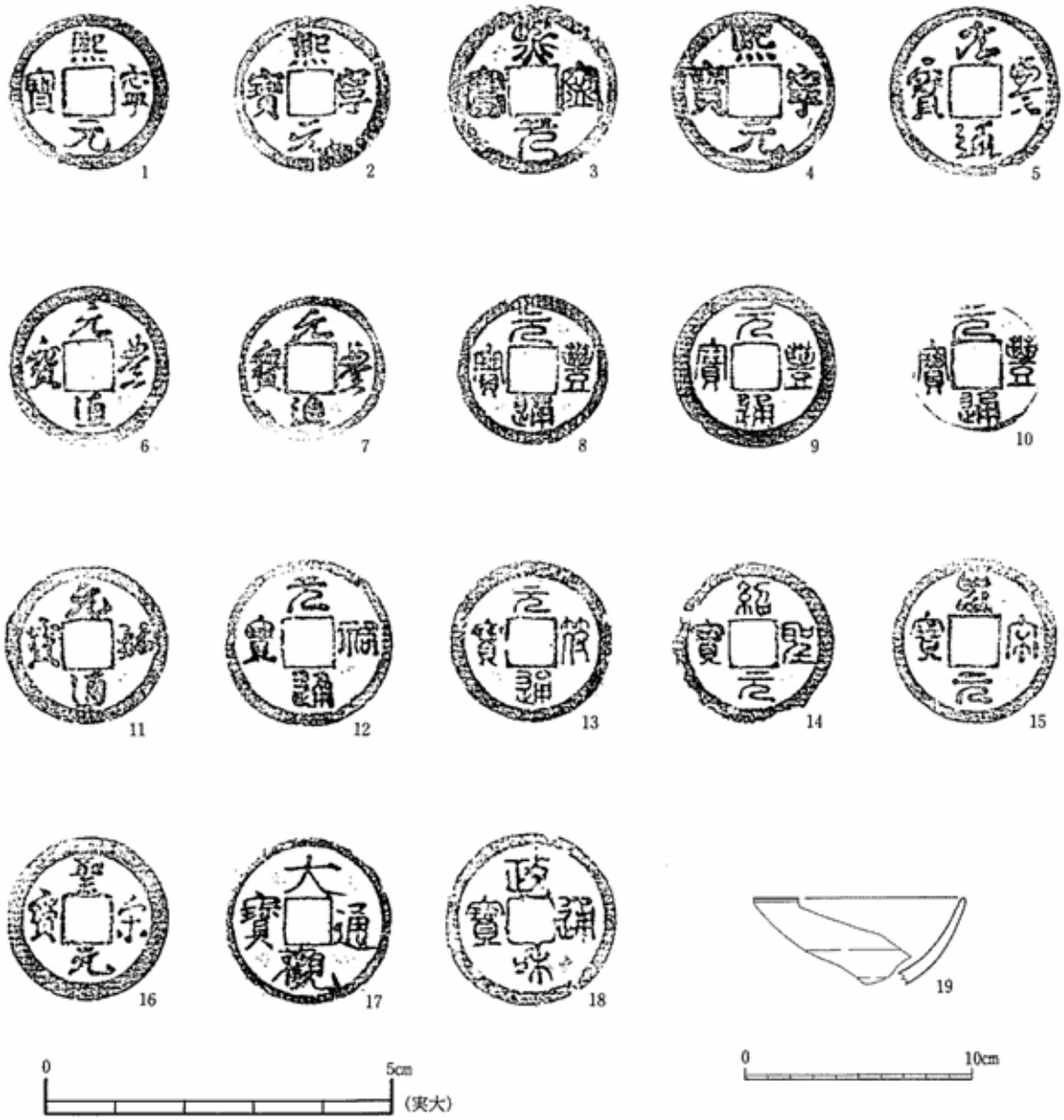
No.	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備考
1	66	SE258	陶器	広口壺	常滑		口径25、内面ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ
2		SE258	かわらけ	皿		手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ、海綿骨針
3	113	SE258	陶器	甕	常滑		内面オサエ→ナデ、外面縦ヘラナデ→押印
4	232	SE258	鉄製品	釘			(5.1)×0.6×0.7
5	185	SE258	木製品	箸		木019、角箸	両方削り、24.3×0.8×0.8、スギ
6	186	SE258	木製品	不明		木069	両端孔（径0.5）、片面溝（幅1～0.8、深0.8）、(68)×2.5×1.7、黒色漆、スギ
7	194	SE221	木製品	曲物		底板、木026	径21.1、厚1.1、内面黒漆、外面周縁に沈線、釘穴5・木釘1（0.3角）、スギ柾目
8	107	SE268	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面縦ヘラナデ
9	100	SE240	陶器	甕	在地？		内面ナデ→縦ヘラナデ、外面縦ヘラナデ
10	197	SE256	木製品	折敷		側板、木133	樺皮結合2ケ所、ケビキ部分で破損、(41.8)×2.9×0.5、ヒノキ柾目

図78　3区井戸跡出土遺物



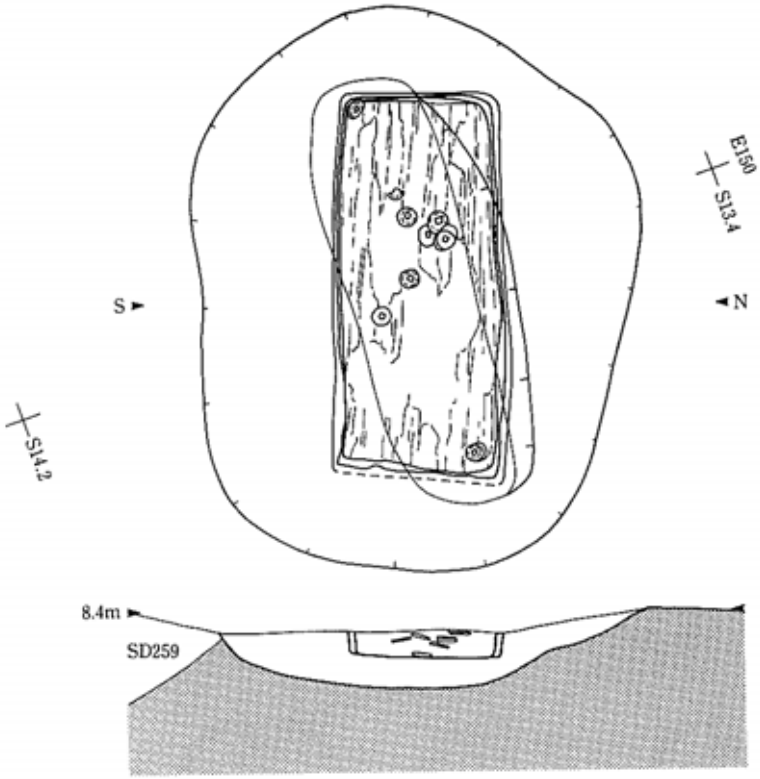
No.	写真	種別	器種	分類ほか	備考
1		銅製品	銭貨	開元通宝	径2.8、重1.3
2	236	銅製品	銭貨	開元通宝	径2.3、重1.6
3	240	銅製品	銭貨	咸平元宝	径2.5、重2.5
4	241	銅製品	銭貨	景德元宝	径2.4、重2.4
5		銅製品	銭貨	祥符元宝	径2.2、重1.2
6	243	銅製品	銭貨	天禧通宝	径2.3、重1.8
7	242	銅製品	銭貨	天禧通宝	径2.5、重2.5
8		銅製品	銭貨	天聖元宝	径2.5、重2
9	246	銅製品	銭貨	景祐元宝	径2.2、重2.1
10	247	銅製品	銭貨	景祐元宝	径2.6、重1.6
11		銅製品	銭貨	皇宋通宝	径2.1、重1.5
12	251	銅製品	銭貨	皇宋通宝	径2.6、重2.4
13		銅製品	銭貨	皇宋通宝	径2.3、重1.4
14		銅製品	銭貨	至和元宝	径2.4、重1.8
15	255	銅製品	銭貨	至和元宝	径2.4、重3
16	256	銅製品	銭貨	至和通宝	径2.4、重1.7
17	257	銅製品	銭貨	嘉祐元宝	径2.3、重2.7
18	258	銅製品	銭貨	嘉祐通宝	径2.5、重1.5
19	259	銅製品	銭貨	治平元宝	径2.3、重1.7
20		銅製品	銭貨	治平元宝	径2.4、重2.7

図79　3区 SK270 出土遺物 (1)

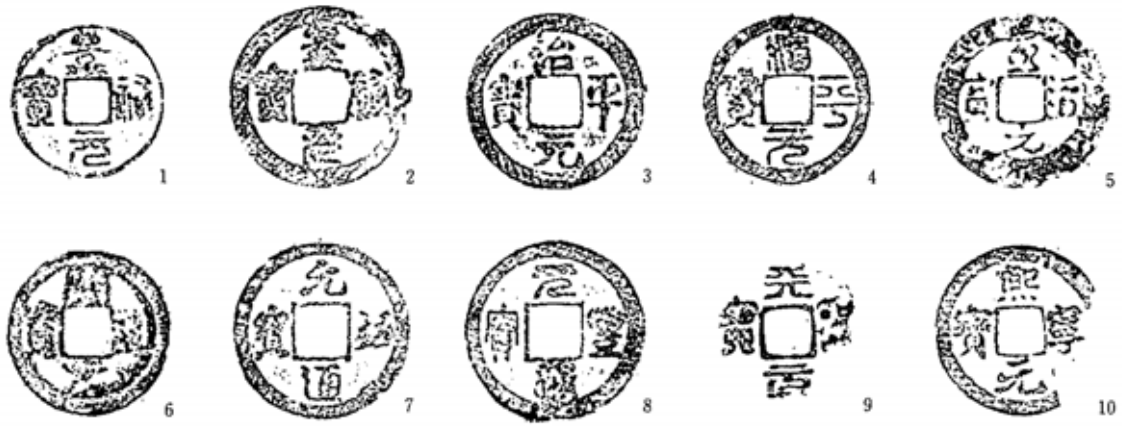


No	写真	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1	262	銅製品	銭貨		熙寧元宝	径2.4、重2.5
2	263	銅製品	銭貨		熙寧元宝	径2.3、重2.1
3	264	銅製品	銭貨		熙寧元宝	径2.5、重3.1
4	265	銅製品	銭貨		熙寧元宝	径2.4、重2.4
5	267	銅製品	銭貨		元豊通宝	径2.6、重1.8
6	268	銅製品	銭貨		元豊通宝	径2.4、重1.9
7	269	銅製品	銭貨		元豊通宝	径2.2、重1.6
8	270	銅製品	銭貨		元豊通宝	径2.2、重1.5
9	271	銅製品	銭貨		元豊通宝	径2.4、重2.9
10		銅製品	銭貨		元豊通宝	径1.9、重103
11	275	銅製品	銭貨		元祐通宝	径2.4、重2.6
12	276	銅製品	銭貨		元祐通宝	径2.5、重2.7
13	280	銅製品	銭貨		元符通宝	径2.4、重2.5
14	279	銅製品	銭貨		紹聖元宝	径2.4、重3.0
15	282	銅製品	銭貨		聖宋元宝	径2.4、重2.3
16	283	銅製品	銭貨		聖宋元宝	径2.4、重3.2
17	284	銅製品	銭貨		大観通宝	径2.4、重2.4
18	285	銅製品	銭貨		政和通宝	径2.5、重3.0
19		青磁	小碗	龍泉窯系	太宰府III1	無文、青灰色

図80　3区 SK270 出土遺物 (2)



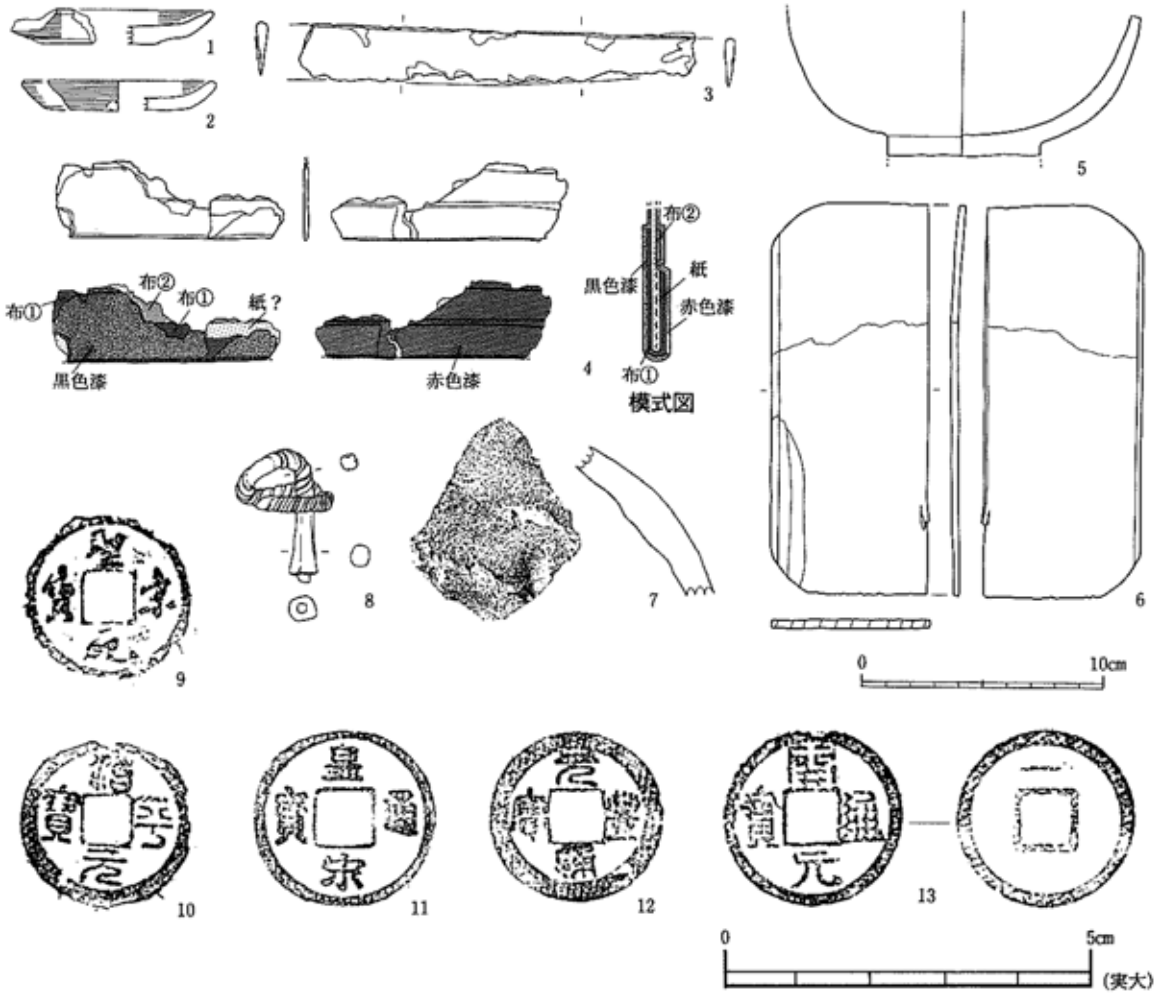
0　1　2m
(S=1/60)



(実大)

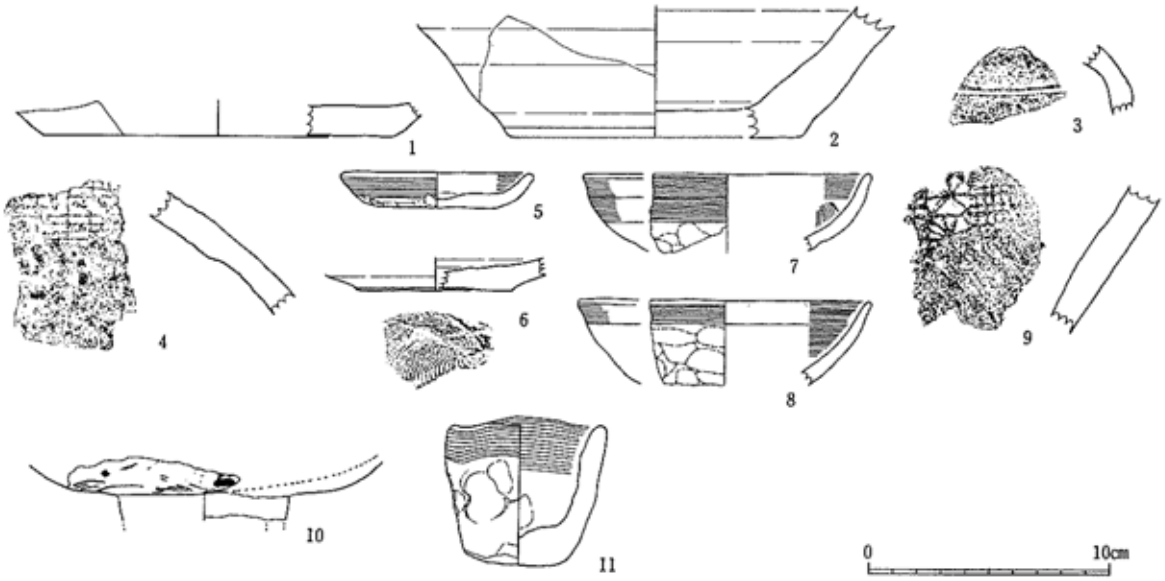
No.	写真	種別	器種	分類ほか	備　　考
1	248	銅製品	銭貨	景祐元宝	径2.2、重1.6、図中にあるもの
2		銅製品	銭貨	景祐元宝	径2.5、重1.8、図中にあるもの
3	260	銅製品	銭貨	治平元宝	径2.5、重3.7、図中にあるもの
4	261	銅製品	銭貨	治平元宝	径2.3、重3、図中にあるもの
5	238	銅製品	銭貨	至道元宝	径2.4、重1.9、図中にあるもの
6		銅製品	銭貨	開元通宝	径2.3、重3、図中にあるもの
7	277	銅製品	銭貨	元祐通宝	径2.5、重3.3、図中にあるもの
8	273	銅製品	銭貨	元豊通宝	径2.5、重2.8、図中にあるもの
9		銅製品	銭貨	天聖元宝	径1.9、重1.2、図中にあるもの
10		銅製品	銭貨	熙寧元宝	径2.4、重2.1、図中にあるもの

図81　3区 SK271 と出土遺物



No	写真	遺構	種別	器種	分類ほか	備　　考
1		SK246	かわらけ	小皿	手づくね	内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ
2		SK246	かわらけ	小皿	手づくね	口径8.2、器高1.2、内面ヨコナデ、外面オサエ→口縁ヨコナデ
3	219	SK246	鉄製品	小刀		丸棟平造、(16.4)×2.4×0.5
4		SK246	繊維製品	烏帽子	木90	芯材（紙）の上に布（絹？）→内面赤色漆・外面黒色漆、折り返し幅3.0
5	172	SK246	木製品	漆椀	木149	高台径6.3、輪高台、内外面黒色漆、漆絵剥落の可能性、ケヤキ横木取り
6	199	SK246	木製品	折敷	底板、木150	16.3×(6.5)×0.4、樹皮・木釘なし、スギ柾目
7	94	SK250	陶器	甕		産地不明、内面ナデ、外面縦ヘラナデ→ナデ→自然釉
8	230	柱穴	鉄製品	鏃		頸部ネジリ・台形関(1.1×1)、茎0.4×0.4
9		柱穴	銅製品	銭貨	聖宋元宝	径2.3、重1.8、SK270より新
10		SB338	銅製品	銭貨	治平元宝	径2.4、重2.1
11	250	SB334	銅製品	銭貨	皇宋通宝	径2.5、重2
12	272	SK267	銅製品	銭貨	元豊通宝	径2.4、重2.4
13	234	SK267	銅製品	銭貨	開元通宝	径2.5、重2.7

図82　3区土壙・柱穴出土遺物



№	写真	遺構	種別	器種	産地	分類ほか	備　　考
1		遺構外	陶器	折縁深皿	瀬戸	古瀬戸中期後半	底径14.4、内面灰釉ハケヌリ、外面体～底回転ヘラケヅリ
2	59	不明	陶器	鉢	在地		底径12.3、内外面ナデ、外底砂目
3	70	遺構外	陶器	有筋壺	常滑		内面ナデ、外面横ヘラナデ→沈線一本・自然釉
4	123	遺構外	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面長方形格子の押印
5	137	遺構外	かわらけ	小皿		手づくね	口径8、器高1.5、内面オサエ→ヨコナデ、外面オサエ→ヨコナデ、海綿骨針
6	148	遺構外	かわらけ	小皿		ロクロ	底径6.4、内外面ロクロナデ、回転糸切り
7		遺構外	かわらけ	皿		手づくね	口径12、内面ヨコナデ、外面オサエ→ヨコナデ、海綿骨針
8	143	遺構外	かわらけ	皿		手づくね	口径12.2、内面ヨコナデ、外面オサエ→ヨコナデ、海綿骨針
9	120	遺構外	陶器	甕	常滑		内面ナデ、外面縦ヘラナデ→菊花格子の押印
10		不明	木製品	漆椀		木013	内面赤色漆、外面黒地・赤色絵、ブナ属横木取り
11	14	遺構外	土師器	ミニチュア			手ヅクネ、口径6.6、器高6.1、外面口縁ヨコナデ、海綿骨針

図83　3区遺構外ほか出土遺物

が、うち4枚のみが側・底板に密着していた。その内訳は、開元通宝（621年）2枚・至道元宝（995年）1枚・天聖元宝（1023年）1枚・景祐元宝（1034年）2枚・治平元宝（1064年）2枚・熙寧元宝(1068年)1枚・元豊通宝（1078年）1枚・元祐通宝（1086年）1枚・不明5枚である。実際に残されていた銭は少ないが、箱は銭を備蓄するための銭箱と考えられ、本遺構は銭備蓄遺構の一種と言える。この遺構の場合では、最終的にほとんどの銭貨が取り出され、土堀が埋め戻される際に何らかの理由で銭貨が混じり込んだものと予測される。

B．遺　物

①磁　器

青磁・白磁・青白磁があり、破片数はそれぞれ28点・4点・2点の計34点で青磁が大半を占める。これらについて破片の部位に関わらず個体識別を行った結果、青磁は碗16個体・小碗1個体・坏1個体・盤？1個体の計19個体、白磁は碗2個体・皿1個体・合子1個体の計4個体、青白磁は梅瓶2個体と考えられた。

出土状況を地区別に見ると、1区が3破片・2個体、2区が26破片・18個体、3区西側が3破片・3個体、3区東側が2破片・2個体となっている。2区が大半を占めるがこの中でも特に西側に集中している。遺構別では、ＳＤ49が15破片･18個体、ＳＤ50が6破片･3個体、ＳＤ207・ＳＤ66が2破片･2個体、ＳＤ201Ｃが2破片･1個体で、他は1破片･1個体となっている。磁器は2区西側の溝に集中

していると言える。

・青磁碗

Ａ：外面が無文で、内面や見込みに片彫り・篦書きによる文様が描かれたもの。底部破片２点・体部破片２点の４個体がある。底部は分厚く断面四角形の削りだし高台が付く。高台内側の削りだしは浅い。畳付および高台内は釉が掻き取られ基本的には露胎となるが、釉が残るものもある。文様は草花文が１点、内面を区画する２本の沈線が描かれるもの１点である。これらは龍泉窯系の劃花文タイプと呼ばれるもので、太宰府ではＩ－2・4 類と分類され、12 世紀中葉～13 世紀前葉に位置づけられている（横田･森田 1978、山本 1992･1995）。ＳＤ50 に２個体（図 25-1･2）・ＳＤ49（図 17-1）と 201Ｃ（図 35-2）に各１個体ある。

Ｂ：外面が無文で、内面見込みに文字がスタンプされているもの。2 点あるが、いずれも文字は「金玉満堂」であると思われる。高台の特徴はＡ類と同様である。太宰府分類でのＩ－1 類に当たり、年代はＡ類と同時期に位置づけられている（山本編 1983）。ＳＤ49（図 17-7）と 66（図 32-1）に各１個体ある。

Ｃ：内面が無文で、外面に片彫りや篦書きにより蓮弁文が描かれるもの。蓮弁に鎬がつくものが 6 個体、つかないものが２個体の計８個体ある。これらも高台周辺の特徴はＡ類と同様である。太宰府分類のＩ－5ａ・ｂ類にあたり、12 世紀末～13 世紀後半に位置づけられている。ＳＤ49 に５個体（図 17-2～6・8・9）、ＳＤ207（図 39-1）・266（図 73-1）・ＳＥ220（図 62-1）に各１個体がある。

このほかに内外面無文の口縁部・体部破片が１点ずつある。

・青磁小碗

口縁部破片が１点ある(3 区ＳＫ270･図 80-19)。釉調は暗い青灰色であるが、体部の湾曲が強いことから太宰府分類のⅢ－1 類にあたると思われる。年代は 13 世紀中葉～14 世紀前葉とされる。

・青磁杯

口縁部破片が１点ある(ＳＤ49･図 17-10)。緩やかに外傾する体部から口縁部が外側に強く折れ曲がり、口唇端部がややつまみあげられている。内外面とも無文である。釉は鮮やかな淡緑色で厚い。太宰府分類の杯Ⅲ－3 類にあたると見られ、13 世紀中葉～14 世紀前葉とされる。

・青磁盤？

外面に鎬蓮弁文が描かれる体部破片１点がある(ＳＤ49･図 17-11)。器厚が碗に比べてかなり厚く、体部の立ち上がりが急であるため盤である可能性を考えた。釉は灰緑色で貫入が認められる。

・白磁碗

口唇部が露胎となる、いわゆる口禿の碗である。口縁部破片が２点ある(ＳＤ49･図 17-13、ＳＤ207･図 39-2)。口縁部は緩やかに外反し端部は薄くなっている。太宰府分類のⅨ類にあたり、13 世紀中葉～14 世紀前葉に位置づけられている。

・白磁皿

底部破片が１点ある(ＳＤ49･図 17-12)。無高台の平底で外底部の釉が掻き取られている。見込みには微かに刻文が残されている。大宰府分類のⅧ－1 類に当たると見られ、12 世紀中葉～13 世紀後半に

位置づけられる。

・白磁合子

1点ある（ＳＤ50Ｂ・図25-3）。口径6.6㎝・底径5.5㎝・器高2.2㎝で型作りと見られる。体部外面の下部～外底部は露胎となっている。体部は直線的に外傾し口縁部には帯状の弱い高まりがある。合わせ部は露胎で、やや窪んでいる。

・青白磁梅瓶

2点ある。1点は渦巻文様の肩部破片である(ＳＤ66・図32-2)。他の1点は底部破片で削り出し高台を持つ。高台径は7.2㎝で、畳付き～外底は露胎である。体部には唐草文を篦書きし、間を櫛歯文で埋めている（1区遺構外・図55-1）。

②施釉陶器

施釉陶器の破片は13点ある。個体数は11点と考えられる。いずれも古瀬戸で大窯期に属するものはない。器種別の個体数は、瓶子2点・縁釉小皿1点・折縁深皿2点・直線大皿2点・盤類1点・卸皿2点・香炉1点である。地区別の出土量は、2区が8破片・6個体、1区が3破片・3個体と多く、他はわずかである。遺構別では、ＳＤ201が3破片・2個体、ＳＤ50・ＳＤ66が2破片・2個体、ＳＤ49が1破片・1個体で、1区東側から2区西側の溝に集中しており、おおむね青磁・白磁と同様な出土状況である。

・瓶子（図25-4・39-3、66-1）

図25-4(ＳＤ50)と図39-3(ＳＤ207)の肩部破片は同一個体である可能性が高い。外面から頚部内面にかけて灰釉が施されるが、釉調は不安定である。内面はナデ調整されている。肩部に平行沈線が3本櫛描きされている。古瀬戸中期（14世紀初頭～中葉）に位置づけられる（藤沢1996・1997）。

図66-1（2区遺構外）は梅瓶型の底部破片である。底径は8㎝で、体部から底部外面に灰釉が施されているが一部は剥落している。底部外面には砂目が見られ、体部下半にかけて削り調整は見られない。古瀬戸中期に属する。

・縁釉小皿（図35-3・ＳＤ201Ｂ）

底部の小破片である。底径は4.9㎝で、回転糸切り痕が残る。体部は直線的になだらかに立ち上がると予測される。体部内面にわずかに黒褐色の鉄釉が見られるが、見込みと体部外面・底部は露胎である。古瀬戸後Ⅲ期以降（15世紀前葉～後葉）のものと考えられる（藤沢1991）。

・折縁深皿（図17-14、図53-1）

2点とも底部の破片である。図17-14（ＳＤ49）は底径13.8㎝で、底部外面の周縁部と体部下半(？)を回転篦削りされている（底部外面の中央部には砂目が残る）。体部の立ち上がりは比較的急である。内外面全面に灰釉が施されているが、外面底部は無釉である。古瀬戸中期前半（14世紀前葉）に位置づけられる。

図83-1(3区東側遺構外)は底径14.4㎝で、外面から底部外面に回転篦削りが見られる。灰釉は内面のみに刷毛塗り？されている。中期後半（14世紀中葉）に位置づけられる。

・直縁大皿（図32-3、図35-4）

直縁大皿 2 個体はいずれも 2 区の西端近くからの出土である。図 32-3(ＳD66)は口径 24.6㎝で、口縁端部は丸味を持つ。外面下部には回転篦削りが加えられ、上部にはロクロ目が強く残る。外面上部と内面全体に灰釉が見られるが、内面下部では刷毛塗りの痕跡が明瞭である。後III期（15 世紀前葉）に位置づけられる。

図 35-4(ＳD201Ｂ)は口縁部の小破片である。口縁端部はやや角張り、外面上部のロクロ目は強い。灰釉は外面から内面上部に見られ、見込みは露胎の可能性もある。後III期に位置づけられる。

・卸皿（図 32-4、図 77-1）

図 32-4(ＳD66)は底部破片である。底径 8㎝前後で内面に格子状の筋目がある。底部の切り放しは回転糸切りで再調整はない。体部外面と内面見込みに灰釉が施されるが、見込みの釉は薄い。中期に位置づけられる。

遺構	1区		2区	3区		計
	東側	西側		西側	東側	
柱穴	2					2
SB326	1					1
SD01	9					9
SD03	6	3				9
SD15		1				1
SD47	2					2
SD49	8		129	18		155
SD50	67		169			236
SD66			59	22		81
SD66・206			2			2
SD201			19			19
SD201・206			5			5
SD206			47			47
SD207			58			58
SD213			22			22
SD214			3			3
SD227				1		1
SD229				2		2
SD236				1		1
SD265					1	1
SD269					2	2
SE10		1				1
SE11		1				1
SE31	1					1
SE38	5					5
SE40	1					1
SE41	8					8
SE42	13					13
SE45	1					1
SE79			2			2
SE209			1			1
SE211			2			2
SE220			2			2
SE231				2		2
SE234				1		1
SE235				3		3
SE240				2		2
SE250				1		1
SE252				1		1
SE255					1	1
SE258					2	2
SE268					1	1
SK62			2			2
SK70		6				6
SK200			12			12
SK219			3			3
SK246				1		1
SX78			1			1
イカク	34	6	58	13	7	118
計	158	18	596	68	14	854

表17　無釉陶器出土破片数

図 77-1(ＳE255)は片口付近の口縁部破片で、口縁端部は沈線状に窪む。体部下半に屈曲があり、それより上は急角度に立ち上がる。体部下半に回転篦削りはなさそうである。内外面の下半部まで灰釉が施されている。体上部に焼成時の融着が見られる。中II期（14 世紀前葉）に位置づけられる。

・香炉（図 55-2、1 区東側遺構外）

袴腰形の香炉である。口径は 9.2㎝と小形で、扁平な体部下半から明瞭な稜を境に頚部が直立気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁端部の断面形は三角形状をしている。体部上方から頚部内面にかけて灰釉が施されている。後III期（15 世紀前葉）の所産である。

③無釉陶器（渥美産の部分的に施釉されたものを含む）

破片総数は 854 点ある。器種は鉢・壺・甕の 3 種があり、壺には広口壺・短頚壺・有耳壺・有筋壺がある。破片数は、鉢が口縁部 94 点・体部 79 点・底部 5 点で合計 217 点、壺が口縁部 31 点・体部 20 点、底部 5 点で合計 56 点、甕が口縁部 39 点・体部 515 点・底部 27 点で合計 581 点ある。なお、甕の体部の小破片には壺や鉢のそれが含まれている可能性がある。

出土全破片を対象に観察と接合作業を行った結果、58 個体の個体別資料を認定した。大形品では、離れた部位の破片が同一個体であるかどうかを判断することは困難であるため、同一個体の認定は部位が近く確実性が高いものに限定した。したがって、本来は同一個体である破片でもそれと認定していないものが相当数あるとみられる。個体別資料の内訳は、鉢 27 個体・壺 9 個体・甕 22 個体である。

全個体数の算出にあたっては、確認しうる最大数を把握するために器種によって基準を変えざるを得なかった。鉢は、互いに接合しない口縁部と底部によっても同一個体の認定が可能であった。したがって、個体別資料数に、個体別資料と認定できなかった口縁部破片と底部破片数を合わせて算出した。壺は、口縁部以外にも体部特に肩部周辺でも個体識別が可能であったため、口縁部資料に一部の体部資料を加えて算出した。甕は同一個体でも口縁部と体部で様相がかなり異なることがあるので、口縁部のみを加えて算出している。結果は鉢 89 個体・壺 16 個体・甕 19 個体、合計 124 個体である。

出土量を地区別に見ると、2 区が 596 破片・89 個体と約 7 割を占め、圧倒的に多数を占める（表 7）。具体的な集計はできなかったが、2 区のなかでも多くは西側からの出土である。1 区は掘立柱建物跡や井戸跡が集中するにも関わらず、破片数で約 2 割（176 点）・個体数で 1 割強（17 個体）と意外に少量である。特に西側の出土量はわずかである（18 破片・4 個体）。3 区は西側(S D230 以西)が 1 割前後（68 破片・14 個体）、東側が 2〜3%（14 破片・4 個体）となっている。東側には遺構が集中して見られるが陶器はごく少なく、逆に西側は遺構が少ないにも関わらず一定量の出土がある。遺構別では、S D49 が 155 破片・31 個体、S D50 が 236 破片・30 個体と圧倒的に多く、他ではS D66（81 破片・14 個体）、S D201（74 破片・10 個体）、S D207（58 破片・6 個体）、S D213（22 破片・4 個体）といった東西溝が多くなっている。しかも、いずれの溝も 2 区の西側に集中している。以上より、無釉陶器は 1 区東側〜2 区西側の溝とその周辺から集中して出土していると言える。

なお前述の通り、S D50・66・201・207 はS D49 と直接重複しており、これらから出土した陶器片には新旧の遺構間で接合するもの、あるいは同一個体と判断されるものが多く含まれている。したがって、古い溝の破片が、掘り返しによって新しい構内に混入した例がかなりあると考えられる。ここでは、直接重複する遺構にまたがって接合資料・同一個体資料が出土した場合、最も古い遺構に所属するものとして集計している。

＜鉢について＞

・分　類

破片資料がほとんどのため、東海地方や在地産の鉢の特徴を考慮しながら、全体の形状を捉えられる資料を参考にして、底部・口縁部の破片資料を含めて以下のように分類した。

A類・・高台付きのもの。内外面とも丁寧にナデ調整され、外面の体部下半ではヘラケズリが 1 段〜3 段なされ、その後に高台が付けられる。

1・・口縁の断面形が丸形で、表裏面・胎土ともに灰色〜灰白色を基調とするもの。口縁部下の強いナデのために口縁が肥厚するものが多い。体部はおおむね直線的に外傾するが、下半は内湾気味である。口唇に小さい平坦面があるもの(A1-ｂ)と、ないもの(A1-ａ)とがある。丸形の口縁部破片の全て・高台付きの底部破片のほとんどは、表裏面・胎土が灰色系統で長石などの砂粒を含むことが

多いため、この分類に含めて良いと考えられる。個体数は52個体となり40個体に口縁部が含まれる。この内口唇に小平坦面があるA1-ｂ類は12個体ある。

2・・口唇が平坦で端部が外方に丸く張り出すもの。体部は直線的で急角度に立ち上がる。表裏面は赤褐色を呈し、胎土も明るい赤褐色となる。個体数は鉢No.1の1個体（ＳD49・図18-11）だけである。

B類・・無高台のもの。

1・・口縁の断面形が角形で、外面の調整は口縁部がヨコナデ・体部は下から上に向かうヘラナデのもの。体部は直線的に立ち上がるが、ヨコナデされた口縁部がやや内側に屈曲することがある。底径は15～18㎝程度と大きい。胎土には長石などの砂粒を多く含むものが多い。口縁部・底部のみの破片資料でも、縦方向のヘラナデを持つものはこの分類に含めている。個体数は12個体ある。

2・・口縁が角形で、外面の調整が口縁から体部下半まで横方向のナデだけのもの。体部下半は外反気味のもの・内湾気味のもの・直線的なものと様々である。口縁部は内湾気味になるものが多い。底径は15㎝以下と小さい。横方向のナデ調整のみを持つ底部破片もこれに含めている。内面に筋目を持つものが底部破片に1点ある（図18-9）。個体数は9個体である。

C類・・高台の有無が不明のもの

1・・口縁が角形となり、外面の調整がナデだけのもの。内面に筋目を持つものが1点ある。無高台のB2類に含められる可能性が高いが、高台付きとなる可能性も残るため一応別類とした。11個体ある。なお口縁は角形であるが、片口部の小破片であるため外面の調整が不明なものが別に1個体ある。

2・・口唇が平坦で端部が外方に丸く張り出すもの。外面の調整はナデだけである。体部は上半が内湾気味になる。高台付きのA2類に含められる可能性がある。2個体ある(ＳD49・図18-7・ＳD50・図25-21)。

3・・口唇端部が外と内側に張り出すもの。体部は直線的に大きく開くと見られる。口縁部はヨコナデされるが、体部下方の調整は明確でない。1個体のみである（2区遺構外、図66-2）。

・産地と年代

高台付きのA1 類は東海地方産と考えられ、いわゆる山茶碗窯系の擂鉢と言われるものである。年代は、赤羽一郎・中野晴久氏の知多半島での編年に照らすと、5～6ａ期(13世紀中葉～後葉)にあたる。この内口唇部に小さい平坦面が見られるA1ｂ類はより新しい様相を持つとされている(中野 1994・1995)。

A2類は高台付きであるが、口縁部の形態と色調・胎土から在地産と予測される。しかし、宮城県内で確認されている窯跡群出土資料に類似資料はない。高台付きの擂鉢は石巻市水沼窯と白石窯一本杉支群で知られるが(藤沼1976・1977、藤沼ほか1979・1984、藤沼・千葉1992、工藤・藤沼ほか1979、菊地・早川1996)、水沼窯のものとは口縁部形態・胎土の特徴が異なる。一本杉窯跡のものは体部下半のケズリが見られず高台も形骸化した低いものである。一方、福島県八郎窯・大戸窯には、高台付きのものが見られ、一部の特徴に共通点が認められるが、産地を特定するには至っていない（寺島・飯

村 1987、石田 1994)。

無高台のB1・B2 類は体部外面の調整方法によって分別したものである。これまでに確認されている東北地方太平洋側の在地産の無高台擂鉢は、例外的な小形品を除いて体部全面が横方向にナデ調整される。底径は 15㎝ 台以下のものがほとんどである。一方常滑産のものは、一部の小形品を除いて体部に縦方向のヘラナデ調整がなされる（中野 1994･1995、青木 1993･1994）。底径は 15㎝ 以上の大きいものが多い。したがって、本遺跡資料の場合B1 類は常滑産、B2 類は在地産とすることができる。ただし、口縁部小破片や底径が不明な底部破片は確定的ではない。常滑産のものの年代は必ずしも定まってはいないが（中野 1994、青木 1994）、赤羽･中野編年の 5～7 期（13 世紀中葉～14 世紀前半）にあたる。在地産のものも同様な年代が与えられている（藤沼 1991、飯村 1995ａ･ｂ、中野 1996、菊地･早川 1996）。

高台の有無が不明のC1・2 類は、体部外面の調整がナデだけであることと、胎土の特徴から在地産と考えられる。

C3 類は、口縁部形状が赤羽･中野編年の 10 期(15 世紀後半)の無高台擂鉢に類似するが、この時期に属する無釉陶器はこの 1 例の出土だけである。

＜壷について＞

壷は、破片数・個体数ともに鉢・甕に比べてごく少数である。器種には、壷(刻文)・広口壷・短頸壷・有耳壷・有筋壷がある。個体数は、広口壷 6 個体・短頸壷 1 個体・有耳壷 1 個体・有筋壷 1 個体・壷(刻文)2 個体・壷 5 個体の計 16 個体である。

広口壷は、通常頸部のすぼまり具合や頸部から肩部への移行の具合によって甕と分離されるが、一般的に広口壷の口径は常滑・在地産ともに 20～25㎝ に収まることから、ここでは口径の大きさをもって広口壷を認定した。口縁形状を見ると、A：断面が受口状で幅狭い縁帯を形成し、下端には明瞭な稜がつくられるもの・上端のつまみ上げは低い(1 点、壷 8＝図 19-1)、B：断面がN字状になり、縁帯下端がやや垂下するもの(3 点、壷 9＝図 26-1・図 33-1・図 36-1)、C：口縁部が頸部先端を強く折り曲げるようにつくられ、幅広の縁帯下部が頸部に接着するもの(1 点、図 78-1)、D：断面が受口状で、上端のみが長くつまみ上げられ、比較的幅広で分厚い縁帯がつくられるもの、下端はやや丸みをもつ(1 点、壷 1＝図 19-5)、がある。これらの内A～Cは常滑産と考えられ、年代は中野(1994･1995)によると、Aが 13 世紀前葉、Bが 13 世紀中葉～末、Cが 13 世紀後葉～14 世紀前半となろう。Dは在地産と見られる。

短頸壷とわかるものは、図 36-2 の口縁部破片 1 個体のみである。口縁部は頸部から短く外反し端部は角形である。常滑産と見られる。

壷 6（図 19-2～4）は、口径 11.2㎝ の壷である。口縁部は内傾気味の頸部からゆるやかに外湾し、端部は丸みを持ちながら下方に折れ曲っているが、頸部とは接していない。頸部のすぐ下に「十」字形の篦書きが見られる。また肩部には単線の沈線がひかれている。渥美産と考えられる。

壷 5（図 26-6）は、直接接合はしないが肩部から底部までの形状が復原できる壷である。底径は 9㎝ で、体部はやや内湾気味に急角度に立ち上がる。肩部は丸みを帯びている。体部下半に薬研掘り風

に刻んだ太く深い沈線が見られる。常滑産と考えられる。

有耳壷は図 19-7 の肩部破片 1 個体のみである。断面が不整多角形の縦耳の基部が残っている。渥美産の可能性がある。なお渥美産の壷としては、この他に壷 7（図 26-5）の灰釉を刷毛塗りした(？)肩部破片がある。図 26-3 の壷 3 の肩部破片も渥美産の可能性がある。

図 83-3 は肩部の小破片であるが、明瞭な単線が刻まれている。常滑産の有筋壷と思われる。

＜甕について＞

口縁部から底部までの全体形状が知られるものはないため、口縁部の特徴によって分類・記述する。口径の推定できるものは 9 点しかないが、40～45㎝のもの 7 点・50㎝程度のもの 1 点・60㎝台のものが 1 点ある。

・分　類

A類・・口縁部が外反気味に外傾し、端部がわずかにつまみあげられて断面形が三角形となるもの。図 26-7 の口縁部小破片 1 点のみである。

B類・・頚部から強く外反し、端部が丸くおさめられるもの。2 個体がある(図 39-8・54-1)。2 点とも胎土は砂質で灰色である。図 54-1(個体 19)は推定口径 64.3㎝の大形品で、丸みをもつ体部上半が頚部で強く外側に屈曲して口縁部に至るものである。口縁部は肥厚気味である。外面肩部には平行線状の押印が帯状に 3 段程見られる。頚部内面から口縁部・体部上半には灰釉が刷毛塗りされている。

C類・・口縁部は内傾する頚部から外側に屈曲し、口縁内部がいわゆる受口状となるものである。縁帯は幅狭で上端のつまみ上げは弱く、下端には明確な稜が付けられる。2 個体ある（図 19-13、図 66-5）。図 66-5 は焼成時に口縁部がゆがんで下がっていると見られる。

D類・・C類と同じ受口状口縁になるが、上端がより強くつまみ上げられ、下端部が下がることにより明確な縁帯が形成されている。口縁の断面形はN字状あるいは横T字状になる。上下端の形状には微妙な相違があるが、縁帯の幅が比較的狭いもの（D-1 類）と、2.5㎝程度の広いもの（D-2 類）に細分できる。D-1 類が 7 個体・D-2 類が 2 個体ある。

D-1 類・・個体 6（図 9-9～12）の口縁部は、ほぼ水平に延び、上端のつまみだしは薄く下端は三角形状を呈する。縁帯は直立する。肩部の破片は外反（内側に凸）しているので体部下半との境界は屈曲すると考えられる。体部下半には簾状？の押印が見られるがどのような構成をとるかは不明である。個体 9（図 26-9～11、47-1、48-1、51-1・3）の頚部は直立気味である。口縁上端の断面形は方形で、下端は三角形をなす。縁帯はやや外傾している。肩部は丸味をもち、横方向のヘラナデが見られる。簾状文と平行線の組み合わさった押印が、肩部から体部にかけて数段帯状に施こされている。個体 11(図 20-1～3)は、内傾する頚部から水平方向に口縁部が折れ曲がる。口縁上端部の断面形は方形・下端部は三角形である。肩部は丸みを持つ。個体 14(図 21-5～7)は、頚部からの折れ曲がりが弱く口縁部は水平にはならない。口縁下端の垂下は長くないが、断面形は横T字形となる。肩部に平行線状の押印がある。個体 25（図 27-1）は、直立する頚部から水平方向に口縁部が延びる。口縁上端のつまみ上げは低いが、下端の垂下は薄く鋭い。図 26-8・36-4 の口縁の断面形態は横T字形である。

D-2 類・・個体 10(図 27-2・3)はいわゆるN字状の口縁となるもので、上端部のつまみ上げは高

くはないが、下端部の垂下は長い。縁帯はやや内傾している。口頸部全体が分厚い。図 49-1 の口縁部断面は横Ｔ字形となり、縁帯は内傾している。

Ｅ類・・口縁内側に幅広い沈線状の窪みがあるため、断面形は受口状に近くなるが、口縁部上端のつまみ上げは弱く、下端の下がりもほとんどない。個体 15 の 1 個体だけで、器体は全体に厚く頸部は特に著しい。少なくとも肩から体部上半に押印はなさそうである（図 21-1～3、47-3・8、54-4）。

Ｆ類・・口縁部上端がつまみ上げられ受口状となるが、下端部は全く垂下せず丸みを持つもの。2 個体ある。図 33-2 は上端部のつまみ上げが弱く、全体に厚手で軟質である。図 47-5 は上端部のつまみ上げは比較的長く、全体に薄手で硬質である。

Ｇ類・・口縁部上端に分厚く長いつまみあげがあり、比較的幅の広い縁帯が作られるが、下端は垂下せずに稜をなす。2 個体あるが、いずれも小片で頸部以下の特徴は捉えられない（図 21-4）。

・産地と年代

Ａ・Ｃ・Ｄ-1・Ｄ-2 類は、口縁部の形状と胎土の特徴から常滑産のものと考えられる。これらの製作年代は、中野(1994・1995)によれば、Ａ類は 4 期(12 世紀末～13 世紀初頭)に、Ｃ類は 5 期(13 世紀初頭～13 世紀中頃)、Ｄ-1 類は 5～6ａ期(13 世紀初頭～13 世紀後葉)に、Ｄ-2 類は 6ａ～6ｂ期(13 世紀後葉～13 世紀末)にあたる。

Ｂ類の産地は渥美半島周辺と考えられる。年代は 12 世紀末～13 世紀初頭とされる。

Ｅ・Ｆ・Ｇ類は東北地方南部の在地産と考えられる。ただし、県内では 3 ケ所の窯跡群が確認されているが、どの窯跡群のものかは特定困難である。年代は 13 世紀中頃～14 世紀前半の幅の中で捉えられている（藤沼 1991、飯村 1995ａ・ｂ、菊地・早川 1996）。

④瓦質土器

出土量はごく少なく、破片数で 5 点・個体数では 2 個体である。図 36-6 の体部破片は 3 区西側のＳＤ201 出土である。器種は明確でないが火鉢かと思われる。図 33-11（ＳＤ66・2 区西側）・図 65-2（ＳＫ219）の鉢は同一個体と見られる（瓦質鉢 1）。口径は 25.6㎝で、体部は内湾気味に外傾する。口縁端部にはなだらかな凸面が形成され、内側の稜がやや張り出す。内面はナデ調整の後に 8 本単位の太い筋目が縦方向に付けられている。外面もナデ調整されるが体部には指オサエの痕跡が残る。

⑤かわらけ

63 破片が出土しており 54 個体を認定した。ロクロづくりのものと手づくねのものとがあり、後者が圧倒的に多い。

地区別の出土状況は、2 区が 32 個体（その多くは西側）・1 区が 6 個体・3 区西側が 5 個体・3 区東側が 8 個体で、2 区が圧倒的に多い。遺構別では、ＳＤ49 が最も多くて 15 個体、次いでＳＤ50 が 9 個体・ＳＤ213 が 4 個体・ＳＤ207 が 3 個体・ＳＥ234 とＳＥ258・ＳＫ246 が 2 個体となっており、他は散発的である。比較的点数が多いＳＤ49・ＳＤ50・ＳＤ213・ＳＤ207 では、合計 31 個体中 28 個体が 2 区からの出土である。かわらけの出土状況は、陶磁器類と同様に 2 区の西側に集中しており、特に偏りを見せることはない。ロクロづくりのものは散在的で、ＳＤ03・49 と 3 区の遺構外に各 1 点である。

ロクロかわらけは 3 点とも底部資料で、全体形状がわかるものはない(図 23-11、47-9、83-6)。底

部中央が分厚くなる特徴があり、いずれもやや上げ底である。底径が 8.6㎝ のものを皿、6.4㎝ の 2 点を小皿とした。いずれも底面に回転糸切り痕が残る。底部内面に横方向のナデが認められるものはない。

手づくねかわらけの胎土は、いずれも比較的緻密でほとんどが海綿骨針を含んでいる。色調は暗褐色から淡い赤褐色である。体部から底部外面には指オサエの痕跡が残り、口縁部はヨコナデ調整される。内面もヨコナデされるが、底部内面が一方向から指ナデされるものもある。口径と器形により皿と小皿に 2 大別でき、個体数は皿が 39 点・小皿が 12 点の計 51 点である。

手づくね皿は底部が丸底で、体部から口縁部にかけて屈曲なく立ち上がるものが多い。図化できたのは 15 点で、口径には 9.2㎝ から 14.3㎝ の幅があるが、12～14㎝ 前後に多くが集中するため、それ以下の 2 点は中形品として別に捉えられる可能性もある(図 23-8･10)。器高が計測できるものは 6 点だけであるが、大形品のほとんどは 3.5㎝～4.5㎝、中形品は 2㎝ 強になると推定される。器形は多様で、体部～底部の丸味が強く立ち上がりが急なもの(図 27-9、74-5、77-4)、体部から口縁部が比較的直線的で立ち上がりがなだらかなもの(図 23-3、27-8)、両者の中間的なものがある。全体的には深めのものが多いと言えるが、小破片からの推定復原が多いため器形の細分は困難である。

手づくね小皿は底部が平底風の丸底で、体部から口縁部は弱い屈曲を持って短く立ち上がる。図化できた 8 点の口径は 7.6㎝～8.6㎝ で、器高は 1.1㎝～1.7㎝ である。口径 8㎝・器高 1.3㎝ 程度が平均的な姿と言えよう。1 区の S K35 出土の 1 点だけが灯明皿に使用された痕跡を残している。

かわらけの年代は、後述する S D49･50 出土陶磁器類の年代観から 13 世紀中葉～14 世紀中葉の幅に収まるものと考えられる。

⑥木製品

木製品には、漆器・曲物・曲物手桶・曲物柄杓・折敷・組物？・箸・竹篭・把手？・柄・栓？・茶筅？・櫛（歯のみ）・付札・下駄・板草履・柱・杭・建築部材・付け木？・削りくず・加工木がある。

＜漆　器＞

椀と皿が出土している。破損もしくは破片資料がほとんどであるが、小破片を除き個体識別を行った結果、個体数は椀が 19 個体・皿が 1 個体と考えられた。出土状況は、1 区の井戸跡が 2 点・2 区の溝が 13 点・2 区の井戸跡が 1 点・3 区の溝が 2 点・3 区の土壙が 2 点で、陶磁器類と同様に 2 区の溝がほとんどである。全体形状がわかる個体はわずかであるため、いくつかの遺構を取り上げて特徴を記載する（用語は四柳（1995）に従った）。

S D49・・椀が 3 個体あるが、図化できたのは 1 点のみである。図 24-14 はやや腰の張る浅めの椀で、高台脇が抉られている。高台は輪高台であるが破損している。上塗りは総黒色系である。

S D50・・椀が 5 点あるがいずれも破片資料である。上塗りは内面赤色系が 4 点・総黒色系が 1 点で、前者の内 3 点に赤色漆による漆絵が認められる。図 29-7 の草花紋は写実的に手描きされている。図 29-6 の底部は比較的厚い。樹種は図 29-6 がブナ属・7 がケヤキで、いずれも横木取りである。

S D201･･椀が 5 点あるがいずれも口縁部を欠く。上塗りは全て内面赤色系で、外面に赤色漆によって草花紋が描かれている。絵柄は写実性のない様式化したもので、図 38-1･2 では同じモチーフが 3～4

単位繰り返されている。全てブナ属の横木取りである。図38-1・3・5はやや腰が張る深めの形態、2・4は腰が丸味を持つ浅めの形態になると予測される。1・5の高台は高く(1.4㎝、1.8㎝)、下端が外側に張りだしており、高台内の削りが浅い特徴をもつ。

ＳＥ41・・皿が1点ある(図51-4)。上塗りは総黒色系で、見込みに梅鉢紋と「上」の文字・外面に「上」の文字が見られる。ケヤキ横木取りである。底部近くに2段の抉りが加えられ、平高台風に仕上げられている。

＜曲　物＞

完形品はわずかに3点であるが(手桶・柄杓を含む)、他に側板が25点・底板が8点と木製品の中では比較的多くの出土があった(同一遺構出土で明らかに同一個体と見られるものは1点と数えている)。出土状況は、1区の井戸・土壙が各1点、2区の溝が11点・井戸が9点・土壙が1点、3区東側と西側の井戸が各6点、不明1点となっており、2区に集中しているが漆器ほど偏在していない。

器高がわかるものはわずかであるため法量を底板の直径でみると、①9㎝ 程度のもの（2 点）、②13㎝程度のもの（2点）、③18～21㎝のもの（4点）と3つのグループに分けられる。①と②は図76-2の例から見て、柄杓クラスの大きさと言える。③のグループは図60-3の手桶を含む。

底板の結合方法には2種類が認められる。一つは側板の内側にはめ込み木釘で留めるいわゆる木釘結合で、他は単にはめ込んだだけのものである。いわゆる樺皮結合は見られない。木釘結合は当然ながら法量の大きいものに認められるが、1点のみ図62-6の直径8.8㎝の小形品にも見られる。ただしこれは釘穴が1ケ所だけであるので、例外的なものと言えよう。

黒色漆が塗られているものが少数ある。図 78-7 の底板は内面だけであるが、小破片のため図示しなかった側板2点(ＳD49・ＳE257出土)では内外両面に塗られている。

図66-6の側板には、幅3.1㎝・高さ0.6㎝の窓があけられている。これは把手をはめ込むためのものと考えられる。図29-9・10、図62-6には墨書が確認されたが判読は不可能であった。

樹種の同定数は多くはないが、底板ではスギが多く使用され、他にアスナロ・ヒノキがある。側板にはスギ・ヒノキ属がある。

＜曲物手桶＞（図60-3～5）

2区の西側のＳE79からの出土で、把手が共伴したことにより手桶であることが確認されたため別に記述する。曲物本体は直径20.5㎝・器高15.5㎝で、底板は木釘によって側板と結合される。木釘は上下2段に計10本打ち込まれており、相当重量のあるものを入れて使用されたと予測される。2本の把手で本体を上下に挟み、本体からはみ出した端部をそれぞれ上下に紐で縛って固定したものと考えられる。把手には、本体に接する面に本体の直径に見合う弧状の溝が刻まれ、反対面には紐かけの抉りないし溝が作られている。上の把手には中央に 1㎝×1.5㎝ の楕円形の孔があけられ、下面には抉りがある。中央の孔に縄が付けられるとすれば、具体的な機能は釣瓶であったと予想される。

＜曲物柄杓＞（図76-1・2）

3 区西側のＳE252 より出土し、柄がついたほぼ完形の状態であったが、取り上げ時に柄を破損してしまった。曲物本体は直径14.1㎝・器高11.4㎝で、底板は挟み込むだけで結合している。側板を綴

じ合わせた部分（打ち合わせ）の上部に1.6㎝四方の孔を、それに対する面に約1㎝四方の孔をあけて柄を差し込んでいる。また、脱落防止の木釘を本体に接する部分の内側に1本打ってある。先端の孔の方がやや下方にあるため、柄は若干斜めに取り付く形になる。柄の断面形は、曲物に差し込まれた部分が方形で基部はほぼ円形である。

＜折　敷＞

完形品はないが、やや不確実なものを含めて底板が5点・側板あるいは桟が5点ある。出土状況は、1区の井戸が2点・2区の井戸が2点・2区の溝が4点・3区の井戸と土壙が各1点である。

平面形は、図82-6の1点が隅切方形である以外は不明である。大きさも、図82-6が一辺16㎝強の小形品であり、図24-16と78-10が一辺40㎝以上の大形品であることが分かるだけである。側板と底板の結合方法には、樺皮結合によるもの(図 61-1･78-10)･桟を底板の縁に載せ木釘で結合するもの(図62-7･63-2)･結合痕が見られないもの(図24-16･82-6)がある。

＜組物？＞

3点ある。図38-7は底板と木釘によって結合される側板であり、一端が斜めに削ぎ落とされている。図29-11にはやや不規則ながら9ケ所の釘孔が見られる。

3区の遺構で記述したＳK271の銭箱も（図81）、器高が3㎝以上あり側板の厚さが7～8㎜になることから組物と考えられる。長辺は約41㎝・短辺は約11㎝を計り、内面全面に黒色漆が塗られている。保存状況が悪く、ほとんど漆の被膜のみの残存であったたため取り上げは不可能であった。

＜箸＞

6点出土した。ＳE61出土の1点は中央部の破片であるため図示していない。完形品は3点あるが長さはまちまちである。両端を細く削りだした両口箸(2 点)と、一端のみを削りだした片口箸(3 点)の両者がある。断面形は、図66-7が楕円形になるほかは全て長方形である。樹種は同定した5点ともスギであった。

＜竹　篭＞

3区西側のＳE235から出土した(図75-2)。完形品ではなかったが、取り上げ時にいくつかの断片に分かれてしまったため、胴部と底部の境部分だけを図示した。幅5㎜・厚さ0.5㎜に削ったひごを、「2本越え・2本潜り・右1本送り」の網代編みに編んでいる。他に孔のあいた樺皮も一緒に出土しているが。綴じ合わせ方は不明である。

＜把手？＞

図63-3に示した2片は同一個体とみられ、芯持ち丸木の片面をやや強く削って平坦面を作りだし、反対面の端部近くと中央部に抉りを入れている。

＜茶　筅＞（図77-2）

3区東側のＳE255で1点出土した。脆弱化のため押し潰れた状態であった。竹製で、節を挟んだ長い部分を先端から切り裂いて穂を作り出している。節は抜いてある。穂の根本に糸でかがった痕跡などはない。全長8.8㎝･柄長(前より下)2.3㎝で、直径は2.5㎝前後と見られる。穂幅は3～1.5㎜と広く、濃茶をたてるための「荒穂」に相当しよう。

＜下　駄＞

連歯下駄が5個体、差歯下駄が4個体出土した。出土遺構は、ＳＤ50が5点（連歯3・差歯2）で、他はＳＥ41・ＳＥ234・ＳＤ66・不明が各1点である。

連歯下駄の台部の形状には長方形と楕円形とがあるが、長さは20㎝前後のもの（4点）と16～17㎝程度の小形のもの（1 点）とに分かれる。後者は女性あるいは子供用と考えられよう。歯は台形のものが多く、いずれも相当にすり減っていると見られる。図31-1の歯の高さはわずかに5㎜である。

差歯下駄は歯のみの出土である。台との結合部はいずれも欠損しているが、形状は台形をなし相当の高さを持つ。木取りは全て柾目である。

＜板草履＞

左右の組み合わせが確認できたものを1組、片側だけのものを1点と数えると、総数12組と22点が出土した。出土遺構はＳＤ50が圧倒的に多く10組と13点あり、次いでＳＤ49が1組と5点、ＳＤ213が1組と1点、3区のＳＥ252・ＳＫ246が各2・1点となっている。ＳＤ50～213では1点を除き全てが2区の出土である。

全体の形状・先端部の孔・側縁の抉り方は実に様々で、確実に同じ形態的特徴を持つと言えるものはない。わずかにＳＤ50出土の破片資料図31-7と図30-2の先端部が類似すると言えるだけである。表裏面に巻き付けたワラあるいはその圧痕が残存しているものがある。これらを見ると、ワラは器体に直交して巻き付けられるが、先端部だけは斜めになっている。長さが計測できるものは6点だけで、いずれも23～25㎝におさまる。しかし破損品の図24-8(ＳＤ49)は、推定長20㎝程度で明らかに小形である。樹種同定を行ったものではスギが最も多く、他にアカマツ・ヒノキ属がある。木取りは約 7割が柾目である。

＜不明品＞

ＳＤ49出土の図24-17は長さ約90㎝の断面長方形の角棒で、先端をはつって尖らし基部の両側辺を斜めに切り欠いたものである。基部中央には木釘が打ち込まれている。

ＳＥ258出土の図78-6は、長さ約70㎝で断面が背の高いカマボコ形を呈する棒状の漆製品である。端部から6㎝程入った位置に孔をあけ、底面には溝を端から端まで切ってある。溝を切った面を除いて黒色漆を塗っている。家具・調度類の部材の可能性が考えられる。

⑦繊維製品

烏帽子と縄が各1点ある。

＜烏帽子＞（図82-4）

3区西端のＳＫ246から出土した縁部の破損品である。外面と下縁に黒色漆・内面には赤色漆が塗られ、下縁から約3㎝の部分が一段高まっている。表面には細かな凹凸が規則的に見られる。縁の部分では、①紙と見られる芯材を内側に1.5㎝程折り返す、②その上に絹布①(？)を貼る、貼る範囲は外面は下端から3㎝程・内面は芯材を折り返した範囲である、③内面の②の布の上方に、外面の段と同じ高さまで別な絹布②(？)を貼る、④外面と縁の下端に黒色漆を、内面に赤色漆を塗る、という製作工程がとられている。

⑧金属製品

羽釜・鉄鍋あるいは釜・鉄鎌・鉄鏃・刀・鞘尻金具・小刀・刀子・錐？・釘・鉄滓・銭貨がある。

＜鍋・釜＞

鋳鉄鋳物とみられるものが小片を含めて4点出土した。この内、ある程度形状が捉えられるＳＤ49出土の2点を図示した。図23-18は鍋あるいは釜の底部で、外底に直径4㎝程の丸形の湯口が見られる。図23-20は羽釜の胴部破片と見られ、厚さ1.2㎝の鍔が付く。

＜鉄　鎌＞

ＳＤ01とＳＤ49から各1点出土した。ＳＤ49出土の図23-14は完形品で、茎が長く延びるいわゆる有茎鎌である(松井1994)。刃部は直刃で断面形はV字形をしている。茎は刃部に鈍角に付き、茎端部には折り返しがある。目釘孔はない。ＳＤ01の図47-11は、茎を欠くが同じく有茎鎌と見られる。

＜鉄　鏃＞

3点ある。図23-12と図55-13はいずれもほぼ完形で長頸鎌に属する。鏃身はそれぞれ三角形と木葉形であるが、頸部との関は撫関である。図82-8も長頸鏃であるが鏃身を欠く。頸部には左巻きのネジリが加えられている。

＜小　刀＞

2点ある。ＳＥ220出土の図62-2はほぼ完形で、ＳＫ246出土の図82-3は刀身部の破片である。両者とも身は反りがなく丸棟平造りである。図62-2の茎は、茎尻に向かって細くなり丸く収まる栗尻である。関は棟・刃とも直におちる。

＜刀　子＞

3点出土した。ＳＤ49出土の図23-15・16の身は共に丸棟平造で、茎には目釘孔が1つある。関は図23-15とＳＤ50の図28-1が両関であるが、図23-16は全く関がない特異な形をしている。

＜錐？＞

ＳＤ49出土の1点がある(図23-13)。身の先端部を欠くが木製の柄が残存している。身の断面形は、基部近くで隅丸方形・中央部では円形となる。関の有無は未確認であるが、一応錐と考えた。柄はヒノキ製で、断面形は円形に近い隅丸方形、端部に一孔があけられている。

＜鉄　滓＞

1区で20点、2区で26点、3区(西側)で2点の合計48点出土した。他種の遺物と比べると1区の出土数が多い。遺構別ではＳＤ50が17点と最も多く(内5点は椀形滓)、次いでＳＤ201･214･206が8点、ＳＤ01が5点、ＳＤ49が4点となる。なお、これらには奈良・平安時代のものが含まれている可能性もある。

＜銭　貨＞

全て中国からの渡来銭で、銭名で24種･合わせて160枚が出土した。時代は唐から明までのものがあるが、北宋時代が最も多い。元銭は見られない。銭名別の内訳は以下の通りである。

開元通宝（唐　　621年）12枚　至道元宝（北宋　995年）2枚　咸平元宝（北宋　998年）6枚
景徳元宝（北宋　1004年）3枚　祥符元宝（北宋　1009年）2枚　天禧通宝（北宋　1017年）3枚

天聖元宝（北宋　1023 年）4 枚　景祐元宝（北宋　1034 年）6 枚　皇宋通宝（北宋　1038 年）19 枚
至和元宝（北宋　1054 年）2 枚　至和通宝（北宋　1054 年）1 枚　嘉祐通宝（北宋　1056 年）2 枚
嘉祐元宝（北宋　1056 年）1 枚　治平元宝（北宋　1064 年）6 枚　熙寧元宝（北宋　1068 年）20 枚
元豊通宝（北宋　1078 年）22 枚　元祐通宝（北宋　1086 年）10 枚　紹聖通宝（北宋　1094 年）6 枚
元符通宝（北宋　1098 年）2 枚　聖宋元宝（北宋　1101 年）7 枚　大観通宝（北宋　1107 年）3 枚
政和通宝（北宋　1111 年）2 枚　淳熙元宝（南宋　1174 年）1 枚　洪武通宝（明　1368 年）5 枚
永楽通宝（明　1408 年）1 枚　不明 14 枚

複数枚出土した遺構毎に銭名を見ると、以下の通りになる。

ＳＤ49・・皇宋通宝（1038 年）1 枚／熙寧元宝（1071 年）1 枚　計 2 枚
ＳＤ213・・皇宋通宝（1038 年）1 枚／元豊通宝（1078 年）1 枚／政和通宝(1111 年)1 枚　計 2 枚
ＳＤ207・・開元通宝（ 621 年）1 枚／景徳元宝（1004 年）1 枚／祥符元宝（1009 年）1 枚
天聖元宝（1023 年）2 枚／紹聖元宝（1094 年）1 枚／聖宋元宝（1101 年）1 枚
洪武通宝（1368 年）2 枚／不明 4 枚　計 15 枚
ＳＤ66・・咸平元宝（ 998 年）1 枚／皇宋通宝（1038 年）1 枚　計 2 枚
ＳＤ201・・熙寧元宝（1068 年）2 枚／洪武通宝（1368 年）1 枚　計 3 枚
ＳＥ42・・元豊通宝（1078 年）1 枚／元祐通宝（1086 年）1 枚　計 2 枚
ＳＫ32・・熙寧元宝（1068 年）1 枚／紹聖元宝（1094 年）1 枚／洪武通宝（1368 年）1 枚
永楽通宝（1408 年）1 枚　計 6 枚（土壙墓副葬六道銭）
ＳＫ267・・開元通宝（ 621 年）1 枚／熙寧元宝（1068 年）1 枚／元豊通宝（1078 年）1 枚
紹聖元宝（1094 年）1 枚　計 4 枚
ＳＫ270・・開元通宝（ 621 年）6 枚／咸平通宝（ 998 年）4 枚／景徳元宝（1004 年）1 枚
紹符元宝（1009 年）1 枚／天熙通宝（1017 年）2 枚／天聖元宝（1023 年）1 枚
景祐元宝（1034 年）3 枚／皇宋通宝（1038 年）9 枚／至和元宝（1054 年）2 枚
至和通宝（1054 年）1 枚／嘉祐元宝（1056 年）1 枚／嘉祐通宝（1056 年）1 枚
治平元宝（1064 年）2 枚／熙寧元宝（1068 年）6 枚／元豊通宝（1078 年）16 枚
元祐通宝（1086 年）7 枚／紹聖元宝（1094 年）2 枚／元符通宝（1098 年）2 枚
聖宋元宝（1101 年）4 枚／大観通宝（1107 年）2 枚／政和通宝（1111 年）1 枚
不明 2 枚　計 76 枚
ＳＫ271・・開元通宝（ 621 年）2 枚／至道元宝（ 995 年）1 枚／天聖元宝（1023 年）1 枚
景祐元宝（1034 年）2 枚／治平元宝（1064 年）2 枚／熙寧元宝（1068 年）1 枚
元豊通宝（1078 年）1 枚／元祐通宝（1086 年）1 枚／不明 5 枚　計 16 枚

明の洪武通宝･永楽通宝の出土はごくわずかである。県内の出土状況からは、両者は 15 世紀に入ってから流通すると見られている(藤沼･神宮寺 1992)。また銭貨が渡来銭のみで構成される状況は、17 世紀前葉まで続くと考えられている(阿部･佐藤 1997)。洪武通宝・永楽通宝を含まずにまとまった出土があった遺構には、3 区東側のＳＫ267･270･271 がある。ＳＫ267・270 では、人為的に埋め戻され

たと見られる土の中に混じって出土した。ＳＫ271 は銭備蓄遺構の一種と考えられたものである。ＳＫ270・271 の周辺を中心とした 3 区東端部では、遺構確認の際にも多くの銭が検出されている。3 基の土壙と周辺の遺構外出土銭貨は、全て北宋以前のもので、初鋳年が最も新しいのは政和通室（1111 年）である。これらの流通年代は 14 世紀前半以前と予測されている（藤沼・神宮寺 1992）。

⑨土製品

土製品には、羽口・土錘・転用砥がある。

＜羽　口＞

14 点(個体)出土した。遺構別ではＳＤ50 が最も多く 8 点あり、他はＳＤ49・ＳＤ66 がそれぞれ 1・2 点、残りは遺構外である。ＳＤ50 に集中する点は鉄滓の出土状況と一致している。図化できた 4 点は、いずれも径が推定で 7～9㎝、孔径が 3㎝前後になり同様な大きさをしている。

＜土　錘＞

ＳＤ201 から 1 点出土したのみである（図 36-7）。孔径が推定 1.2㎝あり、大形品に属する。

＜転用砥＞

陶器・須恵器の破損面･表裏面に研磨面を持つものを転用砥とした。合計 21 点あり、素材別では無釉陶器破片が 18 点、施釉陶器破片素材が 1 点・須恵器破片素材が 2 点である。須恵器破片素材のものは中世の遺構から出土しているが、古代に属する可能がある。遺構別ではＳＤ49(7 点)・ＳＤ50(3 点)が多く、特に遍在はしない。

⑩石製品

石製品には石鉢・粉挽臼・茶臼・硯・温石・砥石・板碑・切石がある。

＜石　鉢＞

2 点あり、いずれも安山岩製である。図 29-2 の底部資料は、平高台が削り出されており、底径は 14.6㎝･器高は 2～3㎝ある。体部は内湾気味に立ち上がっている。図 36-9 の口縁部資料は、器厚 2.6㎝で口唇部に向かい薄くなる。口唇部は平坦に作られている。

＜茶　臼＞

上臼が 1 点、下臼の臼部が 1 点･受皿部が 3 点出土した。全て安山岩製である。ＳＤ50 出土の上臼(図 29-3)には、挽手孔の周囲に「子持菱」と呼ばれる二重の菱形の浮き彫りがある。目（溝）は刻まれていない。「ふくみ」は大きく 1㎝ある。ＳＤ66 出土の下臼（図 34-4）の目は明らかに周縁にまで達しており、一般的な茶臼とは異なっている。主溝は 8 本で副溝は 8～10 本と一定していない。臼面の直径は 22.4㎝で、茶臼としては大形である。

＜　硯　＞

粘板岩製の硯が 3 点出土したが、2 点は小片である(ＳＥ250・3 区西側遺構外)。ＳＤ49 出土の図 24-1 も破片でしかも表裏面が剥落しているが、陸の一部に漆が付着している。

＜温　石＞

2 点出土した。図 47-10 は粘板岩製で横長の長方形になる。紐通しの穴はやや内側にあげられている。図 52-4 は滑石製である。

＜板　碑＞

板碑は砂岩製の１点を除くと他は全て粘板岩製である。16 点に文字などが記されている。このほかに粘板岩の小破片が 39 点あり、これらも板碑破片の可能性が考えられる。全体の形状や内容がわかる資料はないが、最も残存状況が良い図 61-2 は小形品に属すると見られる。

地区ごとの出土点数は、１区が３（11）点・２区が 12（38）点・３区が０（6）点で、遺構別ではＳＤ201 が５（12）点・ＳＤ49 が４（15）点・ＳＤ50 が３（5）点・ＳＤ207 が１（4）点となる。他はほとんど１点の出土である(カッコ内の数値は粘板岩の小片を含めたもの)。他の遺物と同様に２区の溝跡を中心に出土すると言える。

種子が刻まれているものは８点あるが、判読できるのは「カ」あるいは「カーン」・「ウーン？」・「サク」だけである。その他には、二重月輪が１点・「子往生」の願文が１点・北朝年号「貞和五年」（1349 年）と「月日」の紀年がある。文字の彫り方は多くが幅狭の薬研掘りであるが、図 37-3 の種子「カ」あるいは「カーン」は、鑿で文字の輪郭を打ち出した篭彫りである。図 29-4 の種子「ウーン？」には、金箔の痕跡が見える。図 37-2 の砂岩製の小破片は金箔で文字が記されたと見られ、金箔の下には接着剤に使われた漆が残っている。

＜砥　石＞

砥石は合計 56 点と多数出土した。石材は砂岩が最も多くて 27 点あり、次いで粘板岩が 13 点、凝灰岩が７点、軽石が３点、安山岩と珪化木が１点、不明石材が４点である。

砂岩製の砥石には、粗粒のものから細粒のものまでがある。細粒のものは２点と少ないが、いずれも直方体をした定形的なものである。粗粒・中粒のものにも定形的なものが多いが、比較的大形で不定形のものも含まれ、中には円礫を全く加工せずに使用したものもある。粘板岩製の砥石には、板状ないしは棒状の形状をして、使用面が少なく、整形時の剥離面が残るものが多い。一方で、前項で述べたように粘板岩製の板碑はかなりの小片となって出土する。これらの破損面は摂理に沿っているために意図的な割りかどうかの判断は難しいが、板碑が自然に小片にまで破損するとは考えられず、またこれらが他の遺物と同様な分布状況を示すことから、再利用のために破壊されていた可能性が高い。粘板岩製の砥石には、文字の記された板碑片を素材としているものはないが、板碑の再利用は主に砥石への転用と考えられよう。凝灰岩製の砥石はすべて細粒で、定形的なものである。軽石製の砥石は転石をそのまま使用したものである。

砥石には凝灰岩や砂岩製の定形的なものがあるとともに、手近にある粘板岩・軽石・珪化木・砂岩を利用して臨機的に調達されたものとがあると考えられる。前者はおそらく商品として流通していたものであろう。

⑪動物遺体

ウマの出土が最も多く、他にイヌ・ウシ・ニホンジカがある(表 18)。ウマは全て遊離した部位骨の出土で、埋葬されたものはない。保存環境の問題があるが、顎部あるいは歯が多い。イヌはＳＤ50 で同一個体と見られる頭蓋･下顎骨がまとまって出土している。ＳＤ66 出土のイヌは、山内(1958)の推定式を用いて上腕骨の全長から推定すると、体高約 44.6㎝の中型犬となる。これは鎌倉材木座遺跡(雄

約46.8㎝・雌約42.6㎝、茂原・小野寺1987）や草戸千軒町遺跡（雄約44.8㎝、雌約44.7㎝、茂原・松井1995）出土の中世犬とほぼ同大である。

調査区	遺構	種名	部位名	左右	備考
	SD49	ウマ	上顎歯	L	
		ウマ	上顎歯(M3)	L	
		ウマ	橈骨	L	近位～中位
		ウマ/ウシ	不明四肢骨	不明	腓骨近位？
	SD50	ニホンジカ	下顎骨	R	臼歯列長(上)(92.5)、前臼歯列長(34.6)、後臼歯列長(60.5)、M1(15.75×－)、M2(18.2×－)、M3 (24.9×10.1)
		ウマ	中手骨	不明	近位端・遠位端欠損
		ウマ/ウシ	仙骨		
		イヌ	頭蓋骨		同一個体
		イヌ	下顎骨	L	L 下顎体高(1)(26.9)、下顎体高(2)(26.2)、下顎体高(3)(25.5)、下顎体厚(13.25)、M1(19.1×7.95)
		イヌ	下顎骨	R	
		ウマ	大腿骨	L	遠位
		イヌ	上腕骨	L	中位～遠位端
	SD66	イヌ	上腕骨	R	全長142.3、上端最大幅26.3、下端最大幅28.7 → 体高44.56cm
		ウシ	下顎歯(M3)	L	
	SD201	ウマ	上顎歯	L	
	SD201C	ウマ	上顎歯	R	
	SD201C	ウマ	橈骨	R	中位
	SD213	ウマ	上腕骨	L	中位
1区	SD01	ウマ	下顎歯(P2＋後臼歯)	L	
		ウマ	下顎歯(M3＋後臼歯)	R	
2区	SK200	ウマ	上顎歯	R	
2区	SK219	イヌ	尺骨	L	尺骨頭・肘頭欠損
3区	SK246	ウマ	脛骨	R	遠位
1区	遺構外	ウマ/ウシ	肋骨	L	
1区	遺構外	ウマ	下顎歯	不明	
1区	遺構外	ウマ	下顎歯	不明	

表18　出土動物遺体一覧

第７章．自然科学的分析結果

(1)　一本柳遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社　パレオ・ラボ　　**松　葉　礼　子**

1．はじめに

宮城県小牛田町にある一本柳遺跡出土木材の樹種同定をした。遺跡の年代は、大まかに中世前期と推定されており木製品の年代もこれらに準ずると考えられる。これらの木製品の樹種を同定する事により、遺物の性格を知る一端となすことを目的として調査した。

2．方法と記載

同定には、木製品から直接片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版ａ）、接線断面（板目と同義・写真図版ｂ）、放射断面（柾目と同義・写真図版ｃ）の３方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とするとともに同定根拠を後述する。結果は、表 20 一本柳遺跡の樹種同定結果に示す。作成した木材組織プレパラートは、標本番号(MIG106～169)を付し(株)パレオ・ラボで保管されている。

同定根拠

モミ属　*Abies*　sp.　PINACEAE　　写真図版１ａ～1ｃ

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。仮道管内壁に螺旋肥厚はなく、放射組織は柔細胞のみからなり単列同性。その水平壁には単穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型のスギ型で、一分野に 1～4 個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定された。モミ属にはモミを始めとして、5 種が含まれる。

アカマツ　*Pinus　densiflora*　Sieb.　et　Zucc.　PINACEAE　　写真図版２ａ～2c

水平・垂直両樹脂道をともに持つ針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭、垂直樹脂道が晩材部に見受けられる。垂直・水平両樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞があるが薄壁の為壊れて確認できない。放射組織は単列同性と、水平樹脂道を含む紡錘形のものからなる。放射組織の上下端に見られる放射仮道管の水平壁には鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、一分野に 1～2 個。

以上の形質から，マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道～屋久島の温帯から暖帯にかけて分布する。

スギ　*Cryptomerica　japonica*（L.fil.）D.Don　TAXODIACEAE　　写真図版３ａ～3ｃ

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行は急で、年輪界は明瞭である。樹脂細胞が早材部から晩材部にかけて散在する。放射組織は放射柔細胞からなり単列同性。分野壁孔は、大型のスギ型で、通常一分野あたり2個存在する。

以上の形質により、スギ科のスギの材と同定した。スギは、常緑の針葉樹で、本州～屋久島の温帯から暖帯、主として太平洋側に多く存在している。

ヒノキ　*Chamaecyparis　obtusa*（Sieb.et Zucc.）Endl. CUPRESSACEAE　　写真図版4ａ～4ｃ

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に散在しており、水平壁は結節状に肥厚している。放射組織は単列同性。放射柔組織からなり、単列同性。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で、一分野に1～3個。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。ヒノキは、常緑高木の針葉樹で福島県～屋久島の温帯に分布する。

アスナロ　*Thujopsis　dolabrata* Sieb. et Zucc. CUPRESSACEAE　　写真図版5ａ～5ｃ

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急で、晩材部が比較的多い。樹脂細胞は早材部から晩材部にかけて接線方向に散在する。放射組織は背の低い単列で、柔細胞のみからなる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野あたり2～4個存在している。

以上の形質により、ヒノキ科のアスナロの材と同定した。アスナロは、本州～九州に分布する常緑高木の針葉樹である。

クリ　*Castanea　creneta* Sieb. et Zucc. FAGACEAE　　写真図版6ａ～6ｃ

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から単接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道から九州までの温帯下部から暖帯にわたって広く分布する落葉性高木、あるいは中高木で、果実が食用とされる。

ブナ属　*Fagus*　sp. FAGACEAE　　写真図版7ａ～7ｃ

小型で丸い管孔が年輪界に向けて徐々に径を減じながら散在する散孔材。道管の穿孔は単一、もしくは横棒の少ない階段状。放射組織は巾の広い複合状～単列のものまであり同性。

以上の形質により、ブナ科のブナ属の材と同定された。ブナ属には、北海道～九州の温帯に分布するブナと本州（岩手県以南）～九州の中間温帯に分布するイヌブナとが含まれる。

ケヤキ　*Zelkova　serrata*（Thunb.）Makino　ULMACEAE　　写真図版8ａ～8ｃ

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、薄壁の多角形の小道管が多数集合

して接線方向～斜め接線方向に配列する。道管穿孔は単一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周囲状～連合翼状を呈し、放射組織は1～8列程度の異性で、その上下端は時に大きめの結晶細胞が見られる。

以上の形質により、ニレ科のケヤキの材と同定した。ケヤキは、本州～九州の暖帯～温帯に広く分布する。

イヌエンジュ *Maakia amurensis* Rupr.etMaxim.subsp. buergeri (Maxim.) Kitam. LEGUMINOSAE 写真図版9ａ～9ｃ

大型でやや壁の厚い管孔が年輪の始めに 1～3 列ほど並び、晩材部では径を減じ、薄壁で多角な管孔が、集合し斜め～接線方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、横断面では周囲状～翼状、接線方向では階層状に配列する。放射組織は同性で1～6細胞幅程度。

以上の形質から、マメ科のイヌエンジュの材と同定した。北海道～中部地方以北の山地の林縁や河岸に野生する。

クマノミズキ類 *Cornus cf. brachypoda* C.A.Meyer CORNACEAE 写真図版10ａ～10ｃ

やや小型の丸い道管が、ほぼ単独で散在する散乱材。道管の穿孔は、20～30本程の横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状、放射組織は、異性で2～4細胞幅くらい。上下端に直立細胞を持つ紡錘形のものと、直立細胞のみからなるものがある。

以上の形質から、ミズキ科のクマノミズキとヤマボウシのいずれかの材と同定された。ミズキとは、道管が複合しない事により区別した。

ムラサキシキブ属 *Callicarpa* sp. VERBENACEAE 写真図版11ａ～11ｃ

小型で壁の厚い道管が、単独もしくは放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は単一。道管相互壁孔は小型で密に分布する。放射組織は不揃いで、3細胞幅程度異性で背が高い。

以上の形質により、クマツヅラ科のムラサキシキブ属の材と同定した。日本に自生するムラサキシキブ属には、ムラサキシキブ、ヤブムラサキ等9種が含まれ、いずれも落葉低木である。

3. 考 察

今回調査した木製品は、桶、曲物、柄杓、漆器、箸、栓、連歯下駄、板草履等の日常生活用品である。

具体的に製品ごとにその使用樹種を考察してゆく(表 19 参照)。曲物、桶といった製品は、製作上の問題から、針葉樹材、特にスギ、ヒノキが使用されるが、柄にはイヌエンジュ、ムラサキシキブ属が使用されている。本体部分以外の、樹種の影響が少ない部位に使用され、補修もしくは針葉樹材の代用であろう。漆器でも、ろくろ挽きしやすく丈夫なケヤキ材が使用される一方、柔らかく加工しやすいが、保存性の悪いブナ属材も利用されている。近世での(多賀城市山王遺跡町地区)挽物・漆器の

製品名	部 位	モミ属	アカマツ	スギ	ヒノキ	ヒノキ属	アスナロ	クリ	ブナ属	ケヤキ	イヌエンジュ	クマノミズキ類	ムラサキシキブ属
曲物桶	側板			1									
曲物桶	底板			1									
曲物桶	柄										2		
曲物	側板			1	2								
曲物	底板			3	1		1						
柄杓	側板					1							
柄杓	底板			1									
柄杓	柄												1
漆器									9	5			
箸				5									
栓												1	
連歯下駄								2		1			
板草履			2	15		1							
柱(古代)								2					
付札		1											
錐柄					1								
底板				1									
側板				1									
不明品		1		1									

表19　樹種

ブナ属材使用と、中世以前のケヤキ材使用（多賀城市市川橋遺跡、山王遺跡多賀前地図）の両者が確認される。山王遺跡多賀前地区（9 世紀末～10 世紀初頭）、市川橋遺跡館前地区（7～9 世紀）では、挽物にブナ属は確認されておらず、挽物にブナ属を使用するのは市川橋遺跡館前地区の 10 世紀以降からの傾向のようである。この時代前後に宮城県では挽物が一般化したとも考えられる（松葉 1997ａ,ｂ,ｃ）。木地屋などの職業としての轆轤工とも関係していると思われる。

板草履であるが、鎌倉市佐助ヶ谷遺跡で同様の製品、草履芯が計 5117 点も出土している(佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 1993)。使用方法は 2 枚の薄板を芯にして、表裏に藁等を編み、これに鼻緒をつけて履く製品である。残念ながら佐助ヶ谷遺跡の、樹種の同定はされていないが、本遺跡の製品は、スギが 15 点で、アカマツが 2 点、ヒノキが 1 点であった。いずれも針葉樹であるのは、割裂しやすく、板状の製品が取り易い為であると考えられる。

全体的には、スギをはじめとした針葉樹材利用が進んでいるが、中世以前の山王遺跡多賀前地区や、市川橋遺跡館前地区で最も多かった針葉樹材であったモミ属は、2 点しか無く、丘陵部でのモミ属の極相林の資源の枯渇が伺われる。モミ属に替ってスギ材が日常的な製品に多く使用されている。山王遺跡町地区ではヤナギ属、ウツギなどの近隣の広葉樹林を用いていた箸も、本遺跡ではいずれもスギ材である。しかし、柱のような保存性が問題になる建築材では、耐久性のあるクリを使用するなど、古代から見られた樹種の選択性は残っており、近世の江戸の様な(細工町遺跡：能代 1992)用材選択性のないヒノキ属への極端な集中と言うわけではなく、古代の要素も残し、移行期の様な状態といえる。

引用文献

佐助ヶ谷遺跡発掘調査団．　1993．　佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書 第 2 分冊，456pp．

能代修一．　1992．　細工町遺跡，174-187pp．　新宿区厚生部遺跡調査会．

松葉礼子．　1997ａ．　山王遺跡多賀前地区出土木材の樹種同定．　宮城県教育委員会．

松葉礼子．　1997ｂ．　山王遺跡跡町地区出土木材の樹種同定．　宮城県教育委員会．

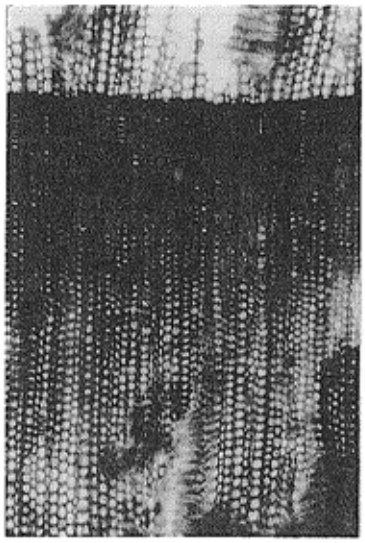
松葉礼子．　1997ｃ．　市川橋遺跡出土木製品の樹種同定．　宮城県教育委員会．

No		樹　種	製品名	部位等	備　考	木取り	木No	遺　構	時 期
MIG	106	スギ	折敷	底板		柾目	150	SK246	中世
MIG	107	スギ	板草履			柾目	158	SD50	中世
MIG	108	クマノミズキ類	栓？			芯持ち丸木	152	SD201A	中世
MIG	109	ケヤキ	漆器	椀	黒地赤紋様	縦木取り	149	SK246	中世
MIG	110	ケヤキ	漆器	皿		横木取り	145	SE41	中世
MIG	111	スギ	板草履	薄板状		柾目	144	SD50	中世
MIG	112	ヒノキ	折敷	側板		柾目	143	SE216	中世
MIG	113	スギ	板草履			柾目	130	SD50	中世
MIG	114	スギ	板草履			板目	129	SD50	中世
MIG	115	ケヤキ	下駄	連歯下駄		板目	35	SE235	中世
MIG	116	クリ	下駄	連歯下駄		板目	21	SD50	中世
MIG	117	ブナ属	漆器	椀		横木取り	131	SD49	中世
MIG	118	スギ	板草履			板目	120	SD49	中世
MIG	119	スギ	板草履				116	SD50	中世
MIG	120	アスナロ	曲物	底板			109	SK219	中世
MIG	121	スギ	板草履			板目	103	SE252	中世
MIG	122	ケヤキ	漆器	破片	黒地無地	横木取り	20	SD49	中世
MIG	123	ケヤキ	漆器	椀		横木取り	79	SE220	中世
MIG	124	ブナ属	漆器	椀	赤漆(黒地)	横木取り	13	SD 不明	中世
MIG	125	スギ	曲物	側板		柾目	60	SE29	中世
MIG	126	スギ	曲物	底板		柾目	60	SE29	中世
MIG	127	ブナ属	漆器	椀	黒地に赤	横木取り	14	SD201C	中世
MIG	128	スギ	底板		片面漆	柾目	26	SE221	中世
MIG	129	クリ	下駄	連歯下駄	焦げあり	板目	59	SD50	中世
MIG	130	ブナ属	漆器	椀	黒地に赤	横木取り	63	SD66B	中世
MIG	131	ブナ属	漆器	椀	黒地に赤	横木取り	82	SD201C	中世
MIG	132	アカマツ	板草履				128	SD50	中世
MIG	133	ヒノキ	錐？		金属残存		10	SD49B	中世
MIG	134	ケヤキ	漆器	椀		横木取り	9	SD50	中世
MIG	135	スギ	板草履			柾目	93	SD50	中世
MIG	136	スギ	板草履			柾目	94	SD50	中世
MIG	137	スギ	板草履			柾目	92	SD50	中世
MIG	138	スギ	板草履			柾目	95	SD50	中世
MIG	139	ブナ属	漆器	椀	黒地赤文様	横木取り	27	SD201A	中世
MIG	140	スギ	板草履			柾目	88	SD50	中世
MIG	141	スギ	箸	角箸			8	SD49	中世
MIG	142	スギ	箸	角箸			57	SD49	中世
MIG	143	ブナ属	漆器	椀	黒無地	横木取り	78	SD50	中世
MIG	144	ヒノキ属	板草履		鼻付着	板目	16	SD50	中世
MIG	145	スギ	箸	角箸	両端削り		19	SE258	中世
MIG	146	スギ	板草履			柾目	157	SD50	中世
MIG	147	スギ	板草履			板目	40	SD50	中世
MIG	148	スギ	板草履				51	SD213	中世
MIG	149	ヒノキ	曲物	底板	墨書あり		7	SE220	中世
MIG	150	モミ属	付札		文字アリ	板目	39	SD49	中世
MIG	151	アカマツ	板草履			板目	56	SD49	中世
MIG	152	スギ	箸	角箸	片方削り		53	SE257	中世
MIG	153	スギ	箸	角箸	両方削り		25	SK 不明	中世
MIG	154	スギ	曲物	底板		柾目	52	SK70	中世
MIG	155	ブナ属	漆器	椀	黒地赤紋様	横木取り	23	SD201C	中世
MIG	156	ブナ属	漆器	椀	黒地赤紋様	横木取り	18	SD201A	中世
MIG	157	ヒノキ属	曲物柄杓	側板	曲物	柾目	32	SE252	中世
MIG	158	スギ	曲物柄杓	底板	曲物	柾目	32	SE252	中世
MIG	159	ムラサキシキブ属	曲物柄杓	柄			32	SE252	中世
MIG	160	スギ	曲物手桶	側板		柾目	33	SE79	中世
MIG	161	イヌエンジュ	曲物手桶	把手			33	SE79	中世
MIG	162	スギ	曲物手桶	底板			33	SE79	中世
MIG	163	モミ属	不明				70	SD49	中世
MIG	164	スギ		側板			132	SE252	中世
MIG	165	クリ	柱				162		古代
MIG	166	クリ	柱				163		古代
MIG	167	イヌエンジュ	桶	把手			33	SE79	中世
MIG	168	スギ	不明	不明	両端穴縦溝	柾目	69	SE258	中世
MIG	169	ヒノキ	折敷	側板		柾目	133	SE256	中世

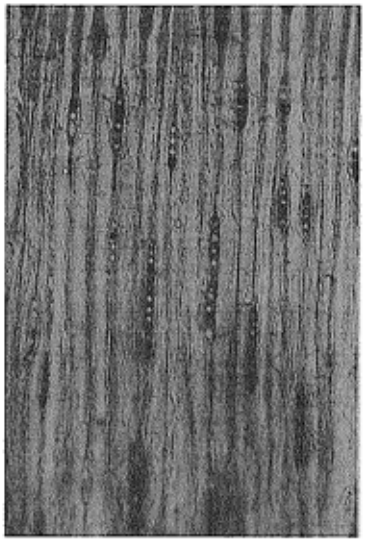
表20　一本柳遺跡の樹種同定結果

図版１　一本柳遺跡出土木材顕微鏡写真

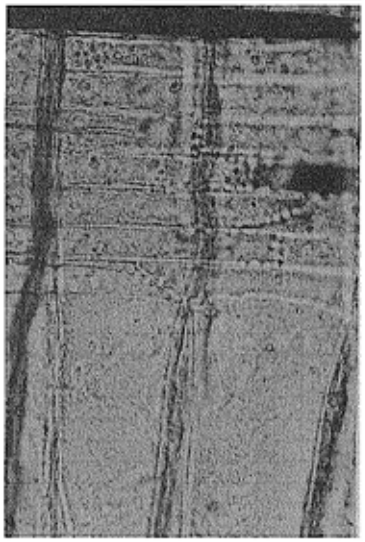
Bar: [redacted]



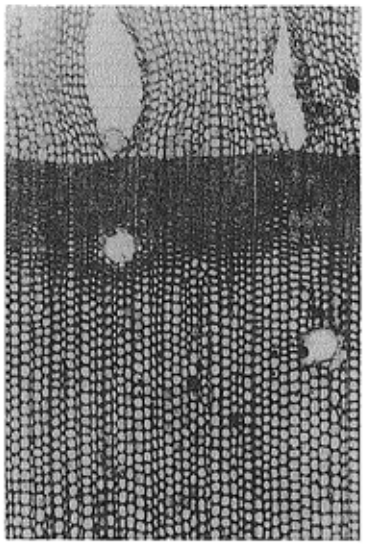
１ａ　モミ属　bar:1mm MIG163



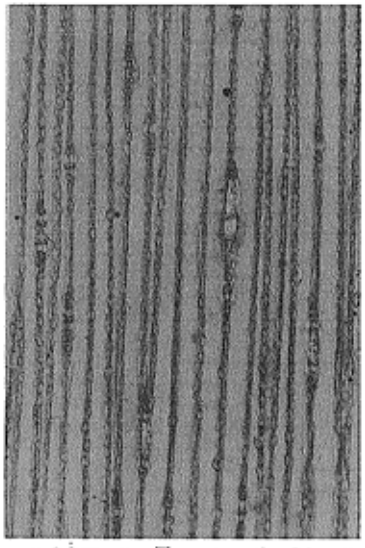
１ｂ　同　bar:0.4mm



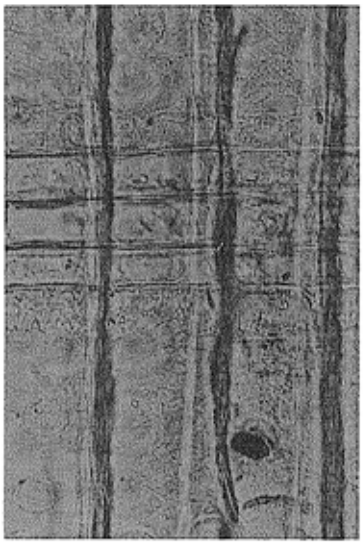
１ｃ　同　bar:0.1mm



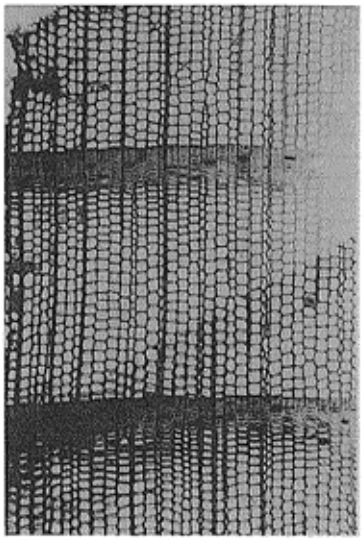
２ａ　アカマツ　bar:1mm MIG128



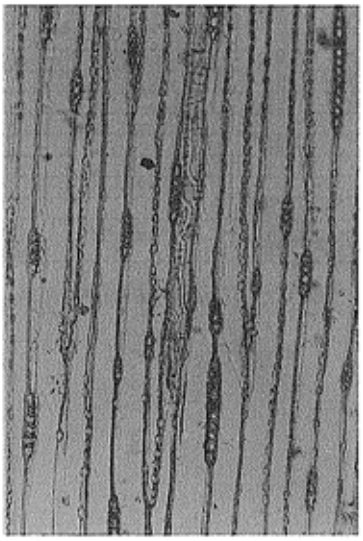
２ｂ　同　bar:0.4mm



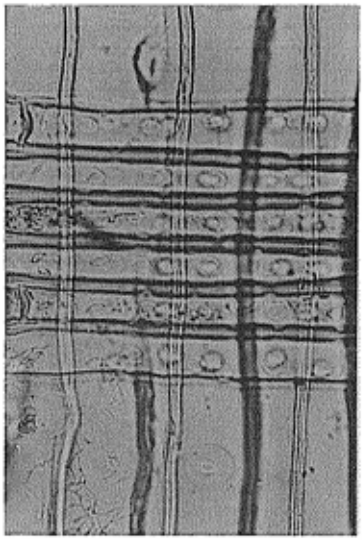
２ｃ　同　bar:0.1mm



３ａ　スギ　bar:1mm MIG107



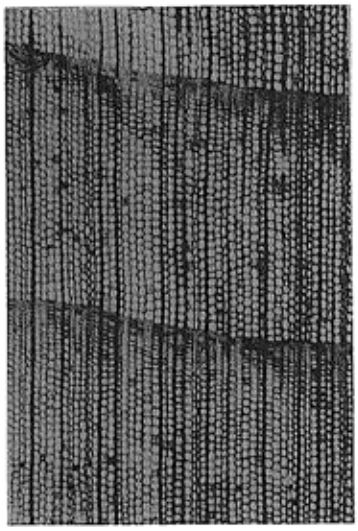
３ｂ　同　bar:0.4mm



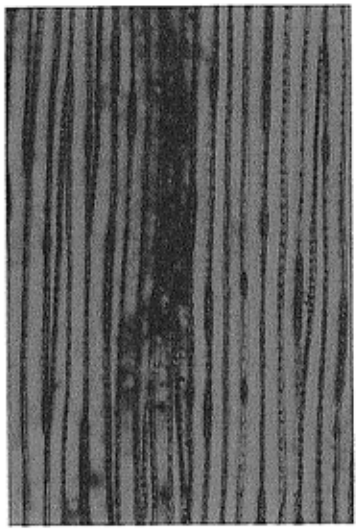
３ｃ　同　bar:0.1mm

図版 2　一本柳遺跡出土木材顕微鏡写真

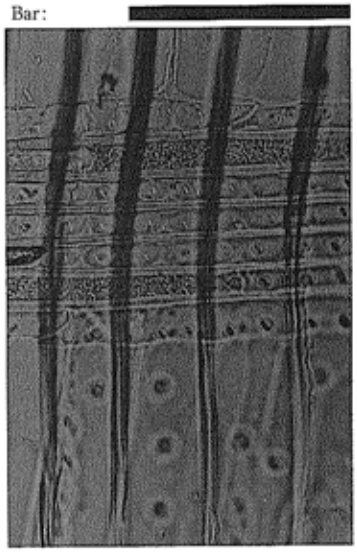
Bar: [redacted]



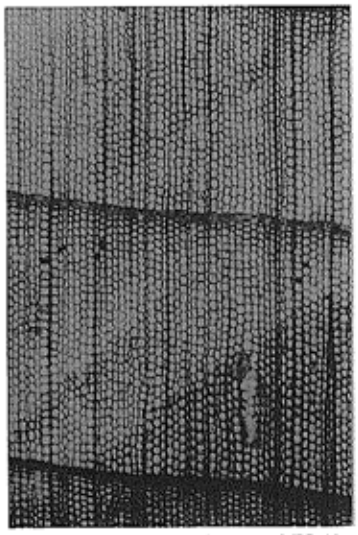
4 a　ヒノキ　bar:1mm MIG149



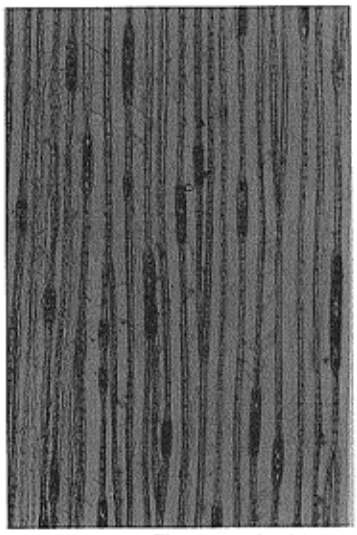
4 b　同　bar:0.4mm



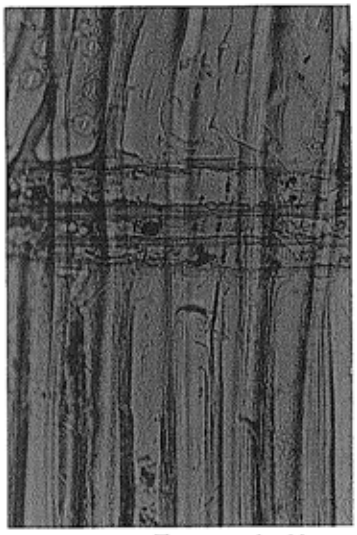
4 c　同　bar:0.1mm



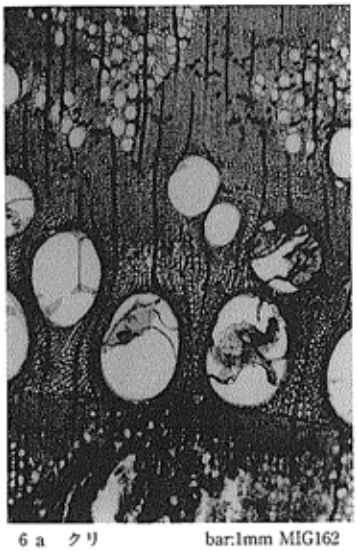
5 a　アスナロ　bar:1mm MIG109



5 b　同　bar:0.4mm

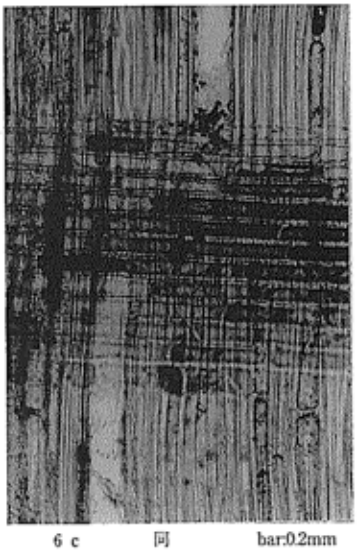


5 c　同　bar:0.1mm



6 a　クリ　bar:1mm MIG162

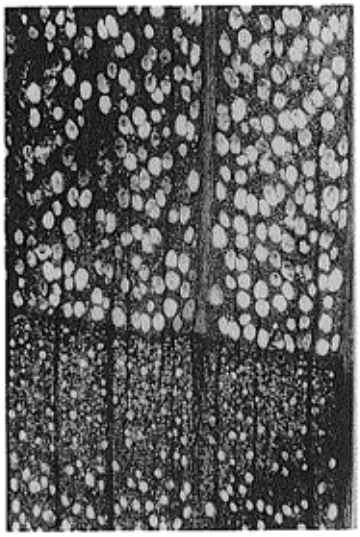
6 b　同　bar:0.4mm



6 c　同　bar:0.2mm

図版 3　一本柳遺跡出土木材顕微鏡写真

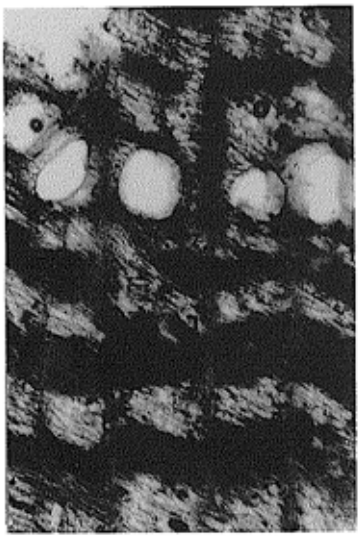
Bar: [redacted]



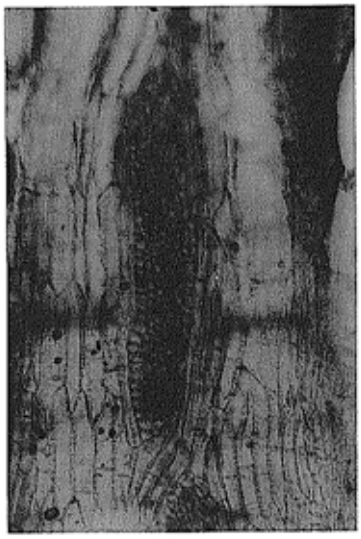
7 a　ブナ属　bar:1mm MIG127

7 b　同　bar:0.4mm

7 c　同　bar:0.2mm

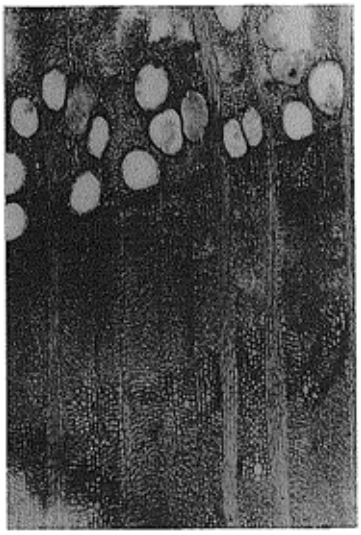


8 a　ケヤキ　bar:1mm MIG134



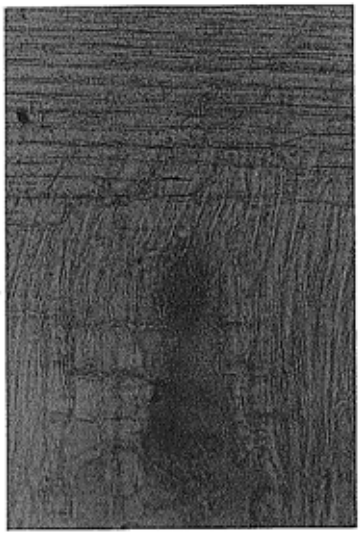
8 b　同　bar:0.4mm

8 c　同　bar:0.2mm



9 a　イヌエンジュ　bar:1mm MIG161

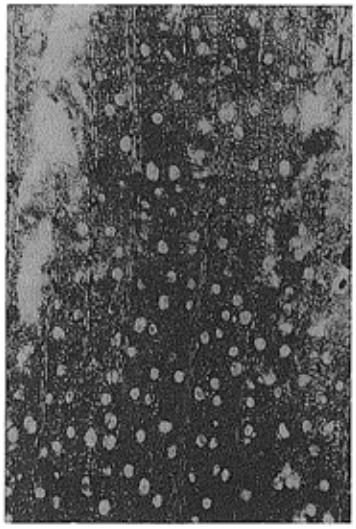
9 b　同　bar:0.4mm



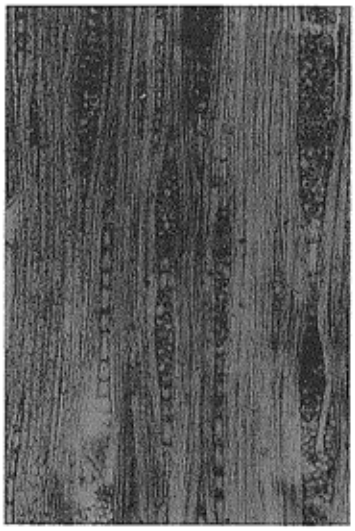
9 c　同　bar:0.2mm

図版 4　一本柳遺跡出土木材顕微鏡写真

Bar: [redacted]



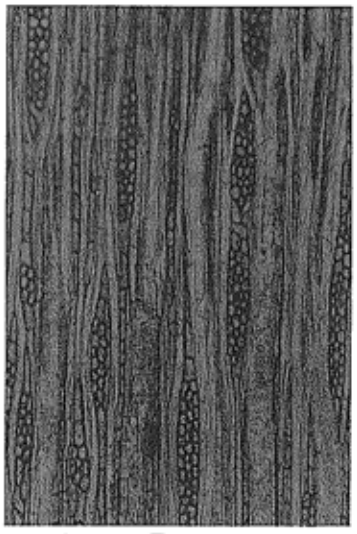
10 a　クマノミズキ類　bar:1mm MIG152



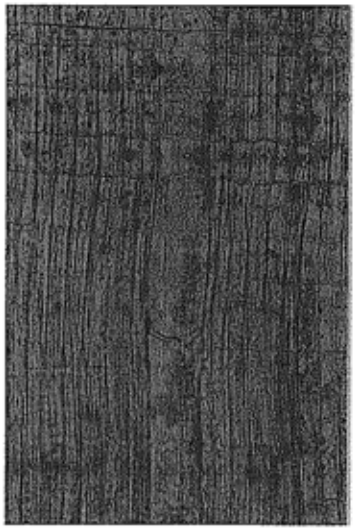
10 b　同　bar:0.4mm

10 c　同　bar:0.2mm

11 a　ムラサキシキブ属 bar:1mm MIG159



11b　同　bar:0.4mm



11 c　同　bar:0.2mm

(2) 宮城県、一本柳遺跡における種実同定分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

残存種実は、花粉や木材などの他の植物遺体に比べ、種のレベルまで同定ができることから、より具体的な植生や農耕を推定することが可能である。また、残存性が比較的悪く、偏った遺体形成もなされるため、局地性が高いことも多い。ここでは、一本柳遺跡より採取された井戸内堆積物の種実同定分析を行い、植生および農耕について検討を行った。

2. 試 料

試料は、ＳK253-6 層、ＳE257-8 層、ＳE258-3 層、ＳE268-11 層の堆積物の 4 点である。

3. 方 法

試料(堆積物)800 ccを 0.25㎜ 目の篩を用いて水洗選別を行った。観察は肉眼および実体顕微鏡で行い、同定は形態的特徴および所有の現生標本との対比で行った。なお、同定レベルによって、種、属、科の各階級によって表した。

4. 結 果

分析の結果、樹木 1、草本 33 の分類群が同定された。分類群および個数を結果表に示す。以下に主要な分類群の特徴を記す。

〔樹木〕

ａ．クワ属 *Morus* 種子 クワ科

茶褐色で広倒卵形を呈し、基部に突起がある。表面はやや粗い。長さ 2.2㎜、巾 1.6㎜。

〔草本〕

ｂ．オオムギ *Hordeum vulgare* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。長さ 5㎜ 前後、幅および厚さ 2.5～3.0㎜ 程度。

ｃ．エノコログサ属 *Setaria* 果実 イネ科

果実Ａは表面に横方向の微細な隆起がある。果実Ｂは炭化しており円形を呈し、胚がくぼむ。大きさ 3㎜ 内外。

ｄ．イネ *Oryza sativa* L. 穎 果実（炭化） イネ科

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し、下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。破片である。

果実は黒色で炭化している。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。長さ 4.0㎜、幅 2.0㎜ 前後。

ｅ．イネ科 Gramineae 果実、穎

果実Ａは球形を呈し、果実Ｂは溝があり、先端がとがる。穎は先端のとがる楕円形を呈する。

ｆ．カヤツリグサ属　*Cyperus*　果実　カヤツリグサ科

黒色で狭倒卵形を呈し、断面三角形である。長さ1.5㎜、幅0.4㎜。

ｇ．スゲ属　*Carex*　果実　カヤツリグサ科

Ａは黒色で倒卵形、扁平である。長さ 3.0㎜。Ｂは黒色で狭倒卵形を呈し断面三角形である。長さ2.5㎜。

ｈ．カヤツリグサ科　Cyperaceae　果実

Ａは黒色で倒卵形を呈し扁平で表面に微細な編目模様がある。長さ 1.5㎜、幅 1.0㎜。Ｂは黒色で広倒卵形を呈し断面は扁平である。長さ 2.5㎜、幅1.4㎜。Ｃは茶褐色で狭倒卵形を呈し、断面形は三角形である。長さ1.1㎜、幅0.8㎜。Ｄは茶褐色で広倒卵形を呈す。断面は三角形である。長さ1.0～1.25㎜、幅0.6～1.0㎜。

ｉ．コナギ　*Monochoria vaginalis* Presl　var.plantaginea　Solms-Lanb.　種子　ミズアオイ科

淡褐色で楕円形を呈す。表面には縦方向に 7～9 本程度の隆起があり、その間を横方向の密な隆線が走る。長さ0.7㎜、幅0.3㎜。

ｊ．アサ　*Cannabis sativa* L.　種子　クワ科

茶褐色で広卵形を呈す。一端には円形のへそ部がある。アサは南アジアや中央アジア原産とされる1年草の畑作物である。茎皮の繊維は麻糸になり、種子は油を採ったり食用になる。

ｋ．タデ属　*Polygonum*　果実　タデ科

Ａは黒褐色でやや光沢があり断面三角形である。長さ 0.8～1.0㎜、幅 0.6～0.8㎜。Ｂは黒色で広卵形を呈し表面には網目模様がある。断面は両凸レンズ形である。長さ0.8㎜、幅0.6㎜。

ｌ．アカザ属　*Chenopodium*　種子　アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。径1.1㎜。

ｍ．ヒユ属　*Amaranthus*　種子　ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し、一ヶ所が切れ込み、へそがある。断面は両凸レンズ形である。径1.1㎜。

ｎ．ナデシコ科　Caryophyllaceae　種子

黒色で円形を呈し、側面にへそがある。表面全体に突起がある。Ａは径0.5㎜以上、Ｂは径0.5㎜以下である。

ｏ．カタバミ属　*Oxalis*　種子　カタバミ科

茶褐色で楕円形を呈し、上端がとがる。両面には横方向に 6～8 本の隆起が走る。長さ 1.3㎜、幅0.8㎜。

ｐ．シソ属　*Perilla*　果実　シソ科

茶褐色で球形を呈し、下端にへそがある。表面には大きい網目模様がある。径1.5㎜以上。

ｑ．ナス科　Solanaceae　Ａ・Ｂ　種子

Ａは黄褐色で円形を呈す。表面にはやや大きい網目模様がある。径2.0㎜。

ｒ．メナモミ　*Siegesbeckia pubescens* Makino　果実　キク科

黒色で倒卵形を呈し、一端は切形で、他端は細く曲る。表面は粗く、断面はひし形である。長さ 3.1㎜、幅 1.1㎜。

5. 考 察

(1) 遺体群集の特徴

1) ＳK253

主に、オオムギとアカザ属の 2 種で構成される。オオムギは畑作物であり、アカザ属は食用や薬用にもなる畑地の雑草であり、畑作要素の強い遺体群である。偏った構成であり人為的要因によって形成された遺体群と考えられる。

2) ＳE257

主に、イネ(頴)、オオムギ、ナデシコ科、タデ属から構成される。イネ、オオムギ、アサは栽培植物であり、ナデシコ科やタデ属は畑作に伴う雑草としての性格が強く、本遺体群は栽培植物と畑作雑草により構成される。

3) ＳE258

オオムギとアカザ属の 2 種で主に構成される。ＳK253 と同じく畑作要素の強い遺体群で、人為的要因の介在によって偏って形成された遺体群と考えられる。

4) ＳE268

イネ科、イネ(頴)、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ属、ナデシコ科、シソ属を主に構成される。イネは栽培植物であり、イネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ属、ナデシコ科、シソ属は畑地雑草ないし人里植物の性格をもつものであり、本遺体群は畑地ないし人里の雑草とイネによって構成される。

(2) 栽培植物と農耕

明らかな栽培植物としてはオオムギ、イネ、アサが検出された。アカザ属は葉が食用になるアカザが含まれるが、畑作雑草でもある。ＳK253、ＳE258 ではオオムギとアカザ属を主とする偏った構成であり、利用され投棄された遺体が井戸内に流入したりして形成されたとみられる。ＳE257、ＳE268 のイネ(頴)も同様の要因で形成されたとみられる。

遺構によって種実構成はかなり偏るが、栽培植物を除き主要に出現するイネ科、カヤツリグサ科、タデ属、アカザ属、ナデシコ科、シソ属はいずれも畑作雑草ないし人里植物の性格をもつ草本ばかりである。遺構の周囲にはこれらの草本が生育し、比較的排水のよい乾燥した畑地や人里の環境であったと推定される。

参考文献

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.
笠原安夫（1984）鳥浜貝塚（第 6・7 次発掘）のアサ種実の同定について.鳥浜貝塚,福井県立若狭歴史民俗資料館, p.80-89.
笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類． 弥生文化の研究第 2 巻生業，雄山閣出版，p.131-139.

分類群		(800cc 中)	SK253	SE257	SE258	SE268
学名	和名	部位	6 層	8 層	3 層	11層
arbor	樹木					
Morus	クワ属	種子		1		
herb	草木					
Hordeum vulgare L.	オオムギ	果実	127	11	61	
Setaria A	エノコログサ属 A	果実		1		2
Setaria B	エノコログサ属 B	果実				1
Oryza sativa L.	イネ	果実			5	1
		穎		45		43
Gramineae A	イネ科 A	果実			3	
Gramineae B	イネ科 B	果実	2		1	
Gramineae	イネ科	穎	2	2		40
Cyperus	カヤツリグサ属	果実		2		21
Eleocharis	ハリイ属	果実				1
Scirpus	ホタルイ属	果実				1
Carex A	スゲ属 A	果実				1
Carex B	スゲ属 B	果実				1
Carex C	スゲ属 C	果実				1
Cyperaceae A	カヤツリグサ科 A	果実		1		18
Cyperaceae B	カヤツリグサ科 B	果実			3	17
Cyperaceae C	カヤツリグサ科 C	果実				1
Cyperaceae D	カヤツリグサ科 D	果実				7
Cyperaceae E	カヤツリグサ科 E	果実			8	
Monochoria vaginalis Presl var. plantaginea Solms Laub.	コナギ	種子				1
Cannabis sativa L.	アサ	種子		2		1
Polygonum A	タデ属 A	果実		1		16
Polygonum B	タデ属 B	果実			2	
Polygonum C	タデ属 C	果実		2		2
Polygonum D	タデ属 D	果実		11		
Polygonum E	タデ属 E	果実				3
Chenopodium	アカザ属	種子		110	18	113
Amaranthus	ヒユ属	種子		1		
Caryophyllaceae A	ナデシコ科 A	種子		28		36
Caryophyllaceae B	ナデシコ科 B	種子		3		8
Oxalis	カタバミ属	種子				1
Perilla	シソ属	果実		2		22
Solanaceae	ナス科	種子		1		
Siegesbeckia pubescens Makino	メナモミ	果実		1		4
Total	合計		131	224	101	363
Unknown	不明		0	8	1	3

表21　一本柳遺跡における種実同定結果

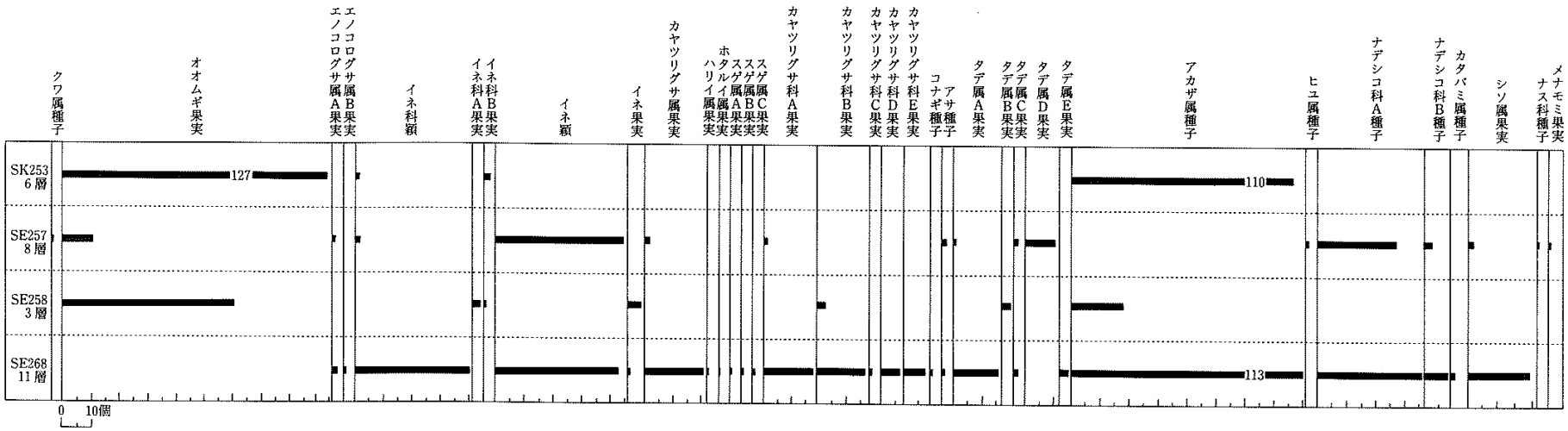
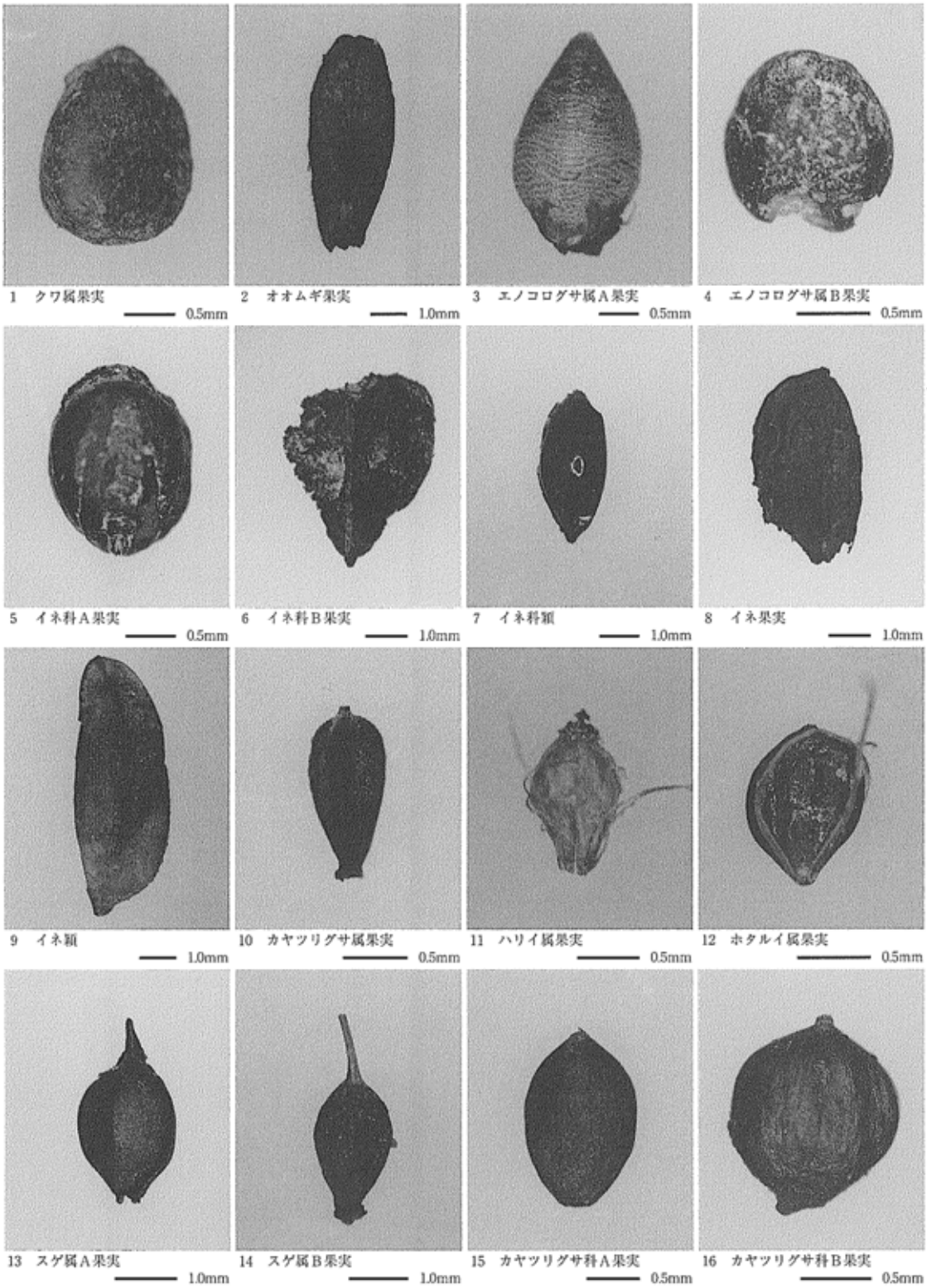


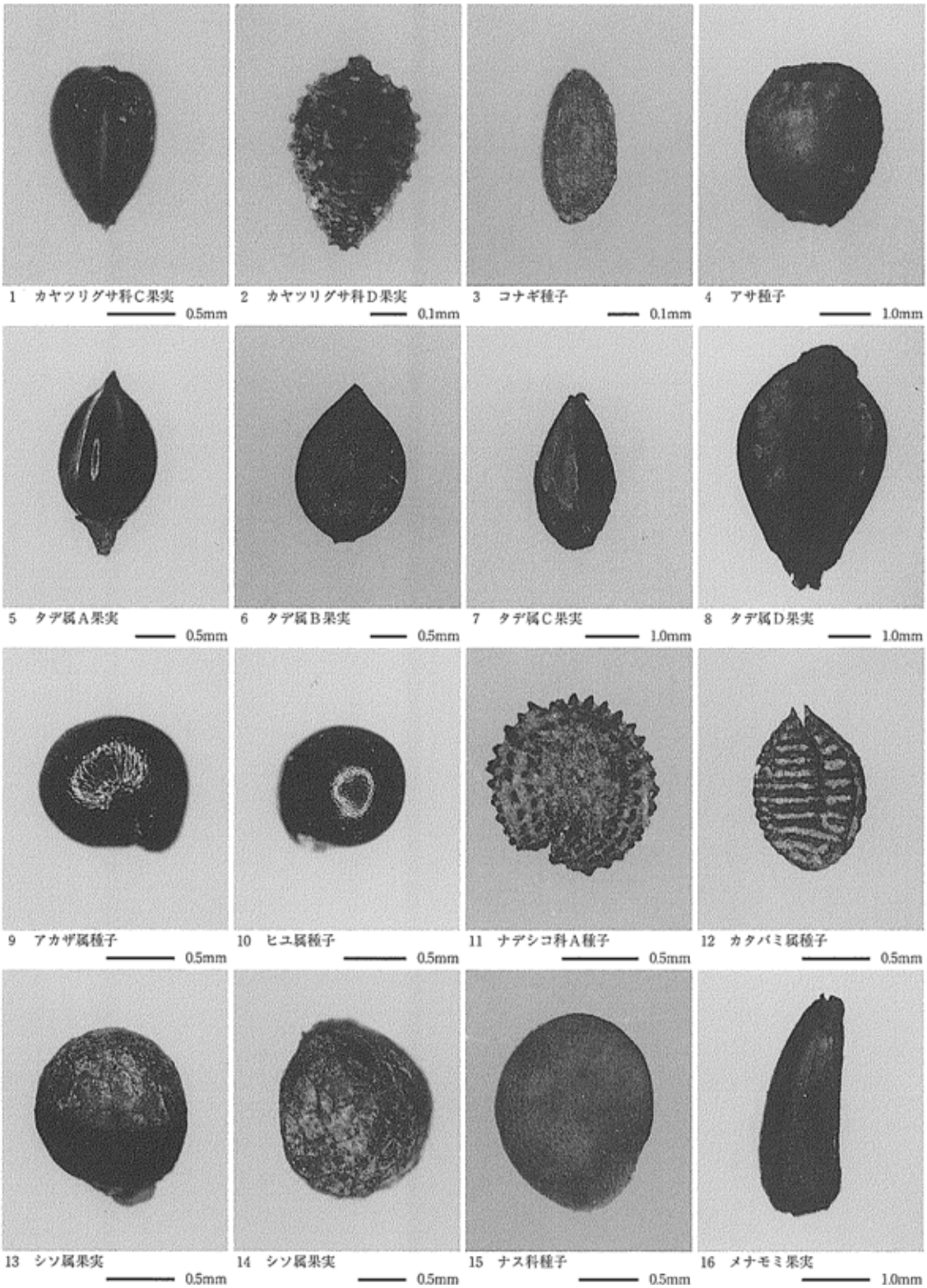
図84　一本柳遺跡における種実同定結果（0.25mm 篩800cc 中）

一本柳遺跡における種実同定結果　Ⅰ



1　クワ属果実　0.5mm
2　オオムギ果実　1.0mm
3　エノコログサ属A果実　0.5mm
4　エノコログサ属B果実　0.5mm
5　イネ科A果実　0.5mm
6　イネ科B果実　1.0mm
7　イネ科類　1.0mm
8　イネ果実　1.0mm
9　イネ類　1.0mm
10　カヤツリグサ属果実　0.5mm
11　ハリイ属果実　0.5mm
12　ホタルイ属果実　0.5mm
13　スゲ属A果実　1.0mm
14　スゲ属B果実　1.0mm
15　カヤツリグサ科A果実　0.5mm
16　カヤツリグサ科B果実　0.5mm

一本柳遺跡における種実同定結果　Ⅱ



1　カヤツリグサ科C果実　0.5mm
2　カヤツリグサ科D果実　0.1mm
3　コナギ種子　0.1mm
4　アサ種子　1.0mm
5　タデ属A果実　0.5mm
6　タデ属B果実　0.5mm
7　タデ属C果実　1.0mm
8　タデ属D果実　1.0mm
9　アカザ属種子　0.5mm
10　ヒユ属種子　0.5mm
11　ナデシコ科A種子　0.5mm
12　カタバミ属種子　0.5mm
13　シソ属果実　0.5mm
14　シソ属果実　0.5mm
15　ナス科種子　0.5mm
16　メナモミ果実　1.0mm

第 8 章．考察とまとめ

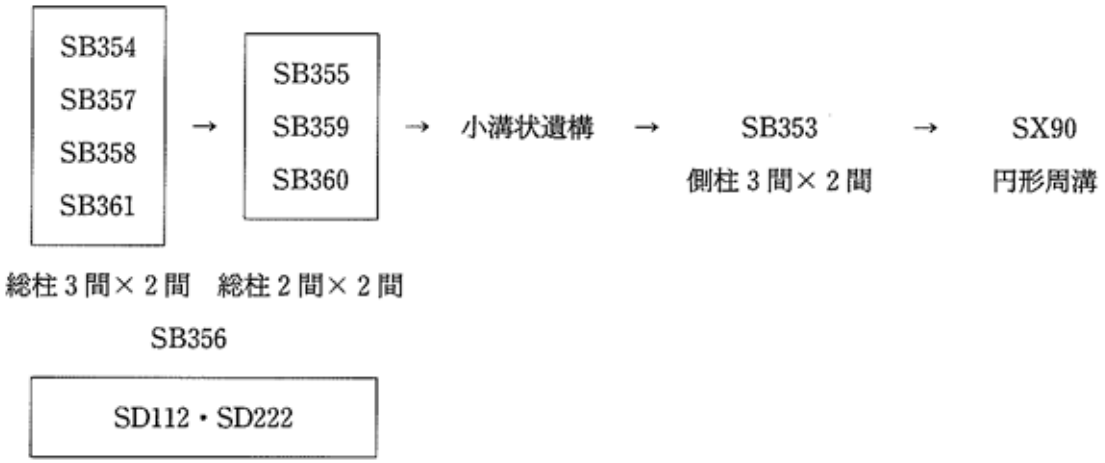
(1) 古 代

遺構の変遷・年代・性格

検出した掘立柱建物跡は、ＳB353 を除く 8 棟が倉庫と考えられる総柱の建物であり、柱穴の切り合いによってＳB354→ＳB355、ＳB358→ＳB359 という 2 つの新旧関係が把握できる。

ＳB357、ＳB360、ＳB361 は他の建物と柱穴が切り合わないが、構造(柱間)の共通性や建物間の間隔、方向などから考えるとＳB354、ＳB357、ＳB358、ＳB361 は 3 間×2 間の倉庫群を、ＳB355、ＳB359、ＳB360 は 2 間×2 間の倉庫群を構成しており、3 間×2 間の群→2 間×2 間の群へと変遷していると考えられる。

このような変遷を他の遺構も含めて整理すると、下のようになる。



これらの遺構の年代を決定する資料はごく少ない状況である。しかし、第 6 章（2）に記した通りＳD222 出土土器が 8 世紀後半～9 世紀前半に位置づけられ、他の遺構出土のわずかな資料、すなわちＳB360 柱穴(須恵器坏　図 12-1)、ＳB357 柱穴(ロクロ使用の土師器長胴甕　図 12-2)、ＳD112(ロクロ使用・回転刷毛目のある土師器長胴甕　図 14-3、注 1)も同様な年代幅の中に位置づけられることから、現段階では 2 段階の倉庫群およびＳD112・ＳD222 について、8 世紀後半～9 世紀前半という年代を与えておく。

ＳB356 は総柱の倉庫だが方向が他の倉庫群よりも北に振れているため、上記の倉庫群とは時期が異なる別の倉庫群が調査区外南側に存在する可能性が高い。

1 区東側にある 3 条の溝跡のうち、ＳD112 は一部の検出ではあるが調査区内で南北方向に直線的に延びており、倉庫群などを区画する溝の可能性がある。

2 区のＳD222 はＳD112 より大規模な溝跡で、検出部より西側にも延びていたと考えられるので、今後の調査によって範囲などを明らかにする必要がある（注 2）。

また 1 区西端のＳB353 は今回検出した唯一の側柱建物で、倉庫群の廃絶後に遺跡の構成が変化したと考えられるが、これも今後の検討課題である。

倉庫群より新しく位置づけた遺構からは年代を検討できる資料が出土しなかったが、1 区の遺構外出

土遺物には口径に対する底径の比がやや小さな須恵器坏が含まれており(図 55-6)、出土土器を総体的に見れば、年代の下限は 9 世紀前半をやや下るかと思われる。

遺構を検出した範囲は限られたものであるが、倉庫群が計画的に配置されそれらが継続的に認められることを確認した。このような点は古代の一般的な集落のありかたとは明らかに異なっており、第 3 次調査以降に南側の様相が明らかとなった段階で、遺構の分布や変遷・遺跡の構成を検討し性格を明らかとしたい。

（注 1）ロクロ調整の甕に見られる回転刷毛目は 8 世紀後半に現れ 9 世紀後半の早い段階には消滅するという（佐藤・村田 1996）。

（法 2）ＳＤ222 検出部の西延長線は中世の溝跡ＳＤ49・50 の直下となり、溝の方向はＳＢ353・355・359・361 などの北側柱筋とおおむね揃ってくる。断定はしかねるが、ＳＤ222 はかなり広い範囲を区画していた溝かとも考えられる。

(2) 中 世

Ａ．陶磁器類の組成について（表 22）

陶磁器類の組成上の特徴を把握するために、まず遺構の新旧関係に応じた組成変化が認められるかどうかを検討する。遺物が多く出土したのは東西に延びる溝であるので、これらを対象とする。

中国産の磁器は、いわゆる劃花文と蓮弁文タイプと呼ばれ高台が四角形になる青磁碗・口禿の白磁碗が特徴的で、これらは一般的には 13 世紀～14 世紀前半に見られるものである。これら以外の青磁・白磁も同時期と考えて良い。層位的に最も古いグループに属するＳＤ49 で 12 個体まとまって出土したが、これより新しい遺構ではわずかでＳＤ49 と特に内容に差はない。施釉陶器では、古瀬戸中期の 14 世紀前～中葉に位置づけられるものとして瓶子・折縁深皿・卸皿があり、後期の 15 世紀代のものとして直縁大皿・縁釉小皿・香炉がある。これらはわずかの点数であるが、前者がＳＤ49 と 50 から、後者がＳＤ66 と 201 からと、溝の新旧に応じた出土状況を示している。無釉陶器には、12 世紀末まで遡るものから 14 世紀前半まで下りうるものがあるが、多くは 13 世紀代に収まる。ＳＤ49 と 50 の出土が多く、それより新しい溝でも一定数の出土があるが、時期や産地の違いに応じた変化は認められない。瓦質土器は擂鉢と火鉢？が 1 点づつ出土しただけだが、層位的に新しいＳＤ66・201、ＳＫ219 からの出土である。かわらけには、ロクロ作りのものと手づくねのものとがあるが、手づくねが圧倒的に多い。ＳＤ49 と 50 である程度まとまった点数が出土しているが、両者を比較しても明瞭な差異は認められない。それより新しい溝からの出土はわずかである。ロクロ作りのものは、ＳＤ49 とこれと共存すると考えられるＳＤ03 から出土している。

以上をまとめると、古瀬戸と瓦質土器は遺物の年代差が溝の新旧に応じて現れている。一方で、中国産磁器・無釉陶器・かわらけは、新しい溝からの出土点数は少なく、それらの特徴は古い段階のＳＤ49 やＳＤ50 出土のものと同様である。次項の遺構の考察で述べるが、ＳＤ49・50 より新しい段階では明確な屋敷が確認できないことからしても、より新しい溝から出土した遺物の多くはＳＤ49 あるいはＳＤ50 段階からの紛れ込みである可能性が高い。したがって、ＳＤ50 より新しい段階のものは個別に組成を検討する意味はないと考えられる。

種類	器種	分類	特徴	産地	年代	計	SD49	SD50	SD213	SD207	SD66	SD201	他	
青磁	椀	A	面花文	龍泉	12中葉～13前葉	4	1	2				1		
		B	スタンプ	龍泉	12中葉～13前葉	2	1				1			
		C	蓮弁文	龍泉	12末～13後半	8	5			1			2	SD266・SE220
			無文	龍泉		2	1						1	表採
	小椀			龍泉	13中葉～14前葉	1							1	SK270
	杯			龍泉	13中葉～14前葉	1	1							
	盤？			龍泉		1	1							
					青磁計	19	10	2		1	1	1		4
白磁	椀		口禿	中国	13中葉～14前葉	2	1			1				
	皿			中国	12中葉～13後半	1	1							
	合子			中国		1		1						SD202
				中国	白磁計	4	2	1		1				
青白磁	梅瓶			中国		2					1		1	94T7
施釉陶器	瓶子			瀬戸	14初頭～中葉	2		1						2区イカク
	縁釉小皿			瀬戸	15前葉～後葉	1						1		W54～57
	折縁深皿			瀬戸	14前葉	1	1							
	折縁深皿			瀬戸	14中葉	1							1	3区イカク
	直縁大皿			瀬戸	15前葉	2					1	1		2区西側
	盤類			瀬戸		1		1						
	卸皿			瀬戸	14初頭～中葉	1					1			
	卸皿			瀬戸	14前葉	1							1	3区SE255
	香炉			瀬戸	15前葉	1							1	1区東側遺構外
					瀬戸計	11	1	2			2	2	4	
無釉陶器	鉢	A1	台・丸	東海	13中葉～14後葉	52	12	10	3	1	8	5	13	
		A2	台・三角	在地		1	1						0	
		B1	無・ヘラ・角	東海	13中葉～14前半	12	4	3	1	2		1	1	
		B2	無・ヨコ・角	在地	13中葉～14前半	9	2	3			1	1	2	
		C1	？・ヨコ・角	在地	13中葉～14前半	11		2		1	2	1	5	
		C2	？・ヨコ・三	在地	13中葉～14前半	2	1	1					0	
		C3	両端張出	東海？	15後半？	1							1	W108遺構外
			角・片口	？		1				1				
					鉢計	89	20	19	4	5	11	8	22	
					東海鉢	65	16	13	4	3	8	6	14	
					在地鉢	23	4	6	0	1	3	2	8	
	壺	広口壺A	受け口	常滑	13前葉	1	1							
		広口壺B	N字状	常滑	13中葉～末	3		1			1	1		
		広口壺C	N字状	常滑	13後葉～14前半	1							1	SE258
		広口壺D	受け口	在地		1	1							
		短頸壺		常滑		1						1		
		刻文壺		渥美		1	1							
		刻文壺		常滑		1		1						
		有耳壺		渥美？		1	1							
		有筋壺		常滑		1							1	
		壺		渥美		1		1						
				渥美？		1		1						
				常滑		1							1	
				常滑？		1		1						
				在地？		1		1						
					壺計	16	4	6			1	2	3	
					常滑壺	9	1	2			1	2	3	
					常滑？壺	1		1						
					渥美壺	2	1	1						
					渥美？壺	2	1	1						
					在地壺	1	1							
					在地？壺	1		1						
	甕	A		常滑	12末～13初頭	1		1						
		B		渥美		2	1			1			1	
		C		常滑	13初頭～13中葉	2	1						1	
		D1		常滑	13初頭～13後葉	7	3	3			1			
		D2		常滑	13後葉～13末	2		1					1	
		E		在地		1	1							
		F		在地		2					1		1	
		G		在地		2	1						1	
					甕計	19	7	5		1	2		5	
					常滑甕	12	4	5			1		2	
					渥美甕	2	1			1			1	
					在地甕	5	2				1		2	
瓦質土器	鉢					1					1			SK219に同一個体
	火鉢？					1						1		
					瓦質土器計	2								
かわらけ	皿		ロクロ			1							1	SD03
			手づくね			39	12	7	4	2	1	1	12	拡張区
					皿計	40	12	7	4	2	1	1	13	
	小皿		ロクロ			2	1						1	3区遺構外
			手づくね			12	2	2		1			7	
					小皿計	14	3	2		1			8	
					かわらけ計	54	15	9	4	3	1	1	21	
					ロクロ計	3	1						2	
					手づくね計	51	14	9	4	3	1	1	19	

表22　遺構別陶磁器類組成（数値は個体数を示す）

ＳD49 出土陶磁器類の生産年代は 13 世紀代に収まるものが多いが、無釉陶器鉢の高台のないものは 14 世紀前半までの幅を考える必要がある。また 1 点の古瀬戸折縁深皿は 14 世紀前葉に位置づけられる。これらの廃棄された年代は、上限は必ずしも明らかでないが、在地産無釉陶器が含まれることから 13 世紀中葉以降 14 世紀前葉までの時間幅の中で捉えられよう。ＳD50 出土資料には、ＳD49 段階の遺物が混入していると見なくてはならないが、年代が大きく異なるものは含まれないため、廃棄された年代はＳD49 に近いと考えられる。ただし 1 点の古瀬戸瓶子は 14 世紀中葉まで下る可能性を持つ。

以下ではＳD49･50 を合わせて陶磁器類の組成の特徴を述べる。これらは、大きくは 100 年近い年代幅を考慮せざるを得ない資料で、厳密な一括性を持つものではないが、県内の中世前期の遺跡の中では比較的資料数に恵まれており、しかも遺跡の性格に関連すると予測される特徴を示すため、あえて提示することとした。また出土資料全体も 13 世紀中葉～14 世紀中葉の様相をおおよそ反映していると考えられるため、これも合わせて検討する。ただし明らかに 15 世紀代とわかる資料は除外する。集計は個体数による。

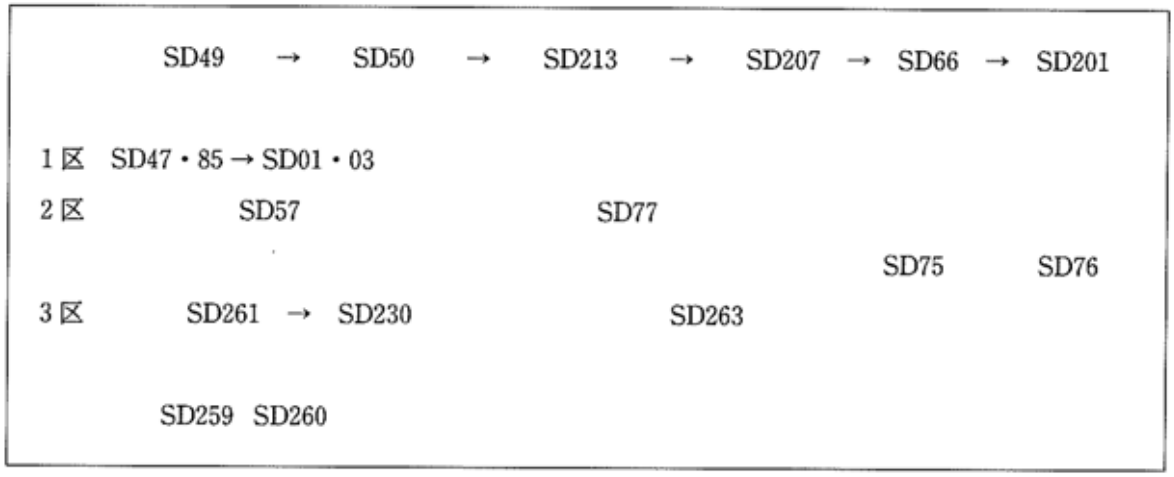
種類別では、ＳD49･50 と資料全体で多少比率が異なるが、無釉陶器が最も多くて約 60%を占め、次いでかわらけが 25%程度、中国産磁器が 10～15%、施釉陶器（古瀬戸）が 3%となる。このうち遺跡内で分布の偏りが大きいかわらけを除いてみると、およそ無釉陶器：中国陶磁器：施釉陶器＝8：1.5：0.5 といった比率になる。無釉陶器の器種別組成では、ＳD49・50、資料全体のいずれの場合も鉢が最も多くて 6～7 割を占める。次いで甕が 1.5～2 割、壷が 1.5 割程度となる。甕の個体数が過小評価されている恐れはあるが、用途・消耗度を考えれば納得のいく数値といえよう。

無釉陶器の産地別組成を見るにあたっては、煩雑さを避けるために疑問が残るものもあえて含めて集計したが、結果に影響を与えるものではない。全資料 122 点でみてもＳD49･50 だけの合計 61 点で見ても、東海産 7.5 割に対して在地産 2.5 割となり圧倒的に東海産が多い。器種別では、鉢より壷・甕の方が在地産の比率が低い傾向がありそうである。東海産陶器では、壷・甕で常滑産と渥美産の判別を行ったが、鉢ではできていない。壷・甕で渥美産の占める割合は 2 割弱あり、在地産とほぼ同数になっている。

以上をまとめると、ＳD49･50 を主体とする陶磁器類の組成は、中世前期における東北地方太平洋側南部の一般的なあり方と共通すると言える(飯村 1997)。無釉陶器の産地別組成では東海産が圧倒的に多い。一方では本遺跡の西方約 12㎞には三本木窯跡が存在し、ほぼ同時代に無釉陶器を生産したとされている(藤沼 1991、ほか)。また本遺跡と同様に近くに伊豆沼窯跡群がある高清水町観音沢遺跡では、在地産陶器が東海産を圧倒している(加藤･阿部 1980)。したがって、東海産が多いという特徴は本遺跡の性格を反映していると考えられる。また、かわらけは散在的な出土状況ではあるが、一般的に手づくねかわらけが減少し、ロクロかわらけが主体となる時期にあって、手づくね成形が 9 割以上を占める点も性格に関係した特徴と見ることができる。よって本遺跡の陶磁器類の組成は、非在地的であるとすることができよう。

Ｂ．遺跡の構成　遺構の変遷と年代

区をまたがって検出された溝を軸として、主要な溝跡の重複関係を整理すると次の通りになる。



直接的な重複関係にある溝跡の変遷には、ＳD49 からＳD76 まで 7 段階を認めることができる。以下では、この変遷を鍵として遺構群の構成・性格・変遷を検討する。

①1 区～3 区西側の遺構変遷

＜第 1＝ＳD49 段階＞

ＳD49 は、確認面での上幅が約 3.5mで深さが約 1mある大溝で、やや蛇行しながら東西に長く延びている。広範囲で確認された東西溝では最初に掘られた溝で、用排水を兼ねた水路と考えられる。

1 区には掘立柱建物跡･井戸跡･土壙といった遺構群が集中するが、これらはＬ字形に曲がるＳD01･03 を境にその東･北側に連続しない。したがって、ＳD01･03 はこれらの遺構群を区画する溝と考えることができ、遺構群を一つの屋敷跡と捉えることができる。これを屋敷 1 と呼称する。また 1 区西端にあるＳD15･16･17 南北溝も、遺構群の分布が切れる位置にあり、ＳD01･03 の北辺ともほぼ直交するため、屋敷 1 の西側の区画溝である可能性が高い。この場合屋敷 1 の東西幅は 70m強となる。ＳD01･03 の北辺はＳD49 とほぼ平行する。出土陶器片は、屋敷内の井戸跡・土壙出土の陶器片とともにＳD49 出土品と年代が一致し、また相互に接合する例が一定数ある。したがって屋敷 1 はＳD49 と同時期に存在したと考えられる。

ＳD47･85 はＳD50･01･03 よりは古いが、ＳD49 との関係は確定的でなく同時かより古いかのいずれかである。これらは屋敷 1 の古い段階の区画溝である可能性があるが、ＳD49 以前に土地の区画がなされていたことをも示唆している。

ＳD57 もＬ字形に曲がる溝で区画溝と考えられる。南辺の途切れる部分は入口かとも考えられる。ＳD50 より古く、南辺がＳD49 とほぼ平行することからＳD49 と共存すると見られるがそれ以前である可能性もある。区画内部には同時期とみられる遺構の検出が少ないため、明確に屋敷跡と捉えることはできないが(ＳB326･ＳE78･ＳK62 はＳD57 より新しい)、ＳD49 の遺物がこの南側にあたる部分から集中的に出土しているため、調査区外北側に屋敷跡を想定することも可能である。これを屋敷 2 としておく（東西幅は 70m以上）。

屋敷 1・2 とＳD49 との間には遺構が見られない溝状の空間があり、これは道路跡と考えることができよう。幅はそれぞれ 2m前後・2～4mある。

＜第2＝ＳＤ50段階＞

ＳＤ50はＬ字形の区画溝で、新段階では上幅が4～4.5m・深さが1m前後ありかなり大規模である。南辺には土橋がつくられている。区画内部は調査面積が少なく掘立柱建物跡の検出はないが、ここが屋敷であった可能性は高い(屋敷3)。東西幅は50m以上となる。ＳＥ54～56・ＳＥ220井戸跡は、やや区画溝に近すぎるきらいはあるが、屋敷に伴うものと考えておく。区画の東側にあってＳＤ57より新しい掘立柱建物跡・井戸跡は、ＳＤ50段階に属する可能性もあるが確定できない。この段階では東西に長く延びる水路は存在しない。

＜第3・4＝ＳＤ213・207段階＞

ＳＤ213・207はいずれも東西に延びる単純な溝で、ＳＤ49よりはかなり小規模になるが同じく用排水路と見られる。この2つの溝跡と共存することが明らかな遺構は確認できない。

＜第5＝ＳＤ66段階＞

ＳＤ66も基本的には東西に長い溝であるが、東西両端は南に折れ、中央近くにも南に折れる三叉がある。性格は、途中に大規模な溜枡があることからも明らかに用排水路と考えられるが、形状からして土地の区画を兼ねていると見られる。区画の東西幅は、西側が約90m・東側が約110mになる。北東隅近くにある東西棟ＳＢ327は、ＳＤ66の北辺とほぼ平行するためこれと共存する可能性がある。また、その南側にある井戸跡5基も同様である。ただしこれらの遺構群は、全体の規模が小さくここだけを区画する溝が存在しないことから、屋敷1～3と同等に扱うことはできない。

ＳＸ236道路跡は、ＳＤ213より新しいがＳＤ66との新旧を確認できず、その段階はＳＤ207以降としかできない。ＳＤ66とは位置関係からみて共存しえないが、土地の区画・境界が継続していると見れば、ＳＤ66に連続する前後の段階と予測することができよう。

＜第6＝ＳＤ201段階＞

ＳＤ201は、基本的には東西に長い水路で東端は南に折れる。調査範囲内では、最終段階の東西溝である。これと共存すると考えられる遺構は確定できない。

＜第7＝ＳＤ76段階＞

東西両端が北に折れる東西溝で、区画を兼ねた水路と考えられる。共存する遺構は確認できない。

②3区東側の遺構変遷

3区東側には、西側からのびてくる東西溝はＳＤ213があるのみで、1～3区西側で捉えられる段階に遺構群を直接位置づけることはできない。したがってまずこの区域における変遷を検討し、その後に1～3区西側の変遷段階との対応を考えることとする。

最も古い遺構群は、ＳＤ259東西溝、ＳＸ262道路跡とこの南側溝の延長かとも見られるＳＤ261である。両者はほぼ平行するため共存した可能性が高い。ＳＤ259は東西方向の直線的な溝で、規模から見て区画溝と見られる。区画内の実体が不明のためここでは屋敷と認識しないでおくが、調査区南東隅にある3基の井戸跡（ＳＥ268・272・273）は、次段階のＳＤ269に切られることから区画内に入る可能性がある。

Ｌ字形に曲がるＳＤ260とＳＤ266・269が次の段階である。東西約20mの方形の範囲を区画する溝で、

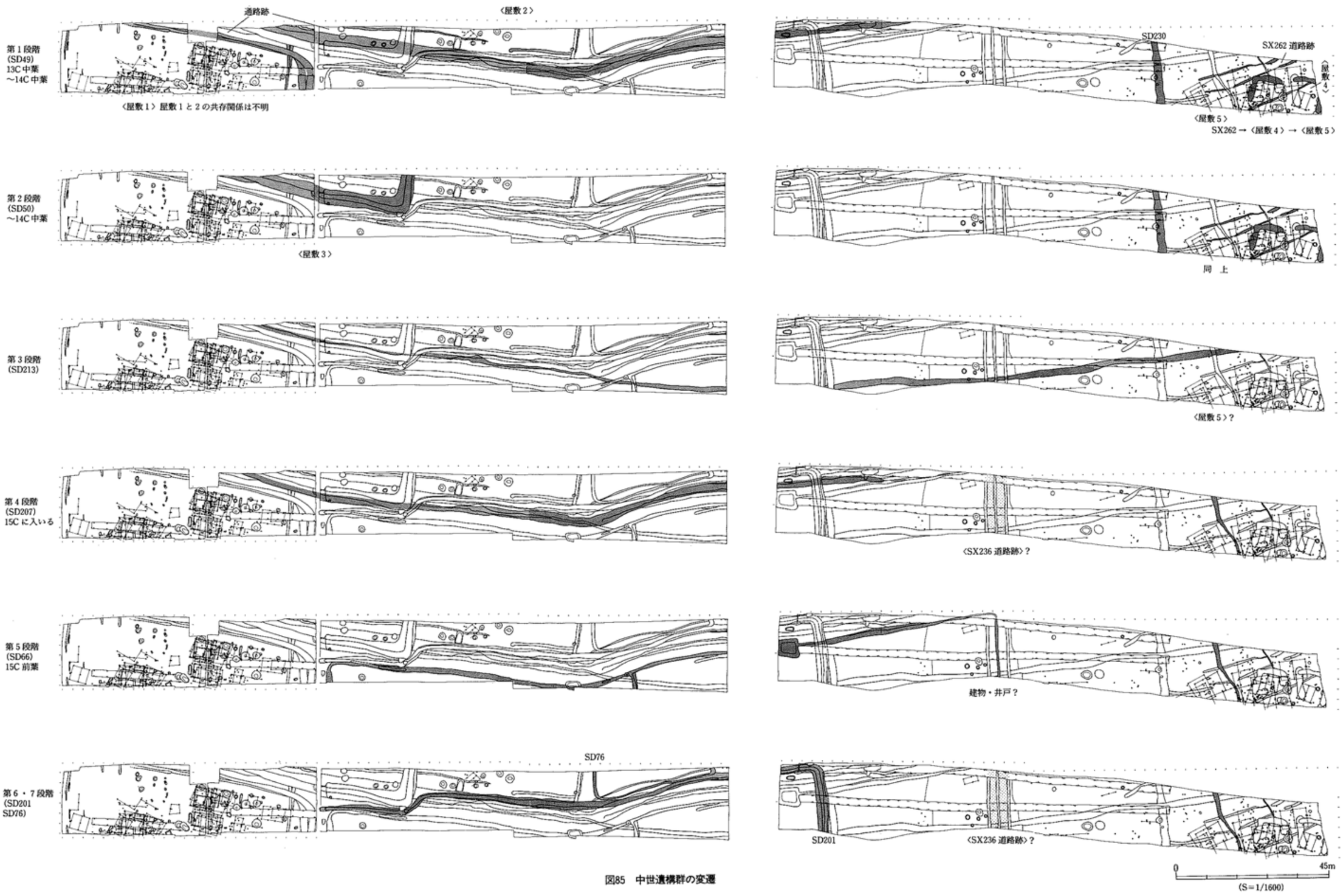


図85　中世遺構群の変遷

北・西・東の途切れる部分は土橋と見ることができる。内部には、区画溝と同様に東に大きく振れる南北棟ＳＤ341 と 345 が、対称的な位置に存在する。また区画の中央部にある井戸跡も、重複関係からこれらに共存する可能性がある。この区画は、区画溝が大きい一方で平面規模は東西約 20mと小規模で、前述の屋敷 1～3 とは様相が大分異なっている。ここではこれを屋敷 4 と呼称するが、その性格はむしろ堂のようなものを考えるべきかも知れない。

ＳＤ341･345 を除く掘立柱建物跡を中心とする遺構群が次段階である。これらを屋敷 5 とする。建物方向は様々で、東西両方向に 15°程度振れる範囲にある。これらには方向と位置関係から最低 5 時期の存在が確認できるが、屋敷の中心が調査区の南にあると考えられるため、時期ごとに建物構成を復原することは困難である。ＳＤ230 より西側にある柱穴列･井戸跡は、屋敷 5 と関係する可能性があるが確定できない。ＳＤ230 南北溝は、屋敷 5 の建物跡のいくつかと方向を揃え、またこれより西側で遺構が少なくなるため、屋敷の西を区画する溝である可能性がある。しかしこれも確定的とは言えず、東西を区画する溝がなく、次の階のＳＤ213 南北溝に沿う形で屋敷が形成された可能性も残る。

次の段階は 1 区から続く東西溝ＳＤ213 で、最終段階がＳＤ263・286 の 2 本の南北溝である。

以上の変遷を 1 区～3 区西側の段階と対応すると、まずＳＤ230 南北溝がＳＤ50 段階以前に位置づけられる。屋敷 5 は、ＳＤ230 との位置関係や周辺の遺物の年代よりＳＤ50 段階以前に位置づけられる可能性が高いが、ＳＤ213 段階にまで下る可能性も残る。屋敷 4･ＳＤ261 東西溝･ＳＸ262 道路跡もＳＤ50 段階以前となる。ＳＤ263･286 はＳＤ213 段階以降に位置づけられる。

③遺跡の構成・変遷・年代

調査区内の遺構全体の変遷を図 85 に示した。

第 1 段階(ＳＤ49 段階)においては、比較的規模の大きい東西の水路が掘削され、調査区西側で用水の南北に屋敷 1・2 が形成される。2 つの屋敷が同時に存在したかどうかは確定できない。屋敷は溝によって区画されるが、溝は防御性を持つような大規模なものではなく、敷地の区画と排水を兼ねたものと考えられる。屋敷と水路との間は道路として機能していたと見られる。年代は 13 世紀中葉から 14 世紀前葉の幅の中で捉えられる。次の第 2 段階(ＳＤ50 段階)では、東西の水路は埋没し屋敷 3 が形成される。区画溝の規模は、第 1 段階の屋敷 1・2 と比べ格段に大きくなっている。年代は第 1 段階とそう離れたものではなく、新しく見ても 14 世紀中葉までと考えられる。

明確な屋敷跡が確認されるのは第 2 段階までで、以降の第 3～7 段階（ＳＤ213･207･66･201･76 段階）では基本的に東西の水路は継続するが、明確な屋敷跡は検出されていない。この中で第 5 段階の水路は、明らかに土地の区画を兼ねていると見られ、北東隅には小規模な建物 1 棟と井戸が伴う可能性がある。第 4・6 段階のいずれかでは、南北道路が造られている。出土遺物からみて、第 4 段階は 15 世紀に入る可能性が高く、第 5 段階は 15 世紀前葉と考えられる。最終の第 7 段階の年代は確定できない。なお、東西溝以外で明らかに 15 世紀以降とわかる遺構は 1 区のＳＫ32 土壙墓と 2 区のＳＫ219 のみであるが、この時期の遺物は 1 区の東側～3 区の範囲から出土している。したがって、この付近の調査区外に 15 世紀以降の遺構群が存在する可能性もある。

調査区東端においては、第 2 段階以前にまず東西道路が造られ、次いで屋敷 4・屋敷 5 が順に形成

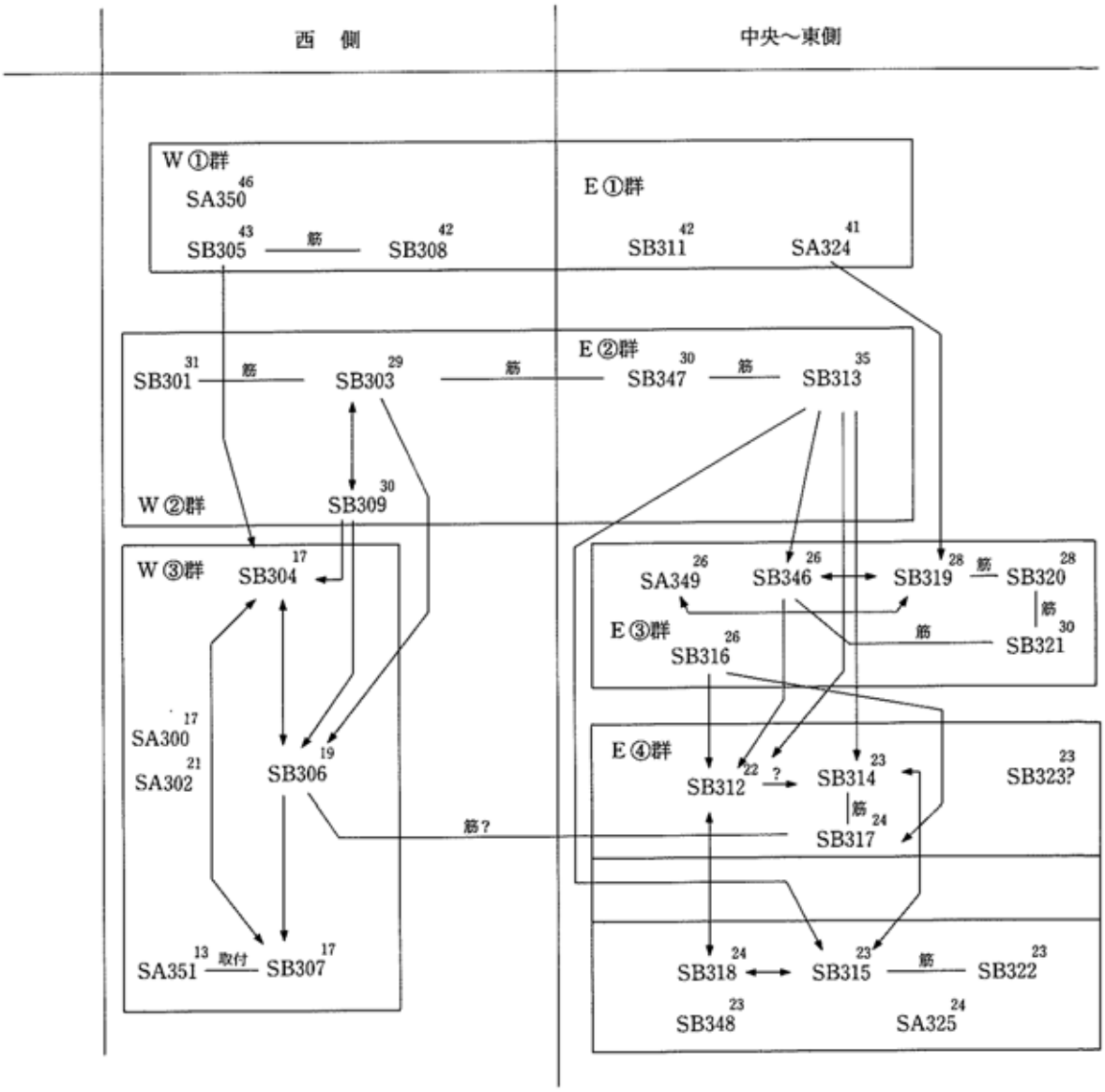


図86　屋敷１の掘立柱建物跡・柱穴列の群別の変遷

される。東西道路があった段階にもその南側に屋敷があった可能性がある。屋敷4は、規模と特徴が他の屋敷と異なり、堂のような性格を考える必要がある。屋敷5は第3段階にまで下る可能性も残る。屋敷4・5は調査区西側の屋敷1からは約250m離れている。

C．屋敷1について

屋敷1は、比較的小規模な溝によって方形に区画されていると考えられる。東西の幅は70〜73m・南北は25m以上ある。区画溝には最大6時期が認められ、東辺は時期によって多少移動している。西辺には入り口かと見られる区画溝の途切れる部分がある。

1・2次調査では屋敷の北側部分を調査したことになるが、この範囲内でも遺構の分布状況に明瞭な違いを認めることができる。掘立柱建物跡は中央部北側と西半部南側に集中し、井戸跡は東北部と西北部の一定範囲に集中する。西北部には遺構が全くない空間がある。また東南部にも空間が空きそうである。掘立柱建物跡には何回もの重複が認められる。したがって、屋敷1では長期間にわたって同様な場の使い分けが維持されていたと言える。ただし、ＳK32土壙墓からは洪武通宝・永楽通宝が出土しており、他の遺構とは明らかに時期が異なっている。屋敷1の存続年代は13世紀中葉から14世紀前葉までの幅の中に収まると考えられる。

内部では掘立柱建物跡が25棟、柱穴列が7条検出された。これらの重複・方向・柱筋の関係を西側と東側にわけて整理すると、図86のような群別ができる。

＜西側＞

W①群：方向が40°以上東へ振れるものである(東西棟の南への振れを便宜的に南北棟の東への振れに合わせて記述する。以下も同様)。W③群より古い。南北棟ＳB305と東西棟ＳB308が柱筋を揃えて直交する位置に並び、これらの北西に鍵の手に曲がるＳA350柱穴列(塀)がある。ＳB308は比較的大形である。

W②群：東への振れが30°前後の建物群である。W③郡よりも古い。東西棟が3棟があるが、ＳB303と309はほぼ同位置で重複し共存しない。両者とも大形で、ＳB309は北側に張り出しを持つ。西端部にあるＳB301は区画溝ＳD15にかなり接近している。

W③群：東西棟ＳB304・306・307の3棟があり、北側には東西の柱穴列ＳA302がある。西端部には区画溝が途切れる部分に、鍵の手状のＳA300柱穴列(塀跡)がある(区画溝ＳD16よりは新しい)。建物跡の東への振れは17〜19°と小さい。W①・②群よりも新しい。3棟はほぼ同位置で建て替えられたものと考えられるが、直接の切り合いはＳB306→ＳB307を確認できるだけである。3棟ともに大形で、ＳB306は北側に張りだしを、ＳB307は西廂と北側の張りだしを持ち、西側に建物跡と関連すると見られる柱穴列ＳA351が連続する。

＜東側＞

E①群：建物跡は、東へ約42°振れる東西棟ＳB311の1棟で、東側に南北の柱穴列ＳA324が平行してある。E③群より古い。ＳB311は比較的大形である。

E②群：東への振れが30〜35°の東西棟ＳB313・347が南北に並ぶ。両者の間隔は約2mで近接するが、共存は可能であろう。E③・④群よりも古い。ＳB313はかなり大形である。

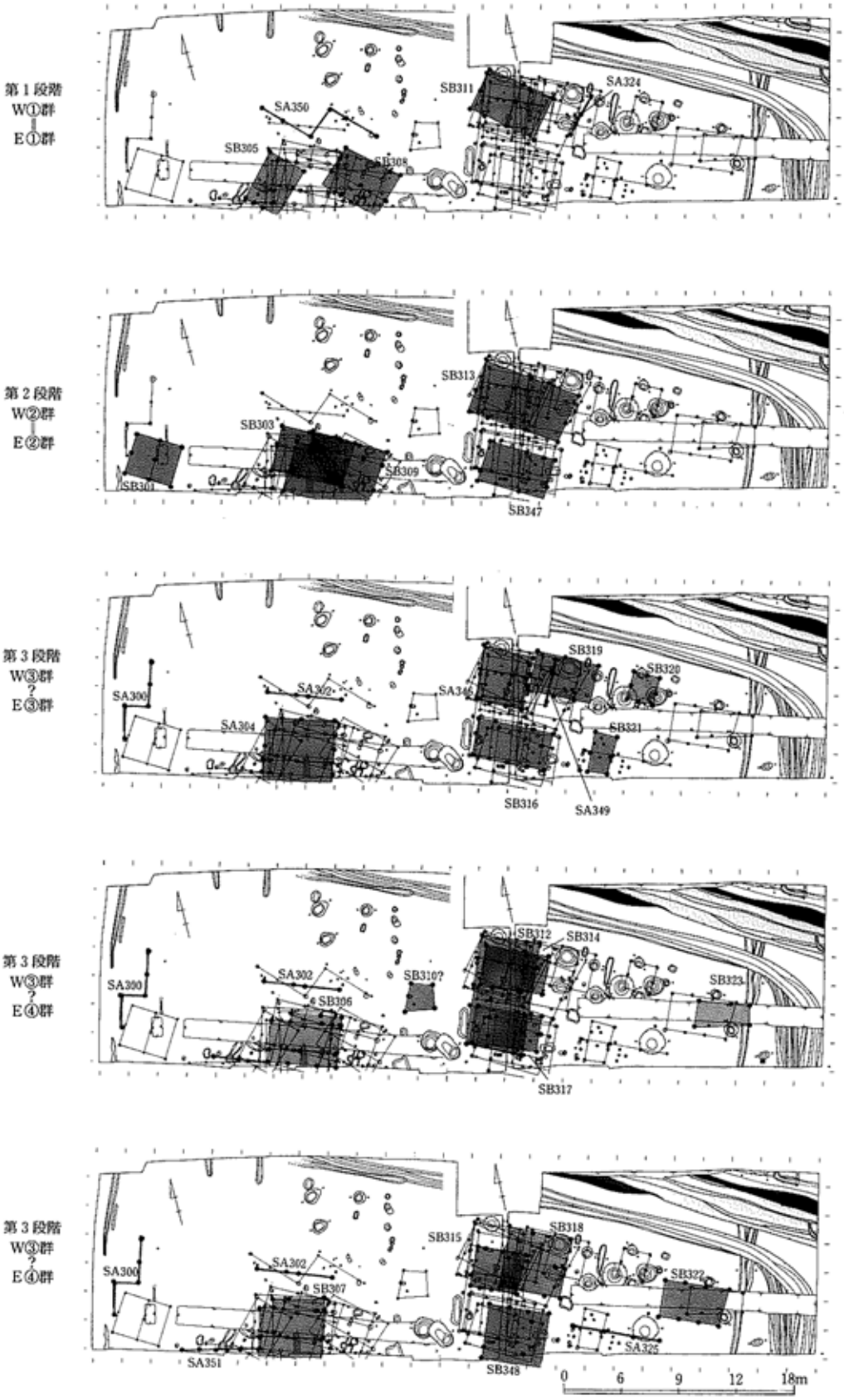


図87　屋敷1掘立柱建物跡・柱穴列の群別の変遷

E③群：東への振れが26～30°の建物群である。E④群よりも古くE②群よりも新しい。建物跡5棟と柱穴列1条がある。小規模な南北棟ＳB320・321と東西棟ＳB319は柱筋を良く揃えている。南北棟ＳB346と東西棟ＳB316との間隔は約3mである。ＳB319と南北棟ＳB346は近接し共存しえないため、2時期が存在することがわかる。

E④群：東への振れが22～24°と最も小さい建物群で、東側では最も新しい。建物跡8棟と柱穴列1条で構成される。ＳA325も南側に展開する建物跡になる可能性が高い。重複があり4時期が想定されるが、相互に直接の切り合いはない。南北に並ぶ東西棟ＳB314・317は、規模・構造が類似し、東西の柱筋が一致することから同時存在としてよい。東西棟ＳB318・348も、約3m離れて南北に並ぶ。ＳB318はかなり大形である。ＳB312はＳB314・317の2棟とほぼ同位置にある南北棟で、屋敷1で最大の建物である。東廂を持ち、妻・桁両方向に間仕切りがある。東西棟ＳB315と322は南側柱列を良く揃えるため同時存在と考えられる。東端のＳB323と西側建物群との間にあるＳB310は、他の建物との共存関係は捉えられない。

＜屋敷1の建物構成と変遷＞（図87）

第1段階

W①群とE①群は方向が一致し、他の建物跡とは明確に分離できることから、同時存在と考えられる。重複関係は直接的には③群より古いとしか捉えられないが、屋敷1の建物群全体に東への振れが大きい建物から小さいものに移行する傾向が見られることから、最古の建物群と考えることができる。西側では南北棟と東西棟が直交して並び、東側には東西棟が1棟あるのみで、第2段階以降とは様相が異なっている。東端部には建物跡が見られないため、井戸があった可能性が考えられる。

第2段階

W②群のＳB303・ＳB309とE②群のＳB347の柱筋が揃うことから、両群は共存すると見られる。西側の東西棟が大形化すること、東側では東西棟2棟が南北に並ぶことに特徴がある。西端部にも東西棟が1棟ある。東端部の使われかたは、第1段階と同じと考えられる。

第1・2段階は、建物群の配置が第3段階の各時期と共通するので、一つの屋敷として継続していると考えられるが、建物の方向は区画溝の方向とかなりずれている。また、第2段階の西端部にあるＳB301は区画溝と見られるＳD15に接近しすぎている。したがって、第1・2段階には区画溝が存在していなかった可能性も考えなくてはならない。

第3段階

W③群とE③・④群が相当するが、両者の対応関係は捉えられない。ただし、西側のＳB306の身舎の北側柱列と、東側の④群ＳB317の南側柱列が柱筋を揃えるかのようである。西側には大形の東西棟が3時期同位置に建てられている。その北には、柱穴列(塀跡)ＳA302が平行して存在する時期がある。また、西端には、入口の目隠し塀かと見られる鍵の手状の柱穴列ＳA300が造られる時期がある。

東側では、ａ．東西棟2棟が南北に並ぶ時期が2時期(ＳB314・317、ＳB318・348)、ｂ．南北棟と東西棟が南北に並ぶ時期(ＳB346・316)、ｃ．東西棟と小規模な建物が南北2列に並ぶ時期(ＳB319・320・321)、ｄ．東西棟が東西に2棟並ぶ時期(ＳB315・322)、ｅ．大形の南北棟1棟が立つ時期(ＳB312)

の 6 時期が想定される。

各時期を通じて西側には大形の東西棟 1 棟が、東側には 2～3 棟の建物がおおむね南北に並べて建てられていたと言える。東側の建物には、西側の東西棟と同規模のものも含まれている。

1～3 段階を通じて見ると屋敷 1 の建物群には以下の特徴があげられる。

①建物が建てられた位置はほぼ一定している。またその配置にもある程度の規則性が認められ、特に第 2 段階以降でそれが明確になる。

②西側には、ほぼ同一位置に東西棟建物が継続して建てられる。この建物は同時期の他の建物と比較して大形で、北や西に廂や張り出しを持つ場合があることから、屋敷 1 の主屋になる可能性がある。

③東側には主に東西棟建物を南北に並べる。北側の建物は大形になることがある。建物の東側に井戸跡の集中区域があることから、これらは厨を含む雑舎かと篦られる。

④第③段階になると、東端部近くも建物域に含まれてくる。また西辺の入口部分には、目隠し塀がつくられる。

＜屋敷 1 の性格＞

屋敷 1 は鳴瀬川に接する自然堤防上にあり、これに平行して掘られた用水に沿ってつくられている。屋敷と用水の間は道路となっていた。規模は東西約 70m・南北 25m以上で、溝によって方形に区画されている。区画溝の規模は比較的小さく、防御的なものとは言えない。年代は、13 世紀中葉から 14 世紀前葉の幅の中におさまる。

敷地の利用には一貫した継続性が認められ、建物は西半部南側と中央部北側に、井戸は北東部と北西部の一定の範囲に集中してつくられている。北西部には空白地が設けられている。建物の配置も規則的・継続的で、西側には主屋とみられる大形の東西棟を、東側には厨・雑舎とみられる建物を主に南北に並べている。

出土陶磁器類の組成には非在地的な性格が予測される。すなわち、在地で無釉陶器が生産される時期にありながら在地産陶器の比率が低く、東海産の陶器が圧倒的に多いこと、かわらけはロクロを使用しない手づくね製品がほとんどであること、である。

屋敷の居住者は、屋敷の規模・規則性・継続性からみて、在地領主程度の武士が想定される。陶磁器類の非在地的な性格は、居住者の階層のみならず鳴瀬川を利用した河川交通・交易を反映していると考えられよう。

なお、屋敷 1 の南側部分は 3 次調査以降の対象地にあたっているため、今後屋敷の全容を明らかにできる可能性がある。

第9章. ま と め

1. 一本柳遺跡は、宮城県の北部中央・遠田郡小牛田町字一本柳ほかに所在する。遺跡は江合・鳴瀬川が形成した大崎低地東縁部にあって、鳴瀬川左岸に形成された自然堤防上に立地する。東西 500m以上・南北200m程？の広がりをもつ。

2. 従来は奈良・平安時代の遺跡として知られていたが、調査の結果、これに加えて中世の遺構・遺物が検出された。2次にわたる調査面積は約6,500㎡で、東西が約375mの細長い調査区となった。

3. 奈良・平安時代では、9 棟の掘立柱建物跡のほか、円形周溝、溝跡、土壙、小溝状遺構群が検出された。掘立柱建物跡には3〜4段階の変遷が認められる。1段階には3間×2間の総柱建物跡が東西に4棟並ぶ。2段階には、1段階とほぼ同位置に2間×2間の総柱建物跡が3棟並ぶ。このほかに方向を異にする総柱建物跡が南側に1棟あり、別段階を構成する可能性がある。建物群の東側で検出された南北溝は区画施設となる可能性がある。総柱建物群の後には小溝状遺構群（畑跡）が形成され、さらにその後に 3 間×2 間の東西棟側柱建物跡が建てられている。1・2 段階の年代は、8 世紀後半〜9世紀前半の時間幅の中で捉えることができる。遺跡の下限は9世紀前半をやや下る。

掘立柱建物群（倉庫群）が規則的・継続的に認められ、竪穴住居が認められない状況は、一般的な集落のあり方とはかなり異なっている。遺跡の性格については、第3次調査以降この南側の調査が予定されているので、その様相が明らかとなった段階で検討したい。

4. 中世では、道路跡2条、掘立柱建物跡41棟、柱穴列12条、溝跡36条、井戸跡52基、土壙墓1基、銭備蓄遺構1基、土壙36基、柱穴多数を検出した。

遺構群は東西に長く走る溝跡（用排水路）の重複関係を鍵として、大別7段階に分類できる。

第1・2段階には、調査区西端において溝で方形に区画された屋敷1・2と、それに後続する屋敷3が形成される。また約250m離れた東端部においては、屋敷4・5が形成される。年代は13世紀中葉から14世紀中葉の幅に収まるものと考えられる。屋敷1は、東西約70m・南北25m以上の規模を持つ。区画溝に6時期・建物跡に少なくとも9時期が認められ、長期間使用されたことがわかる。その間内部では一貫した場の使い分けがなされている。建物跡は東西2ケ所に集中的に継続して認められ、西側には主屋、東側には雑舎の性格が予測される。屋敷の居住者は在地領主クラスの武士で鳴瀬川の河川交通に関係すると想定したが、性格は屋敷の全容が明らかになった段階で再検討したい。第2段階の屋敷3は、区画溝の規模が第1段階より格段と大形化しているが、内部は調査区外となりその構成は捉えられない。屋敷5では区画施設・建物構成を明確にできないが、銭の備蓄遺構が検出され、井戸跡からは茶筅？が出土した点が注目される。第1・2段階の陶磁器類の組成は、東北地方太平洋側南部の中世前期の一般的なあり方を示しているが、無釉陶器の産地別組成とかわらけの組成からは非在地的な性格も予測される。屋敷5にある井戸跡の廃棄層中の種実同定を行ったところ、栽培植物としてはオオムギ・イネ・アサが検出された。

第3段階以降では、基本的に東西の水路が継続して作られるが、調査区内において明確な屋敷跡は現在のところ捉えられない。第5段階(15世紀前葉)の水路は土地の区画を兼ねていると考えられる。

引用文献（五十音順）

青木　修（1993）：「片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第1輯

青木　修（1994）：「続片口鉢の研究－中世知多古窯跡群を中心として－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第2輯

阿部正光・佐藤敏幸（1997）：「宮城県の近世墓と六道銭」『近世の出土銭1－論考篇－』　兵庫埋蔵銭調査会

飯村　均（1995a）：「東北諸窯」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会（真陽社）

飯村　均（1995b）：「陸奥南部の常滑系陶器の生産と技術」『常滑焼と中世社会』（永原慶二編）小学館

飯村　均（1997）：「北海道・東北地方における古瀬戸流通」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯

石黒伸一郎（1995）：「仙台市の板碑」『六軒丁中世史研究』第3号　東北学院大学中世史研究会

石田明夫編（1994）：『会津大戸窯　大戸古窯跡群発掘調査報告書　遺物編』会津若松市教育委員会

和泉匡剛（1997）：「南北朝時代」『多賀城市史1　原始・古代・中世』　多賀城市史編纂委員会

伊藤　信（1997）：「室町・戦国時代」『多賀城市史1　原始・古代・中世』

伊藤　信（1997）：「南北朝の内乱の中で」『新編中新田町史』上巻

伊藤　信（1997）：「奥州探題の栄光」『新編中新田町史』上巻

伊藤　信（1997）：「疾風と怒涛の中で」『新編中新田町史』上巻

伊東信雄（1940）：『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』　東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告　第二

入間田宣夫（1997）：「平泉・鎌倉時代の賀美郡」『新編中新田町史』上巻

加藤道男（1989）：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会

加藤道男・阿部博志（1980）：「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』

菊地逸夫・早川英紀（1996）：『一本杉窯跡』宮城県教育委員会

工藤雅樹・藤沼邦彦ほか（1979）：『伊豆沼古窯　熊狩Ａ窯跡発掘調査報告』　東北歴史資料館

小井川和夫（1981）：「宮城県」『日本城郭体系』第3巻　新人物往来社

小牛田町史編纂委員会（1970）：『小牛田町史　上巻』

小牛田町教育委員会（1976）：『山前遺跡』

佐々木光雄（1997）：「鎌倉時代」『多賀城市史1　原始・古代・中世』　多賀城市史編纂委員会

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ　宮城県多賀城跡調査研究所

佐藤憲幸・村田晃一（1996）：「東北の煮炊具」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東4－煮炊具－』　古代の土器研究会第4回シンポジウム資料

佐藤正人（1995）：「鳴瀬川流域にみる板碑の造立形態」　『六軒丁中世史研究』第3号　東北学院大学中世史研究会

茂原信生・小野寺　覚（1987）：「鎌倉材木座遺跡出土の中世犬骨」『人類学雑誌』95-3

茂原信生・松井　章（1995）：「草戸千軒町遺跡出土の中世犬骨」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ』

辻　秀人（1992）：「古墳の変遷と画期」『新版古代の日本9　東北・北海道』　角川書店

寺島文隆・飯村　均（1987）：『八郎窯跡群－梁川町における中世窯の調査－』福島県梁川町教育委員会

中野晴久（1994）：「赤羽・中野「生産地における編年について」」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

中野晴久（1995）：「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』永原慶二編（小学館）

中野晴久（1996）：「瓷器系中世陶器の生産」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－資料集』瀬戸市教育委員会・瀬戸市埋蔵文化財センター

中野晴久（1997）：「姿器系中世陶器の生産」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯

藤沢良介（1991）：「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ

藤沢良祐（1996）：「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界－その生産と流通－資料集』瀬戸市教育委員会・瀬戸市埋蔵文化財センター

藤沢良祐（1997）：「中世瀬戸窯の動態」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第5輯

藤沼邦彦（1976）：「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『東北歴史資料館研究紀要』第2巻

藤沼邦彦（1977）：「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第3巻

藤沼邦彦（1991）：「東北地方出土の常滑焼・渥美焼について」『知多半島の歴史と現在』3　日本福祉大学知多半島総合研究所
藤沼邦彦ほか（1978）：『多高田窯跡調査報告書』　三本木町教育委員会
藤沼邦彦・千葉孝弥（1992）：「宮城県の中世窯」『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題　資料集』
藤沼邦彦・神宮寺千恵（1992）：「宮城県における一括出土の渡来銭－女川町御前浜出土の古銭を中心として－」『東北歴史資料館研究紀要』第18巻
町田　洋・新井房夫（1992）：『火山灰アトラス［日本列島とその周辺］』　東京大学出版会
松井和幸（1994）：「鉄製農具の変遷」『古代における農具の変遷－稲作技術史を農具から見る－』静岡県埋蔵文化財調査研究所
三輪茂雄（1978）：『臼　ものと人間の文化史25』　法政大学出版局
村田晃一（1992）：「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題　資料集』
村田晃一（1994）：「土器からみた官衙の終末－東北地方の場合－」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』　第3回東日本埋蔵文化財研究会資料集
山田一郎・井上克弘（1990）：「東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田－大湯浮石”の同定」　『第四紀研究』第29巻第2号
山内忠平（1958）：「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』7
山本信夫編（1983）：「磁器の分類」『大宰府条坊跡Ⅱ』　太宰府市教育委員会
山本信夫（1992）：「第6章中世の遺物　3貿易陶磁の分類と出土状態」『太宰府市史　考古史料編』
山本信夫（1995）：「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会（真陽社）
横田賢次郎・森田　勉（1978）：「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究紀要』4
四柳嘉章（1995）：「漆器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会（真陽社）